Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-02-21

ダロウとノデハナイカに関する一考察一中国語話者への教育に向けて

馮，雁鴻

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2021-03-25
(Date of Publication)
2024-03-25
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲第7941号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1007941

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

博 士 論 文

令和 2 年 12 月 1 日

ダロウとノデハナイカに関する一考察 －中国語話者への教育に向けて

神戸大学大学院人文学研究科博士課程
後期課程文化構造専攻

馮　雁　鴻

目 次

第 1 章 序論 1

1. 研究背景および研究対象 1

1.1 研究背景 1

1.2 研究対象 3

2. 研究目的および研究方法 5

2.1 研究目的 5

2.2 研究方法 5

2.2.1 コーパス調査 5

2.2.2 学術論文調査 8

2.2.3 教科書調査 8

3. 論文の構成 8

第 2 章 ダロウについて 10

1. 先行研究および本論文の規定 10

1.1 「推量」のダロウに関する先行研究 10

1.1.1 「推量」のダロウの意味 10

1.1.2 「推量」のダロウのニュアンス 11

1.2 「確認」のダロウに関する先行研究 12

1.2.1 「確認」のダロウと「推量」のダロウとの関係 12

1.2.2 「確認」のダロウの下位分類 13

1.3 「疑念」のダロウに関する先行研究 15

1.3.1 安達（2002） 15

1.3.2 宮崎（2005） 18

1.4 本論文におけるダロウの意味用法の規定 19

2. 日本語話者によるダロウの使用実態－書き言葉 22

2.1 調査方法および結果 22

2.1.1 検索条件 22

2.1.2 検索結果 23

2.2 書き言葉における「推量」のダロウ 24

2.2.1 「推量」のダロウの後接形式 24

2.2.2 「推量」のダロウの共起語 26

2.2.3 「推量」のダロウの前接形式 27

2.2.4 「推量」のダロウのまとめ 30

2.3 書き言葉における「確認」のダロウ 31
2.3.1 「確認」のダロウの＜ジャンル＞別の考察 31
2.3.2 「確認」のダロウの前接形式 32
2.3.3 「確認」のダロウの出現形 33
2.3.4 「確認」のダロウのまとめ 35
2.4 書き言葉における「疑念」のダロウ 35
2.4.1 「疑念」のダロウの＜ジャンル＞別の考察 35
2.4.2 「疑念」のダロウの前接形式 38
2.4.3 「疑念」のダロウのまとめ 40
2.5 書き言葉における「婉曲」のダロウ 40
2.5.1 「婉曲」のダロウの前接形式 40
2.5.2 「婉曲」のダロウの表現効果 41
2.5.3 「婉曲」のダロウのまとめ 42
2.6 まとめ 42

3. 日本語話者によるダロウの使用実態－話し言葉 43
3.1 調査方法および結果 44
3.1.1 使用したコーパス 44
3.1.2 検索条件 44
3.1.3 検索結果 45
3.2 話し言葉における「推量」のダロウ 46
3.2.1 「推量」のダロウの後接形式 46
3.2.2 「推量」のダロウの応答文としての使用 47
3.2.3 「推量」のダロウのまとめ 48
3.3 話し言葉における「確認」のダロウ 48
3.3.1 徐（2019）における調査結果 49
3.3.2 「確認」のダロウの発話意図 50
3.3.3 「確認」のダロウの出現形 52
3.3.4 「確認」のダロウのまとめ 53
3.4 話し言葉における「疑念」のダロウ 54
3.4.1 「疑い」 54
3.4.2 「婉曲疑問」 57
3.4.3 「疑念」のダロウのまとめ 57
3.5 話し言葉における「婉曲」のダロウ 58
3.6 まとめ 58

4. 中国語話者によるダロウの使用実態－書き言葉 59
4.1 先行研究 59

4.2 調査の概要および結果 60
4.2.1 使用したコーパスおよび調査方法 60
4.2.2 調査結果 61
4.3 書き言葉における「推量」のダロウ 61
4.3.1 意見文以外の文体では、CN による使用にどのような特徴があるのか 62
4.3.2 CN による「ノダロウ」の使用実態はどのようになっているのか 62
4.3.3 ほかに CN による使用が少ない場合があるのか 63
4.3.4 「推量」のダロウのまとめ 64
4.4 書き言葉における「疑念」のダロウ 65
4.4.1 「疑い」 65
4.4.2 「婉曲疑問」 69
4.4.3 「疑念」のダロウのまとめ 71
4.5 書き言葉における「婉曲」のダロウ 71
4.5.1 「婉曲」のダロウのタスク別の出現状況 71
4.5.2 「婉曲」のダロウの前接形式 72
4.5.3 「婉曲」のダロウのまとめ 73
4.6 まとめ 74

5. 中国語話者によるダロウの使用実態－話し言葉 75
5.1 調査の概要および結果 75
5.2 「独話」におけるダロウの使用実態 77
5.3 「対話」におけるダロウの使用実態 78
5.3.1 「推量」 78
5.3.2 「確認」 81
5.3.3 「疑念」 82
5.4 まとめ 84

第 3 章 ノデハナイカについて 86

1. 先行研究および本論文の規定 86
1.1 先行研究およびその問題点 86
1.1.1 ノデハナイカと否定疑問文の関係 86
1.1.2 ノデハナイカの意味用法 87
1.1.3 日本語教育の立場からの研究 90
1.2 本論文におけるノデハナイカの意味用法の規定 91

2. 日本語話者によるノデハナイカの使用実態－書き言葉 93
2.1 調査方法および結果 93
2.1.1 検索条件 93

2.1.2 検索結果 97
2.2 ノデハナイカの後接形式および共起語 99
2.2.1 ノデハナイカの後接形式 99
2.2.2 ノデハナイカの共起語 101
2.3 「知恵袋」におけるノデハナイカ 101
2.3.1 「知恵袋」の「質問」におけるノデハナイカ 102
2.3.2 「知恵袋」の「回答」におけるノデハナイカ 103
2.4 「文学」におけるノデハナイカ 105
2.4.1 「文学」における「推測」用法のノデハナイカ 105
2.4.2 「文学」における「確認」用法のノデハナイカ 106
2.4.3 「文学」における「婉曲」用法のノデハナイカ 107
2.5 「雑誌」「文学以外」「ブログ」におけるノデハナイカ 108
2.6 まとめ 109

3. 日本語話者によるノデハナイカの使用実態－話し言葉 110
3.1 調査方法および結果 111
3.1.1 使用したコーパス 111
3.1.2 検索条件 111
3.1.3 検索結果 114
3.2 ノデハナイカの後接形式および共起語 116
3.2.1 ノデハナイカの後接形式 116
3.2.2 ノデハナイカの共起語 118
3.3 「推測」用法 120
3.3.1 認識の段階 121
3.3.2 応答文としての使用 123
3.3.3 聞き手の反応 123
3.4 「確認」用法 125
3.4.1 発話意図 125
3.4.2 情報の質 126
3.5 「婉曲」用法 127
3.5.1 前接形式 127
3.5.2 発話意図 128
3.5.3 表現効果 130
3.6 まとめ 132

4. 中国語話者によるノデハナイカの使用実態－書き言葉 132
4.1 調査の概要および結果 133
4.1.1 使用したコーパスおよび調査方法 133

4.1.2 調査結果 133
4.2 形式の面からの考察 135
4.3 説明文におけるノデハナイカ 136
4.4 意見文におけるノデハナイカ 138
4.4.1 意見文における「推測」のノデハナイカ 138
4.4.2 意見文における「婉曲」のノデハナイカ 142
4.5 歴史文におけるノデハナイカ 144
4.6 まとめ 146

5. 中国語話者によるノデハナイカの使用実態－話し言葉 147
5.1 調査の概要および結果 147
5.2 形式の面からの考察 148
5.3 「独話」におけるノデハナイカの使用実態 149
5.3.1 「sp11」 149
5.3.2 「sp12」と「sp13」におけるノデハナイカ 151
5.4 「対話」におけるノデハナイカの使用実態 153
5.4.1 「インタビュー」におけるノデハナイカの使用実態 153
5.4.2 「ロールプレイ」におけるノデハナイカの使用実態 158
5.5 まとめ 161

第 4 章 ダロウとノデハナイカの比較 164

1. ダロウとノデハナイカの比較に関する研究 164
1.1 ダロウの「推量」「疑念」用法とノデハナイカの「推測」用法の比較 165
1.2 ダロウの「確認」用法とノデハナイカの「確認」用法の比較 167
1.3 先行研究のまとめ 168

2. ダロウとノデハナイカの比較－コーパス調査の結果に基づく 169
2.1 ダロウの「推量」用法とノデハナイカの「推測」用法 169
2.2 ダロウの「疑念」用法とノデハナイカの「推測」用法 170
2.3 ダロウの「確認」用法とノデハナイカの「確認」用法 172
2.4 ダロウの「婉曲」用法とノデハナイカの「婉曲」用法 173

3. ダロウとノデハナイカの比較－文系学術論文における 173
3.1 学術論文におけるダロウとノデハナイカに関する研究 174
3.2 調査方法と結果 175
3.3 ダロウの「推量」用法とノデハナイカの「推測」用法 177
3.3.1 導入部分におけるダロウとノデハナイカ 177
3.3.2 本論部分におけるダロウとノデハナイカ 178
3.3.3 終結部分におけるダロウとノデハナイカ 181

3.4 ダロウの「婉曲」用法とノデハナイカの「婉曲」用法 182
3.4.1 出現場所 182
3.4.2 前接形式 183
4. まとめ 184
第 5 章 日本語教科書におけるダロウとノデハナイカの扱い 187
1. 日本語教科書におけるダロウの扱いとその問題点 187
1.1 日本語教科書におけるダロウの提出課および提出順序 187
1.2 日本語教科書における「推量」のダロウの扱い 189
1.2.1 CN に「推量」のダロウを指導する際の留意点 189
1.2.2 日本語教科書における「推量」のダロウに関する解説とその問題点 190
1.2.3 日本語教科書における「推量」のダロウに関する例文とその問題点 191
1.3 日本語教科書における「確認」のダロウの扱い 192
1.3.1 CN に「確認」のダロウを指導する際の留意点 192
1.3.2 日本語教科書における「確認」のダロウに関する解説とその問題点 193
1.3.3 日本語教科書における「確認」のダロウに関する例文とその問題点 194
1.4 日本語教科書における「疑念」のダロウの扱い 194
1.4.1 CN に「疑念」のダロウを指導する際の留意点 194
1.4.2 日本語教科書における「疑念」のダロウに関する解説とその問題点 194
1.4.3 日本語教科書における「疑念」のダロウに関する例文とその問題点 196
1.5 日本語教科書における「婉曲」のダロウの扱い 196
1.5.1 CN に「婉曲」のダロウを指導する際の留意点 197
1.5.2 「婉曲」のダロウの扱いにおける問題点 197
2. 日本語教科書におけるノデハナイカの扱いとその問題点 197
2.1 日本語教科書におけるノデハナイカの提出課および提出順序 197
2.2 日本語教科書における「推測」のノデハナイカの扱い 199
2.2.1 CN に「推測」のノデハナイカを指導する際の留意点 199
2.2.2 日本語教科書における「推測」のノデハナイカに関する解説とその問題点 199
2.2.3 日本語教科書における「推測」のノデハナイカに関する例文とその問題点 201
2.3 日本語教科書における「確認」のノデハナイカの扱い 201
2.3.1 CN に「確認」のノデハナイカを指導する際の留意点 201
2.3.2 日本語教科書における「確認」のノデハナイカに関する解説とその問題点 202
2.3.3 日本語教科書における「確認」のノデハナイカに関する例文とその問題点 202
2.4 日本語教科書における「婉曲」のノデハナイカの扱い 202
2.4.1 CN に「婉曲」のノデハナイカを指導する際の留意点 203
2.4.2 日本語教科書における「婉曲」のノデハナイカの扱いにおける問題点 203

3. 改善案 203
3.1 ダロウとノデハナイカの各用法の提出順序 203
3.2 例文と日本語教師向けの文法解説 205

第 6 章 結論 212

1. 各章のまとめ 212

2. 今後の課題 222

参考文献 223

参考資料 228

付録 1 第 4 章 学術論文調査資料 230

付録 2 第 5 章 教科書における解説と例文 233

第 1 章 序論

本論文は、モダリティ表現ダロウとノデハナイカを中心に調査・分析を行い、中国語話者（以下「CN」とする）[1]向けの日本語教育へ資する形での文法記述の実現を目指すものである。研究方法として、日本語話者（以下「JP」とする）および CN による使用実態調査から、CN の使用における問題点、そして指導する際の留意点を洗い出す。それに照らし合わせて、日本語教科書を調査し、問題点を指摘した上で改善案を提示する。

本章序論では、次の 3 点について述べる。まず 1.では、本論文の研究背景と研究対象を述べる。それらの内容を踏まえ、2.では、本論文の研究目的を設定し、研究方法の概要を述べる。さらに 3.では、本論文の構成を示す。

1. 研究背景および研究対象

1.1 研究背景

「文法」は、日本語教育において重要な位置を占めており、そのあり方について多くの先行研究がなされてきた。そのうち、日本語教育文法は寺村秀夫や森田良行らをはじめとする、従来の「文法記述を深めていけば、それが（結果として）日本語教育の役に立つ」という考えから、「日本語教育のための文法記述」という視点に変わりつつあり、これまでの文法の見直しや、新しい教育観に基づく提案が試みられている（白川 2002、野田編 2005、森・庵編 2011 など）。

特に、日本語学習者による日本語の使用について、「文末は確言ばかりでそれ以外のモダリティ表現の使用が見られない」（大島 1993: 93）、「相手に向かって直接話しかけたり問いかけたりしているような表現の多用」（高橋・伊集院 2006: 80）、「かなり優れた日本語で書かれていると認められるものでも、その語調の強さに違和感を感じることがしばしばである」（佐々木・川口 1994: 1）といった特徴が観察されることで、モダリティの習得の困難さが示唆されたため、モダリティは日本語教育の視点から、頻繁に取り上げられている。太田（2008: 41）はそれについて、以下のように指摘している。

> 話者の心的態度を表すとされるモダリティに関する研究は、様々な角度から多彩な成果が報告されている。しかし、現在、教育現場で教えられているモダリティ表現の練習を見てみると、そうした成果が十分に活かされていないだけでなく、逆に、話し手がそのような態度で出来事を述べるのはどのようなときなのか、また、そのような述べ方をすることで話し手は何ができるのか、といったことについては、これまでの研究も未だ十分ではないということがわかる。その 1 つの原因は、文の命題部ではなく、それを「誰が」「いつ」「どのような意図で」伝えるかを担うモダリティの部分においてさえ、従来の「意味」と「形式」を重視した記述姿勢を変えていないことに

[1] 本論文で言う CN とは、母語が中国語であり、JFL（Japanese as a Foreign Language: 外国語としての日本語教育）環境で、日本語を学ぶ学習者である。

あるだろう。これからの、コミュニケーションのための文法記述においては、文法を記述する上での見方の転換を図る必要があるのではないだろうか。

また、近年大規模コーパスの整備につれ、モダリティの使用実態を把握することの重要性が提唱されている（野田編 2016 など）。松本（2009: 615）が指摘しているとおり、「現実には、従来の文法理論では説明できない言語現象や文法に逸脱したと考えられる文が少なからず用いられており、人間の言語使用の実態を客観的に眺める必要が生じてくる」。使用実態調査により、これまでに研究者の内省で行なわれてきた文法記述の結果を検証したり、追試をしたりすることも可能になる。また、日本語教育の立場から考えても、よく使用する用法や場面、またその表現とよく共起する形式といった使用実態を明らかにして、さらに日本語教育の現場に反映することは有意義なのではないだろうか。

そこで、日本語教育において有効な文法記述を目的に、使用実態に基づくモダリティ表現に関する考察の一環として、筆者は、多様な用法をもち、話し言葉にも書き言葉にも頻繁に使用され、そして日本語教育に重要視されている「ダロウ」を取り上げた（馮 2018）。JP と CN によるダロウの使用実態について、コーパスを用いて調査、比較し、CN の使用における問題点を分析し、日本語教育への提言を行った。使用実態調査は書き言葉と話し言葉に分けて行い、以下の結論を得た。

「推量」のダロウ：

①. 書き言葉において、CN が「推量」のダロウを使うのは主に主張を述べる場面である。事態の発展や理由を述べる場合における使用は少ない。

②. 話し言葉において、CN はよく言い切りで「推量」のダロウを使用する

「確認」のダロウ：

①. 書き言葉において、CN は JP より「確認」のダロウを多用する傾向がある

②. 話し言葉において、「話し手と聞き手の関係」および「確認する内容」が重要なポイントである。CN は目上の人、初対面の人に対して「確認」のダロウを使用し、失礼になる場合がある。CN は話し手の経験や判断など話し手の情報に関して「確認」のダロウを多用し、ほかの確認表現より失礼になる可能性が高い。

「疑念」のダロウ：

①. 「疑念ー疑い」用法については、CN による用例数は JP に比べ非常に少ない。書き言葉において、「疑い」によって書き手の思考過程を示し、文章を展開させる用法は充分には習得されていない。話し言葉において、「疑い」によって円滑なコミュニケーションを遂行する用法は十分には習得されていない。

②. 「疑念ー婉曲」用法については、「疑念」のダロウの不使用によって、丁寧さに欠ける表現になり、対人関係に影響を与える可能性がある。

ダロウについて調査した際に、CN による「疑念」用法の使用の少なさは、ノデハナイカの不使用による影響を受けていることがわかった。つまり、JP の用例における「疑念」のダロウは、ノデハナイカと共起して使用されることが多い。一方、CN はノデハナイカの使用が少ないため、ダロウの使用も少なくなるのだ。そこで筆者ははじめて、ノデハナイカという表現に注意を向けた。

ノデハナイカはダロウと同じように多様な用法があり、そして各用法がダロウと共通性をもっている。たとえば、(1) におけるノデハナイカが表している意味は、ダロウによって表される推量とよく似ている。(2) におけるノデハナイカは「疑い」を表す点で「疑念」のダロウと共通する。(3) におけるノデハナイカはダロウと同じように、確認要求も表せる。

(1)　明日は雨になる{だろう／んじゃないか}。

（宮崎 2005: 116）

(2)　僕はあのとき、もしかして、この人は嘘をついている{んだろうか／んじゃないか}、と思った。

（日本語記述文法研究会 2003: 181）

(3)　君、疲れてる{だろう／んじゃないか}？

（宮崎 2005: 116）

ダロウと共通性をもつノデハナイカは、くだけた話し言葉から硬い学術論文まで、多様な場面において頻繁に使用されている。しかし、盛んに研究されてきたダロウと違って、ノデハナイカに関する研究は比較的少ない。特に、日本語教育の立場からの議論はわずかである（藤城 2007、小西 2008、張 2009）。日本語教育の現場において、ノデハナイカもあまり重要視されておらず、積極的に取り入れられていない。筆者の日本語学習の経験を振り返っても、ノデハナイカに関する指導が少ないように感じ、実際に日本語でコミュニケーションする際に支障になる場合もあった。たとえば、ノデハナイカは形式上に「か」という疑問形式があるものの、問いかけ以外の意図で使われる場合が多い。このような形式と意味のギャップは、理解の困難さをもたらす。対話でノデハナイカを聞くと、「私に聞いているのか」、「答える必要があるのか」と戸惑ったことがある。文章を読む際にノデハナイカを見ると、「それは筆者の疑問なのか、それとも主張なのか」と迷ったことがある。以上のことから、ダロウと合わせて、ノデハナイカについて調査を行う必要があると考えられる。

1.2 研究対象

本論文で取り上げるカタカナで表記するダロウには、「だろう（か）」、「でしょう（か）」、「であろう（か）」、「だろ」、「でしょ」といった出現形がある。また、カタカナで表記するノデハナイカは、出現形のバリエーションが豊富であり、表 1 に示している出現形を研

究対象とする。「か」が省略された①「ん／のでは」②「ん／のじゃない」③「ん／のではない」④「ん／のじゃ」⑤「ん／のではありません」⑥「ん／のじゃありません」を「簡略形」とし、「疑念」のダロウと共起する⑬「ん／のではないだろうか」⑭「ん／のじゃないだろうか」⑮「ん／のではないでしょうか」⑯「ん／のじゃないでしょうか」を「複合形」とする。それ以外の⑦「ん／のではないか」⑧「ん／のじゃないか」⑨「ん／のではないですか」⑩「ん／のじゃないですか」⑪「ん／のではありませんか」⑫「ん／のじゃありませんか」を「一般形」と呼ぶ。

表 1 本論文の研究対象となるノデハナイカ

形式	出現形
簡略形	①ん／のでは
	②ん／のじゃない
	③ん／のではない
	④ん／のじゃ
	⑤ん／のではありません
	⑥ん／のじゃありません
一般形	⑦ん／のではないか
	⑧ん／のじゃないか
	⑨ん／のではないですか
	⑩ん／のじゃないですか
	⑪ん／のではありませんか
	⑫ん／のじゃありませんか
複合形	⑬ん／のではないだろうか
	⑭ん／のじゃないだろうか
	⑮ん／のではないでしょうか
	⑯ん／のじゃないでしょうか

なお、ダロウについては、(4) のような逆接条件節を形成する用法や、(5) のような詠嘆を表す用法など、慣用的な用法として固定化が進んでいるものは対象外にする。また、ノデハナイカについては、第 3 章で詳しく論じるが、(6) のような「名詞述語文＋ではないか」を本論文では否定疑問文のバリエーションと考え、研究対象外にする。

(4)　「そうすれば、二億だろうが十億だろうが、少人数で無理せずに引き出せますからね。」

（文学, 安東能明 2003『強奪箱根駅伝』, 新潮社）

(5)　今、眼がさめたら、全てが夢で、彼女が、窓際に立って、笑っていたら、どんなにいいだろうか、と、三田村は、思った。

（文学, 西村京太郎 2000『桜の下殺人事件』, 新潮社）

(6)　その分、ますます米国を軸としての世界主要市場の同質化、連動性の研究は必

要ではないかと思います。

（文学以外，吉見俊彦 2001『利益を出す株の教科書』，インターワーク出版）

また、本論文で言う CN とは、母語が中国語であり、JFL（Japanese as a Foreign Language: 外国語としての日本語教育）環境で、日本語を学ぶ学習者である。なお、本論文で取り上げるダロウとノデハナイカは、多様な用法をもっており、日本語教育において各用法は初級後半から中級にわたって導入される場合が多いため、本論文で CN による使用実態を調査する際には、レベルを中級および中級以上に限定する。

2. 研究目的および研究方法

2.1 研究目的

本論文は、モダリティ表現ダロウとノデハナイカに焦点を当て、CN 向けの日本語教育へ資する形での文法記述の実現のために、以下の 3 点を目的とする。

①. JP によるダロウとノデハナイカの使用実態を調査する。それぞれの特徴および共通点と相違点を明らかにし、日本語教科書における記述や指導方法の改善のための基礎データを得る。

②. CN によるダロウとノデハナイカの使用実態を調査する。JP の使用実態との比較により、CN の使用の特徴および問題点を明らかにし、CN 向けの指導における留意点を洗い出す。

③. 中国における日本語教育の現場で広く使われる日本語教科書におけるダロウとノデハナイカの扱いの問題点を指摘した上で、教育現場に貢献できる改善案を提示する。

2.2 研究方法

上記のような研究目的に達成するための研究方法の概要は、以下のとおりである。研究方法の詳細は、各章で調査方法を述べる際に明記する。

2.2.1 コーパス調査

本論文では、JP と CN による使用実態を明らかにするために、下記のコーパスを用い、コーパス調査を行う。

JP 書き言葉：

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の「国会会議録」以外、非コアを含む全データ

JP 話し言葉：

『日本語話し言葉コーパス』の「独話・学会」「独話・模擬」

『名大会話コーパス』

CN 書き言葉：

『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』

『JCK 作文コーパス』

CN 話し言葉：

『発話対照データベース』の「スピーチ」と「ロールプレイ」

『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』の「対話」と「ロールプレイ」

調査は書き言葉と話し言葉に分けて行う。JP による書き言葉については、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下「BCCWJ」とする）における「国会会議録」以外、非コアを含む全データを検索対象とする。BCCWJ は、国立国語研究所が開発し、現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために構築したコーパスであり、現在、日本語について入手可能な唯一の均衡コーパスである。書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって 1 億 430 万語のデータが格納されている。なお、「国会会議録」は書き言葉コーパスに収録されているが、政治家の国会会議での発言という音声データが先にあり、その後文字化された言語資料である。そして、日本語教育の視点から見れば、学習者は国会会議という使用場面に接するチャンスは非常に少ないと想定できるため、本論文では「国会会議録」のデータを扱わないことにする。

JP による話し言葉における使用実態については、さらに「独話」と「対話」[2]に分けて調査する。「独話」[3]については、『日本語話し言葉コーパス（以下「CSJ」とする）』の「独話・学会」「独話・模擬」を用いる。CSJ は、国立国語研究所・情報通信研究機構（旧通信総合研究所）・東京工業大学が共同開発した、日本語の自発音声を大量に集めて多くの研究用情報を付加した話し言葉研究用のデータベースである。「対話」については、『名大会話コーパス』（以下「名大」とする）を使用する。名大は、科学研究費基盤研究（B）(2)「日本語学習辞書編纂に向けた電子化コーパス利用によるコロケーション研究」（平成 13 年度～15 年度 研究代表者 大曽美恵子）の一環として作成された、129 会話、合計約 100 時間の日本語話者同士の雑談を文字化したコーパスである。

CN の使用実態を調査することにあたって、JP との比較を念頭に置いて、書き言葉については、『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』（以下「YNU」とする）と、

---

[2] 西尾（1975）は話し言葉の領域を独話、対話、会話という 3 つの形態に分類している。すなわち、話し手と聞き手が「一対一」もしくは「一対多」で、その話し手はいつも話し手、聞手はいつも聞手になっているのを「独話」、話し手と聞き手が「一対一」で両者が随時交替するのを「対話」、話し手と聞き手が「一対多」でその間に随時交替が行われるのを「会話」とするのである。本論文では、西尾（1975）における対話と会話を合わせて「対話」と呼ぶ。

[3] CSJ における独話（モノローグ）のデータには「独話・学会」「独話・模擬」「独話・朗読」「独話・再朗読」がある。「独話・朗読」と「独話・再朗読」は書き言葉のテキストを朗読したものであるため、本論文では「独話・学会」「独話・模擬」のみを検索対象とする。「独話・学会」は、理工学、人文、社会の 3 領域におよぶ種々の学会における研究発表のライブ録音である。「独話・模擬」は、できるだけ年齢と性別のバランスをとった一般話者による、日常的話題についての講演である（前川 2006: 4）。

「JCK 作文コーパス」[4]（以下「JCK」とする）を使用して調査を行う。YNU には、中国語話者 30 名、韓国語話者 30 名と日本語話者 30 名が 12 のタスクに基づいて書いた作文、計 1,080 編が収められている。JCK は、「説明文」「意見文」「歴史文」という 3 つのタイプの内容について、中国語話者 20 名、韓国語話者 20 名と日本語話者 20 名が 2,000 字程度の長さの作文を書いたものをコーパスにしたものである。

CN による話し言葉については、「独話」を「発話対照データベース」（以下「発話対照 DB」とする）の「スピーチ」を用いて調査する。発話対照 DB は、中国語話者 69 名、韓国語話者 70 名、タイ語話者 51 名、日本語話者 57 名による、朗読、スピーチ、ロールプレイという 3 種類の課題（学習者は日本語および母語で、日本語話者は日本語のみで発話する）のデータを収集したものである。SPOT によって学習者のレベル判定を行っており[5]、点数が 56 点以上の学習者は中級レベルに達していると見なせる。「対話」を発話対照 DB の「ロールプレイ」および『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』（以下「I－JAS」とする）の「対話」と「ロールプレイ」を使用して調査を行う。I－JAS は異なった 12 言語を母語とする学習者および日本語話者計 1050 人による、6 つの発話タスク（ストーリーテリング 1・2、対話、ロールプレイ 1・2、絵描写）と 6 つの作文タスク（ストーリーライティング 1・2、メール 1・2・3、エッセイ）のデータを収集したものである。J－CAT 日本語テスト[6]および SPOT によって学習者のレベル判定を行っており、J－CAT の点数が

---

[4] http://nihongosakubun.sakura.ne.jp/corpus/ で公開されている。2020 年 4 月 27 日最終閲覧。

[5] SPOT は母語話者の自然な話速度の読み上げ文を聞きながら、解答用紙に書かれた各同文を読み、それぞれ 1 箇所のひらがな 1 文字分の空欄に穴埋めディクテーションするというテストである。発話対照 DB では、第 1 期、第 2 期の 2 回に分けてデータが収集され、第 2 期の発話者には SPOT が実施された。

表（1） SPOT スコア互換表

SPOT	能力判断	説明
0-30	入門	日本語を学習したことがほとんどない。
31-55	初級	ゆっくりであれば日常生活の基本的な日本語を理解できる。
56-80	中級	自然な話速度で日常的な場面の日本語がある程度理解できる。
81-90	上級	自然な話速度で幅広い場面の日本語が理解できる。

（http://ttbj.jp/p2.html による）

[6] J－CAT 日本語テストはコンピュータによる日本語学習者のインターネット日本語能力自動判定テストである。

表（2） J－CAT スコア互換表

J－CAT	Proficiency Level	
0-100	Basic	初級
100-150	Pre－Intermediate	中級前半
150-200	Intermediate	中級
200-250	Intermediate－High	中級後半
250-300	Pre－Advanced	上級前半
300-350	Advanced	上級
350-	Near Native	日本語母語話者相当

（http://www.j-cat.org/html/ja/pages/interpret.html による）

150 点以上或いは SPOT の点数が 56 点以上の学習者は中級レベルに達していると見なせる。

2.2.2 学術論文調査

ダロウとノデハナイカのそれぞれの特徴およびの両者共通点と相違点をより明らかにするために、学術論文という使用場面にしぼって調査する。JP が書いた計 120 編の文系学術論文を収集し、ダロウとノデハナイカの使用について考察と比較を行う。

2.2.3 教科書調査

従来の日本語教育においてダロウとノデハナイカがどう扱われているかを探る手がかりとして、本論文では教科書調査を行う。コーパス調査と学術論文調査から得た結果に照らし合わせて、ダロウとノデハナイカの扱いを検討する。太田（2008: 2）が指摘しているように、これまでの日本語学的な文法記述が必ずしも学習者にとって有益な情報とならないとされる原因の 1 つには、従来の教科書や文法解説書は、主に文の「形」と「意味」の記述に重点を置き、その文型が、「どのような文脈」で「どのような機能」を担って使用されるのか、といった運用面からの記述に欠けていることがあげられる。本論文では、現行教科書における問題点を指摘した上で、CN の運用力の向上を目指し、教育現場に貢献できる改善案を提示したい。

3. 論文の構成

本論文の構成は以下のとおりである。

第 1 章 序論
第 2 章 ダロウについて
第 3 章 ノデハナイカについて
第 4 章 ダロウとノデハナイカの比較
第 5 章 日本語教科書におけるダロウとノデハナイカの扱い
第 6 章 結論

第 1 章では、研究背景と研究対象を説明し、研究目的および研究方法を述べる。

第 2 章では、ダロウに関する先行研究を整理し、本論文におけるダロウの意味用法の分類を規定する。書き言葉と話し言葉コーパスを用いて、JP と CN によるダロウの使用実態をそれぞれ調査・分析・比較する。ダロウの使用傾向を明らかにすることで、CN が抱える問題点を洗い出す。

第 3 章では、ノデハナイカに関する先行研究を整理し、本論文におけるノデハナイカの意味分類を規定する。書き言葉と話し言葉のコーパスを用いて、JP と CN によるノデハ

ナイカの使用実態をそれぞれ調査・分析・比較する。ノデハナイカの使用傾向を明らかにすることで、CN が抱える問題点を洗い出す。

第 4 章では、コーパス調査の結果および文系学術論文における使用状況に基づいて、ダロウとノデハナイカを比較し、それぞれの特徴およびの共通点と相違点をより明らかにする。

第 5 章では、第 2 章〜第 4 章の結果を踏まえ、CN 向けの日本語指導の留意点をまとめた上で、日本語教科書を調査し、ダロウとノデハナイカの扱いに関する問題点を指摘する。さらに、改善案および具体的な記述を試案として提示する。

第 6 章では、各章のまとめを行い、本論文の結論をまとめる。最後に、今後の展望と課題について述べる。

第 2 章 ダロウについて

第 2 章では、JP と CN によるダロウの使用実態について、書き言葉と話し言葉に分けて考察する。本章の構成は以下のとおりである。1.では関連する先行研究を概観し、本論文におけるダロウの意味分類を規定する。2.と 3.では JP による書き言葉と話し言葉における使用実態をそれぞれ考察する。4.と 5.では CN による書き言葉と話し言葉における使用実態をそれぞれ考察する。

1. 先行研究および本論文の規定

従来の研究では、ダロウは推量を表す認識的モダリティ表現として扱われている。また、聞き手の存在を前提とする確認要求としての側面にも関心が寄せられている。さらに、ダロウは疑問化可能であり、疑問詞および「か」[1]を付加したダロウについても先行研究で論じられている。本論文はダロウのこの 3 つの用法を「推量」「確認」「疑念」と呼び、1.1〜1.3 ではそれぞれに関する先行研究を概観する。それに基づいて、1.4 では本論文におけるダロウの意味用法の分類を規定する。

1.1 「推量」のダロウに関する先行研究

多くの先行研究では、「推量」はダロウの基本的な用法として位置づけられ（安達 1999、宮崎 2005、三宅 2010a など）、様々な観点から論じられてきた。「推量」という概念については、本論文では三宅（1995: 2）が提唱している「話し手の想像の中で真であると認識する」という定義に従うことにする。

1.1.1 「推量」のダロウの意味

「推量」のダロウの意味については、「断定保留」とする立場がある（森田 1980、益岡 1991 など）。森田（1980: 222）は「話し手がはっきりこう言い切ることを差し控えて、断定を保留するときに用いる言い方である。慎重さや、自信のなさや、不確かなことで断言が差し控えられる気分のときなどに用いられる」と述べている。益岡（1991）もこの指摘に従い、ダロウを第一義的に断定保留としている。

宮崎（2002: 133）は「推量」のダロウを「想像・思考という間接的な認識によって、現実を捉える形式」としている。ダロウの不確かさを認めているが、森田（1980）と益岡（1991）のように判断面で不確かさを捉えることを否定し、認識面でダロウの不確かさを捉える立場をとっている。つまり、(1) のように、ダロウは話し手がその出来事を想像・思考の中で捉えたに過ぎず、経験的な事実として確認されているわけではないという、認識面での不確かさを表すと分析している。本論文は「推量」のダロウの不確かさについて、宮崎（2002）による「認識面での不確かさ」という主張に従う。

---

[1] 疑問詞をともなう際に、文末の「か」は任意である。

(1)　たぶんこれはただの洋服だんすではなく、洋服だんすを装った秘密の通路か何かだろうと私は想像した。

（宮崎 2002: 134）

ダロウは不確かさをもっているにも関わらず、確言度の高い表現であり、積極的に不確実さを表すのではない。寺村（1984: 229）によると、「ダロウという形で推量の表現をするのは、その根拠が自分個人の知識や経験だけによる場合で、その点で結局は確言的な断定のダと大して変わらない」。徐（2019: 66）は「推量」のダロウの表現機能を「断定的な意見表明」としている。また、森山（1995: 178）が指摘しているように、ダロウが不確実を表すように見える用法は、本来未知のことについて言うので、結論づけた言い方ができない、ということを表すだけの標識であり、本来的に積極的に不確実であるという判断を表すのではない。

さらに、主観性の強さも指摘されている。寺村（1984: 229）は、「ダロウは判断の客観性を相手にほのめかすという意識がないため、主観性の強い表現である」と述べている。蓮沼（1991 :213）によると、ダロウの主観性はその推量が「思考・想像」といった話し手の主体的な精神の働きを介してなされるという点にある。

1.1.2 「推量」のダロウのニュアンス

「推量」のダロウには、ニュアンスについての指摘が多く見られる。そのうち、「聞き手の考えを無視してまで強く断定する」(安達 1997: 55)、「やわらかい調子のものにする」（寺村 1984: 229）といった、一見矛盾しているような指摘が見られる。本論文では、それはダロウの「推量」用法と「婉曲」用法を 1 つの用法として扱った結果である考える。

まず、「聞き手の考えを無視してまで強く断定する」と似た指摘が、ほかの先行研究にも見られる。たとえば、日本語記述文法研究会（2003: 148）は、「想像・思考という不確かな認識によって判断を下すことから、「だろう」の文には、独断的なニュアンスがともないやすい」と指摘している。また、森山（1995: 179）は、「自分の心理的プロセスをいちいち開示する言い方は、「勿体」をつけた言い方である」と述べている。このようなニュアンスを回避する方法として、安達（1997）は、終助詞「ね」を付加したり、思考動詞「思う」の補文に埋め込んだりするといった手段をあげている。さらに、庵（2009）は安達（1997）の分析を踏襲し、「推量」のダロウによる言い切りが可能になる場合として以下の 3 つをあげている。

①. 自分の述べる意見や情報が聞き手にとっても受け入れやすいと考えられる場合
②. 相手に対する配慮を犠牲にしてでも、強く主張するということを意図する場合
③. 発話者が「専門家」である場合

（庵 2009: 63）

これに対して、ダロウのニュアンスにある「やわらかい調子」、「婉曲的」という特徴も先行研究にはしばしば指摘されている。たとえば、寺村（1984: 229）は「論説調の文章によく出てくるダロウには、ダ、デアルという言いかたを単にやわらかい調子のものにしたというだけで、自信のある断定であることが少なくない」と述べている。また、宮崎（2002: 133）も「婉曲」用法の存在を指摘している。（2）のような主観的評価にダロウがついた場合に、ダロウは典型的な「推量」を表さず、「主張の強さを抑制する、いわゆる＜婉曲＞用法である」と述べている。そのほかに、「意見叙述を婉曲的にする」（森山 1995:179）、「主張を控えめにする」（日本語記述文法研究会 2003: 149）のように、ダロウの「婉曲」用法の存在は複数の先行研究に認められている。しかし、これらの研究は「婉曲」を「推量」用法の 1 つの下位分類として扱っており、「婉曲」用法にしぼって検討したものはないようである。

（2）　これら三つが、自信喪失の言わば外部要因と言えるだろう。これに加えて、「夢」に対する幻滅という内部要因がある。

（宮崎 2002: 136, 藤原正彦『若き数学者のアメリカ』）

以上概観した先行研究からわかるように、「推量」のダロウの意味については、様々な観点から論じられているが、その多くは研究者の内省によるものである。一方、客観的な使用実態に基づいた研究には庵（2009）と徐（2019）がある。庵（2009）も徐（2019）も使用実態に基づき、日本語教育におけるダロウの扱いを検討するものである。庵（2009）は話し言葉における「推量」の「でしょう」という出現形の使用のみを調査している。徐（2019）は話し言葉におけるダロウのほかの出現形や用法も考察しているが、書き言葉における使用実態については言及していないため、さらに検討する余地があると思われる。

また、「推量」用法と「婉曲」用法を 1 つの用法として扱うことは、日本語学の観点から見れば、「婉曲」が「推量」から派生した用法であるため、さほど問題がないようである。しかし、この 2 つの用法には、話し手の認識が確かか否かという大きな違いがあるため、日本語教育の立場から考えると、「婉曲」を別の用法として扱ったほうがよいだろう。これについては、1.4 で詳しく述べる。

1.2 「確認」のダロウに関する先行研究

「確認」のダロウについては、「推量」のダロウとの関係や、用法の下位分類などの観点によって研究されてきた。以下では、この 2 点に分けて見ていく。

1.2.1 「確認」のダロウと「推量」のダロウとの関係

「確認」と「推量」の関係について、「推量」を基本的な意味用法とし、「確認」を「推量」からの派生・移行と捉えるような立場をとる研究には、奥田（1984）、益岡（1991）、蓮沼（1995）、安達（1999）、宮崎（2005）などがある。ここでは奥田（1984）と宮崎（2005）

を概観する。

奥田（1984）は「推量」のダロウを「おしはかり文」と呼び、「おしはかり文」が話し合いの構造の中で、「念おし的なたずねる文」へ移行するとしている。「念おし的なたずねる文」を推量性と問いかけ性が併存したものとして位置づけており、移行の経緯を「ひとりがおしはかり的な想像なり判断をおこなうとすれば、あい手がわからその真偽がこたえになって、かえってくるのは、当然なことである」と説明している。さらに、「念おし的なたずねる文」は、おしはかるという意味も、たずねるという意味もなくなれば、「たんなる念おしの文」へ移行すると述べている。

また、宮崎（2005: 105）は「確認」と「推量」の相違を表 1 にまとめており、以下のように述べている。

表 1 「確認」と「推量」の相違（宮崎 2005: 105）

	出現位置	イントネーション	テクストのタイプ
推量	文末・文中	下降調のみ	独話・対話（話し言葉・書き言葉）
確認	文末のみ	上昇調・下降調	対話（話し言葉）のみ

文中に出現するもの、独話や書き言葉として使用されたものは、必ず推量用法であり、上昇調イントネーションをとるものは、必ず確認要求用法であるということになる。また、文末＋下降調＋対話といったケースでは、いずれの用法も成立しうることになり、実現条件が問題になる。

（宮崎 2005: 105）

1.2.2 「確認」のダロウの下位分類

「確認」のダロウの下位分類については、ほとんどの先行研究では 2 分類されている。鄭（1995）は情報量の観点から「確認」のダロウを「確認要求」と「認識要求」に分けて考察している。（3）のような「確認要求」は、情報量において聞き手が優位の関係にあると見込まれる場合では、情報量で優位にあると仮定される聞き手に、自分が推量した情報を確認するニュアンスを持つ。また、「認識要求」とは、（4）のような、話し手自身はたしかに認識している事柄であるが、同じく認識可能な聞き手の認識状態が不明・不確かなとき、その事柄についての認識・回想を迫る表現である。

(3) 【確認要求】
「あなた達、泉さんが好きなんだろう」
「ファンクラブさ」

（鄭 1995: 266，セー）

(4) 【認識要求】
「あすこの萩の向こうに、蝶が飛んでいるだろう。」

「ええ。」

（鄭 1995: 266，若葉）

鄭（1995）と同様の立場から、宮崎（2005）は話し手自身の認識のあり方に基づいて「確認」のダロウを下位分類している。話し手自身の認識が不確かな状況での確認要求は「聞き手依存型」、話し手自身の認識が確かな状況での確認要求は「聞き手誘導型」としている。「聞き手依存型」と「聞き手誘導型」はそれぞれ鄭（1995）の「確認要求」と「認識要求」にほぼ対応すると思われる。

また、三宅（1996）は、命題が真であることの確認要求を「命題確認の要求」、当該の知識を聞き手が有していることの確認要求を「知識確認の要求」に2分している。この2つもそれぞれ鄭（1995）の「確認要求」と「認識要求」にほぼ対応している。また、三宅（1996）は「知識確認の要求」をさらに下位分類している。1つは「潜在的共有知識の活性化」である。(5) のように、聞き手の知識を確認することによって、話し手と聞き手が潜在的に共有していると思われる知識を活性化させる機能を有する場合である。もう一つは「認識の同一化要求」である。(6) のように、聞き手に話し手と同じ認識を持つことを要求するといった機能を有している場合である。

(5)　【知識確認の要求－潜在的共有知識の活性化】
「この間、私、東京に帰った<u>でしょう</u>?」禎子は話した。
「はあ」
「あのとき、立川に行ってみたんです」

(6)　【知識確認の要求－認識の同一化要求】
「何言ってんの。2児の母親がスキーなんて行けっこない<u>でしょ</u>」

（三宅 1996: 117-118）

さらに、蓮沼（1995）は「確認」のダロウを「共通認識の喚起」「認識形成の要請」「推量確認」の3種類に分類している。「共通認識の喚起」とは認識的に優位な位置にいる話し手が、自分と同様な認識を持つように聞き手を促し、その成立状態を確認する用法である。「認識形成の要請」というのは、通常の認識能力を持っていれば、認識できて当然といった見込みに基づいて、聞き手に認識形成を要請する用法である。「推量確認」は、聞き手の知覚・感情・判断など、本来的にその直接の経験者・持ち主である聞き手に帰属する情報や、聞き手の領域の情報について、話し手の推測が正しいことを確認する用法である。蓮沼（1995）は上述した研究と異なり、3分類しているが、「共通認識の喚起」と「認識形成の要請」の用法の間に「大きな違いはなく、その差異は、文脈状況の相違を反映しているに過ぎない」と述べている。そのため、3つの用法を同じレベルに位置付けているのではなく、大きく2分類にまとめることができると思われる。

(7)　【共通認識の喚起】

同級生に加藤さんっていただろう。背の高い男の子。

(8)　【認識形成の要請】

だからいったでしょ。あの人には気をつけなさいって。

(9)　【推量確認】

私の料理の腕前が上がったでしょ。

（蓮沼 1995）

以上述べた分類方法の対応関係は表 2 のようにまとめられる。本論文では用法分類を行う際に、話し手の認識を重要な手がかりとするため、「話し手自身の認識のあり方」に基づく宮崎（2005）の用語を踏襲し、「確認」のダロウを「聞き手依存型」と「聞き手誘導型」に 2 分する。

表 2 先行研究における「確認」のダロウの分類

<table>
<tr><td>鄭（1995）</td><td>宮崎（2005）</td><td colspan="2">三宅（1996）</td><td>蓮沼（1995）</td></tr>
<tr><td>確認要求</td><td>聞き手依存型</td><td colspan="2">命題確認の要求</td><td>推量確認</td></tr>
<tr><td rowspan="2">認識要求</td><td rowspan="2">聞き手誘導型</td><td rowspan="2">知識確認の要求</td><td>潜在的共有知識の活性化</td><td>共通認識の喚起</td></tr>
<tr><td>認識の同一化要求</td><td>認識形成の要請</td></tr>
</table>

「確認」のダロウの使用実態については、庵（2009）は実際の発話データを調査し、ダロウの使用を分析した結果、「推量」より「確認」のほうが多数派であるという結論を出している。しかし、具体的な使用場面や発話意図などについての分析はまだ詳しく行われていない。また、中北（2000）は「確認」用法の待遇度の低さを指摘している。(10) のように、目上の人に対して使うと、丁寧形であるにもかかわらず、丁寧さに欠けるため、学習者に推奨できるものではないと述べている。「確認」のダロウの使用実態をもとにして、日本語教育においてはどのように指導すべきかを検討する必要があると思われる。

(10)　先生、レポートの締め切りは、確か来週でしょう？

（中北 2000: 26）

1.3 「疑念」のダロウに関する先行研究

「疑念」のダロウについては、安達（2002）は独話／対話という発話場面によって分類しており、宮崎（2005）は話し手の評価によって分類している。

1.3.1 安達（2002）

安達（2002）では、「疑念」のダロウは「疑い」の表現の 1 つとして扱われている。つまり、質問に備わっている「不確定性条件」と「問いかけ性条件」のうち、「問いかけ性

条件」を欠くものである。それゆえ、安達（2002: 184）は「疑念」のダロウが「聞き手が存在しない状況や心内発話のような独話的な環境で使われるのが一般的である」と指摘しており、独話的用法を＜判断不明＞、＜思考過程＞、＜疑念＞の 3 つに分けている。＜判断不明＞は「その命題の真偽や欠けている情報について、話し手がまったく見当がつかない状態にいることを表すもの」、＜思考過程＞は「疑問の解消に向けてありうる可能性を検討していることを表すもの」、＜疑念＞は「実際のところはまだ分からないが、その命題に対して否定的な方向に向いているということを表すもの」である。なお、安達（2002: 184）も指摘しているように、この 3 つは「断然と分けられるものではない」。

（11）　【判断不明】

森にはわからなかった。自分が意地張ったのがいけなかったのだろうか。あのとき、自分があっさり折れていれば、今ごろ村山は奨励会 1 年生として門出を飾れていたのかもしれない。

（安達 2002: 185, 大崎善生『聖の青春』）

（12）　【思考過程】

さて、席に戻った私は、冷めた紅茶を一口飲んで考えた。この場を救った女性のことである。

缶ペンにルーペとピンセットをいれて、持ち歩いている？　こんな事態に備えて用意していたわけでもなかろう。当然、使用目的があるわけだ。一体、何をする人なのだろう。昆虫学者か、それとも植物の研究家か。

結論は出ない。いずれにしても、この世には、いろいろな人がいるものだ。

（安達 2002: 185, 北村薫『六の宮の姫君』）

（13）　【疑念】

夜が白々と明ける頃、ついに彼は一つの結論に達した。こんなことがあり得るのだろうかと思いつつも、自分が読み切ったのだから間違いない、とその結論を信じた。

（安達 2002: 186, 島朗『純粋なるもの』）

また、安達（2002）は「疑念」のダロウの対話的な機能を、「独話的な用法の特徴を活かすことで獲得」したものとしており、対話的用法を質問用法と応答用法に分けている。質問用法には、「相手が回答を知っているという想定が成り立たない場合」に用いられる＜応答を強制しない質問＞と、「聞き手が解答を知っていることが明らかである場合、「疑念」のダロウによって問いかけ、聞き手に対する丁寧さを加える」＜聞き手への配慮を表す質問＞がある。

（14）　【応答を強制しない質問】

「うん、警察は、菅野さんが交差点にさしかかるまでの行動は調べているんだ

ろうか。」

「さあ……そこまで聞いてみなかったな」

（安達 2002: 188，宮部みゆき『魔術はささやく』）

（15）　【聞き手への配慮を表す質問】

「仕事というのは、どういうことをするのでしょうか」

「主にコピーね」

（安達 2002: 188，北村薫『六の宮の姫君』）

また、応答用法には、「明確な応答はできないものの、もっとも妥当だと思われる可能性を伝える」＜不確かな応答＞と、「話し手が相手の考えに沿った判断を成立させないということを表しており、これによって否定的な態度を暗に伝える」＜不信の表明＞がある。

（16）　【不確かな応答】

「ところで、どの辺から雨が降り出したのですか？」

「北槍をすぎて五十メートルくらいだったでしょうか。あの辺ですな」

（安達 2002: 193，松本清張『遭難』）

（17）　【不信の表明】

「でも、あまりに漠然としていて雲をつかむようです」

円紫さんは、こともなげにいう。

「そうでしょうか」

（安達 2002: 196，北村薫『六の宮の姫君』）

以上概観した安達（2002）に基づき、「疑念」のダロウの用法分類を図にまとめると、図 1 のようになる。

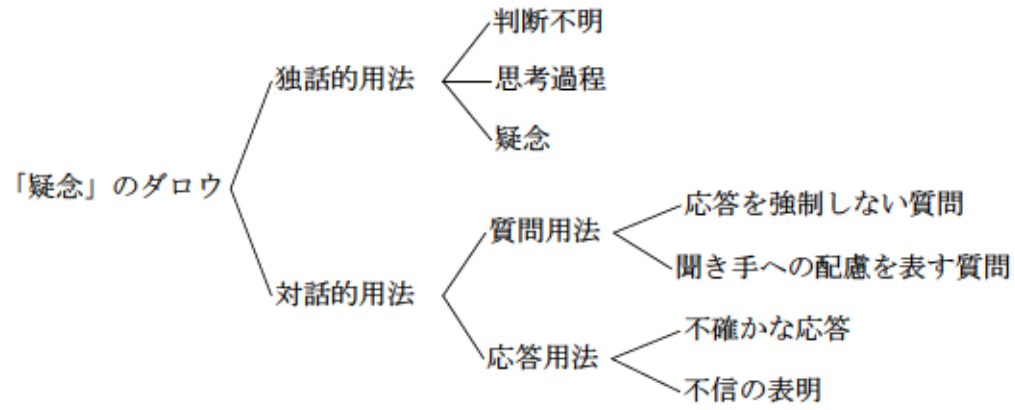

図 1 安達（2002）における「疑念」のダロウの分類[2]

[2] 図 1 は安達（2002）における分類方法に基づき、筆者が作成した図である。

安達（2002）は用法派生の過程を示しながら、独話的と対話的環境それぞれにおける具体的な用法を記述することで、「疑念」のダロウの全体像を示すことができたと思われる。しかし、いくつかの問題点も残っている。まず、前述のように、独話的用法の下位分類は、断然と分けられるものではなく、分類の基準は必ずしも明瞭ではない。また、（18）のような文章でよく見られる、いわゆる問題提起の用法について言及していない。さらに、（19）のような主張を婉曲的に述べる用法は安達（2002）の分類のどれに当てはまるのかについて疑問がある。また、対話的用法の場合、（20）のような応答文に現れるダロウは、＜不確かな応答＞と＜不信の表明＞のいずれでもなく、応答を回避するために使われていると思われる。

（18）　確かに、理論的にはその通りですが、実際に子会社化された Shared Service Company の実態はどうなのでしょうか。結論から言えば、最初の 1、2 年は良いが、中長期的には、以下に述べるような様々な経営上の課題を内含していると思います。

（文学以外，中田研一郎 2005『ソニー会社を変える採用と人事』，角川書店）

（19）　一般投資家よりも重い責任を負担すべく新しい「法的な社員」制度を創設することでもよいのではないだろうか。

（文学以外，三國仁司 2001『不動産投資ファンド』，東洋経済新報社）

（20）　F062：あっ、なんかさ、あのクラスん中でさ、どれだけ本気で目指してる人がいるんだろうねー。

F161：うん、私もそれ思う。なんか、えっ、Aさんが。

F062：Aさんー、はやっぱり目指してんのかなー。うーん。

F161：どうなんだろ。

F062：どうなんだろうねー。

（対話，名大，095）

1.3.2 宮崎（2005）

宮崎（2005）は、話し手がどのように評価しているかという点から、「疑念」のダロウを「中立型」「否定型」「肯定型」の 3 つのタイプに分けている。「中立型」は「特定の可能性を優先させず、中立的な立場をとるタイプ」、「否定型」は「取り上げた可能性を選択しない方向に向いているタイプ」、「肯定型」は「取り上げた可能性を選択する方向に向いているタイプ」である。

(21)　【中立型】

私は坐っていて変にいらいらし出します。私はあれは親類なのだろうか、それとも唯の知り合いなのだろうかとまず考えてみるのです。それから若い男だろうか年輩の人だろうかと思案してみるのです。

（宮崎 2005: 83-84, 夏目漱石「こころ」）

(22)　【否定型】

原田瑞枝は僕の言っていたことを果たして本当に正しく理解しているのだろうかーということが、日を追うにしたがって気がかりになった。

（宮崎 2005: 84, 椎名誠「新橋烏森口青春編」）

(23)　【肯定型】

彼等は、少年院で生活するうちに、殆どの者が、刺青をしたのを悔いていたが、動物を彫ってある者だけは、刺青を悔いていなかった。もしかしたら、あの刺青は、自己鍾愛の表現だろうか、と行助は刺青を見るとき思うことがあった。

（宮崎 2005: 84-85, 立原正秋「冬の旅」）

宮崎（2005）は、「疑念」のダロウの用法を記述するためではなく、ほかの形式との比較を目的として、このように分類しているのである。そのため、すべての用法を詳しく分類しているわけではないが、新しい分類の視点を提供したと言えよう。特に、日本語学習者にとって、インプットされた「疑念」のダロウを理解するための手がかりになると思われる。

1.4 本論文におけるダロウの意味用法の規定

ダロウの意味用法について、本論文では「話し手の認識」と「聞き手情報への配慮」[3]という 2 つの観点から、表 3 のように大きくて「推量」「確認」「疑念」「婉曲」の 4 分類を立てる[4]。

---

[3] 森山（1989）によると、「聞き手情報配慮」と「聞き手情報非配慮」とは、聞き手にも当該内容に関する情報がある、と話し手において仮定されているものとそうでないものである。

[4] ダロウの用法分類を試みる研究の 1 つにはキャアコップチャイ（2010）がある。表（1）には、「聞き手誘導型」の確認の場合、話し手自身の認識が確かであるため、②確認用法をすべて「対象への疑い有」として扱うことに問題がある。また、あげている①推量用法の実例に、本論文で言う「婉曲」用法の例があり、これも「対象への疑い有」として扱えないと思われる。

表（1）「だろう」の分類（キャアコップチャイ 2010: 158）

				疑問要素	
				無	有
対象への疑い	有	相手への問いかけ	無	①推量用法	③疑念用法
			有	②確認用法	④婉曲的質問用法
	無			–	⑤感動用法

表 3 本論文におけるダロウの意味用法の分類

<table>
<tr><td colspan="4"></td><td colspan="2">聞き手情報への配慮</td></tr>
<tr><td colspan="4"></td><td>配慮しない</td><td>配慮する</td></tr>
<tr><td rowspan="5">話し手の認識</td><td rowspan="4">不確か</td><td rowspan="2">疑問要素[5]なし</td><td>情報提供</td><td>A. 推量</td><td>－</td></tr>
<tr><td>情報要求</td><td>－</td><td>B－1. 確認－聞き手依存</td></tr>
<tr><td rowspan="2">疑問要素あり</td><td>情報提供</td><td rowspan="2">C－1. 疑念－疑い</td><td rowspan="2">C－2.疑念－婉曲疑問</td></tr>
<tr><td>情報要求</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">確か（疑問要素なし）</td><td>情報提供</td><td>D. 婉曲</td><td>－</td></tr>
<tr><td>認識要求</td><td>－</td><td>B－2. 確認－聞き手誘導</td></tr>
</table>

話し手の認識が不確かである場合、疑問要素の付加がなく、情報提供の意図で使われるダロウは「推量」用法である。「推量」とは、「話し手の想像の中で真であると認識する」（三宅 1995: 2）。この場合、聞き手情報を配慮しない。

(24)　【推量】

鈴木氏が委員長になれば、会議は早く終るだろう。

（日本語記述文法研究会 2003: 149）

疑問要素の付加がなく、聞き手情報を配慮し、情報要求あるいは認識要求の目的で使用されるのは「確認」用法である。その下位分類には「聞き手依存型」と「聞き手誘導型」がある。話し手自身の認識が不確かな状況での確認要求は、「聞き手依存型」である。この場合、確かな情報を有していると見込まれる聞き手の応答に依存してその情報の確定化を図り、聞き手の応答が yes であるか no であるかに話し手の関心がある。また、話し手自身の認識が確かな状況での確認要求は「聞き手誘導型」である。この場合、聞き手の認識を誘導して共有情報の確立を図り、聞き手の応答のあり方よりも、聞き手がそのように認識できているかどうかが重要である（宮崎 2005: 112）。

(25)　【確認－聞き手依存型】

もしかして、君、嘘ついているだろう。

(26)　【確認－聞き手誘導型】

ほら、昔ここに本屋があっただろう？

（宮崎 2005: 112）

「疑念」用法は疑問要素をともなうことで、ほかの用法と区別できる。その下位分類には、「疑い」と「婉曲疑問」がある。話し手の認識が不確かであり、そして聞き手に確か

[5] 疑問要素とは、「何」「誰」などの疑問詞および「か」を指す。

な情報を有しているという見込みもない場合に使われるダロウは「疑い」の用法である。「疑い」には不確実な情報を提供する機能もあれば、対話で話し手の疑いを聞き手に持ちかけて、聞き手にもそれについて考えさせるという間接的に情報を要求する機能もある。

(27)　【疑念－疑い】
佐藤はここは初めてなのに、どうしてこんなに詳しいんだろう。
（日本語記述文法研究会 2003：36）

また、「疑念」のダロウには聞き手情報を配慮し、疑問文を婉曲的にする「婉曲疑問」用法もある。この場合、ダロウは前接する文の論理的意味を変えず、読み手や聞き手に対する丁寧さを加える。(28) のような質問文で用いられると、質問をやわらげる機能がある。(29) (30) のような疑問文形式をとっている依頼や主張を表す表現といっしょに使われると、依頼や主張を婉曲的にする機能がある。

(28)　【疑念－婉曲疑問】
失礼ですが、田中さんでしょうか。
（日本語記述文法研究会 2003: 37）

(29)　【疑念－婉曲疑問】
すみませんが、明日、時間をとっていただけませんでしょうか。
（作例）

(30)　【疑念－婉曲疑問】
無限責任とはあまりにも重いというのであれば, 一般投資家よりも重い責任を負担すべく新しい「法的な社員」制度を創設することでもよいのではないだろうか。
（文学以外, 三國仁司『不動産投資ファンド』, 東洋経済新報社, 2001）

話し手の認識が確かであり、疑問要素の付加がなく、情報提供の意図で使われるダロウは「婉曲」用法である。仁田（1992）では「婉曲」を「話し手は言表事態の成立が真であると認識している」および「言表事態が未だ確認されていないところを有するものとして表現されている」という 2 つの要件を満たすような表現のことを指すとしている。従来の研究においては、「婉曲」を「推量」用法の一種として扱うことが多い。しかし、両者には話し手の認識が確かか否かという大きな違いがある。また、日本語教育の立場から考えても、「推量」と「婉曲」を同じ用法として扱うと、1.1.2 で述べたように、強く断定する、独断的なニュアンスになる場合もあり、婉曲的、やわらかい調子になる場合もあるため、学習者を困惑させるだろう。そこで、本論文では、「推量」と「婉曲」を別の用法として扱う。

(31)　【婉曲】

これら三つが、自信喪失の言わば外部要因と言えるだろう。これに加えて、「夢」に対する幻滅という内部要因がある。

（宮崎 2002: 136, 藤原正彦『若き数学者のアメリカ』）

2. 日本語話者によるダロウの使用実態ー書き言葉

本節では、書き言葉における JP によるダロウの使用実態について調査する。以下では、2.1 で調査方法および結果を述べる。2.2〜2.5 でダロウの「推量」「確認」「疑念」「婉曲」各用法の使用実態を考察する。2.6 で書き言葉についての考察をまとめる。

2.1 調査方法および結果

2.1.1 検索条件

本論文では、BCCWJ（NT 2.4）における「国会会議録」を除外した全データを対象に、検索アプリケーション「中納言」2.2.2.2 で短単位検索を行った。なお、第 1 章でも述べたように、(32) のような逆接条件節を形成する用法や、(33) のような詠嘆を表す用法など、慣用的な用法として固定化が進んでいるものは今回の調査の対象外にする。具体的な検索条件は下記のとおりである。

(32)　「そうすれば、二億だろうが十億だろうが、少人数で無理せずに引き出せますからね。」

（文学, 安東能明 2003『強奪箱根駅伝』, 新潮社）

(33)　今、眼がさめたら、全てが夢で、彼女が、窓際に立って、笑っていたら、どんなにいいだろうか、と、三田村は、思った。

（文学, 西村京太郎 2000『桜の下殺人事件』, 新潮社）

検索条件①　「だろ（う）」
　キー　　語彙素＝だ　　活用形＝意志推量形
検索条件②　「でしょ（う）」
　キー　　語彙素＝です　　活用形＝意志推量形
検索条件③　「であろ（う）」
　キー　　語彙素＝だ
　後方共起（キーから 1 語）　語彙素＝有る　　活用形＝意志推量形

①によって得られた 76,799 件のうち、誤解析 17 件、慣用的な用法 458 件を排除し、残り 76,324 件の「だろ（う）」の用例を対象とする。②によって得られた 108,955 件のうち、誤解析 8 件、慣用的な用法 178 件を排除し、残り 108,769 件の「でしょ（う）」の用例を対象とする。③によって得られた 19,013 件のうち、歴史的仮名遣いである「であらう」

の用例 130 件、慣用的な用法 1049 件を排除し、残り 17,834 件の「であろ（う）」の用例を対象とする。以上収集した計 202,927 件のダロウの用例から、4,000 件をランダムにピックアップし、分析対象として考察する。

2.1.2 検索結果

ランダムにピックアップした 4,000 件のうち、「だろ（う）」「でしょ（う）」「であろ（う）」の件数はそれぞれ 1500 件（37.5%）、2138 件（53.5%）、362 件（9.0%）であり、元の割合とほぼ一致する。本論文で規定した意味用法に照らし、分類した結果を図 2 に示す。全体で見ると、「疑念」と「推量」用法は約 4 割ずつ占めており、「確認」と「婉曲」用法はそれぞれ 1 割未満である。また、出現形別に見ると、「だろ（う）」の形で現れる際に、半数以上は「推量」であり、その次は「疑念」である。「でしょ（う）」の場合、「疑念」が半数以上を占めている。さらに、「であろ（う）」の場合、「推量」は約 3 分の 2 であり、「婉曲」の割合もほかの出現形より多いが、「確認」はほぼない。

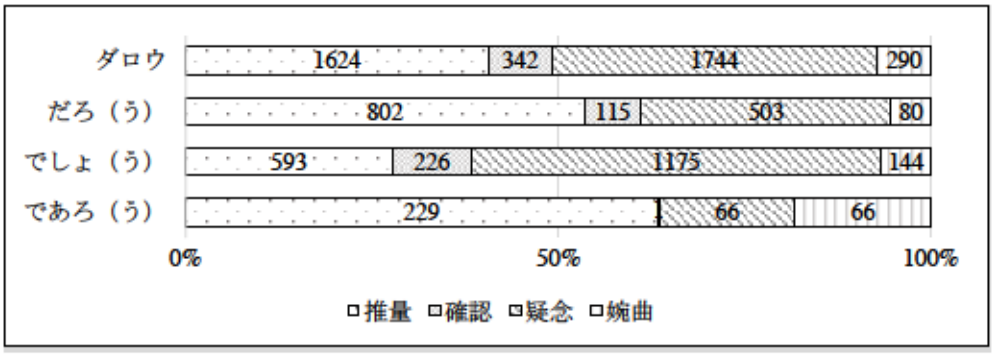

図 2 書き言葉におけるダロウの用法

さらに、抽出したダロウの用例を＜ジャンル＞別[6]に分類し、ピックアップした 4000 件における各＜ジャンル＞の件数およびこれによって推測した 100 万語単位での出現数[7]を

---

[6] 本論文では野田編（2016）を参考にし、得られた実例を 11 の＜ジャンル＞に分ける。＜ジャンル＞は基本的には BCCWJ におけるレジスター（「国会会議録」を除く）にあたるが、そのうち「書籍」と「ベストセラー」は統合した上でジャンルに基づき「文学」と「文学以外」に分ける。＜ジャンル＞ごとの総語数が異なるため、100 万語単位での出現数も示す。

[7] 100 万語単位での出現数（Per Million Words）を PMW と略す。各＜ジャンル＞の 100 万語単位での出現数＝［{（ピックアップした 4,000 件中の各＜ジャンル＞の件数／4,000）×ダロウの総件数}／各＜ジャンル＞の総語数］×1,000,000。つまり、まず［（ピックアップした 4,000 件中の各＜ジャンル＞の件数／4,000）×ダロウの総件数］によって、各＜ジャンル＞におけるダロウの実数を推測し、さらに推測した実数によって 100 万語単位での出現数を算出する。表 4 における「文学」を例にすると、ピックアップした 4,000 件のダロウには、「文学」における件数が 927 件あるため、計 202,927 件のダロウには、「文学」における実数は（927／4,000）×202,927＝47,028 件と推測できる。さらに、「文学」の総語数は 20,139,268 であり、ダロウの 100 万語単位での出現数は（47,028／20,139,268）×1,000,000=2,335 であると算出できる。

表 4 に示す。

表 4 ＜ジャンル＞別のダロウの件数と推測した 100 万語単位の件数[8]

＜ジャンル＞	総語数	計		推量		確認		疑念		婉曲	
		件数	PMW	件数	PMW	件数	PMW	件数	PMW	件数	PMW
文学	20,139,268	927	2335	462	**1164**	182	**458**	245	617	38	96
文学以外	42,533,142	1238	1477	647	772	54	64	367	438	170	**203**
雑誌	4,444,492	121	1381	61	696	13	148	35	400	12	137
新聞	1,370,233	14	518	5	185	2	74	6	222	1	37
白書	4,882,812	15	156	8	83	0	0	4	42	3	31
広報誌	3,755,161	6	81	2	27	0	0	4	54	0	0
法律	1,079,146	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
教科書	928,448	31	1694	9	492	0	0	20	**1093**	2	109
韻文	225,273	6	1351	4	901	0	0	2	450	0	0
知恵袋	10,256,877	1227	**6069**	232	**1147**	45	223	904	**4471**	46	228
ブログ	10,194,143	415	2065	194	965	46	229	160	796	15	75
計	99,808,995	4000	2033	1,624	825	342	174	1,747	886	287	147

100 万語単位での合計件数から見ると、「知恵袋」におけるダロウの使用頻度はほかのどの＜ジャンル＞よりも著しく高く、「文学」と「ブログ」においても比較的高い。一方、「法律」ではダロウの用例は見られない。「広報誌」「白書」における使用も非常に少ない。また、用法別に見ると、「推量」用法は、「文学」と「知恵袋」においてほかの＜ジャンル＞より頻繁に現れている。「確認」用法は「文学」における使用頻度が高い。「疑念」用法の場合、「知恵袋」における使用頻度は特に高い。また、「教科書」においても比較的頻繁に使用される。「婉曲」用法の場合、「文学以外」によく現れることが特徴的である。

2.2 書き言葉における「推量」のダロウ

本節では、後接形式、共起語、前接形式といった視点から、JP による「推量」のダロウの使用実態を考察する。

2.2.1 「推量」のダロウの後接形式

安達（1997）は、「推量」のダロウが話し言葉において「言い切り」で使いにくいことを指摘している。安達（1997: 91）によれば、ダロウによる「言い切り」は、「不確かな事態であるにもかかわらず、話し手が一方的に強い主張を行っているといったニュアンス」を帯びるため、「不安定であり」、終助詞「ね」や「な」を後接させるか、思考動詞の補文

[8] 表 4 に示している件数はピックアップした 4,000 件中の件数であり、100 万語単位の件数は注 7 に述べた方法で推測した件数である。

に埋め込む必要がある。

では、書き言葉においてはどうだろうか。ダロウによって言い切る場合を「言い切り」とし、言い切らない場合を「言い切り以外」とし、後続形式によってさらに下位分類する。その結果を図 3 に示す。「と／という」節が後接する場合を「引用形式」と呼び、「が」「けれども」「し」「から」などが後接する場合を「接続形式」と呼び、「ね」「な」などの終助詞が後接する場合を「終助詞」と呼ぶ。図 3 より、「言い切り」が 3 分の 2 を占めていることがわかる。つまり、書き言葉における「推量」のダロウは「言い切り」で使われる場合が多いと言える。

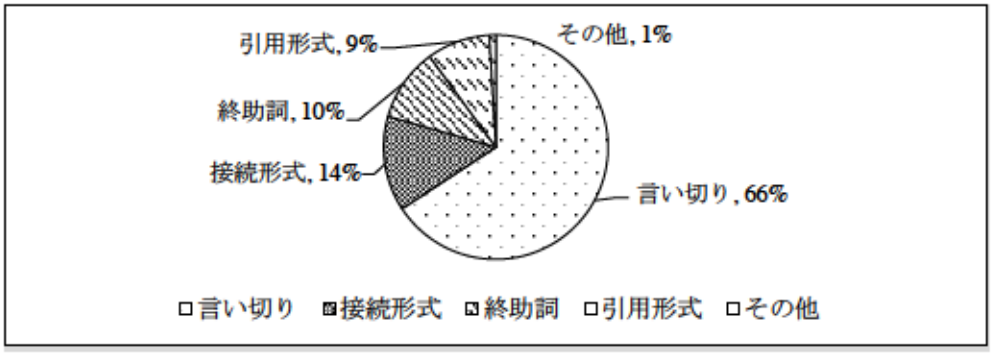

図 3 書き言葉における「推量」のダロウの後接形式

ただし、＜ジャンル＞間の差異が見られる。図 4 に「推量」のダロウの件数が比較的多い＜ジャンル＞における後接形式の出現状況を示す。なお、「文学」については、個々の用例を確認した上でさらに「文学－会話の文」と「文学－地の文」に区別する。「ブログ」「文学－会話の文」「知恵袋」における「言い切り」の割合は、「文学－地の文」「文学以外」「雑誌」より小さい。安達（1997: 93）では、ダロウは「聞き手に伝えるという意図を本来的には持っていない」「表出に近い関係があるもの」であり、ダロウが伝える判断は「本来的に聞き手に向けて発信されたものではない」と指摘している。本論文の調査結果はこの指摘を裏付けられる。つまり、「ブログ」「文学－会話の文」「知恵袋」はほか＜ジャンル＞より、話し言葉に近く、伝達する意図が強いと思われる。そのため、ダロウは「言い切り以外」の形で使用される傾向が強いのであろう。

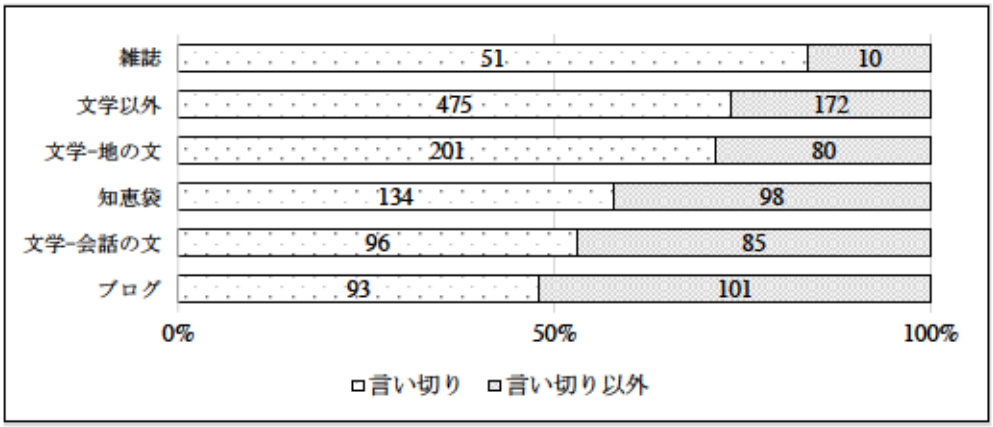

図 4 書き言葉における「推量」のダロウの後接形式（<ジャンル>別）

次に、「言い切り以外」の場合に目を向ける。もっともよくダロウに後接するのは「接続形式」である。そのうちの 6 割以上は、逆接を表す「が／けれども（けど）」である。(34) のような「だろうけれど」によって譲歩を表すものがその典型的な例である。また、残りの約 4 割は（35）のような「から」など原因理由を表す形式である。

(34)　たくさんの人のまっとうな善なる総意のもとに、国家というものが国民のニーズを満たすのが理想なのだろうけれど、そうなったとき、人間は確かに清らかだけれど、とてつもなく独善的なものになってしまうような予感がする。
（文学，田口ランディ 2004『ほつれとむすぼれ』，角川書店）

(35)　おそらく、こうした宝石やスイス製の腕時計は、東京の有名店で買ったものだろうから、そうした店を廻って歩けば、買った人間がわかるのではないか。
（文学，西村京太郎 2002『日本海からの殺意の風』，講談社）

また、「終助詞」の後接は 1 割であり、そのうちの 6 割以上は「ね」である。さらに、「と／という」のような「引用形式」の後接が 9%である。次節では、「と／という」節がダロウに後接する場合の主節述部・被修飾名詞について考察する。

2.2.2 「推量」のダロウの共起語

佐藤（2010）はモダリティ表現を含む引用節と共起する主節述部・被修飾名詞の意味、およびその数量の分布には、各モダリティ表現の意味の違いが反映していると指摘している。たとえば、(36) の「引用節－主節述部」では、「出鱈目を言っているのではないか」と考えることが、「疑う」ことだということが表現されている。「疑う」など主節述部は、ノデハナイカを用いた節がどのような行為・思考であるかを換言したものとなっている。本論文では、佐藤（2010）の指摘を踏まえ、便宜のためにこのような主節述部・被修飾名詞をダロウの「共起語」と呼び、上位 5 位を表 5 に示す。共起語を考察することによって、ダロウが表している意味だけでなく、日本語教育の現場で例文づくりのヒントにもな

ると思われる。

(36)　初め、野々宮が何かを企んで出鱈目を言っているのではないかと疑ったが、それなら彼が自分と森本の関係を知っているわけがない。

（佐藤 2010：25）

表 5 「推量」のダロウの共起語

順位	共起語	件数
1	思う／考える	78（4.8%）
2	言う	12（0.7%）
3	推測／推定／察する／想像	11（0.7%）
4	見る／理解／判断／解釈	9（0.6%）
5	予測／予想	5（0.3%）
TOP 5 のカバー率		115（7.1%）

「推量」のダロウの共起語には、思考動詞「思う／考える」、他人の発話を引用する「言う」、推測に関する語「推測／推定／察する／想像」、認識判断を表す「見る／理解／判断／解釈」、未来の予測を表す「予測／予想」がある。そのうち、思考動詞「思う／考える」がもっとも多い。また、「推測／推定／察する／想像」「予測／予想」といった共起語から、「推量」のダロウが表す認識は「想像・思考という間接的な認識」（宮崎 2002: 133）であることがわかるだろう。また、「見る／理解／判断／解釈」といった共起語から、ダロウは確言度の高い認識を表せることがわかる。その断定の強さは、共起する副詞によって調節できる。「推量」のダロウとよく共起する確信度を表す副詞を示している表 6 から、「おそらく」との共起がもっとも多いことがわかる。また、「きっと」「たぶん」ともよく共起する。一方、「さぞ／さぞかし」との共起はそれほど多くない。

表 6 「推量」のダロウと共起する副詞

順位	副詞	出現数
1	おそらく	55
2	きっと	48
3	たぶん	42
4	さぞ／さぞかし	7

2.2.3 「推量」のダロウの前接形式

「推量」のダロウの前接形式については、(37) のような「のだ」が前接し、「の／ん＋ダロウ」の形（以下、便宜のため「ノダロウ」とする）で現れる組み合わせに注目したい。

(37)　彼は私の机の前の椅子に座り、何も言わなかった。ただ静かに泣いていた。大

きな心の衝撃があったのだろう。

（文学以外，須藤八千代 2004『ソーシャルワークの作業場』，誠信書房）

収集した「推量」のダロウの用例には、「ノダロウ」が 362 件あり、2 割以上を占めている。木下（2014a）は（38）のような学習者による誤用例をあげ、「ノダロウ」の理解と習得の困難さを指摘している。それを改善するためには、JP はどのように使用しているのか明らかにする必要がある。

（38） 昔にひきかえ、今の文に間違った文字が数少なくないある。読み直ることが粗末に取り扱うだろう。

（Cf. 読み直ることが粗末に取り扱うのだろう。）

（木下 2014a: 35）

田野村（1990: 72）では、「ノダロウ」の意味について、「「β のだろう」は、「のダ」と「だろう」が組み合わせられたものであるから、あることがら α の背後の事情が β であることを、推量して述べたり、推量や事実についての確認を聞き手に求めたりするのに用いられる」と定義している。森田・松木（1989）は、(39) を例として説明している。(39a) は、「心配した」「疲れた」という既知の事実の間に、「心配した」ことが原因で「疲れた」という因果関係を認める可能性を表明している。ところが「だろう」に置き換えると、違った意味になってしまう。(39b) は、「疲れた」か否かは未知の事柄であり、「心配した」という状況からみて「疲れた」可能性が高いという判断を示すことになるのである。

（39） a. 心配したから疲れたのだろう。

b. 心配したから疲れただろう。

（森田・松木 1989: 262）

幸松（2015: 3）はこのような「所与に対して「なぜこのような事態が起こったのか」「この事態が何を意味しているのか」と推量する際に用いられる「ノダロウ」を、＜事情推量＞と呼び、その最大の特徴は「ダロウへの置き換えができない」と指摘している。本論文で収集した用例において、＜事情推量＞の「ノダロウ」には、2 つのパターンがある。1 つは、(40) のような「推量内容＋既知事態＋ノダロウ」の順で、ノダロウによって推量するのはその直前の「視野に入らなかった」ではなく、さらに前の「窓ばかり見ていた」である。本論文ではこれを＜事情推量 1＞と呼ぶ。また、もう 1 つのパターンは、(41) のような「既知事態＋推量内容＋ノダロウ」の順で、「ノダロウ」によって推量するのはその直前の「疲れがたまってきた」という内容である。本論文ではこれを＜事情推量 2＞と呼ぶ。

(40)　【事情推量 1】

前回内側作業のため入室したときはそこにドアがあったことに気がつかなかった。窓ばかり見ていたので、視野に入らなかったのだろう。

（文学，森村誠一 1986『異型の街角』，角川書店）

(41)　【事情推量 2】

レストランを出てしばらくすると、牧師は、急に胸がむかついて気分が悪いと言い出した。私は疲れがたまってきたのだろうと思い、リクライニング・シートを倒してケニー牧師を寝かせた。

（文学以外，岩田明 2003『十六菊花紋の謎』，偕成社）

また、幸松 (2015) は＜事情推量＞を表さない「ノダロウ」の存在も指摘している。(42) における「ノダロウ」文は、現在起こっていると考えられる事態について単純な推量を述べた文であり、所与に対する事情を推量する文ではない。このタイプの「ノダロウ」は、ダロウに置き換えたところで非文にはならないが、「ノダロウ文の方は、あたかも、推量した事態、すなわち命題事態が、「そうなることがすでに決定している事態であるかのように述べている」というニュアンスを感じる」と述べている。

(42)　【事情推量を表さない】

「いやよ。帰りません」吉田は言った。

「いま耕二くんのアパートにいるの。だから心配しないで」（中略）

そう言ったときの吉田の声には、あきらかに相手を愚弄するような響きがあった。耕二は、ひどく動揺し、うろたえているに違いない厚子を思った。寝巻のまま受話器を握りしめているのだろう。彼女は夫を起こすだろうか。

（Cf.（厚子は）寝間着のまま受話器を握りしめているだろう。）

（幸松 2015: 4，【東京タワー】）

では、実際の使用においては、＜事情推量＞を表す「ノダロウ」と＜事情推量＞を表さない「ノダロウ」と、どちらのほうがより頻繁に使われるのだろうか。収集した 362 件の「ノダロウ」における各タイプの割合を示している図 5 からわかるように、＜事情推量＞のほうがより頻繁に使われる。特に、＜事情推量 2＞だけで「ノダロウ」の半分以上を占めている。このように、ダロウへの置き換えができない＜事情推量＞のほうが多用されるため、学習者に優先に指導すべき「ノダロウ」のタイプと言えよう。

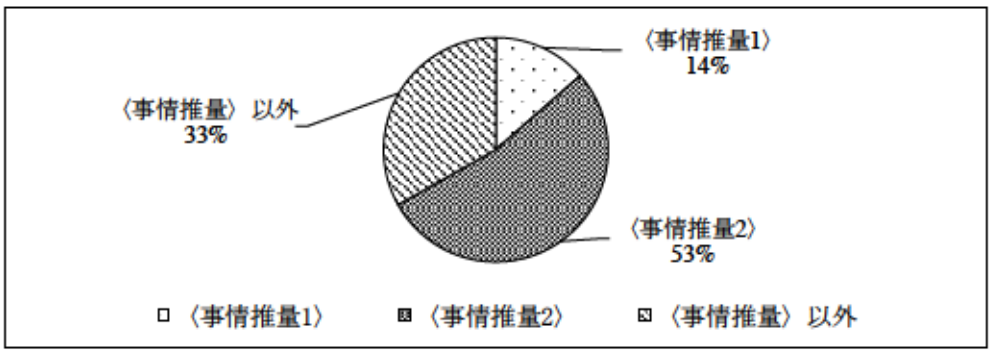

図 5 「ノダロウ」のタイプ

また、前接形式の時制という視点から見ていく。ダロウが「過去」と「現在／未来」のいずれについて推量しているのかによって、分類した結果を図 6 に示す。

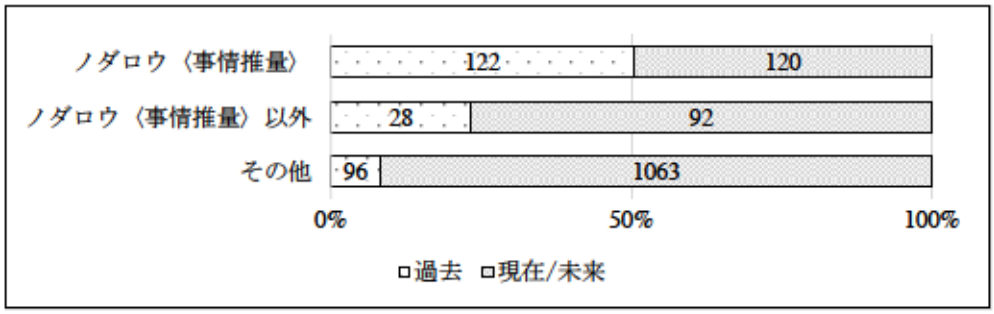

図 6 書き言葉における「推量」のダロウの前接形式の時制

図 6 からわかるように、「その他」、すなわち「のだ」が前接する場合以外では、ダロウは「現在／未来」の推量に偏っている。つまり、現在の状況から、書き手の想像や思考を介して帰結を推量することが多いと言える。「ノダロウ」の方に目を向けると、＜事情推量＞は既知の事態を引き起こした背後の事情を推量することになり、「過去」の割合が多くなる。一方、＜事情推量＞以外は「その他」と同じような傾向を示している。ここからも、＜事情推量＞と＜事情推量＞以外の「ノダロウ」に大きな違いが存在することがわかるだろう。

2.2.4 「推量」のダロウのまとめ

本節では、JP による書き言葉における「推量」のダロウの使用を考察し、以下のことがわかった。まず、後接形式から見れば、ダロウは伝達する意図がある際に「言い切り以外」の形で、伝達する意図がない際に「言い切り」の形で使われる傾向がある。「言い切り以外」の場合、接続形式「が／けれども（けど）」、「から／し」、終助詞「ね」、および引用形式「と／という」がよく後接する。

また、「推量」のダロウの共起語には、思考動詞「思う／考える」、他人の発話を引用する「言う」、推測に関する「推測／推定／察する／想像」、認識判断を表す「見る／理解／

判断／解釈」、未来の予測を表す「予測／予想」がある。

さらに、前接形式については、「のだ」が前接する「ノダロウ」が多い。「ノダロウ」には＜事情推量＞と＜事情推量＞以外の 2 タイプがあり、よく使われるのは、「既知事態＋推量内容＋ノダロウ」のような＜事情推量 2＞である。

2.3 書き言葉における「確認」のダロウ

本節では JP による書き言葉における「確認」のダロウの使用実態を考察する。考察は＜ジャンル＞別の出現状況、前接形式および出現形をめぐって行う。

2.3.1 「確認」のダロウの＜ジャンル＞別の考察

「確認」用法は「文学」における出現率がほかのどの＜ジャンル＞よりも高い。また、「知恵袋」と「ブログ」においてもよく使われる。この 3 つの＜ジャンル＞における「確認」のダロウの用例、そして比較のために件数が比較的多い「文学以外」における用例を、「聞き手依存型」と「聞き手誘導型」に分けた結果を図 7 に示す。

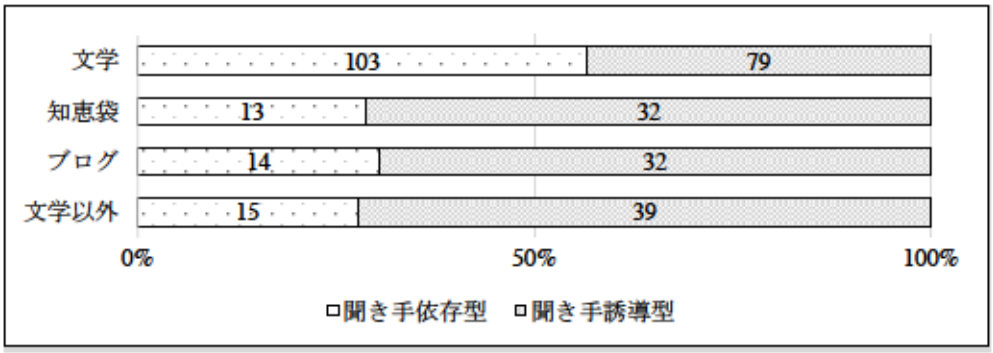

図 7 書き言葉における「確認」のダロウの下位分類

図 7 からわかるように、「文学」はほかの＜ジャンル＞と異なり、「聞き手依存型」のほうが多用されている。これは、「文学」における「確認」のダロウは「会話の文」によく現れるからだと思われる。つまり、「聞き手依存型」は、「確かな情報を有していると見込まれる聞き手の応答に依存して、その情報の確定化を図り、聞き手の応答が yes であるか no であるかに話し手の関心がある（宮崎 2005: 112）」ため、応答できる相手が存在する会話でしか使えられない。「文学」における 182 件中の 180 件は（43）のように「会話の文」に現れているため、ほかの＜ジャンル＞に比べれば「聞き手依存型」の割合が大きいのだろう。

（43）　「ユカはシメオンにも会ったんでしょ？」突然訊かれて、私はマリーの顔を見た。

「ええ。だって私がこの世界に着いた最初の場所がシメオンの家だったんだもの」私がそう話すと、マリーは初めて驚いた顔を私に向けた。

（文学，有以このみ 2005『ユカのこころの旅』，文芸社）

一方、「知恵袋」「ブログ」「文学以外」においては、「聞き手誘導型」のほうが多い。「知恵袋」は、利用者同士が「質問・回答」の形で知識や知恵を教え合うサイトである。「知恵袋」における「確認」のダロウは、(44) のように「回答」によく現れる[9]。(44) では、回答者はパソコンの設定のステップを答える際に、ダロウによって今の状況を確認し、質問者の認識を誘導しながら、質問者が目の前にいるように説明している。

(44) 問：パソコンの画面が…Win 九十八を立ち上げると液晶画面よりも小さく映るんです。（中略）設定方法などありましたら教えて下さい。
答：1 デスクトップ上でマウスを右クリック 2 プロパテイーを選択して設定を選びます 3 画面の領域が大になっているでしょう？　4 その PC の規定の大きさに設定しなおして下さい。

（Yahoo!知恵袋, 2005）

「ブログ」の場合、(45) のように書き手が個人の思考を即興的に述べるような文脈によく用いられる。「なあ」「よ」などの終助詞や、「せいぜい七十年代までだろ？　使ってたの」のような倒置文も現れるため、話し言葉に近い文体であると言える。また、(46) のような自慢する文脈でも、「確認」のダロウがしばしば用いられる。

(45) キアヌリーブスの映画で宇宙人と和訳するのはいい加減止めてくれないかなあ。スペースマンの和訳である宇宙人は、せいぜい七十年代までだろ？　使ってたの。意味的におかしいから今じゃ使わないよ。

（Yahoo!ブログ, 2008）

(46) バラのコサージュではありません！　ちょっと、つまみを飾ってみました。美味しそうでしょ？

（Yahoo!ブログ, 2008）

2.3.2 「確認」のダロウの前接形式

本節では、「確認」のダロウの前接形式について考察する。表 7 に「確認」のダロウの前接形式の上位 5 位をまとめる。

[9] 「知恵袋」における「問」と「答」の分割は、筆者の判断による。

表 7 書き言葉における「確認」のダロウの前接形式

順位	前接形式	出現数	%
1	ある／いる	42	12.3%
2	評価を表す形容詞	27	7.9%
3	わかる	18	5.3%
4	言う	15	4.4%
5	する	9	2.6%

「確認」のダロウには「ある／いる」がよく前接する。その次に多いのは「いい」「かわいい」「きれい」など評価を表す形容詞である。この場合、上記（46）のような「聞き手誘導型」で自慢する用法もあれば、（47）のような「聞き手依存型」で相手の評価を求める用法もある。第 4 位の「言う」が前接する場合、（48）のように話し手が以前聞き手に伝えたことを思い出させたり、聞き手の認識を喚起したりする。

（47）　書斎の机の上にむらさきと黄のすみれが活けてある。
「うちのすみれ？」
「そうです。庭に咲いていたの。きれいでしょう」
「きれいだな」
（文学, 庄野潤三 2000『鳥の水浴び』, 講談社）

（48）　「だからわたしがそう言ったでしょう。ちゃんと言ったよね、わたし。」
（文学, 鱧余夢紋 2004『メガネをかけた犬』, 文芸社）

2.3.3 「確認」のダロウの出現形

小西（2011: 161）はレンマ（代表形・見出しの形）と出現形を区別することの必要性を指摘しており、言語運用能力の習得を目指す日本語教育においては、実際の言語運用を反映させた各出現形と、その使用環境に関する記述を行うべきだと主張している。ここでは「確認」のダロウの出現形について考察する。

ダロウの敬体である「でしょう」について、中北（2000: 29）は「形の上では敬体だが、常体の他の述語と並んで常体基調の談話に頻出」すると述べている。コーパス調査の結果もそれを裏付けている。図 8 に使用頻度の高い＜ジャンル＞における「確認」のダロウの普通体と丁寧体の比率を示す。また、全体的な文体比率と比較するために、図 9 に各＜ジャンル＞の全体的な文体比率を示す。

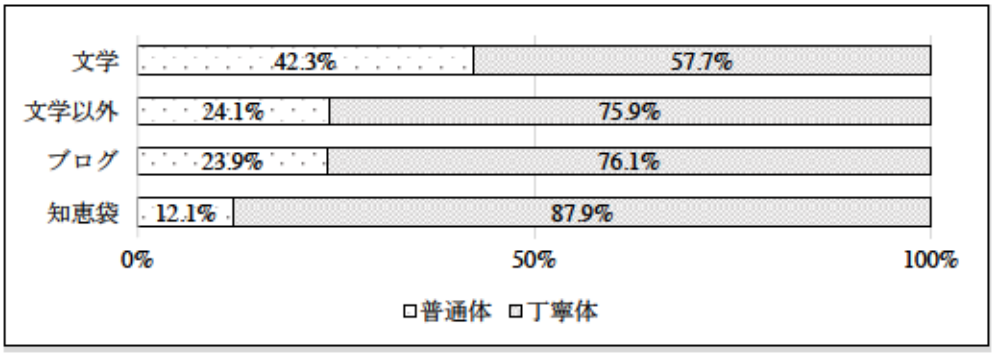

図 8 書き言葉における「確認」のダロウの文体比率

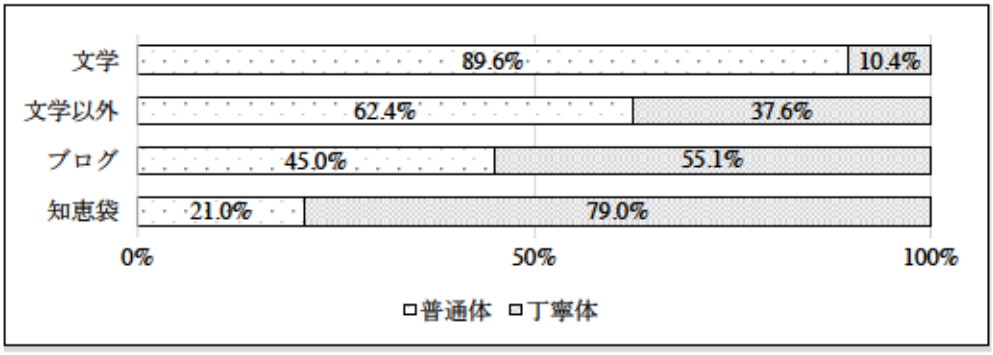

図 9 各＜ジャンル＞の文体比率（田野村 2012、小西 2011 の結果に基づく）[10]

図 8 から、「文学」以外のすべての＜ジャンル＞では、普通体と丁寧体の比率に大きな偏りが見られ、普通体より丁寧体の使用率が高いことがわかる。また、図 8 と図 9 との比較から、ダロウの丁寧体の比率は全体の丁寧体の比率より大きいことがわかる。つまり、丁寧体基調の場合はもちろん、普通体基調の場合でも、「確認」のダロウは丁寧体で使われる傾向が見られる。中北（2000: 29）はこれについて、「確認」のダロウは「形態に対し実際の待遇価値が低い方にずれているのである」と述べている。

次に、なぜ「文学」では比率に大きな偏りを見られなかったのかを検討する。前述のように、書き言葉における「確認」のダロウは文学作品などの会話文によく現れる。（49）（50）は会話の文における普通体の「だろう」の例である。（49）のように、ごく親しい友人同士の普通体基調の対話において、「だろう」は使われている。また、（50）は喧嘩の場面に現れているため、丁寧さに配慮する必要がなく、「だろう」の押し付けるニュアンスによって、話し手の怒りを表す。このような衝突の場面はほかの＜ジャンル＞にあまり

[10] 田野村（2012）は BCCWJ における各＜ジャンル＞の丁寧率を調査している。本論文は「ブログ」、「知恵袋」に関する調査結果を引用した。また、小西（2011）は本論文と同じように BCCWJ における「書籍」という＜ジャンル＞を「文学」と「文学以外」に区別して調査している。本論文は「文学」と「文学以外」の文体比率に関する調査結果を引用した。BCCWJ の拡充により、本論文が調査した語数と小西（2011）が調査を行った時点の語数とは異なっているが、丁寧体と普通体の比率には大きな差がないと思われる。

見られない。

(49)　「とりあえず、あんたとおれの関係をはっきりさせとこうじゃないの」
「オーケイ、監督さん。君が監督だ。わたしは何をやればいい？」
「それがあんたのダメなとこなんだってば！　」ピンは大声で叫んだ。「もう、山ちゃんてば、もろ『指示待ち族』じゃん。元々、あんたの作品だろ？　要するに、何を撮りたいわけ」
（文学，高橋源一郎 2004『日本文学盛衰史』，講談社）

(50)　智沙は、荒れ狂う感情にまかせ、吐き捨てた。「勝手なことやってんじゃねえよ、この脳天パーが。全部ぶち壊しじゃねえか！　」枕を投げつけた。
それを手で払いのけ、男が怒鳴る。「ぶち壊しって…なんだよそれ！　」
「なんでもいいだろ、てめえには関係ねえんだよ！　」
（文学，小川勝己 2001『彼岸の奴隷』，角川書店）

2.3.4 「確認」のダロウのまとめ

本節では JP による書き言葉における「確認」のダロウの使用実態を考察し、以下のことがわかった。まず、＜ジャンル＞別に見ると「確認」のダロウは「文学」の「会話の文」によく現れ、「聞き手依存型」のほうがよく使われる。また、「知恵袋」における「確認」のダロウは「回答」のほうによく現れ、「聞き手誘導型」のほうがよく使われる。

前接形式については、評価を表す形容詞がよく前接し、自慢したり、相手の評価を求めたりする際に使われる。また、「わかる」、「言う」を前接する用例も多く、以前聞き手に伝えたことを思い出させたり、聞き手の認識を喚起したりする目的で用いられる。

また、「確認」のダロウの出現形についての考察から、「文学」以外の＜ジャンル＞では、ダロウの普通体と丁寧体の比率に大きな偏りがあることがわかった。つまり、丁寧体基調の場合はもちろん、普通体基調の場合でも、「確認」のダロウは丁寧体の「でしょ（う）」が選ばれやすい。

2.4 書き言葉における「疑念」のダロウ

本節では、JP による「疑念」のダロウの使用実態を明確にするために、＜ジャンル＞別の出現状況および前接形式から考察する。

2.4.1 「疑念」のダロウの＜ジャンル＞別の考察

「疑念」用法は「知恵袋」における出現率がほかのどの＜ジャンル＞よりも著しく高い。また、「教科書」に頻繁に使用されることは、ほかの用法に見られない特徴である。さらに、「ブログ」と「文学」においてもよく使われる。この 4 つの＜ジャンル＞における用例、そして比較のために件数が比較的多い「文学以外」における用例を、「疑い」と「婉曲疑問」に分けた結果を図 10 に示す。「知恵袋」以外の＜ジャンル＞では、「疑い」の比

率に大きな偏りがある。以下では＜ジャンル＞ごとに見ていく。

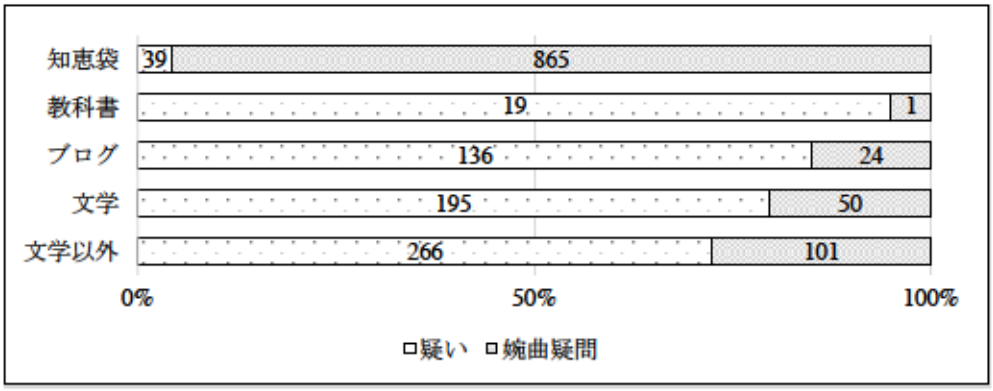

図 10 書き言葉における「疑念」のダロウの下位分類

まず、「知恵袋」における「疑念」のダロウの使用を考察する。「知恵袋」における用例を「質問・回答」に分けると、それぞれ 743 件（82%）と 161（18%）件ある。つまり、「疑念」のダロウは「質問」のほうに頻繁に現れている。「知恵袋」の質問者は回答を依頼する側であり、質問者にとって回答者は不特定の面識のない人であるため、婉曲的に質問することが望ましい。そのため、「質問」における「疑念」のダロウはほぼすべてが、（51）のような「婉曲疑問」用法である。

（51）　問：こうやって税金を知らないうちに使われて、借金国になってしまい、国民に押し付けようとしている（消費税などで）。みなさん、どう思いますでしょうか。

（Yahoo!知恵袋, 2005）

「知恵袋」の「回答」においても、「婉曲疑問」の用例も見られる。それは、（52）（53）のように、「～したらいかがですか」やノデハナイカなどの表現と組み合わせて、婉曲的に助言や主張をするために用いられるものである。また、「回答」においては、（54）のような「疑い」も見られ、不確かな情報提供の機能を果たしている。

（52）　問：小学校 4 年の男の子です。学習障害と診断されました。とても親として不安です。うちの学校ではひとりめなんです。親の立場からアドバイスがほしいです。

答：同じ障害を持った保護者の方達と情報交換してみたらいかがでしょうか。

（Yahoo!知恵袋, 2005）

(53)　問：ダルビッシュが卒業した今年の東北高校はどうですか？　強いですか？
答：宮城大会の決勝では、石巻工業に十八－2 で勝ったので、強いのではないでしょうか。

（Yahoo!知恵袋, 2005）

(54)　問：（前略）やっぱり使用時間量によって HDD の寿命は変わってくるのですか？
答: どんな物にも寿命はあります。パソコンは 5 年から十年ぐらいでしょうか。

（Yahoo!知恵袋, 2005）

次に、「教科書」における「疑念」のダロウを見よう。「教科書」における 20 件中の 19 件は（55）のような「クイズ質問文」である。牧原（1994: 79）では、「疑念」のダロウは「聞き手に回答を導くように働きかけるという機能をもつ」と指摘しており、「クイズ質問文」もこのような機能によるものであると述べている。教科書は学習者の知識を確認しながら、新しい知識を導入し、問題の解決を導くものであると考えられる。そのため、「疑念」のダロウによる「クイズ質問文」の割合は高いのだろう。

(55)　「森へ」を読んで、どんなことを考えただろうか。次のテーマから一つを選んで、考えをまとめよう。

（教科書, 宮地裕ほか 2006『国語　六上　創造』, 光村図書出版株式会社）

また、ほかの＜ジャンル＞では、「疑念」のダロウはよく書き手の内的思考における疑いを提示する表現として使用されている。「ブログ」においては、(56) のように、疑いを提示し、書き手の考えの筋道を示す。「ブログ」は個人の日常を不特定多数の人に発信するものとして使われていることが多い。書き手の疑いを自問的に表す「疑念」のダロウは個人の思考や感情などを綴るブログの性格に馴染むと考えられる。また、「文学」においては、(57) のように、登場人物の思考内容や心理活動を描写する際に「疑念」のダロウが用いられている。さらに、「文学以外」によく見られるのは、(58) のような問題提起を表すダロウである。安達（2002: 186）が指摘しているように、「疑念」のダロウは「意味的には判断の未成立を表すものの、機能的にはどのように判断を形成してよいかが話し手にわからないということを表すにとどまらず、もっと主体的に疑問を解決するために思考を展開させて、回答の発見に向けてありうる可能性を検討していることを表す」ものでもある。問題提起はこのような思考を展開させる機能を活用した結果であろう。(58) ではまずダロウによって問題を提起し、それから回答も提示する。問題提起は読み手にその疑いに気づかせ、さらにそれについて考えさせる働きがある。これによって、続きを読む興味を湧かせる表現効果があると思われる。

(56)　ましてや、二十代最後の日は一生に一度しかない。私は、二十代を楽しめたか？

人生の「夏」を謳歌しただろうか。二十代に戻りたくてももう戻ることはできない。こんなことでいいのだろうか。三十代というと、(失礼かもしれませんが)「中年」というイメージがあるものの、自分が「中年」になるという実感が全く無い。

(Yahoo!ブログ, 2008)

(57) 六ヶ月の赤ん坊に、冷たいオレンジジュースを飲ませてもよかったのだろうか—そう考えてしまい、私は哀しくなったのだ。

(文学, 松井計 2002『ホームレス失格』, 幻冬舎)

(58) 確かに、理論的にはその通りですが、実際に子会社化された Shared Service Company の実態はどうなのでしょうか。結論から言えば、最初の 1、2 年は良いが、中長期的には、以下に述べるような様々な経営上の課題を内含していると思います。

(文学以外, 中田研一郎 2005『ソニー会社を変える採用と人事』, 角川書店)

2.4.2 「疑念」のダロウの前接形式

「推量」と同じように、「疑念」のダロウにもよく「のだ」が前接し、「〜のだろう(か)」「〜んでしょう(か)」などの形で現れる。このような「のだ」が前接する用例が 915 件あり、半数以上を占めている。以下では、便宜的に「のだ」が前接する「疑念」のダロウを「ノダロウカ」、それ以外のものを「ダロウカ」と呼ぶ。

2.2 で考察した「推量」の「ノダロウ」と同じように、「ノダロウカ」にも「ダロウカ」と置き換えができないものと、置き換えても非文にはならないものがある。置き換えができない「ノダロウ」として、(59) のような「なぜこのような事態が起こったのか」という書き手の思考過程を提示するものと、(60) のような、述部以外に疑問詞があるものがあげられる。

(59) 問:好きな人(まだ、付き合ってません)とほんの少しの時間しか会えないとしたら、どんなアピールが効果的でしょうか?? 僕の置かれている状況といたしましては、まず、彼女に CD を貸す約束をしていて、(後略)
答:CD を貸すということは、共通の趣味や話題があるのでしょうか? (後略)

(Yahoo!知恵袋, 2005)

(60) これは、小説『羅生門』の設定とは明らかに異なる。では、なぜ芥川は設定を変更したのだろう。

(教科書, 加藤周一ほか 2006『国語総合』, 教育出版株式会社)

「ノダロウカ」に関して、三枝(2002)が「ダロウカ」と比較しながら詳しく論じており、「ダロウカ」は「文の内容の真偽を不確実なものとして示」し、「現場性」という特徴があるのに対して、「ノダロウカ」は「文の内容と背景の事情とが照応しているか否かを

一つの事案として客観的に示」し、「客観性」という特徴があると指摘している。ここで、三枝（2002）を踏まえて、「ダロウカ」と「ノダロウカ」の前接形式について詳しく見る。表 8 に「疑念」のダロウの前接形式の上位 5 位を示す。

表 8 書き言葉における「疑念」のダロウの前接形式

順位	前接形式	計	ダロウカ	ノダロウカ
1	ノデハナイカ	155（8.9%）	111	44
2	どう／いかが	126（7.2%）	104	22
3	ある／いる	116（6.6%）	34	82
4	ほかの疑問詞	108（6.2%）	82	26
5	ば／たら／といい	67（3.8%）	27	40

全体から見れば、もっとも頻繁に前接する形式はノデハナイカである。(61) のように、ダロウはノデハナイカによって述べられる主張や判断をより婉曲的にする働きを果たしている。この場合、「疑念」のダロウはよく「ダロウカ」の形で使用される。

(61)　実際問題としては、このような厳しい現実認識は不可欠でしょうが、（中略）学習意欲を喚起するのに、さほど効果的とは言えないのではないでしょうか。
（文学以外，宮地正卓 2004『教育改革への哲学的視点』，日本図書センター）

また、前接形式に疑問詞も多く見られ、そのうち「どう／いかが」が特に多い。この場合も「ダロウカ」の形でよく使用される。「どう／いかが」が前接する場合、以下の 3 つの使い方がある。1 つ目は、(62) のように、「疑い」の機能によって、問題提起を表す。2 つ目は、(63) のように、情報を要求する側に使用され、「婉曲疑問」の機能を果たす。3 つ目は、(64) のように、情報を提供する側に使用され、助言を婉曲的にする機能がある。第 5 位の「ば／たら／といい」が前接する際にも、同じような機能がある。

(62)　さて、幼稚園であれ保育所であれ、その営みは「保育」といえます。では、「幼児教育」についてはどうだろうか。千九百六十三（昭和三十八年）に、文部省・厚生省より「幼稚園と保育所との関係について」という共同通達が出されました。そこには（後略）
（文学以外，石垣恵美子 2005『はじめて学ぶ幼児教育』，ミネルヴァ書房）

(63)　問：カナダに住んだことがある方　現在住んでいる方にお尋ねします。治安　食べ物　物価などどうでしょうか？
（Yahoo!知恵袋, 2005）

(64)　問：筆耕を安く引き受けてくれるところを探しています。オススメＨＰがあったら教えて下さい。

答：HP はないと思いますけれどもシルバー人材センターとかはかなり安いみたいです。各地にありますのでお尋ねになったらいかがでしょうか？

（Yahoo!知恵袋, 2005）

第 3 位の「ある／いる」が前接する場合には、「ある／いる＋ノダロウカ」が 82 件あり、そのうち、(65) のような「ノダロウカ」を「ダロウ」に言い換えても非文ではない用例が 41 件ある。これを、「ある／いる＋ダロウカ」が 34 件あるという結果と合わせて考えると、「ある／いる」が前接して、「ダロウカ」と「ノダロウカ」のどちらも使用できる場合には、書き手の疑いが込められている「ノダロウカ」のほうが選ばれやすいと言えよう。

(65)　問：添付ファイルのついているメールが届かなくなってしまいました。ウイルス対策のソフトのせいかと思うのですが、直す方法はあるのでしょうか。パソコンに詳しい人教えてください。

（Yahoo!知恵袋, 2005）

2.4.3 「疑念」のダロウのまとめ

本節では、JP による書き言葉における「疑念」のダロウに関する考察から、以下のことがわかった。まず、＜ジャンル＞別に見ると、「疑念」のダロウは「知恵袋」の「質問」における出現率が非常に高く、基本的に「婉曲疑問」として機能している。また、「教科書」においても頻繁に使用される。それは、「疑念」のダロウによる「クイズ質問文」の「聞き手に回答を導くように働きかける」機能が、「教科書」という＜ジャンル＞にふさわしいからである。ほかの＜ジャンル＞では、「疑念」のダロウはよく問題提起の表現として用いられ、文章の展開に重要な働きを果たしている。

また、「のだ」と共起した「ノダロウカ」の使用が多い。前接形式と合わせて見ると、「ノデハナイカ＋ダロウカ」、「どう／いかが＋ダロウカ」、「ある／いる＋ノダロウカ」のような組み合わせが多い。

2.5 書き言葉における「婉曲」のダロウ

本節では、書き言葉における JP による「婉曲」のダロウの使用実態について、前接形式および表現効果から考察する。

2.5.1 「婉曲」のダロウの前接形式

表 9 に、「婉曲」のダロウに前接する形式の上位 5 位を示す。「と言える／言ってもいい」のような、「話し手が構築した主張や表現について、その客観的妥当性を承認する標識」（森山 2000: 64）がもっとも多く、5 分の 1 以上に達している。また、必要を表すモダリティ表現「ば／たら／といい」「べき」「ほうがいい」などもよく前接する。

表 9 書き言葉における「婉曲」のダロウの前接形式

順位	前接形式	計
1	と言える／言ってもいい	59（20.6%）
2	ば／たら／といい	31（10.8%）
3	べき	28（9.8%）
4	いい	24（8.4%）
5	ほうがいい	19（6.6%）

（66）は「と言える／言ってもいい」が前接する例である。書き手が「と言える」によって「～は大きなテーマ」という認識の客観的妥当性を承認して主張し、さらに「であろう」を付加することで、その主張をより婉曲的にしている。また、「ば／たら／といい」が前接する場合、（67）のように「といい」によって述べられた解決方法に「でしょう」を付加すると、その提案はより婉曲的になる。

（66）　日本と西欧近代の対立と折衷の構図が一貫して建築家の意識を支配してきたことは事実である。その基本構図をどう相対化し得るのかは大きなテーマと言えるであろう。

（文学以外，布野修司 1989『「出会い」の不思議』，創元社）

（67）　問：i－pod shuffle の購入を考えています。私の PC はネットにつないでいません。ネットからダウンロードなどはしません。支障あるでしょうか？　よろしくお願いします。

答：曲名なども関係ないですから、shuffle でも問題はないでしょうね。iTunes の最新版は、今使っているパソコンなどから拾ってきて入れるといいでしょう。

（Yahoo!知恵袋, 2005）

2.5.2 「婉曲」のダロウの表現効果

ここで「婉曲」のダロウの表現効果について考える。前述のように、「婉曲」のダロウは「主張・評価」および「提案・助言」を表す形式を婉曲的にする機能がある。しかし、「婉曲的にする」という抽象的な説明は学習者にとって理解しにくいだろう。具体的にどのような表現効果をはかるために、「婉曲」のダロウを使うのかを検討する必要がある。

まず、先行研究における指摘を見る。森山（1995）は（68）を例としてあげ、自分の主張にダロウを付加すると、「しばしばよく考えて言っているというニュアンスを付加させる」と述べている。宮崎（2002: 136）と日本語記述文法研究会（2003: 149）は、このような例におけるダロウには、「主観性の強さや独断的なニュアンスを抑える」、「主張を控えめにする」といった表現効果があると指摘している。

（68）　その判断は間違っていると言えるだろう。

（森山 1995: 179）

一方、ダロウの「婉曲」用法を認めない研究もある。たとえば、蓮沼（2015）は「と言えるであろう」を取り上げ、以下のように述べている。

> 客観的妥当性の判断を述べる「と言える」類に付加される「であろう」は、専門的検討を経たうえでの結論・主張であるという、話し手のスタンスを明示する文体的標識である。その使用により、専門家としての書き手のアイデンティティ、自己イメージの演出する効果も図れる。したがって、これを主張の抑制・断定回避を表す婉曲表現とするのは適切とは言えない。
>
> （蓮沼 2015: 27）

本論文では、蓮沼（2015）が指摘している、ダロウの「十分な検討・検証を経た結果の結論・見解であるという意味を添える」というニュアンスは認めるが、ダロウに婉曲用法がないという主張には反対する。蓮沼（2015）が指摘したニュアンスは、ダロウの判断面の断定性によるもので、認識面の不確かさによって生じた「婉曲」とは矛盾しないと考えられる。つまり、「婉曲」のダロウの表現効果について考える際に、形式の面も意味の面も考慮に入れるべきである。まず、形式の面から見れば、ダロウは本来推量を表す形式であり、認識が不確かであることが前提である。このような表現は認識が確かである文に付加されると、形式上の婉曲さが加わり、主張を控えめにする表現効果を生じさせるだろう。また、意味の面から見ると、ダロウによって述べられるのは断定した判断であるため、「十分な検討・検証を経た結果の結論・見解である」といったニュアンスはここから生じたのだろう。

2.5.3 「婉曲」のダロウのまとめ

本節では、JP による書き言葉における「婉曲」のダロウの使用実態を考察し、以下のことがわかった。まず、前接形式から見ると、「と言える／言ってもいい」がもっとも多く、また、必要を表すモダリティ表現「ば／たら／といい」などもよく前接する。「婉曲」のダロウは書き手の「主張・評価」および「提案・助言」を婉曲的にする場合に使われる。

また、表現効果から考えると、「婉曲」のダロウに「主観性の強さや独断的なニュアンスを抑える」という表現効果があると同時に、ダロウによって述べられるのは断定した判断であるため、「十分な検討・検証を経た結果の結論・見解である」というニュアンスもある。

2.6 まとめ

本節では、JP による書き言葉におけるダロウの使用実態を考察し、以下のような結果

が得られた。

A. 「推量」のダロウ：

①. 「言い切り」の形で使用される場合が多い。伝達する意図が明確である話し言葉においては、ダロウは「言い切り」で使いにくいが、書き言葉ではその制限は強くない。そのため、学習者に使用の制限を指導する際に、使用場面の提示が必要である。

②. 「のだ」が前接した＜事情推量＞を表す「ノダロウ」がよく使用される。「推量内容＋既知事態＋ノダロウ」のような＜事情推量 1＞と「既知事態＋推量内容＋ノダロウ」のような＜事情推量 2＞があり、＜事情推量 2＞の使用がより多い。

B. 「確認」のダロウ：

①. 「文学」の「会話の文」および「知恵袋」の「回答」によく現れる。

②. 前接形式には、「ある／いる」のほかに、評価を表す形容詞も多く、それによって自慢したり、相手の評価を求めたりする。

③. 丁寧体基調の場合はもちろん、普通体基調の場合でも、丁寧体で使われる傾向がある。このような形態と実際の待遇価値にずれがあるところを学習者に指導すべきである。

C. 「疑念」のダロウ：

①. 「知恵袋」の「質問」では「婉曲疑問」用法が頻繁に使用される。ほかの＜ジャンル＞では、問題を提起する際に「疑い」用法がよく使用される。これは文章の展開に重要な働きを果たすため、学習者に書くことを指導する際に、ダロウの問題提起の機能の説明が必要である。

②. 「のだ」と共起した「ノダロウカ」の使用が多い。前接形式と合わせて見ると、「ノデハナイカ＋ダロウカ」、「どう／いかが＋ダロウカ」、「ある／いる＋ノダロウカ」の組み合わせが多い。

D. 「婉曲」のダロウ：

①. 「と言える／言ってもいい」、「ば／たら／といい」の前接が多く、書き手の「主張・評価」あるいは「提案・助言」を婉曲的にするために用いられる。

②. 「主観性の強さや独断的なニュアンスを抑える」という表現効果があると同時に、ダロウによって述べられるのは断定した判断であるため、「十分な検討・検証を経た結果の結論・見解である」というニュアンスもある。

3. 日本語話者によるダロウの使用実態ー話し言葉

本節では、話し言葉における JP によるダロウの使用実態について調査を行う。調査するデータは「独話」と「対話」からなる。以下、3.1 で調査方法および結果を述べる。3.2～3.5 でダロウの各用法の使用実態を考察する。3.6 で話し言葉についての考察をまとめる。

3.1 調査方法および結果

3.1.1 使用したコーパス

本論文では、話し言葉におけるダロウの使用実態を調査するにあたって、「独話」における使用実態については、CSJ における「独話」を調査対象とする。「独話」のデータは「学会」と「模擬」からなっている。「学会」は発話スタイルのあらたまり度が概して高い。「模擬」のほうは「学会」よりくだけたものとなっている。学習者が日本語で独話する発話場面は、授業での発表や、スピーチなどが多いと考えられる。これは、「独話」のデータの性質と一致している。「対話」における使用実態については、日本語話者同士の雑談を収録している名大を調査対象とする。

3.1.2 検索条件

「独話」におけるダロウの使用実態については、CSJ における「独話」を対象に、検索アプリケーション「中納言」2.4.5 で短単位検索を行った。「対話」については、名大の全データを対象に検索アプリケーション「中納言」2.2.2.2 で短単位検索を行った。具体的な検索条件は下記のとおりである。

検索条件①	「だろ（う）」		
	キー	語彙素＝だ	活用形＝意志推量形
検索条件②	「でしょ（う）」		
	キー	語彙素＝です	活用形＝意志推量形
検索条件③	「であろう」		
	キー	語彙素＝だ	
	後方共起（キーから 1 語）	語彙素＝有る	活用形＝意志推量形

「独話」については、①によって得られた 3,392 件から、「～だろうと～だろうと」などの慣用的な用法を 121 件排除し、残り 3,271 件を分析対象とする。②によって得られた 2,849 件から、慣用的な用法 3 件を排除し、残り 2,846 件を分析対象とする。③によって得られた 515 件から、慣用的な用法 33 件を排除し、残り 482 件を分析対象とする。以上合わせて計 6,599 件を「独話」におけるダロウの分析対象とする。

「対話」については、①によって得られた 1,477 件のうち、誤解析 8 件、聞き取り不能の印である「*」によって判断できない用例 4 件、慣用的な用法 11 件を排除し、残り 1,454 件を分析対象とする。②によって得られた 3,066 件のうち、誤解析 8 件、聞き取り不能の印である「*」によって判断できない用例 7 件、慣用的な用法 4 件を排除し、残り 3,047 件を分析対象とする。③によって得られた 8 件から、慣用的な用法 3 件を排除し、残り 5 件を分析対象とする。以上合わせて計 4,506 件を「対話」におけるダロウの分析対象とする。

3.1.3 検索結果

以上述べた検索条件によって収集した用例の件数および 100 万語単位での出現数を表 10 に示す。出現形から見ると、「独話」では「だろ（う）」、「対話」では「でしょ（う）」がよく使われている。「であろう」は頻繁に用いられず、特に「対話」ではほぼ見られない。使用頻度を示す 100 万語単位での出現数から見れば、ダロウは「対話」における使用頻度が「独話」より高い。

表 10 話し言葉におけるダロウの件数

出現形	独話	対話
①だろ（う）	3,211	1,454
②でしょ（う）	2,846	3,047
③であろう	482	5
計	6,599	4,506
100 万語単位での出現数[11]	958	3,990

収集した「独話」と「対話」におけるダロウの用例からそれぞれ 700 件をランダムにピックアップし、分析の対象とする。本論文で規定したダロウの意味用法に照らして分類した結果を図 11 に示す。「独話」ではダロウは「疑念」用法がよく使われている。一方、「対話」では「確認」用法の割合が高く、「婉曲」用法はほぼ使われていない。

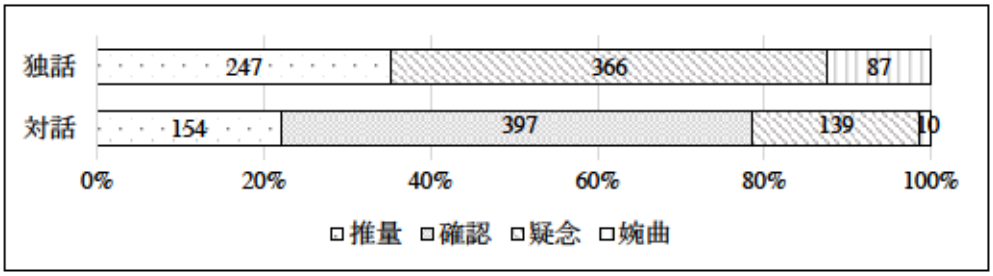

図 11 話し言葉におけるダロウの用法（発話状況別）

また、出現形別に見ると、図 12 が示しているように、「だろ（う）」の形で現れる場合、半数以上は「疑念」であり、その次は「推量」であり、「確認」を表すことが少ない。一方、「でしょ（う）」の場合、「確認」がもっとも多く、約 6 割に達している。さらに、「であろ（う）」は「確認」として使われず、約 3 分の 2 は「推量」であり、「婉曲」の割合もほかの出現形より多い。

[11] 100 万語単位での出現数は「件数／総語数×1,000,000」によって算出する。「独話」における「模擬」と「学会」の総語数はそれぞれ 3,605,729 と 3,279,364 である。「対話」における「名大」の総語数は 1,129,271 である。

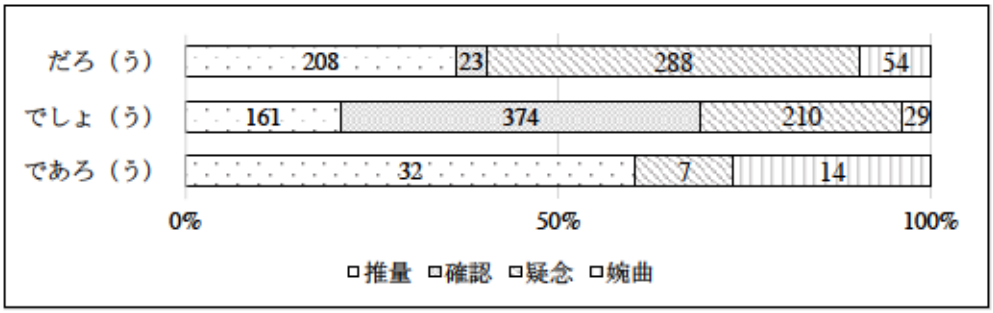

図 12 話し言葉におけるダロウの用法（出現形別）

3.2 話し言葉における「推量」のダロウ

本節では、後接形式および応答文としての使用という 2 つの視点から、JP による話し言葉における「推量」のダロウの使用実態を考察する。

3.2.1 「推量」のダロウの後接形式

「推量」のダロウの後接形式を図 13 に示す。合計件数から見れば、安達（1997）が指摘しているとおり、「言い切り」での使用が少なく、2 割のみである。また、「独話」と「対話」に差がある。「独話」における「言い切り」は 1 割強のみあり、その代わりに、半数以上は「引用形式」を後接している。一方、「対話」では約 3 分の 1 は「言い切り」であり、後接形式に「引用形式」は少なく、終助詞の「ね」が多く見られる。

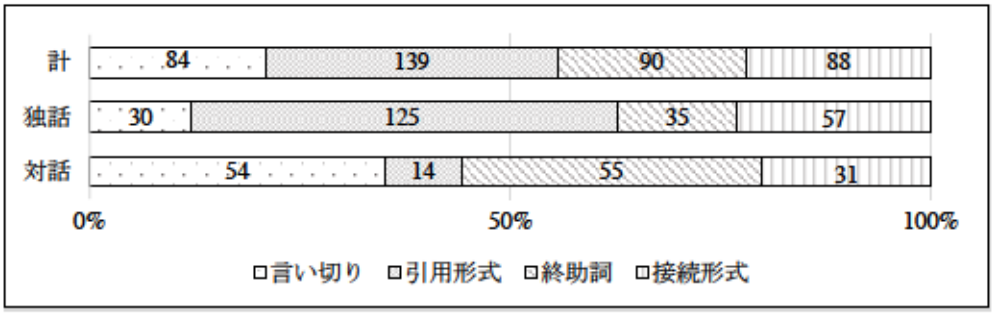

図 13 話し言葉における「推量」のダロウの後接形式

「推量」ダロウの「言い切り」での使用が少ない原因について、安達（1997: 93）では、ダロウは「聞き手に伝えるという意図を本来的には持っていない」「表出に近い関係があるもの」であり、ダロウが伝える判断は「本来的に聞き手に向けて発信されたものではない」ため、伝達する意図がある際に、ダロウによって言い切ることは「当該事態が不確かであるにも関わらず、一方的な断定を行っているというニュアンスをもってしまう」ことになるからだと分析している。

「言い切り以外」の場合、「独話」では（69）のように「引用形式」がよく後接する。また、（70）のような「ダロウ＋と。」の用例も少なからずある（23 件, 8.4%）が、「対話」にはほぼ見られない。

(69)　これはあ肺インピーダンスがない場合にはあ観測されませんのでえこのおホルマント帯域幅のお広がりはあ肺インピーダンスならびにその気管部分等々のえー影響であろうという風に考えることができます

（独話, CSJ 学会, A01M0378）

(70)　その敬語をお一含むもうちょっとあの他のことえ敬語に近い方から行けば言葉遣いあるいは言葉遣いをと一緒に起こる何か行動何かこう敬語を中心にして何か同心円上に広がるような行動の色々な要素に敬語での気配りと同じような構造のものがきっとあるだろうと

（独話, CSJ 学会, A01M0378）

また、「終助詞」が後接する場合、独話には「な」、「対話」には「ね」が多い。(71)（72）はそれぞれの例である。安達（1997: 88-89）はこのような終助詞の付加を、ダロウの「不安定性を回避するための手段」と見なし、田窪・金水（1996）が指摘している「自己確認操作」、すなわち、「情報を話し手が自分の知識と照合する作業の遂行を示す」という機能を用いて説明している。つまり、述べようとする意見をいったん自分の知識に照らし合わせ、その結果、伝えるのに十分価値がある意見であるという判断をしたものとして伝達するわけである。このように、「ね」「な」の付加は、自分の意見を直接的に表明することを避け、心的なチェックを経たということを明示することによって、聞き手に対する配慮を表すという方略に基づくと指摘している。

(71)　以上が私の自慢の両親なんですけれども#えーと両親の背中を見て育った私も多分働き続けていく人生を選ぶんだろうなって思っています

（独話, CSJ 学会, S00F1241）

(72)　F091：この人もだからユダヤ人なんだよねえ。あっ、それとも教会に入るときに、（うん）かぶってくださいって言われたのかもね。

F004：うん、きっとそうなんだろうね。

（対話, 名大, 041）

3.2.2 「推量」のダロウの応答文としての使用

ここでは「推量」のダロウが応答文として使用される場合に注目する。応答文に現れるダロウには 2 つのタイプがある。1 つは（73）のように、「そうでしょうね」で同意を表すものである。(73) において、F108 による「みんな親切」という評価に対して、F098 は「そうでしょうね」と応答している。ダロウによってそれは自分の推測と一致することを表し、同意を示す。このタイプの応答が 26 件（16.9%）ある。

（73）　F108：結構、あの、（うん）みんな親切、ですね。
F098：あ、そうですか。そうでしょうね。

（対話，名大，109）

また、応答文に現れるダロウのもう 1 つのタイプは、相手の質問に対する応答である。このような応答が 10 件（6.5%）のみで、頻繁には使用されていない。（74）はその例である。F098 の質問に対して、M027 は「推量」のダロウによって相手に要求される情報を提供する。このようなダロウが少ないことは、森山（1995: 178）が指摘している「ダロウは不確かさを持っているが、本来的に積極的に不確実であるという判断を表すのではない」ことによるのではないかと考えられる。

（74）　M027：バイリンガルのことやってます、彼女。
F098：あ、そうですか。へー。なんかな。英語と日本語の？
M027：英語と日本語でしょうね。

（対話，名大，035）

3.2.3 「推量」のダロウのまとめ

本節では、JP による話し言葉における「推量」のダロウの使用実態について、後接形式および応答文としての使用から考察した。後接形式から見ると、「推量」のダロウは「言い切り」での使用が少なく、「独話」では「と／という」節、「対話」では終助詞「ね」がよく後接する。また、応答文としての使用については、「推量」のダロウは「そうでしょうね」の形で同意を表す表現としてよく使用される。しかし、相手の質問に対して答える際にはあまり使用されない。

3.3 話し言葉における「確認」のダロウ

「確認」のダロウは「対話」では頻繁に使用されており、多くの研究に取り上げられている。そのうち、使用実態に基づく研究として、庵（2009）、張（2010, 2012）、徐（2019）などがあげられる。庵（2009）は職場での自然会話における「でしょう」という出現形の使用実態を考察している。張（2010, 2012）は 50 代、60 代の親しい女性友人同士 8 組による自然会話で使用された「確認」のダロウの使用を調査している。また、徐（2019）は名大を用いてダロウを考察している。「確認」の使用は「対話」に集中しているため、ダロウの「確認」用法にかぎると、本論文で扱うデータは徐（2019）と重なる部分が多い。そのため、本節では、まず徐（2019）における調査結果をまとめる。それを踏まえて、発話意図と出現形から「確認」のダロウを考察する。

3.3.1 徐（2019）における調査結果

徐（2019）は名大を用いて、データを「初対面 JP 同士の自然会話」と「親しい JP 同士の自然会話」に分けて、ダロウの使用実態を考察している。「確認」のダロウ[12]に関しては、以下のような結果を得ている。

①. 使用場面について：

初対面 JP 同士の自然会話には「確認」用法が極めて少ないが、親しい JP 同士の自然会話には頻繁に使用される

②. 使用頻度について：

親しい JP 同士の自然会話では、「聞き手誘導型」のほうが圧倒的に多い

③. 出現形について：

「確認」のダロウはよく「でしょ（う）」の形で現れる

（徐 2019: 62 より整理）

次に、徐（2019）における「聞き手依存型」と「聞き手誘導型」に関する考察をそれぞれ見ていく。「聞き手依存型」については、徐（2019）は三宅（2010a）の分析を踏襲し、「推量」用法から拡張された用法であるとしている。つまり、想像の中で捉えた認識を聞き手に提示することによって、間接的に聞き手にその真偽に関する情報を求める機能を表すようになると分析しており、その表現機能を「押し付け的な判断承認促し」としている。

また、「聞き手誘導型」については、徐（2019）は三宅（2010a）を踏襲して、さらに「潜在的共有知識の活性化」と「認識の同一化要求」に 2 分して調査している。その結果、「聞き手誘導型」の約 8 割は「潜在的共有知識の活性化」であり、「認識の同一化要求」は 2 割のみであることがわかった。「潜在的共有知識の活性化」の場合、6 割以上は（75）のような、聞き手の反応を待たずに、ダロウ文の命題内容を前提として話し続ける、つまり話者交替が起こらないものであると指摘している。これより、徐（2019）では、「潜在的共有知識の活性化」は聞き手に確認を求めるのではなく、前提・話題を作るために双方の既知情報を提示することにより、相手に共通認識を喚起させることを促すという表現機能を果たすと分析し、「潜在的共有知識の活性化」のダロウの表現機能を「前提・話題作りのための共通認識喚起促し」としている。

（75） F052：ちょっと色ふき始めたねっていうくらいだった、あの、奈良は。でも、奈良はすごい人だった、やっぱり。あの一、正倉院展の博物館ある<u>でしょ</u>。

---

[12] 徐（2019）は三宅（2010a, b）の分類方法に従い、「確認」のダロウを「命題確認の要求」と「知識確認の要求」に分けている。1.2 で述べたように、「命題確認の要求」と本論文で言う「聞き手依存型」、「知識確認の要求」と本論文で言う「聞き手誘導型」と対応できる。徐（2019）をまとめる際に本論文の用語を使う。

あそこからタクシーに乗ったけど、全然進まない、タクシーが。

F142：渋滞で？

（徐 2019: 70, 『名大』055）

また、（76）のような「認識の同一化要求」については、徐（2019）はダロウが聞き手との間に明らかに認識のギャップがある場合に、認識のギャップを埋めるために使用されるものであると述べており、「認識の同一化要求」の表現機能を「認識ギャップ埋めのための共通認識形成促し」としている。

（76） F001：ね、私ね、そういうなんかねえ、なんか横から指示されるの大嫌いなのよ。

M033：指示とかいう問題じゃないでしょう。常識。

（徐 2019: 72, 『名大』046）

徐（2019）による考察は、使用実態に基づき、ダロウの「確認」用法を全面的に考察しているが、データを提示することにとどまり、分析が不十分なところがある。たとえば、なぜ初対面同士の会話に「確認」用法が極めて少ないのか、また、なぜ「確認」のダロウはよく「でしょ（う）」の形で現れるのかといったことについての分析はまだ不十分である。本論文では、「確認」という行為の性質から考えるべきであると考える。つまり、「確認」は失礼さをともないやすい行為であるため、中北（2000: 29）が指摘しているように、「確認」のダロウは、「聞き手の認識のあり方に対し何らかの要求をするという機能を果たす表現を、その要求ができる立場にない人物が発すれば、「無礼」「攻撃的」等のマイナス評価を受けることになる」。そこで、「確認」のダロウを丁寧な場で控え、親しみを表す場合に多く使用する傾向があるのだろう。以下では、「確認」のダロウの発話意図および出現形という 2 つの視点から、徐（2019）の考察を補足する。

3.3.2 「確認」のダロウの発話意図

本論文で収集した「確認」のダロウを「聞き手依存型」と「聞き手誘導型」に分けると、それぞれ 124 件（31.2%）と 273 件（68.8%）あり、「聞き手誘導型」のほうが約 7 割を占めており、より頻繁に使われている。これは徐（2019）の指摘と一致している。前述したように、徐（2019）は「聞き手依存型」の表現機能を「押し付け的な判断承認促し」としているが、ダロウによって促すのがどのような判断承認であるかについては言及していない。そこで本節では、「聞き手依存型」の発話意図について考察する。

山岡他（2010）における発話意図の分類[13]に照らして、収集した「聞き手依存型」の用例を検討すると、「陳述要求」「主張要求」「感情要求」といった発話意図が見られた。そ

[13] この分類は山岡他（2010）の用語で「発話機能」についての分類であるが、本論文では「発話機能」と「発話意図」は本質的共通しているものであると考え、「発話意図」と呼ぶ。

れぞれの発話意図の目的と語用論条件は以下のとおりであり、割合を図 14 に示す。

「陳述要求」：

目的：世界の現象を命題として述べること

語用論条件：参与者 B が当該命題を述べる根拠を有していないことは自明ではないこと

「主張要求」：

目的：世界の現象に対する参与者の見解を述べること

語用論条件：a. 参与者 B が当該命題を述べる根拠を有していないことは自明ではないこと

b. 当該命題は参与者の立場によって異なるものであること

「感情要求」：

目的：参与者 B の心情を参与者 A に伝達すること

語用論条件：なし

（山岡他 2010: 132-133）

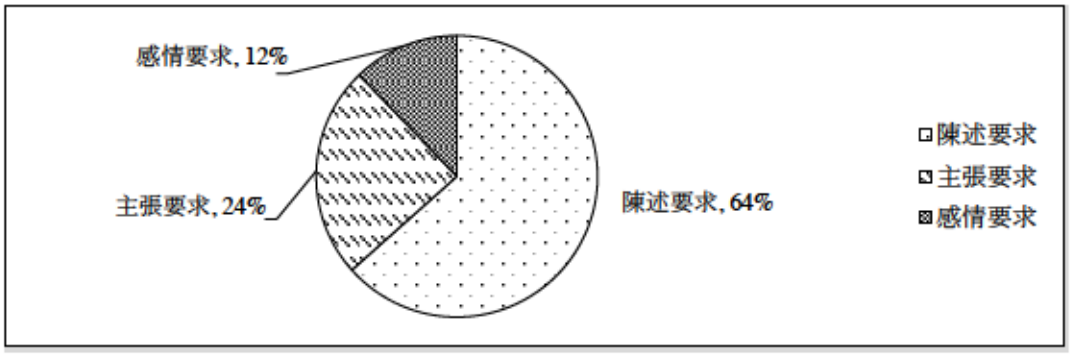

図 14 「対話」における「確認」のダロウの発話意図

図 14 からわかるように、「聞き手依存型」は「陳述要求」の意図でもっともよく使われる。つまり、約 3 分の 2 は（77）のように、客観的な情報について確認しているのである。これに対して、（78）（79）のような聞き手の主張、感情などについて確認することは比較的少ない。

（77） 【陳述要求】

M031：あの一、E2 さんもこの関東へ住んでんの？

F098：そうよ。あそこよ。

F013：白金。

（中略）

M031：高級住宅街でしょ。

F098：そうそうそう

（対話，名大，037）

(78)　【主張要求】

F128：その子がさあ、50 キロ以上出せないのよね。もうね、どんなにすごい大きい国道でも、（中略）もう 50 キロ以上出せないとか言って。

M018：おーこえっ。

F128　：変わってるでしょう。

M018：すごいね。変わってるっていうか、逆に危ないよね。

（対話，名大，004）

(79)　【感情要求】

M026：ほんな前の日から買って、前の日でも。

F128：そうだよ。でも選びたいんでしょう？　お肉を選びたいでしょう？　M023 ちゃん。

M023：どうせなら行っちゃう。だって買い物好きだもん。

F128：＜笑い＞まあまあ、いいよ。あなたの、あなたの思うとおりにして。

（対話，名大，005）

「陳述要求」の場合、ダロウによって促すのは、客観的事実に対する判断の承認であり、聞き手の私的領域の周辺的なものである。一方、「主張要求」と「感情要求」の場合、ダロウによって促すのは主観的評価や感情に対する判断の承認であり、聞き手の私的領域のより中心部のものであると思われる。そのため、「主張要求」と「感情要求」の意図で「確認」すると制限はより強いのであろう。

3.3.3 「確認」のダロウの出現形

本節では、「確認」のダロウの出現形に注目する。収集したデータを出現形別に「だろ（う）」と「でしょ（う）」に分けると、図 15 が示しているように、「でしょ（う）」のほうが圧倒的に多い。特に、「聞き手依存型」はほとんどすべてが「でしょ（う）」であり、「だろ（う）」は非常に少ない。

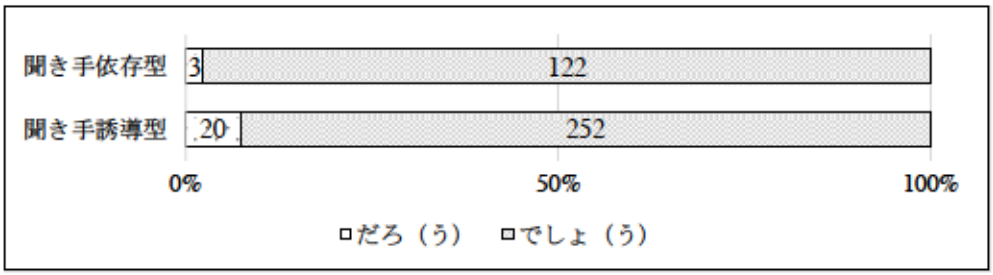

図 15 「対話」における「確認」のダロウの出現形（用法別）

次に、ダロウの前後文脈の文体に目を向ける。図 16 が示しているように、「確認」のダロウが現れる前後文脈の文体を見れば、397 件中の 356 件（89.7%）は常体基調の談話で

ある。一方、「確認」のダロウの出現形を見れば、常体と見なされる「だろ（う）」が 23 件（5.8%）のみある。つまり、(80) のように、常体基調の談話においても、ダロウは敬体の「でしょ（う）」の形で使われる傾向が見られる。

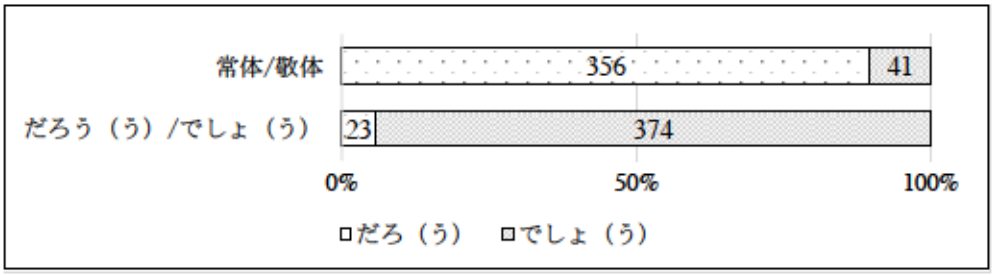

図 16 「対話」における「確認」のダロウの出現形と文体

(80) F045：まあね、確かにそうかもね。（うん）私もどういう人が好きかって言われてもよくわかんないんだよね。

F160：うーん。ねえ。ただ何か、肌、肌がすごくぶつぶつの人って、ぶつぶつっていうか、ニキビとかすごく人いるでしょう。その人がだめなの。

F045：うん、見た目じゃん。

（対話, 名大, 067）

このような現象については、中北（2000）ではダロウの「形態と待遇価値のずれ」を指摘している。つまり、「だろ（う）」は「常体基調の談話の中でもごく限られた場合にしか使われない」一方、「でしょ（う）」は「形の上では敬体だが、常体の他の述語と並んで常体基調の談話に頻出」し、「常体から敬体にまたがる広い守備範囲をもつ」が、「特に距離を保った高い待遇レベルの要求される場面では、許容度が低くなることがあ」り、「形態に対し実際の待遇価値が低い方にずれているのである」（中北 2000: 27-29）。これは、徐（2019）が指摘した「「確認」のダロウはよく「でしょ（う）」の形で現れる」という現象の原因であろう。

3.3.4 「確認」のダロウのまとめ

本節では、徐（2019）を踏まえながら、JP による話し言葉における「確認」のダロウの使用実態について、発話意図および出現形から考察した。発話意図から見れば、「陳述要求」の意図での使用が多く、「主張要求」と「感情要求」の意図での使用は比較的少ない。また、出現形については、徐（2019）は「確認」のダロウがよく「でしょ（う）」の形で現れるという現象を指摘している。本論文では、それは常体基調の談話においても、ダロウは敬体の「でしょ（う）」の形で使われる傾向があるためと指摘し、「確認」という行為の性質によるものであると分析した。

3.4 話し言葉における「疑念」のダロウ

本節では、話し言葉における「疑念」のダロウについて考察する。「疑念」は話し言葉では頻繁に使用される用法であり、特に「独話」における使用頻度が高い。収集した「疑念」用法をさらに「疑い」と「婉曲疑問」に分けた結果を図 17 に示す。「疑い」のほうが「婉曲疑問」よりよく使用されている。以下では、「疑い」と「婉曲疑問」をそれぞれ見ていく。

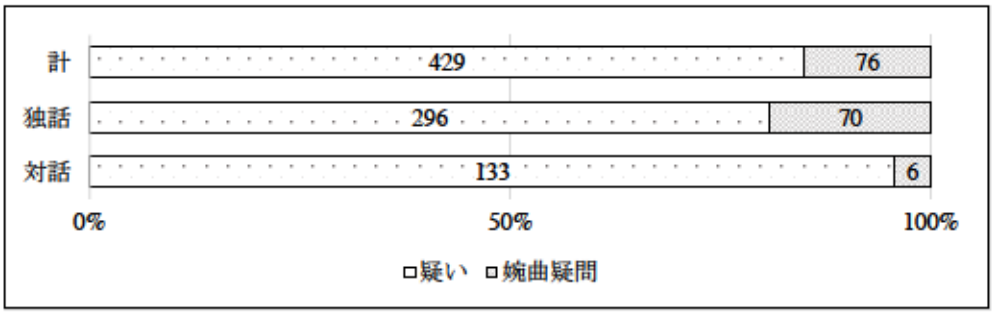

図 17 話し言葉における「疑念」のダロウの下位分類

3.4.1 「疑い」

まず、「疑い」を表すダロウの後接形式を図 18 に示す。約半数は「言い切り」で現れる。「言い切り以外」の場合、「独話」では（81）のような、引用形式が後接する用例が多い。一方、「対話」では（82）のように終助詞「ね」がよく後接する。宮崎（1999: 85）によれば、「ね」の後接により、問題の共有化を促すニュアンスが強く出ている。

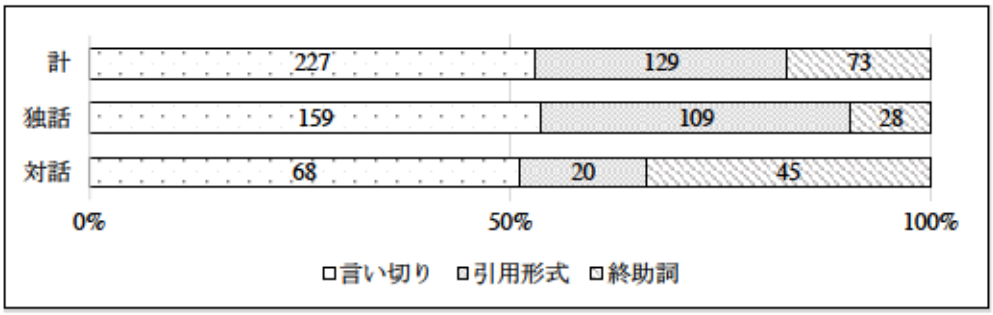

図 18 話し言葉における「疑い」の後接形式

（81）　実際に本当にあの一留学生にとってアクセントっていうのは難しいんだろうかということをま確認したいということ（中略）が最初にありました

（独話, CSJ 学会, A05F0502）

（82）　F119：だからなんか、非常勤の女の子の、女の人２人が仲悪くて、（中略）
F160：へえー。何でそうやって争っちゃうんだろうねー。（うん）女の人ってね。
F119：別にいいのにねえ。

（対話, 名大, 068）

次に、「独話」と「対話」における「疑い」についてそれぞれ考察していく。「独話」では、2 割以上の「疑い」は（83）（84）のような「何＋ダロウ」および「何て言う＋ダロウ」という組み合わせである。これらの例におけるダロウは、自問的に疑いを表明することで、話し手の思考過程を提示し、思考時間を作るというフィラーのような働きがある。また、この場合、基本的に「言い切り」の形で現れ、そして文末の「か」が省略される傾向がある。

（83）　緑ってのがま空気の浄化を促進何だろう促進促してくれてるって言うのかなあの一ま一植物がま一自分達を救ってくれてると言ってもま過言ではないのかもしれません

（独話, CSJ 模擬, S11M1136）

（84）　そういう制度ができることによってあの一何て言うんでしょう自己評価をしないと今度はそういう法人そういう事業所が社会に受け入れられていけないあの制度ができるようですので

（独話, CSJ 模擬, S09F0368）

また、「独話」における「疑い」には、（85）のような問題提起の例も多く見られる。問題提起のダロウには、聞き手の興味を湧かせる表現効果があると同時に、自然に次の話題に移すという機能もある。

（85）　次にじゃ名前のトップテンとぅこれはどうでしょうとえー一位は誰でしょう竹下さんですねさすがあの一昔からえー政治に新聞を賑わしてる人

（独話, CSJ 学会, A07M0250）

次に「対話」における「疑い」を見よう。前述した「独話」と同じように、フィラーのような機能を果たすダロウは「対話」にも高頻度で使用され、2 割以上を占めている。また、応答を回避する表現としてもよく使用される。（86）のように、F037 はダロウを用いて、回答がわからないということを間接的に表している。この場合、よく終助詞「ね」が後接する。

（86）　F128：でも、ねえ、娘、うん、かわいい娘だからお父さんたちは心配なのかな、やっぱりね。

F037：ねえ、どうなんだろうねえ。

（対話, 名大, 035）

「疑い」は対話で使用されると、間接的に伺うニュアンスを帯びることがある。では、聞き手としては「疑い」をどのように受け止めているのだろうか。（87）のように話し手が聞き手の反応を待たず、「疑い」の発話の次に続けて発話する場合を「維持」とし、話

者交替が起こった場合を「交替」とする。また、話者交替が起こった場合をさらに 2 分する。1 つは（88）のように、発話内容は話題の続きだけであり、ダロウに対する反応ではない。これを「交替－継続」とする。また、もう 1 つは（89）のように、交替後の発話内容はダロウに対する直接な答えである。これを「交替－答え」とする。図 19 に「疑い」に対する聞き手の反応を示す。

（87）　【維持】

F004：そうだよねー。うーん。なんかさ、不思議なんだけどさー、（うん）ほら、日本語勉強しに来てるのに、なんで授業中に英語使うんだろう。使わない？

F005：使う、使う。

（対話，名大，052）

（88）　【交替－継続】

F051：Ｃウイメンズクリニックだっけ。レディースじゃないんだよね。

F131：ウィメンズ。＜笑い＞じゃ、対象が幅広いのかな？

（中略）

F051：その I 先生のはさ、レディース（レディースだったよね）だったよね。

F131：何が違うんだろう。

F051：そう、そう、ウィメンズだった。うん。

（対話，名大，117）

（89）　【交替－答え】

F134：でも、次、何の仕事するんだろう。

F112：え、でもあの人作家だから、そっちで稼ぐんじゃない？

（対話，名大，125）

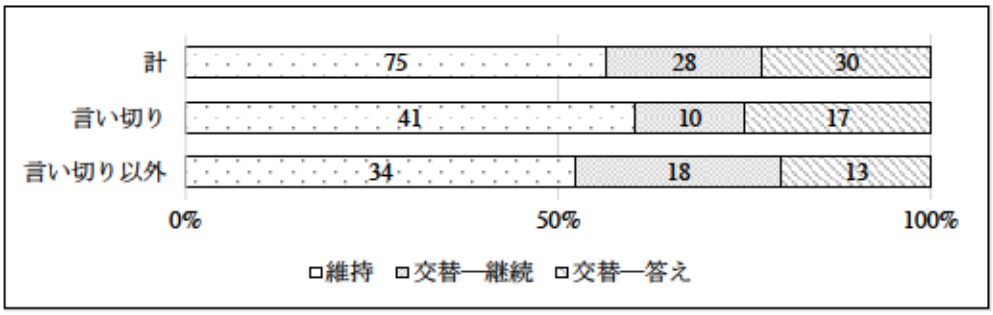

図 19 「対話」における「疑い」に対する聞き手の反応

「維持」「交替－継続」「交替－答え」のうち、「交替－答え」だけがダロウの伺うニュアンスに対する反応であるが、図 19 からわかるように、その割合は高くない。「言い切り」で現れる場合、「交替－答え」の割合がやや高いが、4 分の 1 にすぎない。つまり、「疑い」は「対話」においては、話し手の疑いを述べることが主たる用法であり、積極的

に伺うニュアンスを帯びるわけではないと言えよう。

3.4.2 「婉曲疑問」

「婉曲疑問」は「疑い」ほど頻繁に使われておらず、特に「対話」では少ない[14]。「独話」においては、(90) のようなノデハナイカの前接が多く、47 件 (67.1%) もある。ダロウは基本的に「主張・評価」および「提案・助言」を婉曲的にするために用いられている。つまり、「独話」における「婉曲疑問」のダロウは、形式上は疑問文と共起し、それを婉曲的にするのであるが、実際の機能としては、情報を要求するのではなく、情報を提供するために使われている。

(90) やはり人に喜んでもらえる自分自身がえ楽しみでえ一栽培できるそういうう一ことを通して思いやりとか優しさが育っていくのではないだろうかという風に私は思っております

(独話, CSJ 模擬, S10M0789)

一方、「対話」においては、「婉曲疑問」のダロウは (91) のように、相手の意見を尋ねたり、情報を求めたりする際に用いられている。

(91) F050：これが一番新しいのでしょうか。
X　：ええ、あそこには入ってなかったので。

(対話, 名大, 061)

3.4.3 「疑念」のダロウのまとめ

本節では、JP による話し言葉における「疑念」のダロウの使用実態については、「疑い」と「婉曲疑問」に分けて考察した。その結果、「疑い」のほうがより頻繁に使用されることがわかった。後接形式から見ると、「疑い」の約半数は「言い切り以外」の形で現れ、「独話」では「と／という」節、「対話」では終助詞「ね」がよく後接する。また、「何＋ダロウ」と「何て言う＋ダロウ」のような組み合わせは、思考時間を作るためのフィラーのような表現としてよく使用される。さらに、「対話」においては、応答を回避する表現としてもよく使用される。

「婉曲疑問」の場合、「独話」ではダロウはノデハナイカとよく共起し、情報を提供するために、「主張・助言」などを柔らかくする表現として用いられる。「対話」の場合、よく婉曲的に情報を要求するために使われる。

---

[14] 「対話」における「婉曲疑問」が少ないことは、名大には親しい者同士の雑談が多いことと関連していると思われる。

3.5 話し言葉における「婉曲」のダロウ

ダロウの「婉曲」用法は「対話」における使用頻度が非常に低い。「独話」においては、その使用傾向は書き言葉とほぼ同じであり、「と言える」「ば／たら／といい」「べき」などがよく前接し、話し手の「主張・評価」をより控えめにするために使用される。ただし、後接形式は書き言葉と異なる。書き言葉においては、9 割以上の「婉曲」のダロウは「言い切り」の形で現れるが、話し言葉の「独話」においては、その割合は 2 割のみである。つまり、（92）のように、話し言葉における「婉曲」のダロウは、「言い切り以外」の形で現れる傾向がある。

（92）　それを私は凶悪化とはやっぱり一応定義上は言えないだろうと思います

（独話, CSJ 学会, A07M0652）

3.6 まとめ

本節では、JP による話し言葉におけるダロウの使用実態を考察し、以下のような結果が得られた。

A. 「推量」のダロウ：

①. 伝達する意図が明確である話し言葉においては、「言い切り」での使用が少ない。「独話」では「と／という」節、「対話」では終助詞「ね」がよく後接する。日本語教育では、使用の制限およびよく後接する形式の指導が必要である。

②. 応答文においては、「推量」のダロウは「そうでしょうね」の形で、同意を表す表現としてよく使用されるが、相手の質問に対して答える際には、あまり使用されない。「推量」のダロウは認識上の不確かさをもっているにもかかわらず、不確実な情報を提供する際には頻繁に使われないということを学習者に説明する必要がある。

B. 「確認」のダロウ：

①. 「陳述要求」の意図での使用が多い。聞き手の私的領域の中心部に踏み込んだ「主張要求」と「感情要求」の意図ではあまり使用されない。

②. 普通体基調の場合でも、丁寧体が使われる傾向がある。「確認」は失礼さをともないやすい行為であるため、丁寧な場における使用を控えるべきであること、そして使用する際に意図と形式に注意すべきであることを学習者に指導する必要がある。

C. 「疑念」のダロウ：

①. 「疑い」の場合、「何＋ダロウ」と「何て言う＋ダロウ」のような組み合わせは、思考時間を作るためのフィラーのような表現としてよく使用される。また、応答回避の表現としてもよく使用される。これらの用法は円滑なコミュニケーションを遂行するために重要であるため、学習者に指導すべきである。

②. 「婉曲疑問」の場合、ノデハナイカおよび「いかが」とよく共起し、「主張・助言」

などを柔らかくする表現として使用される。

D. 「婉曲」のダロウ：

①. 「対話」における使用頻度は非常に低い。

②. 「独話」では書き言葉と異なり、よく「言い切り以外」の形で使用される。

4. 中国語話者によるダロウの使用実態ー書き言葉

第 2 節と第 3 節では、JP によるダロウの使用実態について調査を行った。JP による使用実態を日本語教科書および日本教育現場に反映すれば、学習者にとって実用性が高く、学習効果の向上も期待できると思われる。しかし、JP の使用実態のみでは、日本語学習の主体である学習者の状況が把握できない。本論文は、CN 向けの日本語教育の改善を目指しているため、CN によるダロウの使用実態にも注目する必要がある。これによって、CN の実際の使用にはどのような問題点があるのか、どういうところに困難を感じているのかなどが見えてくるだろう。さらに、それに基づいて対応する改善方法が提案できる。そこで、第 4 節と第 5 節では、CN による書き言葉および話し言葉におけるダロウの使用実態について調査する。

本節ではダロウについて、JP と対照しながら、CN による書き言葉における使用実態を調査する。なお、調査対象者は中級以上に達している CN に限定する。本節の構成は以下のとおりである。4.1 で CN によるダロウの使用に関する先行研究を概観したうえで、4.2 で調査方法および結果を述べる。4.3～4.5 では、用法別に CN によるダロウの使用実態を考察する。4.6 で考察の結果をまとめる。

4.1 先行研究

学習者によるダロウの使用を考察する研究は数多くある。これらの研究の多くは、書き言葉、特に意見文にしぼり、JP との比較をとおして、学習者によるモダリティ表現全体の使用を考察している（伊集院・高橋 2004, 2010、木下 2014a, b、野崎・岩崎 2014、永谷 2017 など）。ダロウに関しては、学習者による使用頻度が JP より低いことが共通に指摘されている。その原因については、永谷（2017）ではまず「と思う」の多用をあげている。つまり、実現していない事態を想像しながら述べる場合に、JP はダロウを用いる傾向があるのに対し、学習者は「と思う」を用いる傾向がある。そして、もう 1 つの原因は、断定形の不適切な使用にあると永谷（2017）は指摘している。また、伊集院・高橋（2004）は CN の使用に注目している。CN による日本語作文の特徴として、「相手に向かって話しかけているような表現の多用」と指摘しており、“Writer／Reader visibility”、つまり「書かれた文章において書き手や読み手の存在が言語表現として示しされる度合い」という概念を用いて考察している。CN が「べきだ」のような評価のモダリティを「主節末・裸の形式」で多用することを明らかにした上で、これらの表現は働きかけの機能を持つことから、CN による日本語作文は JP より“Writer／Reader visibility”が大きい可能性が示唆され

たと指摘している。これも、ダロウの使用の少なさと関連すると思われる。さらに、木下（2014a, b）は CN の誤用に注目し、「推論の方向性」、つまり「ノダロウ」に関する誤用が多く見られると述べている。

以上の先行研究における考察は、ダロウの「推量」用法をめぐって行われている。また、高橋・伊集院（2006）、伊集院・高橋（2010）、野崎・岩崎（2014）は「疑念」用法の使用の少なさも指摘している。「疑念」のダロウの不使用は、CN の日本語作文の印象として指摘されることの多い「詰問」的な口調と関連していると高橋・伊集院（2006: 83）は述べている。

以上概観したように、CN によるダロウの使用を検討する研究の数は少なくないが、調査対象となる文体は単一であり、基本的に意見文である。たしかに意見文においては、ダロウの「推量」用法は多用されるだろう。しかし、それだけに注目すると、ほかの文体における使用の特徴や問題点が見過ごされる可能性がある。また、これらの先行研究では、ダロウにしぼったものが少ないため、CN によるダロウの各用法それぞれの使用実態はまだ明らかになっていない。そこで、本論文では多様な文体を選定し、CN によるダロウの各用法の使用実態を全面的に考察する。

4.2 調査の概要および結果

4.2.1 使用したコーパスおよび調査方法

JP と対照しながら CN による書き言葉におけるダロウの使用実態を調査するために、YNU と JCK を使用して調査を行う。YNU と JCK における各タスクの内容は、以下のとおりである。

【YNU の各タスクの内容】

タスク①　面識のない先生に図書を借りる
タスク②　友人に図書を借りる
タスク③　デジカメの販売台数に関するグラフを説明する
タスク④　学長に奨学金増額の必要性を訴える
タスク⑤　入院中の後輩に励ましの手紙を書く
タスク⑥　市民病院の閉鎖について投書する
タスク⑦　ゼミの先生に観光スポット・名物を紹介する
タスク⑧　先輩に起こった出来事を友人に教える
タスク⑨　広報誌で国の料理を紹介する
タスク⑩　先生に早期英語教育について意見を述べる
タスク⑪　友人に早期英語教育について意見を述べる
タスク⑫　小学生新聞で七夕の物語を紹介する

（金澤編 2014: 53）

【JCK の各タスクの内容】

意見文：晩婚化の原因とその展望について

説明文：自分の故郷について

歴史文：自分の趣味（昔から続けていること）について

本節では、YNU については、CN による 360 編（約 13.3 万字）と JP による 360 編（約 11.7 万字）の作文を対象とする。JCK については、CN による 60 編（約 12.9 万字）と JP による 60 編（約 13.6 万字）の作文を対象とする。対象とした作文から、ダロウの用例を手作業で抽出する。これらのコーパスは、CN と JP に対して同じ作文タスクを課すことによって得た作文を収録しており、文章の内容が揃っているため、CN と JP によるダロウの使用における違いが伺えると思われる。

4.2.2 調査結果

以上述べた調査方法によって抽出したダロウの件数を用法別に表 11 に示す。「確認」以外のどの用法でも、CN によるダロウの使用頻度は JP を大きく下回っている。特に「推量」と「疑念」における差は大きい。以下では、実例に基づいて、件数が比較的多い「推量」「疑念」「婉曲」用法をめぐって、JP と対照しながら、CN による使用実態を検討する。

表 11 CN と JP によるダロウの各用法の件数

用法	書き	YNU												JCK				計
		①	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	小計	説明	意見	歴史	小計	
推量	CN			3	9	5			7	1	9	2	36	7	17	16	40	**76 (2.9)**
	JP		2		7	8	2	1		1	4	5	30	49	92	16	157	**187 (7.4)**
確認	CN				5			3			3		11	1		1	2	13 (0.4)
	JP				4			2			2		8					8 (0.3)
疑念	CN	15	1	5	2	5	2		4	2	2	2	40	5	27	8	40	**80 (3.1)**
	JP	22	2	12	3	28	5	3		7		11	93	33	55	14	102	**195 (7.7)**
婉曲	CN				1	1		1	7	1	5		16	1	5	2	8	24 (0.9)
	JP		1		1	3			1				6	24	34	8	66	72 (2.8)

（() 内は 1 万字あたりの件数）

4.3 書き言葉における「推量」のダロウ

4.1 で述べたように、CN による「推量」のダロウの使用は先行研究ですでに考察されている。本節ではそれらの研究を踏まえ、以下の 3 つのリサーチ・クエスチョンを立てる。

①. 意見文以外の文体では、CN による使用にどのような特徴があるのか

②. CN による「ノダロウ」の使用実態はどのようになっているのか

③. 先行研究で指摘された「実現していない事態を述べる」場合のほかに、CN による使用が少ない場合があるのか

4.3.1 意見文以外の文体では、CN による使用にどのような特徴があるのか

2.2 で述べたように、伝達する意図がある場合、ダロウによって言い切ることは「当該事態が不確かであるにも関わらず、一方的な断定を行っているというニュアンス」になりやすいため、ダロウは「言い切り以外」の形で出現する傾向がある。これは日本語教育では重視すべき点であり、CN による使用実態を明確にする必要がある。しかし、従来の研究はおもに読み手が不特定多数である意見文を調査対象とし、伝達の意図が明確ではないため、後接形式についての考察は行われていない。一方、本論文で調査した YNU のタスク④⑤⑦⑧⑩⑪は、特定の読み手向けの文であり、伝達の意図はより明確であると言える。図 20 のように、これらのタスクにおいては、JP はダロウの使用を控えており、特に「言い切り」での使用が非常に少ない。一方、CN によるダロウのほぼすべては「言い切り」である。

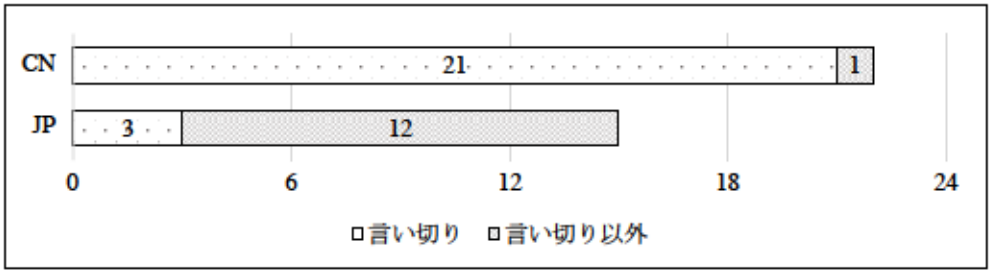

図 20 タスク④⑤⑦⑧⑩⑪におけるダロウ

読み手が「仲の良い友達」であるタスク⑪における（93）を例にすると、CN はメールの返信に、早期英語教育に賛成する理由を述べる際に、「言い切り」で「推量」のダロウを使用している。このような特定の読み手へのメールでは、意見を伝達する意図は強いと思われる。「言い切り」の形でダロウを使用すると、一方的に意見を述べることになり、伝達する意図は通じにくい。CN は「推量」のダロウの伝達的側面の特徴に対する認識が不十分のまま「言い切り」でダロウを使用しており、それに気づいていない可能性がある。

（93） 英語を勉強するには、やはり小さいごろから英語に対する興味を育てるべきだと思うよ。興味さえあれば、これからの英語勉強も楽しくなるでしょう。
（Cf. これからの英語勉強も楽しくなるでしょうね。）
（CN, YNU タスク⑪, C040）

4.3.2 CN による「ノダロウ」の使用実態はどのようになっているのか

2.2 における JP の使用実態に対する調査からわかるように、書き言葉においては、「推量」のダロウの 2 割以上は「ノダロウ」である。そして、そのうちの 3 分の 2 以上は、「所与に対して「なぜこのような事態が起こったのか」「この事態が何を意味しているのか」と推量する＜事情推量＞（幸松 2015: 3）である。この場合、「ダロウ」への置き換えがで

きないため、「ノダロウ」を使用しないと誤用になる。また、木下（2014a）は「ノダロウ」の理解と習得の困難さを報告しているが、それについての詳しい考察は行われていない。そこで、以下では CN による「ノダロウ」の使用について考察する。

CN による「ノダロウ」の使用状況を図 21 に示す。CN による「ノダロウ」の使用は JP に比べれば非常に少ない。

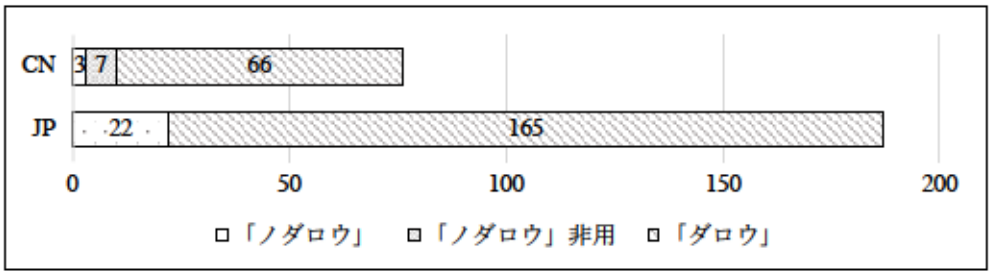

図 21 「ノダロウ」の使用状況

また、CN による 3 件はすべて「既知事態＋推量内容＋ノダロウ」のような＜事情推量 2＞である。「推量＋既知事態＋ノダロウ」のような＜事情推量 1＞の場合、（94）のように、「ノダロウ」を使うべきところで「ノダロウ」を使わないという非用の問題がある。（94）においては、「若い」は推量の内容であり、「そのようなバカみたいなことを考えもなくやった」は既知の事態である。「ノダロウ」の非用により、推量の方向性が読み手に伝わりにくいだろう。

（94） 女の子だけがいるので、みんなわがままお酒を飲んだりすることもある。若いこそ、そのようなバカみたいなことを考えもなくやっただろう。
（Cf. 若いこそ、そのようなバカみたいなことを考えもなくやったのだろう）
（CN, JCK「歴史文」, c50－3）

CN による非用の件数は使用した件数よりも多いことから、「ノダロウ」の習得の困難さが伺える。特に、＜事情推量 1＞の使用が見られず、重点をおいて指導する必要があると思われる。「のだ」の習得の困難さは多くの先行研究に指摘されており、指導の試案も出している（菊地 2000、古川 2005、庵 2013 など）。それらを踏まえて、CN に「ノダロウ」を指導する際に、「のだ」についての説明を適宜に繰り返し、さらに、具体例と合わせて、まず＜事情推量 2＞、そして＜事情推量 1＞の順に指導したほうがよいのではないかと考えられる。

4.3.3 ほかに CN による使用が少ない場合があるのか

永谷（2017）は CN によるダロウの使用が少ない場合として、実現していない事態を想像しながら述べる場合のみをあげている。ここでほかに CN による使用が少ない場合があ

るのかを見ていく。4.3.1 で述べたように、CN はよく「言い切り」の形でダロウを使用する。これは伝達性に問題があるのみではなく、CN による使用の単調さの問題も反映している。たとえば、JP の用例には、ダロウが（95）のように、逆接を表す「が」を後接し、譲歩を表すことがよく見られる。また、（96）のように、ダロウは「し」に前接し、理由を列挙する際に用いられることもある。

（95）　晩婚化の傾向も徐々に緩やかになるのではないかと思う。（中略）精子卵子の冷凍保存や代理母など子供を持つことのできるチャンスは年齢を重ねても増えるだろうが、人間を育てるというのはとても気力・体力ともにスタミナが無ければできるものではない。

（JP, JCK「意見文」, j12－2）

（96）　私はこの課題に性差は関係ないと思われる。男性も女性も若い内によく働くことでその先の昇進をより現実的なものにしたいと考えるだろうし、またライフスタイルの多様化によってプライベートで使う出費を賄うためにより多く働きたいと考えているように思われるからだ。

（JP, JCK「意見文」, j17－2）

JP によるダロウの用例には、接続形式「が／けれども（けど）」および「から／し」を後接する例が 31 件（16.5%）あるが、CN の場合それが 2 件しかない。譲歩を表す表現を使用する利点については、伊集院（2010: 109）では「意見を述べる際に単に自分の主張を繰り返したり、好都合な根拠を取り上げるだけでなく、別の立場の見解も取り入れた上で論理的に一貫性のある主張を展開することが望まれる」と述べている。「ダロウ＋が／けれども（けど）」「ダロウ＋から／し」を使わなくても誤用にならないが、文章の展開に論理性と説得力を加える効果があるため、論理的に文章を組み立てて展開していくことが求められる中級以上の段階で扱うのがよいだろう。

4.3.4 「推量」のダロウのまとめ

本節では、先行研究を踏まえて、リサーチ・クエスチョンを設定し、考察を行った。その結果を以下のようにまとめられる。

①. 意見文以外の文体では、CN による使用にどのような特徴があるのか

読み手に意見を伝達する意図がある場合でも、CN は「推量」のダロウを「言い切り」で使用する傾向がある。そのため、一方的に意見を述べることになり、伝達の意図が通じにくい。CN は「推量」のダロウの伝達的側面に対する認識が不十分のまま「言い切り」でダロウを使用し、それに気づいていない可能性はある。

②. CN による「ノダロウ」の使用実態はどのようになっているのか

CN による「ノダロウ」の非用の件数は使用した件数よりも多いことから、「ノダロ

ウ」の習得の困難さが伺える。使用した場合、すべて「既知事態＋推量内容＋ノダロウ」のような＜事情推量 2＞である。一方、「推量内容＋既知事態＋ノダロウ」のような＜事情推量 1＞の使用がないため、CN にとって特に困難であると思われる。

③. 先行研究で指摘された「実現していない事態を述べる」場合のほかに、CN による使用が少ない場合があるのか

CN による用例に、ダロウが「が／けれども（けど）」および「から／し」を後接し、譲歩あるいは理由を述べる場合での使用は少ない。「ダロウ＋が／けれども」「ダロウ＋から／し」は文章の展開に論理性と説得力を加える効果があるため、中級以上の段階で扱うとよい。

4.4 書き言葉における「疑念」のダロウ

「疑念」のダロウをさらに「疑い」と「婉曲疑問」に分けた結果を図 22 に示す。「疑い」と「婉曲疑問」の比率から見れば、CN と JP との間の差は大きくないが、件数から見れば、大きな差がある。では、具体的にどのような場面において、JP と CN は使用の有無に違いが生じるのだろうか。CN による「疑念」のダロウの使用における問題点を究明するために、以下、「疑い」と「婉曲疑問」をそれぞれ検討していく。

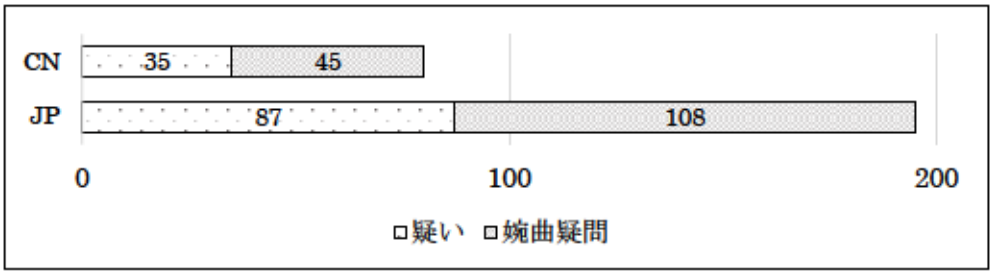

図 22 「疑念」のダロウの下位分類

4.4.1 「疑い」

1.3.2 で述べたように、宮崎（2005）は「疑い」に「中立型」「肯定型」「否定型」の 3 つのタイプがあると指摘している。「中立型」は特定の可能性を優先させず、中立的な立場をとるタイプ、「肯定型」は取り上げた可能性を選択する方向に向いているタイプ、「否定型」は取り上げた可能性を選択しない方向に向いているタイプである。収集した「疑い」の用例を 3 つのタイプに分けた結果を表 12 に示す。どのタイプでも CN の件数は JP より少ない。

表 12 「疑い」用法の各タイプの件数

	中立型	肯定型	否定型
CN	29	5	1
JP	73	9	5

各タスクにおける「中立型」の件数を図 23 に示す。JP による「中立型」の用例は、YNU のタスク⑥⑫、そして JCK の「意見文」にもっともよく出現する。一方、これらのタスクにおける CN の件数は JP より著しく少ない。

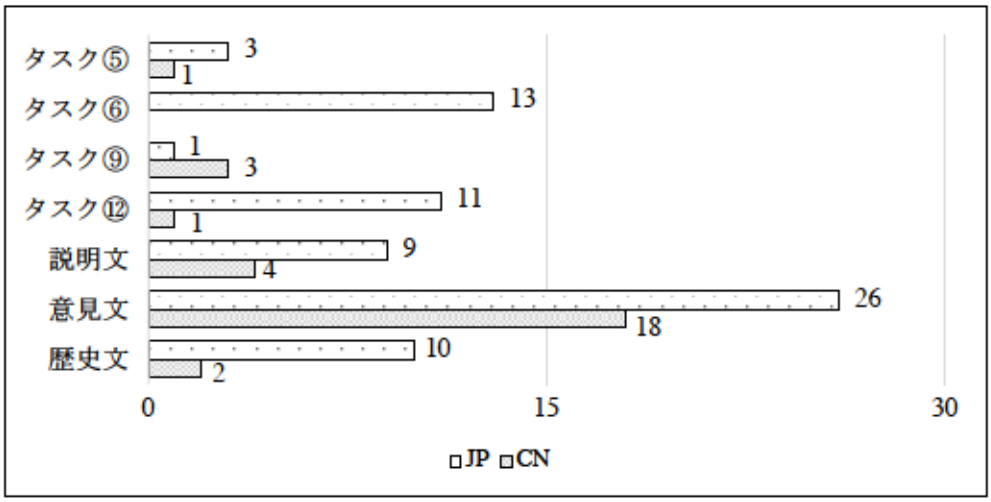

図 23 各タスクにおける「中立型」の件数

まず、タスク⑥「市民病院の閉鎖についての投書」と「意見文：晩婚化の原因とその展望」について見よう。JP では、これらのような意見や主張を述べることが要求される文章において、ダロウはよく問題提起の形式として用いられる。この場合に、これから述べようとする内容を予告する働きがあり、ダロウによって提起された問題を読み手に考えさせて、読む興味を湧かせる表現効果があると考えられる。(97) を例にすると、書き手は晩婚化の理由を述べる前に、ダロウによって「なぜ結婚しないのか」という問題を提起して、これから晩婚化の理由を述べるということを予告し、文章の流れをわかりやすくしている。読み手はその問題に気づき、晩婚化の理由を考えながら面白く読み進めていくだろう。

(97) 近年、世界各国で晩婚化が進んでいる。そして、これは日本でも例外ではない。なぜ、人々はなかなか結婚しなくなってしまったのだろうか。特に日本の事例について、晩婚化が進んだ理由を述べたい。

(JP, JCK「意見文」, j06－2)

また、タスク⑫「小学生新聞で七夕の物語を紹介する」においては、JP によるダロウ

はよく（98）のように、物語の展開を述べる際に現れ、読み手の興味を引く働きがあると考えられる。

（98） おりひめとひこぼしは、おにあいの夫婦となり一緒に暮しはじめました。ところがどうでしょう。あんなに働き者だったおりひめとひこぼしが、結婚してから全く働かなくなってしまいました。

（JP, YNU タスク⑫, J013）

一方、（99）と（100）の比較からわかるように、同じく病院閉鎖の影響について述べる際に、JP はまず「疑い」のダロウによって問題を提出し、それから予想を述べるのに対して、CN は直接影響を述べ、ダロウを使わない傾向が見られる。この傾向は、CN が問題提起のダロウの文章の構造における働きに対する理解、また運用できるようになるための指導が不十分である可能性を示している。この場合にダロウを使わなくても誤用にならないが、比較的長い論理的文章を書く際には、ダロウのような表現によって、構造をわかりやすく示すことがより望ましいだろう。

（99） それなのに、市民病院を閉鎖してしまったらどうなるのだろうか。（中略）多くの人が町を離れ、別の医療が受けられる町へうつっていくだろうということは容易に予想できる。

（JP, YNU タスク⑥, J013）

（100） 閉鎖されると、近隣の住民たちが産婦人科とリハビリセンターに通う場合は、隣区の病院に行かざるを得ないことになってしまう。

（CN, YNU タスク⑥, C047）

次に、「肯定型」に目を向ける。JP による「肯定型」の用例は、JCK における「歴史文：自分の趣味（昔から続けていること）について」によく出現する。（101）のようなはっきり覚えていないことについて述べる場面や、（102）のような不確定でありながら原因理由を推測する場面において「肯定型」が使われている。

（101） 茶道部の活動によりいっそうのめり込んでいた私に転機が来たのは、入部してから 3 年ほどたったころでしょうか。私の通っていた中学校の茶道部では、毎年文化祭の時期に茶会を催すのが恒例だったのですが（後略）

（JP, JCK「歴史文」, j04－3）

（102） 旅に出る時間も余裕もないのに、なぜスポーツバイクなら行けると思ったのだろうか。きっと、遠くに自分を連れて行ってくれる乗り物が目の前に、旅そのものが具現化してそこにあったような気がしたからだろうか。

（JP, JCK「歴史文」, j11－3）

一方、CN による（103）のような不適切な使用が見られる。YNU のタスク③は、レポートでデジカメの販売台数に関するグラフの説明である。「肯定型」は肯定への傾きがあるが、判断がまだ成り立っていない段階にある。そのため、レポートのような書き手の判断や主張が要求される文章においては不適切である。学習者に指導する際に、「肯定型」のニュアンスはもちろん、使用場面の提示も求められるだろう。

（103）【レポートにおけるグラフの説明】
2006 から 2008 にかけ販売台数の数がやや、増えてくる。そして、2008 から、販売台数が一気に上がって、販売台数が 2010 に歴年の第 2 位になった。これからも増えていくでしょうか。

（CN, YNU タスク③, C005）

「否定型」の場合、ダロウは「取り上げた可能性を選択しない方向に傾く」（宮崎 2005: 84）ことによって、書き手の主張を間接的に表せると思われる。JP による（104）を例にすると、書き手はダロウを用いて、「経営が成り立たないことを理由に病院を閉鎖するという考え方はよくない」と間接的に主張している。

（104）多くの人が通い、待合室で多くの時間をかけてやっと医者に観てもらえるような状態であるのに、経営が上手く行っていないのだという。人は来ている、しかし、経営が成り立たない、だから閉鎖する、という考え方で本当に良いのだろうか。

（JP, YNU タスク⑥, J014）

一方、CN による日本語作文の特徴として、「相手に向かって話しかけているような表現の多用」が指摘されている（伊集院・高橋 2004: 86）。（105）からもこのような特徴が見られる。（105）はタスク⑥「市民病院の閉鎖について投書する」における CN の用例である。（104）との比較からわかるように、疑問文の形式によって主張を述べる場合では、「疑い」のダロウを用いたほうがよりふさわしい。その不使用によって、直接相手に問いかけるような話し方になり、「新聞への投書」という体裁にそぐわなくなっている。このような不使用は、中国語では疑問文をそのまま疑いとして使うことができるという母語の影響に関連していると思われる[15]。

（105）このような意見が高まる中、居民の安心した暮しのために、国が当病院の閉鎖は果していい決断なのか？

[15] 「国が当病院の閉鎖は果していい決断なのか」の中国語訳「国家关停这家医院真的是一个正确的决定吗」は、「国が当病院の閉鎖は果していい決断なのだろうか」という意味も表せる。

（Cf. 国が当病院の閉鎖は果していい決断なのだろうか）

（CN, YNU タスク⑥, C049）

4.4.2 「婉曲疑問」

「婉曲疑問」は発話意図によって、「意見尋ね・答え求め」「依頼・許可求め」「主張・助言」の 3 タイプに分けられる。「婉曲疑問」の用例をこれによって分類し、JP および CN の件数を図 24 に示す。いずれの発話場面においても、CN による用例数は JP より少ない。特に「主張・助言」の場面における CN と JP の差がもっとも大きい。

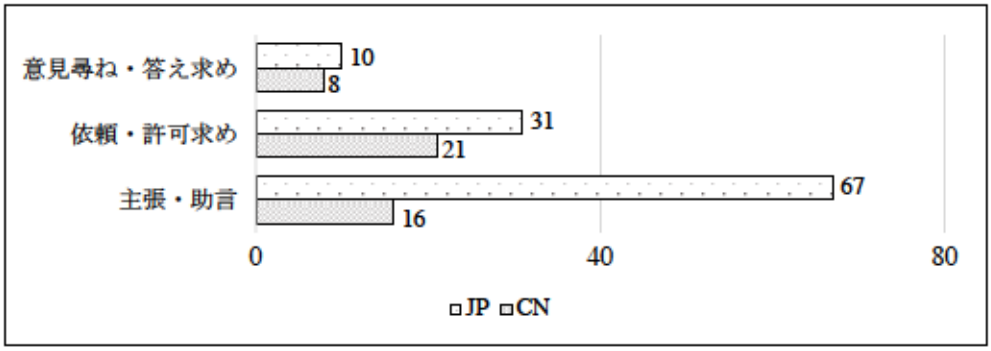

図 24 「婉曲疑問」の発話意図

「意見尋ね・答え求め」の場合、ダロウは質問を丁寧にする働きがある。後述する「依頼・許可求め」と同じように、読み手が特定の目上の人である際に、「婉曲疑問」のダロウがよく使われる。（106）はその例である。この場合、もし使用しないと、丁寧さに欠けるようになる恐れがあるが、CN の使用は JP とはそれほど大きな差がなく、このような場面に「婉曲疑問」のダロウを使う意識は持っていると言える。

（106） 近日、先生のご都合のよろしい日はございますでしょうか。返信いただければ幸いです。

（JP, YNU タスク①, J005）

「依頼・許可求め」の意図で発せられたダロウは、よく「～していただけないでしょうか」「～してもらえないでしょうか」「～していただけないでしょうか」「～してもよろしいでしょうか」などの形で現れる。（107）はその例である。無論、（108）のように、ダロウを使わずほかの表現によって間接的に依頼することも可能であるが、CN による用例においては、（109）のように文法的間違いはないものの、ダロウを使用すれば、より丁寧な、ふさわしい表現になる例がある。

（107） 大変突然なお願いではありますが、ぜひ貸していただけないでしょうか。よろしくお願い致します。

（JP, YNU タスク①, J018）

（108） 先生が研究室に所蔵していらっしゃると伺いまして、もし宜しければ、1 週間ほど拝借したいと思っております。宜しくお願いいたします。

（JP, YNU タスク①, J022）

（109） 【面識のない先生へのメール】
そこで、友達から先生の研究室にあると聞きまして、失礼ですが、お借りできませんか。
（Cf. お借りできないでしょうか）

（CN, YNU タスク①, C040）

最後に「主張・助言」の例を見る。「婉曲疑問」のダロウは「主張・助言」を表す表現と組み合わせることによって、書き手の「主張・助言」を和らげる働きがある。上に提示した図 24 から、「主張・助言」の意図で発せられた場合、CN による件数は JP より特に少ないことがわかった。その原因を探るために、「婉曲疑問」のダロウの前接形式を図 25 にまとめる。

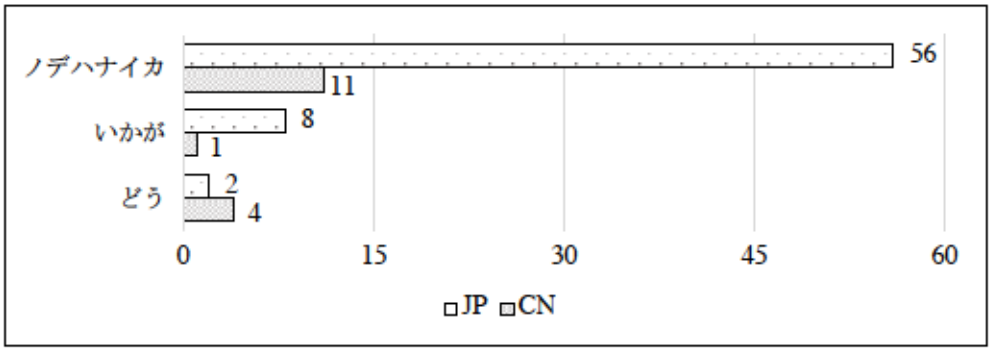

図 25 「主張・助言」の場合の前接形式

「主張・助言」の場合、ノデハナイカが前接する用例がもっとも多い。（110）はその例である。また「～いかが＋ダロウ」「～どう＋ダロウ」の組み合わせも見られる。CN による「主張・助言」の使用が少ない理由として、「主張・助言」を述べる際、そもそもノデハナイカの使用が少ないことがあげられる。ノデハナイカの代わりに、CN が主張を述べる際には、「～と思う」を多用する傾向が見られる。また、CN はノデハナイカを使用しても、「婉曲疑問」のダロウと組み合わせて使用することも少ない[16]。

[16] 今回の調査範囲内に、CN と JP によるノデハナイカの用例は 41 件と 131 件ある。そのうち、「婉曲疑問」のダロウと組み合わせたのはそれぞれ 5（12.2%）と 44 件（33.6%）である。

（110） これは決して比喩ではなく、工場から出た空気中のちりが実際に星を瞬かせるのです。きれいに見える星も良いものですが、瞬く星というのも逆に珍しいのではないでしょうか。

（JP, JCK「説明文」, j18－1）

また、「主張・助言」を述べる際、JP は「～いかが＋ダロウ」をよく使用するが、CN の用例にはそれも少ない。（111）のように「お勧めしたいと思います」によって助言する例や、助言形式を使わず、（112）のように「～てください」などの依頼形式を使う例が見られる。

（111） まず、観光スポットについて、一つは揚子江の三峡あたりをお勧めしたいと思います。

（CN, YNU タスク⑦, C048）

（112） 「八達嶺」というのは、「万里の長城」の一部です。ペッキンから一番近いから人気がかなりあります。もし興味があれば、是非、いってみてください。

（CN, YNU タスク⑦, C045）

4.4.3 「疑念」のダロウのまとめ

本節では、JP と対照しながら CN による書き言葉における「疑念」のダロウの使用実態を調査した。その結果、CN の使用における以下のような問題点が明らかになった。

まず、CN では問題提起の使用が少ない。論理的な文章におけるダロウの働きについての理解が不足であると言える。「疑念」のダロウを指導する際に、文レベルで意味用法を説明するだけでは不十分であり、文章の構造における重要性も言及することが望ましい。

また、CN では間接的に主張を表すダロウの使用が少ない。その代わりに作文では直接相手に問いかけるような疑問文を使う。これは中国語では疑問文をそのまま疑いとして使うことができるという母語の影響に関連していると思われる。

さらに、CN では「主張・助言」を婉曲にするためのダロウの使用は少ない。原因として、CN は「主張・助言」を述べる際に、より婉曲的な表現を使用する意識が薄いことと、ダロウとノデハナイカなどの表現との共起についての習得がまだ不十分であることがあげられる。

4.5 書き言葉における「婉曲」のダロウ

本節では、CN による書き言葉における「婉曲」のダロウの使用実態について、タスク別の出現状況および前接形式から、JP と対照しながら考察する。

4.5.1 「婉曲」のダロウのタスク別の出現状況

CN と JP による「婉曲」のダロウの件数にも大きな差が見られ、CN による件数は少な

く、JP の 1／3 にすぎない。一方、CN による合計件数は少ないにもかかわらず、タスク⑨と⑪においては、CN は JP より明らかに頻繁にダロウを使用している。では、CN が JP より「婉曲」のダロウを多用するのはどのような場合だろうか。タスク⑨「広報誌で国の料理を紹介する」における「婉曲」のダロウは（113）のように、料理の作り方を説明する際に用いられている。また、タスク⑪「友人に早期英語教育について意見を述べる」では、CN は（114）のように主張を述べる際に「婉曲」のダロウを使っている。

（113） お湯が沸いたら、準備した好みの肉や野菜などを入れます。お好みでえびや魚などもいいでしょう。四川料理特製のカラシがこの料理のポイントでしょう。「火鍋」は冬でも夏でも楽める人気料理なので、ぜひ本番の「四川火鍋」をためしてください。

（CN, YNU タスク⑨, C033）

（114） それを第一の目的に簡単であるものの、長期的に見たら、英語勉強の生涯に有意義でしょう。

（CN, YNU タスク⑪, C042）

しかし、JP はこれらの文脈に「婉曲」のダロウをほぼ使わない。2.5 で述べたように、ダロウに主観性の強さや独断的なニュアンスを抑えるという表現効果があるが、「聞き手に伝えるという意図を本来的には持っていない」（安達 1997: 93）という伝達的側面の特徴もある。（113）（114）は文法的に正しい文であるが、（113）の場合後文脈における「～てください」のような行為要求表現から、対人的に伝達する意図が読み取れる。また、（114）は仲の良い友達からのメールへの返事であり、対人的に伝達する意図は強い。そのため、これらの文脈に「婉曲」のダロウは不適切になると考えられる。CN によるこのような使用は、「婉曲」のダロウのニュアンスに対する理解が不十分だからであろう。

4.5.2 「婉曲」のダロウの前接形式

「婉曲」のダロウの前接形式を見れば、JP では（115）のような、「と言える／言ってもいい」がもっとも多く、20 件ある。しかし、CN の場合、「と言える／言ってもいい」の前接が 3 件しかない。「と言える／言ってもいい＋ダロウ」の使用が少ないことは、CN による「婉曲」のダロウの件数が少ないことの原因の 1 つと言える。

（115） この様に、晩婚化は人生での選択肢の増加と結婚を巡る事情の変化が相互に影響しつつゆっくり進んでいったと言えるでしょう。

（JP, JCK「意見文」, j21－2）

JP による「と言える／言ってもいい＋ダロウ」の用例は JCK に集中している。JCK におけるすべての「と言える／言ってもいい」を取り出して見ると、JP では 58 件あり、そ

のうちの 19 件（32.8%）はダロウに前接している。一方、CN では 7 件のみあり、ダロウに前接するものは 1 件もない。つまり、そもそも CN による「と言える／言ってもいい」の使用は JP より著しく少ない。その上で、「と言える／言ってもいい」と「婉曲」のダロウをいっしょに使用する意識も薄い。その結果、「と言える／言ってもいい＋ダロウ」の使用が少なくなったのだろう。

また、JP による「婉曲」のダロウの 11 件は、「必要／重要／大事」のような重要性を評価する表現に後接するが、CN の用例においてはそれは 1 件のみである。（116）と（117）の比較からわかるように、同じ「重要」であるという意見を述べる際に、JP はダロウによって婉曲的に主張や評価を述べているのに対して、CN はダロウを使わずに裸の形式を使用する傾向が見られる。この場合、ダロウを使わなくても文法的に間違っていないが、主張が強くなり、独断的なニュアンスになる恐れがある。特に、（117）のように、「晩婚意識も必要だ」「今後の生活にとっても重要だ」のように連続的に断定的な意見評価を述べると、独断的なニュアンスになりやすいだろう。

（116） さらに、先に挙げたように、晩婚化の進む原因に育児と仕事の両立が難しいことがある。そのため、託児所や保育園、ベビーシッターなどの施設を整備することも重要であろう。

（JP, JCK「意見文」, j01－2）

（117） 個人にとって、晩婚意識も必要だ。年齢の増えるにつれて、時間の重要性や自分の重要がはっきりしていく。どうすれば自分が幸福できるのを分かるから、今後の生活にとっても重要だ。

（CN, JCK「意見文」, c31－2）

JP による「必要／重要／大事＋ダロウ」の用例も JCK に集中している。JCK におけるすべての文末に現れる「必要／重要／大事」を取り出してみると、JP では 19 件あり、そのうちの 11 件（57.9%）がダロウを後接する。一方、CN では「必要／重要／大事」が 38 件あるが、ダロウを後接するのは 1 件（2.6%）のみである。つまり、CN は重要性を評価する表現に「婉曲」のダロウを付加することで主張を控えめにする意識が足りないと言えよう。

4.5.3 「婉曲」のダロウのまとめ

本節では、JP と対照しながら CN による書き言葉における「婉曲」のダロウの使用実態を調査した。その結果、CN の使用における以下のような問題点が明らかになった。

まず、対人的で、強い伝達する意図がある文脈においても、CN は「婉曲」のダロウを使用することである。CN に指導する際に、「婉曲」のダロウのニュアンスおよび使用場面の指導が不可欠である。

また、CN では「と言える／言ってもいい＋ダロウ」、「必要／重要／大事＋ダロウ」の

使用が少ない。「婉曲」のダロウを付加することで主張を控えめにする意識が足りないことが原因であると考えられるが、「と言える／言ってもいい」の使用が少ないこととも関連している。そのため、日本語教育では、「と言える／言ってもいい」の指導を重視した上で、「と言える／言ってもいい＋ダロウ」、「必要／重要／大事＋ダロウ」などをかたまりとして提出することが望ましい。

4.6 まとめ

本節では、YNU と JCK を利用して、CN による書き言葉におけるダロウの使用実態について、用法別に考察を行った。JP との比較から、以下のことがわかった。

A. 「推量」のダロウ：

①. 読み手へ伝達する意図が明確である場合でも、CN は「言い切り」の形を多用する。これは、「推量」のダロウの伝達的側面の特徴に対する認識が不十分からであるため、指導が必要である。

②. 「ノダロウ」の非用は大きな問題であり、「推量内容＋既知事態＋ノダロウ」のような＜事情推量 1＞は特に困難である。指導の際に、「のだ」についての説明を適宜に繰り返し、＜事情推量 2＞、＜事情推量 1＞の順に指導し、＜事情推量 1＞に重点をおいて説明したほうがよい。

③. 譲歩および理由を述べる際のダロウの使用が少ない。「ダロウ＋が／けれども」「ダロウ＋から／し」は文章の展開に論理性と説得力を加える効果があり、上級段階で扱うとよい。

B. 「疑念」のダロウ

①. 問題提起としての使用が少ない。指導の際に、文レベルでの説明だけでは不十分であり、文章の構造におけるダロウの重要性も言及するとよい。

②. 間接的に主張を表すダロウの使用が少ない。その代わりに作文では直接相手に問いかけるような疑問文を使う。これは、中国語で疑問文はそのまま疑いを表せるという母語の影響に関連しているため、重点をおいて指導する必要がある。

③. 「主張・助言」を婉曲的にするという意図での使用が少ない。その原因として、「主張・助言」を述べる際に、より婉曲的な表現を使用する意識が薄いことと、「疑念」のダロウとノデハナイカなどの表現との共起についての習得が不十分であることがあげられる。

C. 「婉曲」のダロウ

①. 聞き手へ伝達する意図が明確である場合でも、「婉曲」のダロウを使用する。CN に指導する際に、「婉曲」のダロウのニュアンスおよび使用場面の指導が不可欠である。

②. 「と言える／言ってもいい」、「必要／重要／大事」に後接するダロウの使用が少ない。「婉曲」のダロウの付加で主張を控えめにする意識が足りないことが原因と考えら

れるが、「と言える／言ってもいい」の使用の少なさとも関連している。そのため、日本語教育では、「と言える／言ってもいい」の指導を重視した上で、「と言える／言ってもいい＋ダロウ」、「必要／重要／大事＋ダロウ」をかたまりとして提出することは望ましい。

5. 中国語話者によるダロウの使用実態－話し言葉

本節では、JP と対照しながら、CN による話し言葉におけるダロウの使用実態について調査する。書き言葉と同じように、調査対象者は中級以上に達している CN に限定する。また、調査するデータは「独話」と「対話」からなる。本節の構成は以下のとおりである。5.1 で調査の概要および結果を述べる。5.2 と 5.3 でそれぞれ「独話」と「対話」におけるダロウの使用実態について、実例に基づいて考察を行う。5.4 で考察の結果をまとめる。

5.1 調査の概要および結果

本論文では、CN による「独話」におけるダロウの使用実態を調査するにあたって、発話対照 DB の「スピーチ」における中級以上に達している 16 名の CN[17]のデータを調査対象とする。「スピーチ」は、あらかじめ指定されたテーマに基づき、学習者が「何も見ないで」話をするというタスクである。学習者ひとりにつき 4 課題を提示し、各課題につき目安として「3 分程度」で発話している（宇佐美他 2004: 7）。課題の内容は以下のとおりである。また、比較のために、同じ課題で発話した 10 名の JP[18]のデータも調査する。

【sp10】: あなたの国の行事やお祭りなどをひとつ取り上げ、それがどのようなものか説明してください。

【sp11】: 今度生まれるときは、男性がいいですか、女性がいいですか。理由を挙げて、あなた自身の考えを話してください。

【sp12】: 日本語（外国語）をより早く、効率的に勉強するために、どのような工夫をするといいと思いますか。あなた自身の経験も挙げながら、これから日本語（外国語）を勉強しようとする人に提案をしてあげてください。

【sp13】: あなたの家族の中に、「タバコが嫌いで、自分の周りでは誰にもタバコを吸ってもらいたくない」と思っている人、「タバコが好きで、リラックスするためにはタバコを吸うことがぜひ必要だ」と思っている人の両方がいるとします。家族の中でこのふたりがうまくやっていくためには、どうすればいいと思いますか。具体的な解決策の提案をしてください。

以上の調査範囲内のデータから、ダロウの用例を手作業で抽出し、その結果を表 13 に

---

[17]SPOT 点数が 56 点以上であり、調査対象とする CN の ID は cn050、cn051、cn052、cn053、cn054、cn055、cn058、cn059、cn060、cn062、cn063、cn064、cn065、cn066、cn067、cn069 である。

[18] 調査対象とする JP の ID は jp35、jp38、jp42、jp45、jp46、jp47、jp48、jp49、jp50、jp51 である。

示す。合計で見れば、JP は 1 発話につき 0.5 件のダロウを使用している。その頻度は CN の 3.5 倍以上である。CN による「独話」における使用実態については、5.2 で考察する。

表 13 「独話」におけるダロウの件数

話者＼課題	sp10	sp11	sp12	sp13	合計
CN（64 発話）	1（0.06）	3（0.19）	3（0.19）	2（0.13）	9（0.14）
JP（40 発話）	3（0.30）	1（0.10）	8（0.80）	6（0.60）	18（0.50）

（()内は 1 発話あたりの件数）

また、「対話」のデータは「インタビュー」と「ロールプレイ」からなる。「インタビュー」については、I－JAS の「インタビュー」における中級以上に達している 197 名の CN[19] のデータ 44.2 万字および 50 名の JP のデータ 20.2 万字を調査対象とする。迫田他（2016: 99）によれば、I－JAS の「インタビュー」は学習者と調査実施者が自然な会話を 30 分程度行うものである。内容はある程度統一された話題を設定し、「ウォーミングアップ」「現在のことを聞く」「過去の体験を聞く」「未来のことを聞く、意見陳述」「クールダウン」という流れで行われた。また、「ロールプレイ」については、I－JAS の「ロールプレイ 2」おける中級以上に達している 197 名の CN のデータ 3.8 万字、50 名の JP のデータ 1.1 万字および、発話対照 DB の「ロールプレイ 6」における中級以上に達している 16 名の CN のデータ 0.6 万字、10 名の JP のデータ 0.8 万字を調査対象とする。ロールプレイの内容は以下のとおりである。

【RP2】あなたは、日本料理店でアルバイトをしています。接客スタッフとして注文を取ったり、料理を運んだりしています。店長さんから、「料理を作る人が一人やめたので、来月から料理を作る仕事を担当してほしい」と言われました。しかし、あなたは料理は苦手だし、日本人と話せる仕事がしたいので、この話を断りたいと思いました。店長に、料理の仕事の話をじょうずに断って、今の仕事を続けられるように話してください。

【RP6】＜ロールカード A＞
来週の水曜日は先生の誕生日です。それで、なにかいいプレゼントを贈ろうと思います。あなたは、プレゼントを一人で贈るより、ほかの友達と一緒に贈ったほうがいいと思っています。そこで友達のところに行って、一緒にプレゼントを贈ろうと誘い、どんなプレゼントがいいか、相談して決めてください。
あなたは、プレゼントはあとにずっと残るものがいいと思っています。

[19] I－JAS に計 200 名の CN のデータを収録しているが、中級以下であるため調査対象から除外した 3 名の CN の ID は、CCS21、CCM53、CCH49 である。

＜ロールカード B＞

友達が訪ねてきて、来週の水曜日は先生の誕生日なので、一緒にプレゼントを贈ろうと誘いました。あなたも、それはとてもいいことだと思いました。そこで、友達と相談して、どんなプレゼントにするか決めてください。あなたは、プレゼントには先生の好きな花か食べ物がいいと思っています。

I－JAS におけるデータについては、中納言 2.4.5 を使用し、短単位検索を行う。発話対照 DB については、ダロウの用例を手作業で抽出する。結果を表 14 に示す。合計から見れば、CN によるダロウの 1 万字あたりの件数は JP より著しく少ない。「対話」における使用実態については、5.3 で考察する。

表 14 「対話」におけるダロウの件数

課題／話者	インタビュー	ロールプレイ		合計
		RP2	RP6	
CN	120 (2.7)	38 (10.0)	7 (11.7)	165 (3.4)
JP	487 (24.1)	16 (14.5)	6 (7.5)	506 (22.9)

(() 内は 1 万字あたりの件数)

5.2 「独話」におけるダロウの使用実態

「独話」において、JP は CN の 3.5 倍の頻度でダロウを使用している。特に「sp12」「sp13」における差が著しい。その原因を探るために、まず、JP がどのような発話意図でダロウのどの用法を使用しているのかを明確にする必要がある。それを踏まえて、同じ場面において、CN がどのように発話しているのかを考察すれば、使用の少ない原因が見えてくるだろう。そこで、以下ではまず「sp12」「sp13」における JP による使用を見る。

「sp12」「sp13」における JP による 14 件のうち、「推量」用法が 7 件あり、すべて「が／けれども」「から／し」のような接続形式を後接する。特に（118）のような、「けれども」が後接し、譲歩を表す用例が多い。また、「疑念」用法が 5 件あり、すべて（119）のようなノデハナイカと共起したものである。

（118） 例えば日本語には百害あって一利無しという言葉があります。たばこが好きで吸っている人にとって、そのたばこは一利はあるでしょうけれども、たばこが嫌いで人の煙さえ我慢できない人にとっては、それは本当に百害そのものです。

（JP, 発話対照 DB sp13, jp038）

（119） できることなら、現地に行って現地の言葉に触れる。それが一番良い勉強なのではないでしょうか。

（JP, 発話対照 DB sp12, jp045）

一方、CN による使用に目を向けると、「推量」の場合、ダロウに接続形式を後接する譲歩の用例は見られない。これは 4.2 で述べた書き言葉の場合と同じ傾向を示している。譲歩に関する指導の重要性は、書き言葉については先行研究に指摘されているが、話し言葉について言及した研究はほぼない。発表、スピーチなどの「独話」の場面でも、説得力のある論理的な発話が求められるため、「たしかに～でしょうけれども、～」のような譲歩構造の指導も重要であろう。また、CN による「疑念」の使用も JP より著しく少なく、1 件のみである。それは、CN によるノデハナイカの使用が少ないため、それと共起するダロウの使用も少なくなったのであると思われる。

5.3 「対話」におけるダロウの使用実態

「対話」における 1 万字あたりの件数から見れば、JP は CN の約 7 倍の頻度でダロウを使用している。また、用法別に見ると、図 26 からわかるように、CN による「推量」と「疑念」用法の使用は JP より著しく少ないが、「確認」の使用は JP よりやや多い。以下では、件数が比較的多い「推量」「確認」「疑念」をそれぞれ見ていく。

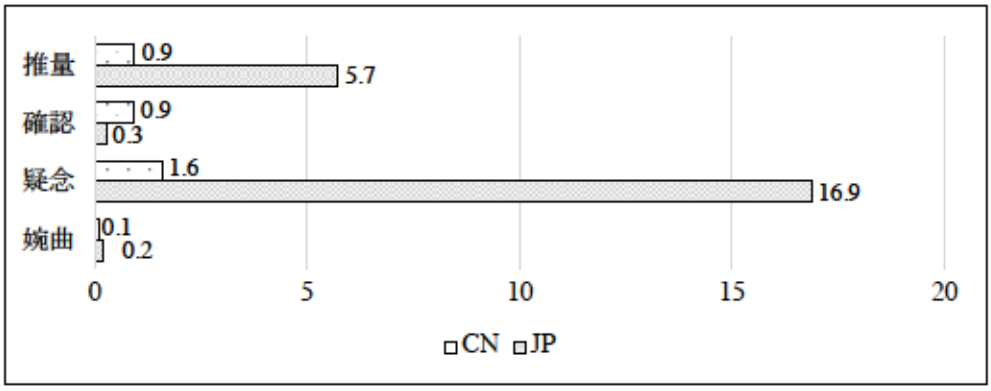

図 26 ダロウの用法別の出現状況（1 万字あたり）

5.3.1 「推量」

CN による「推量」のダロウの使用について、後接形式、応答文としての使用、および出現した話題という 3 つの視点から見ていく。

3.2 では、JP による使用実態の調査から、話し言葉において「推量」のダロウは「言い切り」での使用が少ないことがわかった。では、CN による使用にも同じ傾向が見られるのだろうか。「推量」のダロウの後接形式を示している図 27 から、そうではないことがわかる。CN の用例のうち「言い切り」が 7 割以上も占めており、その割合は JP より著しく高い。

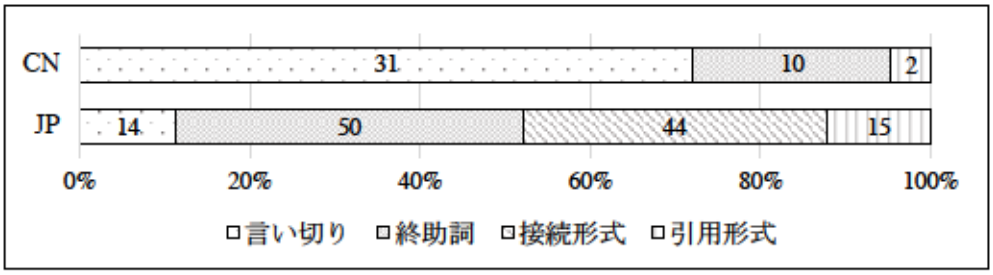

図 27 「推量」のダロウの後接形式

たとえば、(120) におけるダロウの文は相手への反論である。この場合、自分の意見を相手に伝える意図は強いと思われる。しかし、ダロウによって言い切ると、その意図は不明確になり、「当該事態が不確かであるにも関わらず、一方的な断定を行っているというニュアンスをもってしまう」(安達 1997:93) だろう。

(120) CCM15：そんなにお金がもらえない
C　　：そう、でもたくさん時間ありますよね、例えばフリーターみたいだったら、あのじ
CCM15：そういう、そういう事は無いでしょう
C　　：えそう？

(CN, I－JAS, CCH02－I)

さらに、「言い切り以外」の詳細を見ると、JP では終助詞「ね」「な」および、接続形式「が／けれども」「から／し」が後接する場合が多い。しかし、CN では終助詞の後接はあるが、接続形式の後接は見られない。

また、3.2 における JP の使用実態調査からわかったもう 1 つの事実は、「推量」のダロウは「そうでしょうね」の形で同意を示す際に応答文によく用いられるが、相手に要求される情報を提供する際にはあまり使われないことである。一方、CN の用例を見ると、43 件中の 19 件は応答文に現れ、すべて (121) のような不確実な情報を提供するための使用であり、同意を示す用例が 1 件もない。このようなダロウの使用は、独断的なニュアンスになりやすく、相手を不愉快にさせる恐れがある。これより、CN はダロウが「本来的に積極的に不確実であるという判断を表すのではない」(森山 1995: 178) ということに対する理解が不十分であると言えよう。

(121) C　　：そばを食べますか
CCH30：そばを食べました
C　　：なんか、意味がありますか？　どうして
CCH30：長寿を願って一
C　　：長寿を願って

CCH30：長寿を、願ってでしょ

（CN, I－JAS, CCH30－I）

次に、CN と JP による使用の有無に違いが生じた原因について考える。前述のように、「インタビュー」はある程度統一された話題で構成されている。図 28 に、ダロウが「インタビュー」のどの話題に出現しているのかを示す。

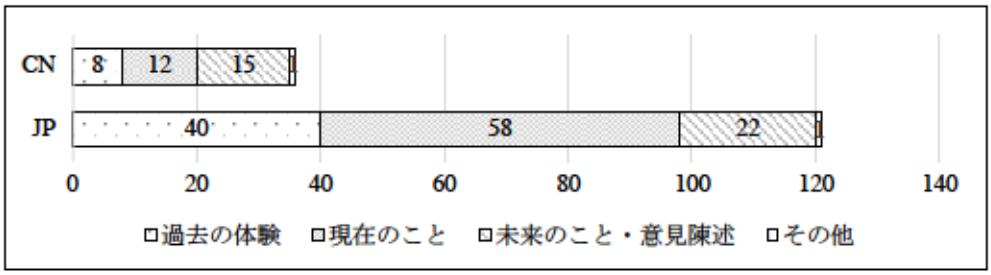

図 28 「インタビュー」にダロウが出現した話題

CN による「推量」のダロウの使用は JP に比べれば、「未来のこと・意見陳述」に集中しており、（122）のような「過去の経験」、および「現在のこと」が話題になる際に、CN の使用は JP より著しく少ない。そのため、CN はダロウが未来を表す形式だと誤解している可能性があるだろう。

（122） JJJ33：あの、ちょっと妹がいて、
C　：〈はい〉
JJJ33：一緒に、祝えるってゆう親の頭があって
C　：あ、あー
JJJ33：あんまり誕生日を、こうやって、もらってたんでしょうけど、自分の記憶の中にないんですよ

（JP, I－JAS, JJJ33－I）

姫野（1999）が指摘しているように、多くの日本語教科書が（123）のような対比でダロウを導入しているため、ダロウを未来を表す形式だと思う学習者が出てくるのである。それゆえ、日本語教師が気をつけるべき点として、ダロウは未来を表すテンス形式だと誤解させないことの重要性を強調している。

（123） きのうはいい天気でした。
きょうもいい天気です。
あしたもいい天気でしょう。

（姫野 1999: 12-13）

5.3.2 「確認」

ダロウの 4 用法のうち、「確認」は唯一 CN が JP より多用する用法である。3.3 で述べたように、「確認」のダロウは失礼さをともないやすい表現であり、特に距離を保った高い待遇レベルが要求される場面では許容度が低い。そのため、ダロウによって確認する際に、話し手と聞き手との親疎、上下関係が重要なポイントになると思われる。本論文で調査した課題のうち、初対面同士の対話である「インタビュー」は「疎」であり、店長からの仕事内容の変更依頼を断る「RP2」は「上」向けの発話である。そのため、「確認」のダロウの使用の制限が強いと思われる。

JP の件数を見ると、「インタビュー」には 5 件あるが、そのうち 4 件は引用文に現れる。また、「RP2」には 1 件もない。一方、CN の場合、「インタビュー」に直接聞き手に向けて「確認」することが多く見られ、31 件もある。また、「RP2」には 6 件ある。（124）と（125）はそれぞれ CN による「聞き手依存型」と「聞き手誘導型」の例である。（124）ではダロウは相手の評価を確認する際に使われている。（125）では、ダロウは店長からの依頼を断る理由を述べる際に使われている。「この仕事は誰でもできる」という認識を強引に相手に押し付けるニュアンスを帯びてしまい、無礼さを感じさせやすい。これらの場合に使われる「確認」のダロウは、相手の領域に踏み込んで、自分の判断を相手に押し付けるというニュアンスを持ちやすいため、なれなれしく感じられたり、相手に違和感を覚えさせたりする可能性がある。

（124） C　　：あー行ってもそれが綺麗に見れ見られるか見られないかわからないんですね
CCM10：あーはいはいはい
C　　：へー
CCM10：面白いでしょ？
C　　：そうですね、

（CN, I－JAS, CCM10－I）

（125） CCM15：手伝うことなんですか。
C　　：そうですよ。
CCM15：じゃあせでもー店長さん、〈んー〉手伝うことだったら、誰でもできるでしょ。

（CN, I－JAS, CCM15－RP2）

次に、確認する内容という側面から CN によるダロウの使用を見よう。3.3 で述べたとおり、JP の発話意図から見ると、「確認」のダロウは「陳述要求」の意図でよく使用されるが、「主張要求」と「感情要求」の意図で使用すると、聞き手の私的領域のより中心部に踏み込むことになり、制限が強い。しかし、CN による「聞き手依存型」の発話意図を見れば、上記（124）のような「主張要求」が多用され、半数を占めており、JP と大きく

異なることがわかる。

5.3.3 「疑念」

「疑念」は CN と JP による件数の差がもっとも大きい用法である。収集した用例を「疑い」と「婉曲疑問」に分けた結果を示している図 29 からわかるように、「疑い」における差が特に著しい。

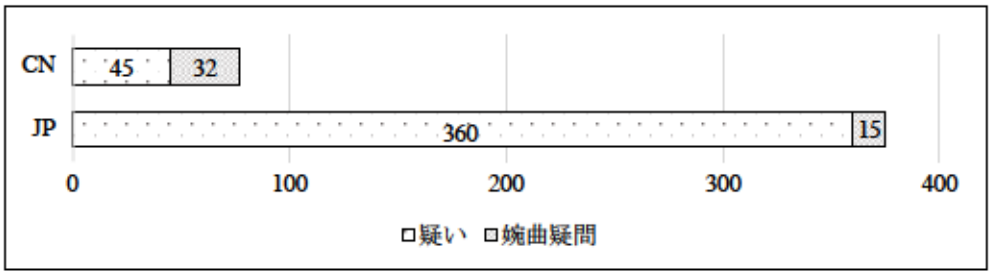

図 29 「疑念」のダロウの下位分類

「疑い」については、(126) のような話し手の思考過程を提示し、思考時間を作るために使われるものを「フィラー」とし、(127) のような答えがわからないということを間接的に表す用法を「応答回避」とし、(128) のような不確実な情報を提供する用法を「不確実表示」とする。このように分けた結果を図 30 に示す。

(126) 【フィラー】

C　　：他に何かありますか、小籠包の他に

CCM51：そうですねー、上海、何でしょうね、あんまり上海の一、なんか上海だけーの食べ物ってないんですね

(CN, I－JAS, CCM51－I)

(127) 【応答回避】

C　　：それで、ルフィは、海賊の王になれるんでしょうか？

CCS24：さあ〈笑〉、どうでしょうね

(CN, I－JAS, CCS24－I)

(128) 【不確実】

JJJ50：まあその、うん普通の、子供と違うところはその二点、

C　　：〈ふーん〉

JJJ50：ぐらいでしょうかね、まああとはごく普通の、日々、だったような気がしますね

(JP, I－JAS, JJJ50－I)

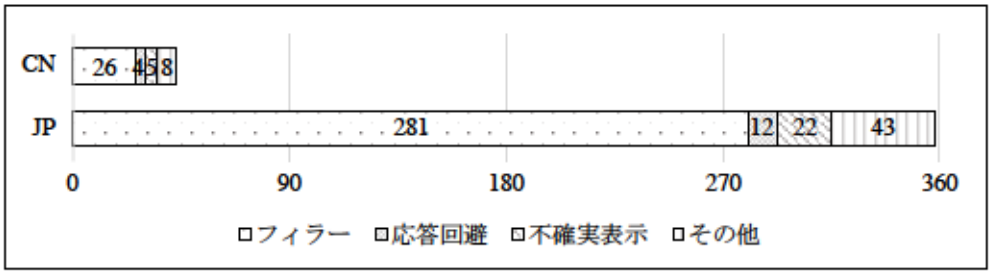

図 30 「疑い」の詳細

図 30 からわかるように、「フィラー」として使われる際に件数の差がもっとも著しい。CN では（129）のような不使用の例が多く見られる。（129）において、CCM10 は質問に対して思考する際に、「どちら？」によって時間を作っている。「どちらでしょう」に比べれば、「どちら？」のほうが反問的なニュアンスになり、聞き手に違和感を持たせ、コミュニケーションに支障をきたす可能性がある。また、CN による「応答回避」の使用も少ない。「フィラー」と「応答回避」として使われるダロウは、円滑なコミュニケーションを遂行するために重要な働きを果たすが、CN はまだこれらの用法に対する理解が不十分と言えよう。

（129） C　　：お金と時間はどちらがたくさんあったらいいですか？
CCM10：どちら？　時間でしょ？
C　　：時間ですか？　どうしてですか
（Cf. どちらでしょう。）
（CN, I－JAS, CCM10－I）

さらに、CN による「不確実表示」の使用が少ないことについて、考えられる 1 つの原因は「推量」との混同であると考えられる。5.3.1 で述べたように、CN は JP と異なって、よく応答文に不確実な情報を提供する意図で「推量」のダロウを使用する。（130）のように、「推量」のダロウを使用しても間違いとは言えない。ただし、「推量」は不確実な情報を提供する際には頻繁に使われず、積極的に不確実さを表すのではないため、もし CCM10 の発話に不確実であることを強調する意図があれば、「真面目さでしょうかね」のように、「推量」ではなく、「疑念」で答えたほうがよりふさわしいと思われる。

（130） CCM10：うん、その先生は、とっても厳しい先生です
C　　：はいはいはい、でもどうして好きなんですか？
CCM10：んー、真面目さでしょ、〈ふーん〉そして、学生にとってもいい
（CN, I－JAS, CCM10－I）
（Cf. んー、真面目さでしょうかね、）

次に、「婉曲疑問」の詳細を見る。「婉曲疑問」の場合、CN と JP による件数の差は大きくないが、「独話」と同じように、ノデハナイカに後接するダロウの使用は見られない。また、課題別に見ると、「婉曲疑問」の用例は「RP2」、つまり店長からの仕事内容の変更依頼を断るという課題に集中している。これらの用例から、CN と JP による「婉曲疑問」の使用に以下のような違いが伺える。まず、JP はよく（131）のように、「ちょっといいですか」、「時間ありますか」などの話題導入の質問に対して応答する際に、「婉曲疑問」を使い、「はい何でしょうか」で答えている。一方、CN はこのような文脈に「婉曲疑問」を使用せず、「はい」だけで答える傾向がある。

（131） C　　：JJ さんちょっと今時間あります？
　　JJJ35：はい何でしょうか。

（JP, I－JAS, JJJ35－RP2）

一方、「RP2」において CN は多用するが、JP はほぼ使用しないのは、（132）のような提案の文である。藤森（1994）は、代案提示の使用について、JP にはあまり用いられていなかったが、CN による使用頻度が高く、母語からの語用論的転移であると示唆している。この場合に使用されたダロウには問題がないが、代案を提示するという CN による依頼を断る際のストラテジーの特徴が見られる。

（132） CCM35：あのこの料理をお客様に出すことは、ちょっとなんか、んーお客様に、悪口される恐れも、あります、と思います、けど
　　C　　：〈うーん〉
　　CCM35：だから店長は、えーっと、十分その、料理の腕前を、えー腕前の高い人を、おー探したらどうでしょうか
　　C　　：うーん、そうですかー

（CN, I－JAS, CCM35－RP2）

5.4 まとめ

本節では、発話対照 DB と I－JAS を利用して、CN による話し言葉におけるダロウの使用実態について考察を行った。JP との比較から、以下のことがわかった。

A. 「推量」のダロウ：

①. 聞き手に伝達する意図がある場合でも、「言い切り」の形を多用する。

②. 応答文に不確実な情報を提供する意図でダロウを使用する。これにより、独断的なニュアンスになりやすいため、「推量」のダロウが積極的に不確実さを表すのではなく、不確実な情報を提供する際には頻繁に使われないということの指導が求められる。

③. 「が／けれども」が後接して譲歩を表す用例が少ない。「たしかに～でしょうけれども、～」のような譲歩構造の指導が必要である。

④. ダロウの使用は「未来のこと」についての話題に集中し、ダロウを未来を表す形式と誤解する可能性がある。それを防ぐために、適切な例でダロウを導入することを工夫すべきである。

B. 「確認」のダロウ：

①. 高い待遇レベルの要求される場面でも「確認」のダロウを使用する。

②. よく「主張要求」の意図で使用する。このような使用は相手に違和感を覚えさせる可能性があるため、使用制限についての指導が求められる。

C. 「疑念」のダロウ：

①. 「フィラー」と「応答回避」の表現としての使用が少ない。これらの用法は円滑なコミュニケーションを遂行するために重要な働きを果たすため、重点をおいて指導する必要がある。

②. 「不確実表示」としての使用が少ない。「推量」用法のニュアンスと比較することで、CN の理解を深めることができると思われる。

第 3 章 ノデハナイカについて

第 3 章では、JP と CN によるノデハナイカの使用実態について、書き言葉と話し言葉に分けて考察する。本章の構成は以下のとおりである。1.では関連する先行研究を概観し、本論文におけるノデハナイカの意味分類を規定する。2.と 3.では JP による書き言葉と話し言葉における使用実態をそれぞれ考察する。4.と 5.では CN による書き言葉と話し言葉における使用実態をそれぞれ考察する。

1. 先行研究および本論文の規定

1.では先行研究を整理し、その問題点を指摘する。その上で、本論文におけるノデハナイカの意味用法の分類を規定し、研究対象を述べる。具体的には、1.1 では先行研究とその問題点を整理する。1.2 では本論文におけるノデハナイカの意味用法の分類を規定する。1.3 では本章の研究対象を述べる。

1.1 先行研究およびその問題点

ノデハナイカに関する議論は、まずノデハナイカと否定疑問文の関係についての検討から始まる（田野村 1988、安達 1999、宮崎 2004 など）。それに基づいて、安達（1999）、日本語記述文法研究会（2003）、宮崎（2005）、藤城（2007）などはノデハナイカの意味用法に注目している。また、日本語学習者の手助けを目的にし、グループ・ジャマシイ（1998）、庵他（2001）、小西（2008）はノデハナイカの意味用法、ほかの形式との共起、出現形と使用環境の関連といった側面から考察を行っている。以下、ノデハナイカと否定疑問文の関係、ノデハナイカの意味用法、日本語教育の立場からの検討という 3 つの視点から、ノデハナイカに関する先行研究を概観する。

1.1.1 ノデハナイカと否定疑問文の関係

本論文で取り上げるノデハナイカは、(1) のような田野村（1988）で「第二類」の「ではないか」として提示された「推定」を表すものに属する。田野村（1988: 122）は第二類の「ではないか」を否定疑問文の一種として扱い、「話者は前の表現の内容を否定しておらず、むしろ、それを認める方に傾いている」と述べており、「【体言】ではないか$_2$」の体言には、名詞のほか、「用言＋の」も含まれるとしている。

(1)　（空模様を見て）雨でも降るんじゃないか？

（田野村 1988: 122）

これに対して、安達（1999）は「ノデハナイカ」という形式を 1 つの類型として取り出し、否定疑問文から区別している。「ノデハナイカ」は否定疑問文より情報提供文として文法化の進んだ形式であり、名詞に接続するときには「の」が落ちて「デハナイカ」とい

う形をとると述べている。これは田野村（1988）第二類の「ではないか」の外延と一致すると考えられる。

安達（1999）を踏まえて、宮崎（2004）はさらに「名詞述語文＋ではないか」と「名詞述語文＋なのではないか」を別扱いにし、否定疑問文とノデハナイカの関係を表 1 のように整理している。つまり、「雨ではないか」のような文について、安達（1999）はノデハナイカとして扱うのに対して、宮崎（2004）はそれを「否定疑問形式」に分類している。その理由として、宮崎（2004: 6）は「安達の否定疑問文を形式的に規定するなら、「述語となる単語の否定形式＋疑問助辞」という構成をもつ形式ということになる。したがって、動詞述語「降っていない＋か」、形容詞述語「寒くない＋か」と並行的に、名詞述語「雨ではない＋か」が成立してよいはずである。そもそも、否定疑問文が、動詞述語、形容詞述語にあって名詞述語にだけないというのは、奇妙である」と述べている。本論文で取り上げるノデハナイカの外延は宮崎（2004）と一致する。

表 1 否定疑問文とノデハナイカの関係（宮崎 2004：7）

	否定疑問形式	ノデハナイカ
動詞述語	降っていないか	降っているのではないか
形容詞述語	寒くないか	寒いのではないか
名詞述語	雨ではないか	雨なのではないか

1.1.2 ノデハナイカの意味用法

ノデハナイカには、聞き手から情報を引き出そうとする「情報要求」と、情報を聞き手に与える「情報提供」の機能があることは、先行研究で共通に指摘されている（国立国語研究所 1960、安達 1999、宮崎 2005、日本語記述文法研究会 2003、藤城 2007 など）。たとえば、国立国語研究所（1960）では、ノデハナイカを「判定要求の表現」と「判断への疑念の表現」の両方をあげている。また、安達（1999: 80-91）はノデハナイカが「情報要求」と「情報提供」として働くことを示す現象を以下のように指摘している。まず、ノデハナイカはイントネーションが基本的に上昇イントネーションであること、(2) のように応答文が現れること、そして（3）のように感情や感覚を表す形容詞の主体が一人称から二人称に転換されることといった事実から、「情報要求」の機能が確認されている。また、(4) のような応答文としての使用、(5) のような思考動詞の補文への生起、および（6）のような「たぶん」などのモダリティの副詞との共起といったことから、「情報提供」の機能も確認されている。

(2)　【情報要求】

「(略)。今日話したのは、何か食べる時、これ下さいってことだけ」

「それだけ？　じゃ、そのうちひとりごと言うようになるんじゃない？」

「うん、もう、なんか気がおかしいんじゃないかって思いますね。(略)」

(安達 1999: 81, 沢木耕太郎『彼らの流儀』)

(3)　【情報要求】

「ご気分でも悪いんじゃありませんか」

耳のすぐそばで女の声が聞こえたので、味岡は心臓に針を刺されたようになった。

(安達 1999: 82, 松本清張『状況曲線　上』)

(4)　【情報提供】

さとみ「こないのかな？」

万里子「誰？」

さとみ「うんー三上くんとか」

万里子「もう来ないんじゃない？」

さとみ「そうー」

(安達 1999: 84, 坂元裕二『TV 版シナリオ　東京ラブストーリー』)

(5)　【情報提供】

ケンプの舞台姿は悪くいえば、聴衆への媚であり、その温かさも厳しさの欠如から生じる表面的なものに過ぎなかったのではないかと思われる。

(安達 1999: 87, 宇野功芳『名演奏のクラシック』)

(6)　【情報提供】

中沢　若い作家で山田さんのように、そういうのに共感を持ってる趣味のいい人っている？

山田　たぶん、いないんじゃない？

(安達 1999: 89, 山田詠美・中沢新一『ファンダメンタルなふたり』)

一方、先行研究において、ノデハナイカの基本的な意味に関する見解は分かれている。安達（1999: 117）はノデハナイカの基本的な意味を「判断を下すための根拠の欠如」としており、「情報要求」機能が基本で、「情報提供」機能は派生としている。これに対して、宮崎（2005: 29）は「基本は話し手の疑いを表す」とし、「聞き手の存在を前提としない用法にこそノデハナイカの認識的な意味の本質が反映する」としている。

では、なぜこのような見解の違いが生じたのだろうか。藤城（2007）は、それはどのような形式をノデハナイカの基本と捉えるかによると解釈している。藤城(2007)によると、安達（1999）は話し言葉における「んじゃないか」、宮崎（2005）は書き言葉における「のではないか」をそれぞれ念頭に置いている可能性があるため、基本的な意味に関する見解が分かれているのである。つまり、ノデハナイカは実際の使用場面によって、違う意味を表すことができると言えるだろう。ここから、場面ごとにノデハナイカの使用実態を考察

することの重要性が伺える。

ノデハナイカは具体的にどのような用法があるのかについて、日本語記述文法研究会（2003）では「独話」と「対話」に分けて考察している。まず、ノデハナイカは「話し手の判断が未成立ながら一定の方向性をもっている」ことを表す形式であり、(7)のように、「独話」や心内発話で用いることができる。

(7)　僕はあのとき、もしかして、この人は嘘をついているんじゃないか、と思った。

（日本語記述文法研究会 2003: 179）

また、「対話」の場合、日本語記述文法研究会（2003）はノデハナイカをさらに以下の3つに分類している。

①. 話し手だけでなく聞き手も知ることのできないことを述べる場合には、推量的な用法になる。

(8)　A「佐藤も来ると思う？」
　　B「ああ、たぶん来るんじゃないか」

②. 話し手から聞き手にもちかけるような発話の場面には、話し手の推量判断を示しつつ、同時に、聞き手はどう思うかということをうかがっているニュアンスになる。

(9)　A「たぶん、明日は雨が降るんじゃない？」
　　B「そうだね。この分じゃ、降るかもしれないねえ」

③. 聞き手の知っていることを述べる場合には、推量的な意味に積極的な問いかけ性が加わり話し手の推量判断の妥当性を聞き手に確認する用法になる。

(10)　A「君は嘘をついているんじゃないか？」
　　B「いや、嘘なんてついてないよ」

（日本語記述文法研究会 2003: 180）

日本語記述文法研究会（2003）におけるノデハナイカを「独話」と「対話」に分けて分析するという捉え方は、ノデハナイカの意味用法を把握するには有効であると思われる。しかし、上記のような分類方法には、(11)におけるノデハナイカの用法を含めることができないという問題点がある。(11)において、ノデハナイカは応答文で「情報提供」として使われているが、前接の「出せばいい」は話し手の主観的な意見であり、話し手の認識は確かであると思われる。そのため、推量とは言えず、むしろ話し手自身の主観的な意見や評価を婉曲的に述べているのであろう。

（11）　F075：もうやめよっかなー。ほかんとこに（うん）出しちゃおうかな、もう。
F098：出せばいいんじゃない、うん。来ないんだったらね。
F075：やめますって言って。（うん、うん）

（対話，名大，097）

このようなノデハナイカの「婉曲」用法の存在は、三宅（1994）、安達（1999）、張（2004）などにも指摘されている。たとえば、安達（1999）では、ノデハナイカの情報提供機能が活用されることによって生じた以下の 2 つの現象を指摘している。1 つは、（12）のように、ノデハナイカには婉曲な情報提供によって丁寧さを生じさせるという効果がある。もう 1 つは、（13）のように、話し手の評価的な主張をやわらげる効果がある。

（12）　A：「失礼ですが、席を{a. お間違えではありませんか／b.？　お間違えですよ}
B：「あ、そうですか。それは失礼しました」

（13）　市子　せめてさァ、仕事みつけてから学校やめた方がいいんじゃない？　ずっと見つかんなかったらどうすンのよ。
ひらり　うん…。

（安達 1999: 93）

しかし、先行研究ではノデハナイカの「婉曲」用法を述べる際に、単に「推測」用法の付属的な用法であると捉えることが多い。そして、用法の提示にとどまり、文章や談話に現れた具体的な使用場面や発話機能について深く分析したものが少ない。本論文では、このような「婉曲」用法のノデハナイカは、日本語学習者の文章や談話の理解に大きな役割を果たしているため、重要な学習項目として位置づけるべきであると考え、「婉曲」用法を「推測」用法から取り出し、独立した用法として扱う。具体的な分類方法は 1.2 で述べる。

1.1.3 日本語教育の立場からの研究

日本語教育の立場からのいくつかの研究は、ノデハナイカのニュアンス、ほかの形式との共起などについて言及している。たとえば、庵他（2001）では、ノデハナイカは聞き手に尋ねる形をとっているため、話し手の主張を押し付けることなく、丁寧な表現となりうると述べている。グループ・ジャマシイ（1998）では、「のではないか」のほか、「のではないかとおもう」「のではないだろうか」といった組み合わせも項目として立てている。しかし、「ノデハナイカにはこういう用法がある」「この形式とよくいっしょに使われる」のような結論にとどまるのが一般的であり、使用場面と関連して分析するものは少ない。そして、ほぼ研究者の内省によるものであり、正しく使用実態を反映しているかは不明である。

小西（2008）は日本語教育の立場から、ノデハナイカのような実際の言語運用で多様な

出現形を持つ表現を記述する際に「どのような環境でどのような形式が用いられるのかという点に注意を向けなければならない」と指摘し、使用環境として「媒体(文字／音声)」「文中の出現位置（主節／従属節)」「場面」の 3 要素を設定し、各要素からノデハナイカの出現形を分析している。主な結論は以下のとおりである。

①. 媒体による出現形の異なり：文字言語では「のではないか」、音声言語では「んじゃないか」が多用される
②. 出現位置の異なり：文字言語では従属節、音声言語では主節に現れやすい
③. 場面と機能から：主節のノデハナイカはターン[1]を交替する確率が高い、従属節のノデハナイカはターンを維持する確率が高い

小西（2008）はノデハナイカの出現形と使用環境の関連に注目し、新たな研究の視点を提供したと言えよう。ただし、時代の制限もあり、小西（2008）が使用したコーパスは規模が小さいため、収集したノデハナイカの用例は 274 件に過ぎず、一般性があるとは言い難い。そのため、本論文では、大規模のコーパスを利用して、範囲を拡大して調査を行う。

1.2 本論文におけるノデハナイカの意味用法の規定

ノデハナイカの意味用法について、本論文では「話し手の認識」と「聞き手情報への配慮」という 2 つの視点から、表 2 のように「推測」「確認」「婉曲」の 3 用法を立てる。

表 2 本論文におけるノデハナイカの意味用法の分類

<table>
<tr><td colspan="3"></td><td colspan="2">聞き手情報への配慮</td></tr>
<tr><td colspan="3"></td><td>配慮しない</td><td>配慮する</td></tr>
<tr><td rowspan="3">話し手の認識</td><td rowspan="2">不確か</td><td>情報提供</td><td rowspan="2">A. 推測</td><td>－</td></tr>
<tr><td>情報要求</td><td>B. 確認－聞き手依存</td></tr>
<tr><td>確か</td><td>情報提供</td><td>C. 婉曲</td><td>－</td></tr>
</table>

「推測」用法の場合、話し手の認識が不確かであり、聞き手情報を配慮しない。「推測」の定義は、本論文では三宅（1994: 18）に従い、「話し手の想像の中で命題を、弱い見込みではあるが、真であると認識する」とする。「推測」には（14）のように情報を提供する機能もあれば、対話では（15）のように話し手の推測を聞き手に持ちかけて、聞き手にもそれについて考えさせるという間接的に情報を要求する機能もある。

[1] 小西（2008）は文中の出現位置による聞き手への働きかけの度合を示すために、ターン・テイキング（会話において、話し手と聞き手の役割が入れ替わること）に着目している。ターンを交替する割合が高いほうが働きかける機能が強い。

(14)　【推測】

だが、それだけだと、崩壊はなお続くのではないか。必要なのは、情報公開だ。

（文学以外，氏岡真弓 2001『学級崩壊』，朝日新聞社）

(15)　【推測】

M034：たとえば 9 時に起き、（<笑い>）起きたときに、（うん）そしたら 12 時ぐらいに寝たりしませんか？　眠っちゃったり。

M030：いや、しないと思う。（9 時に起きても）やっぱり 2 時ぐらいか 2 時ぐらいまで起きてるんじゃないかなあ。

M034：そうかな。3 日ぐらいそれで、あの 9 時に無理やり 9 時に起きて、（うん）でー、まあどんなに遅くなっても 9 時に起きてっていうこと繰り返してたら、ま、12 時ぐらいに眠くなるんじゃないですか？

M030：どうかなあ。

（対話，名大，095）

話し手が自身の認識が不確かであり、そして聞き手が確実な情報をもっていると想定し、聞き手から情報を引き出そうとするのが、「確認」用法である。従来の研究で「確認」には 2 種類があるという捉え方が定着している（奥田 1984、森山 1992、三宅 1996、宮崎 2005 など）。宮崎（2005: 112）の用語を用いると、1 つは、話し手自身の認識が不確かな状況で、確かな情報を有していると見込まれる聞き手の応答に依存してその情報の確定化を図る「聞き手依存型」である。もう 1 つは、話し手自身の認識が確かな状況で、聞き手の認識を誘導して共有情報の確立を図る「聞き手誘導型」である。ノデハナイカが表すのは「聞き手依存型」のみである。

(16)　【確認－聞き手依存】

F142：お歳暮。

F052：え？　もらったの？

F142：うん？

F052：もらったんじゃない？

F142：いや、もう、もらわないよ。

（対話，名大，055）

話し手の認識が確かである場合、ノデハナイカは「婉曲」用法となる。「婉曲」に関して、仁田（1992: 7）では、「話し手は言表事態の成立が真であると認識している」および「言表事態が未だ確認されていないところを有するものとして表現されている」という 2 つの要件を満たすような表現のことを指すとされている。本論文では仁田（1992）の定義に従い、「婉曲」用法をノデハナイカの独立した用法として扱う。

(17)　【婉曲】

それからそもそも日本語の話し言葉の文法としてこういったことは記述しておくべきなんではないかと思います

（独話, CSJ, 学会 A01M0462）

2. 日本語話者によるノデハナイカの使用実態ー書き言葉

本節では、書き言葉における JP によるノデハナイカの使用実態について調査を行う。以下、2.1 で調査方法および結果を述べる。2.2 で形式の面から書き言葉におけるノデハナイカの後接形式および共起語について考察する。2.3〜2.5 で意味の面から＜ジャンル＞別でノデハナイカの使用実態を考察する。2.6 で書き言葉についての考察をまとめる。

2.1 調査方法および結果

2.1.1 検索条件

本論文では、BCCWJ（NT 2.4）における「国会会議録」を除外した全データを対象に、検索アプリケーション「中納言」2.2.2.2 で短単位検索を行った。

簡略形

検索条件①　「ん／のでは」

・キー	語彙素＝の	品詞＝助詞－準体助詞	
後方共起（キーから 1 語）	語彙素＝だ	品詞＝助動詞	活用形＝連用形
後方共起（キーから 2 語）	語彙素＝は	品詞＝助詞	
後方共起（キーから 3 語）	語種＝記号[2]		

検索条件②　「ん／のじゃない」

・キー	語彙素＝の	品詞＝助詞－準体助詞
後方共起（キーから 1 語）	書字形出現形＝じゃ	
後方共起（キーから 2 語）	語彙素＝無い	
後方共起（キーから 3 語）	語種＝記号	

検索条件③　「ん／のではない」

・キー	語彙素＝の	品詞＝助詞－準体助詞	
後方共起（キーから 1 語）	語彙素＝だ	品詞＝助動詞	活用形＝連用形
後方共起（キーから 2 語）	語彙素＝は	品詞＝助詞	
後方共起（キーから 3 語）	語彙素＝無い	活用形＝終止形	
後方共起（キーから 4 語）	語種＝記号		

[2] 検索した結果、「記号」に「、」「。」「？」「!」「—」「,」「…」などがあった。これより、文末に出現した「簡略形」のノデハナイカの用例が拾えると思われる。

検索条件④　「ん／のじゃ」

・キー	語彙素＝の	品詞＝助詞－準体助詞
後方共起（キーから 1 語）	書字形出現形＝じゃ	
後方共起（キーから 2 語）	語種＝記号	

検索条件⑤「ん／のではありません」

・キー	語彙素＝の	品詞＝助詞－準体助詞	
後方共起（キーから 1 語）	語彙素＝だ	品詞＝助動詞	活用形＝連用形
後方共起（キーから 2 語）	語彙素＝は	品詞＝助詞	
後方共起（キーから 3 語）	語彙素＝有る	活用形＝連用形	
後方共起（キーから 4 語）	語彙素＝ます	活用形＝未然形	
後方共起（キーから 5 語）	語彙素＝ず	活用形＝終止形	
後方共起（キーから 6 語）	語種＝記号		

検索条件⑥「ん／のじゃありません」

・キー	語彙素＝の	品詞＝助詞－準体助詞
後方共起（キーから 1 語）	書字形出現形＝じゃ	
後方共起（キーから 2 語）	語彙素＝有る	活用形＝連用形
後方共起（キーから 3 語）	語彙素＝ます	活用形＝未然形
後方共起（キーから 4 語）	語彙素＝ず	活用形＝終止形
後方共起（キーから 5 語）	語種＝記号	

①によって得られた 3,657 件から、（18）のような「～のでは、～」の用例 805 件を排除し、残り 2,852 件の用例を分析対象とする。②によって得られた 1,561 件から、（19）のような否定を表す用例 474 件、（20）のような「のだ」＋第一類の「ではないか」（田野村 1988）の用例を 12 件排除し、残り 1,075 件を分析対象とする。③によって得られた 1,398 件から、否定を表す用例 1,393 件を排除し、残り 5 件を分析対象とする。④によって得た 1,194 件から（21）のような「のだ」の形態上のバリエーションの用例 1,101 件を排除し、残り 93 件を分析対象とする。⑤「ん／のではありません」によって得た 332 件から、否定を表す用例 331 件を排除し、残り 1 件を分析対象とする。⑥「ん／のじゃありません」によって得た 55 件から、否定を表す用例 40 件を排除し、残り 15 件を分析対象とする。以上合わせて計 4,043 件の簡略形の用例を分析対象とする。

（18）　モノを中国や東南アジアで生産して日本にもってくるのでは、生産リードタイムが長すぎる。

（文学以外，深谷紘一・片山修 2004『日本にしかできない技術がある』，PHP 研究所）

（19）　「わたしは…ほんとは、自分が悪いと思って謝ってるんじゃない。謝ってしま

えば、それで済むから。その方が楽だから、謝ってるだけ」

（文学，妹尾ゆふ子 2001『チェンジリング』，角川春樹事務所）

(20)　彼女は、猛烈に警官に食ってかかった。「そんなこと言ったって、ここに困った人がいるんじゃない。そんなことよりも今困っている人の方が優先でしっ！」。

（文学，諸橋泰樹 2001『ジェンダーの罠』，批評社）

(21)　わしもあれから他力念仏の教えを少しは学んでみたのじゃ。その結果、悪人正機をとなえる他力の思想には、ひとつまちがえば世間を惑わす危険なものがひそんでいると思うようになった。

（文学，五木寛之 2001『蓮如』，中央公論社）

一般形

検索条件⑦　「ん／のではないか」

・キー	語彙素＝の	品詞＝助詞－準体助詞	
後方共起（キーから 1 語）	語彙素＝だ	品詞＝助動詞	活用形＝連用形
後方共起（キーから 2 語）	語彙素＝は	品詞＝助詞	
後方共起（キーから 3 語）	語彙素＝無い		
後方共起（キーから 4 語）	語彙素＝か	品詞＝助詞－終助詞	

検索条件⑧　「ん／のじゃないか」

・キー	語彙素＝の	品詞＝助詞－準体助詞
後方共起（キーから 1 語）	書字形出現形＝じゃ	
後方共起（キーから 2 語）	語彙素＝無い	
後方共起（キーから 3 語）	語彙素＝か	品詞＝助詞－終助詞

検索条件⑨　「ん／のではないですか」

・キー	語彙素＝の	品詞＝助詞－準体助詞	
後方共起（キーから 1 語）	語彙素＝だ	品詞＝助動詞	活用形＝連用形
後方共起（キーから 2 語）	語彙素＝は	品詞＝助詞	
後方共起（キーから 3 語）	語彙素＝無い		
後方共起（キーから 5 語）	語彙素＝か	品詞＝助詞－終助詞	

検索条件⑩　「ん／のじゃないですか」

・キー	語彙素＝の	品詞＝助詞－準体助詞
後方共起（キーから 1 語）	書字形出現形＝じゃ	
後方共起（キーから 2 語）	語彙素＝無い	
後方共起（キーから 4 語）	語彙素＝か	品詞＝助詞－終助詞

検索条件⑪　「ん／のではありませんか」

・キー	語彙素＝の	品詞＝助詞－準体助詞	
後方共起（キーから 1 語）	語彙素＝だ	品詞＝助動詞	活用形＝連用形
後方共起（キーから 2 語）	語彙素＝は	品詞＝助詞	
後方共起（キーから 3 語）	語彙素＝有る	活用形＝連用形	
後方共起（キーから 4 語）	語彙素＝ます	活用形＝未然形	
後方共起（キーから 5 語）	語彙素＝ず	活用形＝終止形	
後方共起（キーから 6 語）	語彙素＝か	品詞＝助詞－終助詞	

検索条件⑫　「ん／のじゃありませんか」

・キー	語彙素＝の	品詞＝助詞－準体助詞
後方共起（キーから 1 語）	書字形出現形＝じゃ	
後方共起（キーから 2 語）	語彙素＝有る	活用形＝連用形
後方共起（キーから 3 語）	語彙素＝ます	活用形＝未然形
後方共起（キーから 4 語）	語彙素＝ず	活用形＝終止形
後方共起（キーから 5 語）	語彙素＝か	品詞＝助詞－終助詞

⑦によって得られた 9,216 件から、612 件の「のではなかろうか」の用例を除外し、残り 8,604 件を分析対象とする。また、⑧によって得られた 4,283 件から、46 件の「んじゃなかろうか」の用例を除外し、残り 4,237 件を分析対象とする。さらに、⑨によって得られた 4,961 件から、1,489 件の「ん／のではないだろうか」の用例および、2,818 件の「ん／のではないでしょうか」の用例を婉曲形として別扱いし、また、「ん／のではないのか」の用例を 147 件および「ん／のではなかったのか」の用例を 146 件排除し、残り 361 件を分析対象とする。⑩によって得られた 2,583 件から、100 件の「ん／のじゃないだろうか」の用例および、794 件の「んじゃないでしょうか」の用例を婉曲形として別扱いし、また、「んじゃないのか」の用例を 546 件および「んじゃなかったのか」の用例を 52 件排除し、残り 1,091 件を分析対象とする。⑪によって得られた 179 件から、「ん／のではありませぬか」の用例 7 件を排除し、残り 172 件を分析対象とする。⑫によって得られた 159 件を分析対象とする。以上のようにして得られた計 14,624 件の用例を「一般形」のノデハナイカの分析対象とする。

複合形

上述のような検索方法で、別扱いとした 1,489 件の⑬「ん／のではないだろうか」、100 件の「⑭ん／のじゃないだろうか」、2,818 件の⑮「ん／のではないでしょうか」、794 件の⑯「んじゃないでしょうか」、計 5,201 件複合形のノデハナイカの用例を分析対象とする。

2.1.2 検索結果

以上述べた検索条件によって収集した用例の形式別の件数を表 3 に示す。書き言葉において、ノデハナイカは「一般形」の件数がもっとも多い。特に、普通体である⑦「ん／のではないか」⑧「ん／のじゃないか」の件数が多い。一方、丁寧体である⑨「ん／のではないですか」⑪「ん／のではありませんか」⑫「ん／のじゃありませんか」の件数は少ない。また、「複合形」における⑮「ん／のではないでしょうか」と「簡略形」における①「ん／のでは」の件数も比較的多い。

表 3 書き言葉におけるノデハナイカの件数

形式	出現形	件数	
簡略形	**①ん／のでは**	**2,852**	4,041
	②ん／のじゃない	1,075	
	③ん／のではない	5	
	④ん／のじゃ	93	
	⑤ん／のではありません	1	
	⑥ん／のじゃありません	15	
一般形	**⑦ん／のではないか**	**8,604**	14,624
	⑧ん／のじゃないか	**4,237**	
	⑨ん／のではないですか	361	
	⑩ん／のじゃないですか	1,091	
	⑪ん／のではありませんか	172	
	⑫ん／のじゃありませんか	159	
複合形	⑬ん／のではないだろうか	1,489	5,201
	⑭ん／のじゃないだろうか	100	
	⑮ん／のではないでしょうか	**2,818**	
	⑯ん／のじゃないでしょうか	794	
計			23,866

また、表 4 に＜ジャンル＞別のノデハナイカの件数および 100 万語単位での件数を示す。「知恵袋」における出現頻度がほかのどの＜ジャンル＞よりも著しく高い。また、「文学」「雑誌」「文学以外」「ブログ」における頻度の比較的高い。一方、ノデハナイカは「法律」「白書」における出現頻度は極めて低い。

表 4 ＜ジャンル＞別のノデハナイカの件数と 100 万語単位の件数

＜ジャンル＞	総語数	件数	PMW
文学	20,139,268	5,482	**272**
文学以外	42,533,142	8,777	**206**
雑誌	4,444,492	985	**222**
新聞	1,370,233	231	169
白書	4,882,812	74	15
広報誌	3,755,161	126	34
法律	1,079,146	0	0
教科書	928,448	50	54
韻文	225,273	10	44
知恵袋	10,256,877	6,064	**591**
ブログ	10,194,143	2,067	**203**
計	99,808,995	23,866	239

さらに、ノデハナイカの出現頻度が高い「知恵袋」「文学」「雑誌」「文学以外」「ブログ」における、100 万語単位での形式別の出現状況を図 1 に示す。「知恵袋」以外の＜ジャンル＞では、ノデハナイカは主に「一般形」で使用されており、「簡略形」と「複合形」は少ない。「文学」「雑誌」「ブログ」において、「簡略形」と「複合形」はほぼ同じ頻度であるが、「文学以外」では「簡略形」はあまり用いられておらず、「複合形」のほうが多い。一方、ノデハナイカの出現頻度がもっとも高い「知恵袋」において、「簡略形」と「複合形」の使用はほかの＜ジャンル＞より著しく高い。

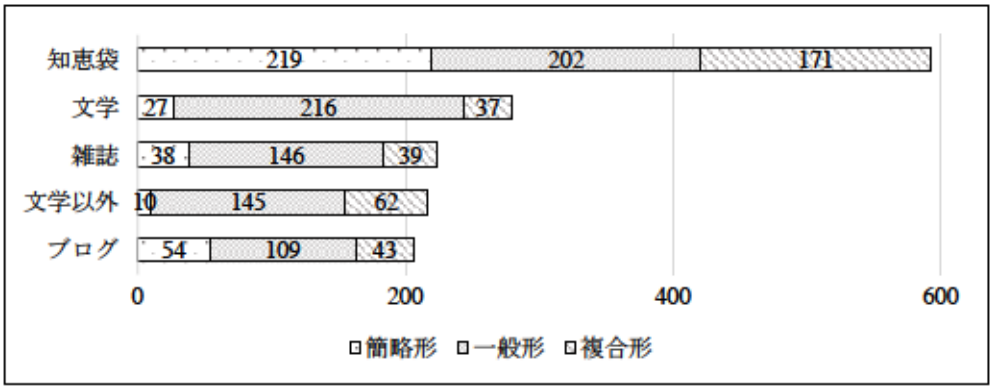

図 1 100 万語単位のノデハナイカの件数（形式別）

以下では、収集した 23,850 件のノデハナイカの用例から、ランダムにピックアップした 4,000 件のノデハナイカの用例を分析対象として考察を行う。

2.2 ノデハナイカの後接形式および共起語

2.2 では書き言葉におけるノデハナイカの使用実態について、形式の面からの考察を行う。2.2.1 ではノデハナイカの後接形式、2.2.2 ではノデハナイカの共起語を考察する。

2.2.1 ノデハナイカの後接形式

まず、ノデハナイカの各形式に後接形式の有無によって、「言い切り」と「言い切り以外」に分類した結果を図 2 に示す。

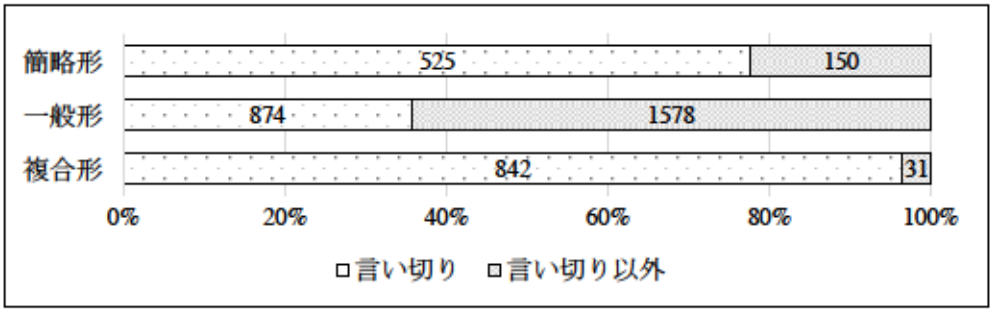

図 2 書き言葉におけるノデハナイカの後接形式

出現形別でノデハナイカの後接形式に大きな違いが見られる。まず、「簡略形」の約 8 割と「複合形」の 9 割以上は（22）（23）のような「言い切り」である。これに対して、「一般形」が「言い切り」の形で用いられるのは約 3 分の 1 のみであり、「言い切り以外」の形で使用される傾向がある。

（22） 問：びわ湖わんわん王国が来年 1 月で閉園するという話を聞いたことがあるのですが、本当ですか？
答：本当です犬達は　つくばワンワン王国に　行くとか？　関西からも　ちょっと行きにくい場所にあったし　リピーターも少なかったのでは？
（Yahoo!知恵袋, 2005）

（23） 医師は専門家として患者さんの自己決定のプロセスを支援することが重要なのではないでしょうか。
（文学以外, 大井賢一 2005『国民は医療になにを求めているか』, メディカルレビュー社）

さらに、「一般形」について、後接形式の出現状況をより詳しく見るために、図 3 に使用頻度の高い＜ジャンル＞における後接形式の出現状況を示す。どの＜ジャンル＞においても「言い切り以外」の形で使用される傾向があるが、特に「ブログ」と「文学以外」において、その傾向がより明確である。

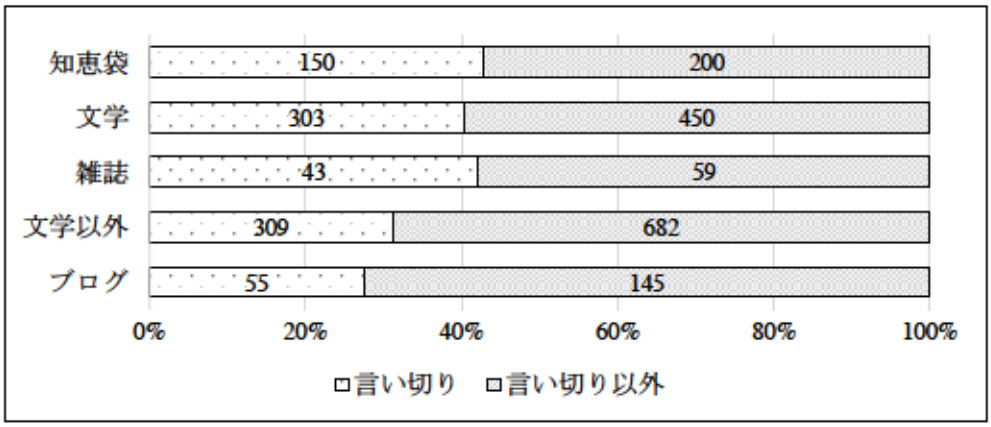

図 3 書き言葉における「一般形」のノデハナイカの後接形式

では、「言い切り以外」の場合、ノデハナイカにどのような形式が後接するのだろうか。その詳細を図 4 に示す。

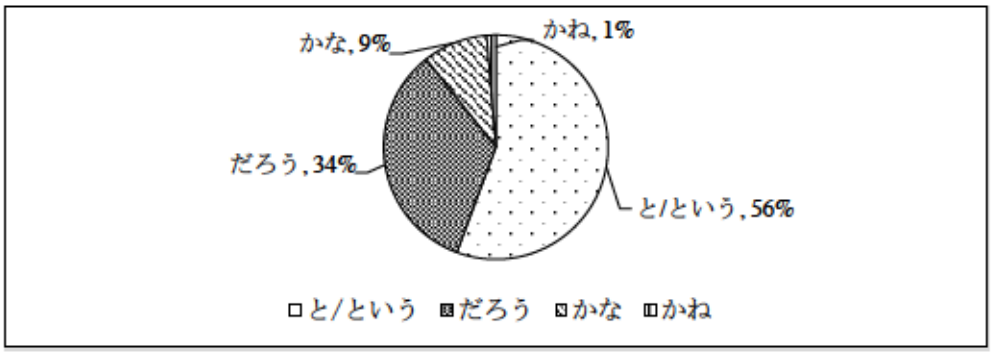

図 4 書き言葉におけるノデハナイカの後接形式の詳細

図 4 からわかるように、(24) のような「と／という」節[3]がノデハナイカに後接する用例が半数以上に達している。(24) において、「と」を後接することによって、ノデハナイカが思考動詞「思う」の補文に埋め込まれ、書き手の思考内容を表すことが明示される。

(24)　総合的に見ても、千九百八十五年頃の 2 食事が食塩も含めて最も健康的なのではないかと思われる。
（文学以外, 伊藤敬一 2001『減塩だけがよいわけではない！　』, 講談社）

また、「疑念」のダロウと「かな」のような疑いの形式もよくノデハナイカに後接し、合わせて 4 割以上である。宮崎（2005: 33）では、疑いの形式の後接が、ノデハナイカの「問いかけ性の希薄化といった面で働いている」と指摘している。(25) のるように、「かな」の後接によって、ノデハナイカが情報を要求しているのではなく、書き手の不確実な

[3] 「って／っていう」も含む。

推測を述べるのだということがより明確になる。

(25)　問：軽の中で安全な車種は何でしょうか？
　　答：安全な軽なんて、1台もないんじゃないかな。（後略）
（Yahoo!知恵袋, 2005）

2.2.2 ノデハナイカの共起語

表5にノデハナイカの共起語の上位5位を示す。ノデハナイカとよく共起するものには、思考動詞「思う／考える」、ネガティブな心理状態を表す「心配／不安／懸念／危惧」、そして直感的な感覚を表す「感じる／気がする」および「疑い」「推測」などがある。そのうち、思考動詞「思う／考える」がもっとも多く、全体の2割弱を占めている。つまり、(26)のようにノデハナイカは書き手の思考内容を述べる表現としてよく使われる。また、ノデハナイカは（27）のように話し手の「心配／不安／懸念／危惧」といったネガティブな心理状態を表す際にもよく使われる。

表 5 書き言葉におけるノデハナイカの共起語

順位	共起語	件数
1	思う／考える	702（17.6%）
2	心配／不安／懸念／危惧	138（3.5%）
3	感じる／気がする	65（1.6%）
4	疑い／疑念／疑問	58（1.5%）
5	推測／推量	27（0.7%）
TOP 5 のカバー率		24.9%

(26)　素材までうるさく言う気はないが、色あいだけでも、もう少し深味があってもいいんじゃないかと思う。
（文学以外，中野翠 1999『へなへな日記』，毎日新聞社）

(27)　その背後には、そうであればあるほどフロイトにのみ込まれ、食べられてしまうのではないかという不安が潜んでいたのである。
（文学以外，小此木啓吾 2002『フロイト思想のキーワード』，講談社）

2.3 「知恵袋」におけるノデハナイカ

まず、出現頻度がもっとも高い＜ジャンル＞である「知恵袋」において、ノデハナイカはどのように使われているのかについて考察する。「知恵袋」は、利用者同士が「質問・回答」の形で知識や知恵を教え合うサイトである。ランダムにピックアップした4,000件のノデハナイカの用例のうち、「知恵袋」における件数が1,017件あり、そのうちの約9割が「回答」に現れている。また、用法別で見ると、図5が示しているように、「知恵袋」

において、「質問」に現れるノデハナイカの 4 分の 3 は「推測」用法であり、「確認」と「婉曲」用法として使用されるのは多くない。一方、「回答」の場合、「確認」用法の用例が見られず、「推測」と「婉曲」が約半分ずつである。以下では、「知恵袋」におおけるノデハナイカについて、「質問」と「回答」における使用実態をそれぞれ考察していく。

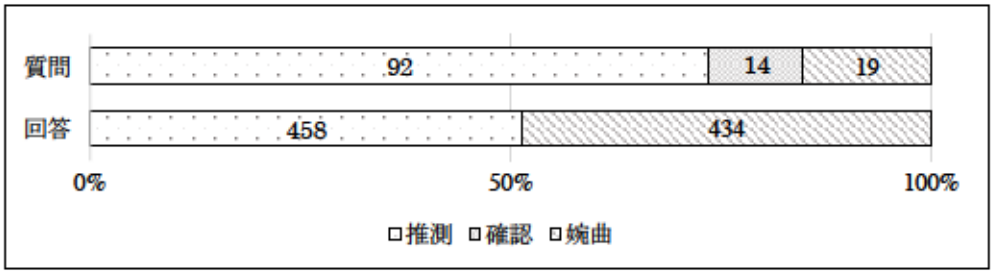

図 5 「知恵袋」におけるノデハナイカの用法

2.3.1 「知恵袋」の「質問」におけるノデハナイカ

「知恵袋」における質問者は、疑問に思うことについて問いかけたり、悩んでいることについて助けを求めたりするために質問するのである。つまり、基本的に情報を要求することが目的と言えよう。しかし、前述のように、「知恵袋」の「質問」において、ノデハナイカは（28）のような「確認」としての使用は多くない。すなわち、ノデハナイカには「情報要求」の機能があるものの、「知恵袋」に質問者が質問する際に、あまりノデハナイカの「確認」用法を使用しない。

（28） 問：犬や猫など動物は亡くなるのですか？ 死ぬんじゃないですか？
答：「亡くなる」と言うのは尊敬語ですから、動物はおろか自分の家族にも使いません。たとえば、「父が亡くなりました」と言うのは間違いです。
（Yahoo!知恵袋, 2005）

では、「知恵袋」の「質問」におけるノデハナイカは、どのように使われているのだろうか。（29）のように、質問者は質問する前に、自分の「不安」や「心配」に思うことを述べる際によくノデハナイカを用いるのである。前述したように、ノデハナイカとネガティブな心理状態を表す表現との共起は、全<ジャンル>で見るとその割合は 3.5%である。「知恵袋」の「質問」だけを見ると、その割合は 16%に達している。（29）を例とすると、質問者はまず恋人の家の家風について紹介し、そしてノデハナイカによって、「結婚してもうまくいかない」という自分の推測を述べ、不安に思うことを提示する。つまり、ノデハナイカは質問の背景を説明するための情報を提供するのである。その上で、最後に「ご意見お願いします」で情報を要求している。

（29） 問：2 年くらい付き合った彼がいるのですが、彼の家の家風というか、ご両親

ととてもなじめそうにありません。（中略）今からこんな風だと結婚してもうまくいかないのではないか？　不安になっています。ご意見お願いします。

（Yahoo!知恵袋, 2005）

2.3.2 「知恵袋」の「回答」におけるノデハナイカ

安達（1999: 85）は、応答文で使われることを、ノデハナイカが情報提供機能をもっていることの有力な根拠としている。「知恵袋」の「回答」におけるノデハナイカもそうであり、情報を提供するための「推測」と「婉曲」用法が使われている。

質問に対して回答者は確実な情報をもっていない場合、自分なりの推測を述べる際に「推測」のノデハナイカを用いている。その推測は、客観的な根拠に基づくものもあれば、回答者の経験あるいは想像などに基づくものもある。たとえば、（30）において、回答者は「竹簡に墨書していた」ことを推測の根拠として、推測の結果をノデハナイカで述べている。（31）の場合、回答者は「メールが届かない原因」について確実な情報をもっておらず、経験などから可能な原因を推測して、ノデハナイカによって述べている。また、（32）のように、回答者は「直接知っているわけではありません」、「想像です」と述べ、明確に情報をもっていないこと示した上で、ノデハナイカで推測している。

（30）　問：司馬遷は「史記」によって読者に何を伝えたかったのでしょうか。司馬遷は果たして「読者」を想定していたでしょうか？

答：（前略）当時は紙が発明されておらず、竹簡に墨書していたわけですから、大量の読者は有り得ず、内容からしても史官程度を想定していたのでは？

（Yahoo!知恵袋, 2005）

（31）　問：Yahoo アドレスから携帯電話にメールをしても、いくらやっても届かないアドレスがあるのですが、なぜでしょうか？

答：それは PC（または PC 経由）からのメールを拒否する設定をしているものに送っているのではないでしょうか？　ご本人に尋ねるのが一番早いと思いますけど。

（Yahoo!知恵袋, 2005）

（32）　問：アメリカ初の証券取引所は、フィラデルフィアでその一年後にニューヨークとのことですなぜ先にニューヨークにしなかったのでしょうか？

答：そのことについて直接知っているわけではありませんが、フィラデルフィアはアメリカ最初の首都で、独立宣言がされた場所です。想像ですが、当時のＮＹは今のようなものではなく、フィラデルフィアのほうが中心的な存在だったのではないでしょうか？

（Yahoo!知恵袋, 2005）

次に「回答」における「婉曲」のノデハナイカに目を向ける。表 6 に、「婉曲」のノデハナイカに前接する形式の上位 4 位[4]を示す。前接形式に「～いい」のような評価を表す表現が非常に多く、合わせて 6 割以上に達している。もっともよく前接するのは「てもいい」であり、2 割以上を占めている。また、「ば／たら／といい」「いい」「ほうがいい」もよくノデハナイカに前接する。

表 6 「知恵袋」の「回答」における「婉曲」のノデハナイカの前接形式

順位	前接形式	件数
1	てもいい	88（20.3%）
2	ば／たら／といい	73（16.8%）
3	いい	67（15.4%）
4	ほうがいい	48（11.1%）

これらの形式は「婉曲」用法のノデハナイカに前接し、「知恵袋」の「回答」において、主に回答者の「意見・評価」、あるいは「提案・助言」などを婉曲的に述べる際に使用されている。たとえば、(33) では質問に対して、回答者は「いいんじゃないでしょうか」と答え、「いい」という評価にノデハナイカをつけることによって、より婉曲的に回答している。(34) は「提案・助言」を述べる際に使われるノデハナイカの例である。

(33)　問：友人で、7 年前に購入した日産グロリアをいまだに「新車だから・・・」と言います。（中略）皆さん、どう思いますか？
答：まあいいんじゃないでしょうか。それだけ、車を大事にしているのでしょう。
（Yahoo!知恵袋, 2005）

(34)　問：（前略）メールで連絡頂いているのですが返信してもエラーで何回も戻ってきてしまいます。。◆
答：評価欄に書き込んでもいいのでは？　いずれにしろ、早く事情をわかってもらったほうがいいですね。
（Yahoo!知恵袋, 2005）

「知恵袋」におけるノデハナイカについて考察した結果は、以下のようにまとめることができる。まず、「質問」より「回答」のほうによく現れる。「質問」の場合、ノデハナイカは「情報要求」の「確認」用法よりも、「情報提供」の機能をもつ「推測」用法のほうが多く、特に質問の背景である質問者の悩みや心配に思うことなどを述べる際によく使われている。また、「回答」においても、ノデハナイカは「情報提供」として用いられて

[4] 「知恵袋」の「回答」における「婉曲」のノデハナイカの前接形式は 4 位までの形式に集中しており、5 位となる「ある」が 8 件のみある。

いる。「推測」用法は、回答者が確実な情報をもっていない場合に用いられている。「婉曲」用法は、よく「〜いい」の形式に後接し、回答者の「意見・評価」、および「提案・助言」を婉曲的に述べる際に用いられている。

2.4 「文学」におけるノデハナイカ

「文学」におけるノデハナイカは、地の文（51%）にも会話の文（49%）にも現れる。その割合はほぼ同じである。では、ノデハナイカは地の文と会話の文において、それぞれどのように使われているのだろうか。その用法別の出現状況を図 6 に示す。地の文では、9 割のノデハナイカは「推測」であり、残りの 1 割は「婉曲」用法である。会話の文においても、「推測」用法がもっとく多く、約 6 割である。また、「確認」用法も見られるが、他の用法に比べれば、頻繁には使われていない。

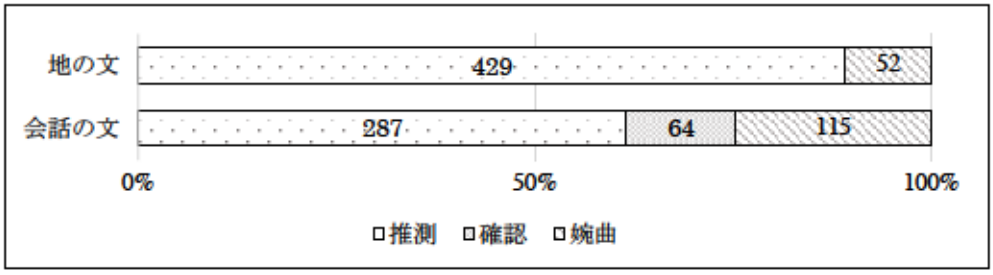

図 6 「文学」におけるノデハナイカの用法

2.4.1 「文学」における「推測」用法のノデハナイカ

まず、使用数のもっとも多い「推測」用法の用例をあげる。地の文において、ノデハナイカは（35）のように、よく登場人物の心内発話に現れ、心理状態や思考過程を描写するために用いられる。（35）では会話の文に次いで、登場人物である「ぼく」の心内発話に、どうして会話に「タメロを叩いた」のかについて自分の動機を推測する際に、ノデハナイカが使われている。また、件数は多くないが、心内発話以外にも「推測」用法の用例が見られる。（36）のように、「彼の泣いている様子」を描写する際にノデハナイカが使われている。

（35） 「心配しなくていいよ。変なことは考えてないから」ぼくは笑顔で両手を胸の前に掲げ、それから背中に回した。
「なんだよ、急になれなれしく。かえって怪しい」
「そんなことは…」
「つーか、何度言われりゃわかるんだよ。言葉づかいに気をつけろ。それと笑い」
「すみません」
自分は彼女に叱られることを期待して、わざとタメロを叩いたのではないかと、

そんな考えがふと頭をよぎった。

（文学，歌野晶午 2005『女王様と私』，角川書店）

（36）　長男と次男、相次ぐ息子たちの死に、彼は気が動転し立っていることさえも出来ず、膝を折るようにその場にひざまずくと、気でも狂ってしまったのではないかと思われるほど激しく泣きたてた。

（文学，木下寿孝 2004『負の迷路』，新風舎）

会話の文における「推測」には（37）（38）のような例がある。（37）におけるノデハナイカは応答文に出現し、話し手は「その前の状況」について確実な情報をもっていないが、情報提供のために自分の推測をノデハナイカによって提示している。（38）におけるノデハナイカは、条件文の後件に現れ、「そうなる」ことの結果を推測している。

（37）　小田木は玄関で、四十年配の支配人に話を聞いた。
「この店は五十四年の夏からやってますが」
「新築して？」
「ええ、そうです」
「するとその前は、山だったんでしょうか」
「いえ、確か古い家が建ってたんじゃないですか。ここのオーナーが土地ごと買い取って、家は壊してこの店を新築したんだと思いますよ」

（文学，夏樹静子 1989『M の悲劇』，光文社）

（38）　「担当、お宅のだんな？」
「直接は違いますけど、単行本の方は、そうなると思います」
「やだなあ。そうなると、大野もくっついて来るんじゃない？　あいつしつこいんだよね。銀座の飲み屋で一緒になった時なんて最悪でさ」

（文学，山田詠美 2003『A2Z』，講談社）

2.4.2 「文学」における「確認」用法のノデハナイカ

ノデハナイカの「確認」用法は、情報を提供できる相手の存在が前提となるため、ほかの書き言葉の＜ジャンル＞では、「確認」用法の使用が少ない。一方、「文学」の会話の文の場合、相手の存在という要素を満たしていても、「確認」用法の使用は多くなく、64 件（14%）のみである。

「確認」用法の用例の 8 割以上は、（39）と（40）のような客観的な情報についての確認である。（39）では第三者の行方について尋ねる際にノデハナイカが使用されている。情報をもっていると想定された聞き手に対して、話し手は自分の推測を述べ、その正確さについてノデハナイカによって聞き手に確認している。（40）では、聞き手の経験について確認する際にノデハナイカが用いられている。一方、（41）のような聞き手の感情について確認する用例が比較的少ない。

(39)　「あの、つかぬことを伺いますが…」と断わって、信太郎は話に入った。「右の目じりに大きな泣きぼくろのある…ええ、覚えています。光雲堂のひとで、二、三年前によく染翰堂へ、はい。でも、あのひと、いまは小伝馬町のお牢暮らしなんじゃありませんか？」と、手代は言った。
「そんなことはねえや。おれたちは、この朔日の晩、かめ三でやつを見ているんだ」

（文学，杉本章子 2004『水雷屯』，文藝春秋）

(40)　「こんなところ、あんた入ったことないんじゃない？」
味はともかく、量と値段が良心的な店で、司はウーロンハイを煽った。
「うん、確かに…入る機会はなかったね。（後略）

（文学，六本木曜 2003『スーツの玩具』，桜桃書房）

(41)　「あなた、何を考え事して被居るの？」
漸く化粧を終えた美枝子は、くるりと芳次郎の方を振向くと、取ってつけたような蓮葉さで言った。
「何も考えてなど居やあしませんよ。」
「後悔しているんじゃない？」
「僕が？」

（文学，横溝正史 2005『双生児は囁く』，角川書店）

2.4.3 「文学」における「婉曲」用法のノデハナイカ

最後に「婉曲」用法の用例を考察する。「文学」の地の文における「婉曲」用法のノデハナイカは、(42) のように、書き手の「意見・評価」を述べる際に使われている。(42) において、「書くことを仕事にするようになってわかったことでした」という後文脈から、「作品が好きということと、作家自身を好きということはずいぶん違う」ということに対する書き手の認識が確かであることがわかる。ノデハナイカの働きはその主張を婉曲的にすることである。

(42)　私は、作品が好きということと、作家自身を好きということはずいぶん違うのではないかと思っています。それは、自分がたまたま書くことを仕事にするようになってわかったことでした。

（文学，最相葉月 2001『なんといふ空』，中央公論新社）

また、会話の文における「婉曲」のノデハナイカは、話し手の「意見・評価」を婉曲的にすると同時に、その意見を積極的に聞き手に共有させるという表現効果もある。(43) のように、話し手は「クラークヴィルに少し厳しすぎる」という評価にノデハナイカをつけて、直接的な評価によってもたらす衝突感をやわらげている。そして、その評価を述べ立てるだけでなく、聞き手にも同じように考えてほしいというニュアンスも読み取れる。

(43)　「ペニー」、ケイトは言った。「あなた、クラークヴィルに少し厳しすぎるんじゃない？　まだ聞いたばかりなんだけれど、彼のヴィクトリア朝の講義では、五百人集まるそうよ。きっと感動的な授業なのよ」

「そうね、彼は講師としては感動的な人だわ、確かに」、ペニーは言った。

（文学，アマンダ・クロス（著）/瀧田佳子（訳）1996『ハーヴァードの女探偵』，三省堂）

ここで、「文学」におけるノデハナイカについての考察をまとめる。地の文におけるノデハナイカは主に「推測」用法であり、よく登場人物の心内発話に現れ、心理状態や思考過程を描写するために用いられる。会話の文においては、相手の存在という要素を満たしているが、「確認」用法の使用は多くない。特に、聞き手の感情について確認することは少ない。また、会話の文に現れる「婉曲」用法のデハナイカは、話し手の主張や評価を婉曲的にすると同時に、その意見を積極的に聞き手に共有させるという表現効果もある。

2.5 「雑誌」「文学以外」「ブログ」におけるノデハナイカ

上述した「知恵袋」と「文学」に加えて、「雑誌」「文学以外」「ブログ」においても、ノデハナイカはよく現れる。これら3つの＜ジャンル＞における用法別の出現状況を図7に示す。いずれの＜ジャンル＞においても、「推測」用法がもっとも多い。特に「文学以外」において、7割以上は「推測」用法である。以下では、「推測」用法の用例を中心に見ていく。

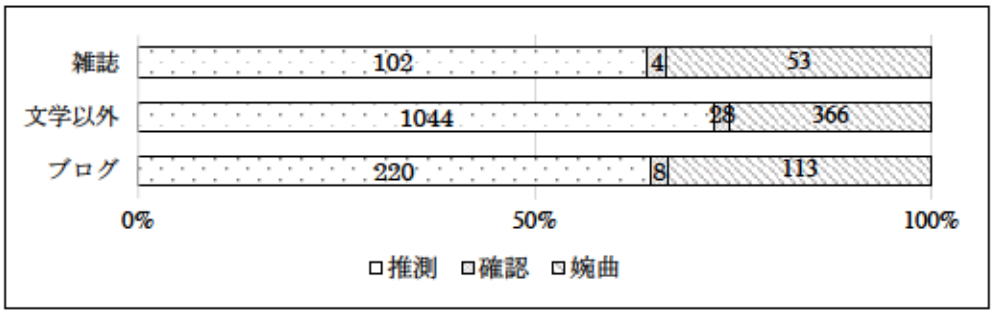

図 7 「雑誌」「文学以外」「ブログ」におけるノデハナイカの用法

(44)～(46)で、ノデハナイカが使用されているのは、書き手が読み手の状況や心理状態などを推測する場面である。(44)におけるノデハナイカは、読み手がいま直面している課題についての推測に用いられ、読み手の共感を呼び、続きを読む興味を湧かせる表現効果があると思われる。また、(45)ではノデハナイカは聞き手の認識状況を推測している。書き手が目の前にいるように論説が進められ、読み手との距離も縮められる。そして、(46)も同じように、読み手に向けて語っているような文脈である。

(44)　さて、夏休みも後半になってくると合宿の疲れや長期の休みから来る精神的な

疲れ等が重なって、ともすればだらだらとした日々を送りがちになってきます。夏休みの残りの日数を数えながら宿題の整理に追われている人もいるのではないでしょうか。昨年のトレーニングワイドにも書きましたが、（後略）

（雑誌，『陸上競技マガジン』2002 年 9 月号，ベースボール・マガジン社）

（45） 子供たちの病気には、親子関係が大きくかかわってくることは、前章までにあげたいくつかの例でご理解いただけたのではないでしょうか。

（文学以外，三木裕子 2001『愛情遮断症候群』，角川書店）

（46） 今日の大阪のお天気は晴後曇、今朝も冷え込んで冷たい・冷たい。明日から 3 連休の方もいらっしゃるのでは？　良い週末をお迎えください。

（Yahoo!ブログ，2008）

また、もう 1 つ見られた特徴は、引用における使用が多いことである。特に、「文学以外」において、この特徴はより顕著である。1,044 件の「推測」のノデハナイカの用例から 105 件の対話の文[5]を除き、残り 939 件のうちの約 3 割は（47）（48）のように、引用文に現れている。（47）では先行研究における論述を引用する際に、（48）では「父」の発話を引用する際に、ノデハナイカが使われている。

（47） たとえばクリスティーヌ・ボイヤーは、（中略）この視角がある隠蔽、ないしは視野狭窄を含んでいるのではないかと論じている。

（文学以外，吉見俊哉 2003『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』，人文書院）

（48） 父は、あまり飛躍させることは危険だが、と前置きして、少数派ができるということも、それが突然マジョリティー・シフトするということも、生物界の原則なのではないか、と言いました。

（文学以外，吉田直哉 2005『日本の科学者吉田富三』，メディカルトリビューン社）

2.6 まとめ

本節では、形式の面と意味の面から、JP による書き言葉におけるノデハナイカの使用実態について考察し、以下のような結果が得られた。

A. 後接形式と共起語：

①. 「一般形」のノデハナイカは「言い切り以外」の形で使用される傾向があり、「と／という」節を後接することが多い。

---

[5] 「文学以外」における対話の文は、下記（b）のような談話集などに現れる用例である。

（b）金子　（前略）組合でなければ何か助け合える結びつきというのがあるかが、これからのキーワードになるんじゃないですか。

青木　昔の長屋の生活には貧しいながらに、醤油貸してくれ米を貸してくれ、いいよ貸してやるというのがあったんです。

（文学以外，金子勝・青木雄二 2003『火事場の経済学』，青春出版社）

②. 共起語から見ると、思考動詞およびネガティブな心理状態を表す表現との共起が多い。日本語教育では、「一般形」について、「のではないかと思う」「んじゃないかと心配する」のようなかたまりで導入し、自分の思考や不安に思うことなどについて述べる際によく使われると指導することが望ましい。

B. 「知恵袋」:

①. 「質問」より「回答」のほうによく現れる。「回答」においては、「推測」用法は、回答者が確実な情報をもっていない場合に用いられる。「婉曲」用法は、よく「〜いい」の形式に後接し、回答者の「意見・評価」および「提案・助言」を婉曲的にするために用いられる。

②. 「質問」においては、「情報要求」の「確認」用法よりも、「情報提供」の機能をもつ「推測」用法のほうが多く、質問の背景である質問者の悩みや心配に思うことなどを述べる際によく使われる。

C. 「文学」:

①. 地の文においては、主に「推測」用法であり、よく登場人物の心内発話に現れる。

②. 会話の文においては、「確認」用法が見られるが、件数は多くない。特に、聞き手の感情について確認することが少ない。

③. 会話の文に現れる「婉曲」用法は、話し手の「意見・評価」を婉曲的にすると同時に、その意見を積極的に聞き手に共有させるという表現効果もある。

D. 「雑誌」「文学以外」「ブログ」:

①. 書き手が読み手の状況や心理状態などを推測する場面によく使われ、読み手の共感を呼び、読み手との距離を縮める表現効果がある。このような表現効果についての説明は、より高い書く技術を目指す学習者が求めているだろう。

②. 他人の意見などを引用する際によく使われる。アカデミック・ライティングの指導に、先行研究などを引用する際に使える表現として提示するとよい。

3. 日本語話者によるノデハナイカの使用実態ー話し言葉

本節では、話し言葉における JP によるノデハナイカの使用実態について調査を行う。調査するデータは「独話」と「対話」からなる。以下、3.1 で調査方法および結果を述べる。3.2 で形式の面から話し言葉におけるノデハナイカの後接形式および共起語について考察する。3.3〜3.5 で意味の面から用法別にノデハナイカの使用実態を考察する。3.6 で話し言葉についての考察をまとめる。

3.1 調査方法および結果

3.1.1 使用したコーパス

本論文では、話し言葉におけるダロウの使用実態を調査するにあたって、「独話」における使用実態については、CSJ における「独話」を調査対象とする。「独話」のデータ「学会」と「模擬」からなっている。「学会」は発話スタイルのあらたまり度が概して高い。「模擬」のほうは「学会」よりくだけたものとなっている。学習者が日本語で独話する発話場面は、授業での発表や、スピーチなどが多いと考えられる。これは、「独話」のデータの性質と一致している。「対話」における使用実態については、日本語話者同士の雑談を収録している名大を調査対象とする。

3.1.2 検索条件

ノデハナイカの各出現形に対して、「独話」におけるダロウの使用実態については、CSJ における「独話」を対象に、「対話」については、名大の全データを対象に、検索アプリケーション「中納言」2.4.2 で短単位検索を行った。具体的な検索条件は下記のとおりである。

簡略形

検索条件① 「ん／のでは」

・キー	語彙素＝の	品詞＝助詞－準体助詞	
後方共起（キーから 1 語）	語彙素＝だ	品詞＝助動詞	活用形＝連用形
後方共起（キーから 2 語）	語彙素＝は	品詞＝助詞	
後方共起（キーから 3 語）	語種＝記号		

検索条件② 「ん／のじゃない」

・キー	語彙素＝の	品詞＝助詞－準体助詞
後方共起（キーから 1 語）	書字形出現形＝じゃ	
後方共起（キーから 2 語）	語彙素＝無い	
後方共起（キーから 3 語）	語種＝記号	

検索条件③ 「ん／のではない」

・キー	語彙素＝の	品詞＝助詞－準体助詞	
後方共起（キーから 1 語）	語彙素＝だ	品詞＝助動詞	活用形＝連用形
後方共起（キーから 2 語）	語彙素＝は	品詞＝助詞	
後方共起（キーから 3 語）	語彙素＝無い	活用形＝終止形	
後方共起（キーから 4 語）	語種＝記号		

検索条件④ 「ん／のじゃ」

・キー　語彙素＝の　品詞＝助詞－準体助詞
　後方共起（キーから 1 語）　書字形出現形＝じゃ
　後方共起（キーから 2 語）　語種＝記号

検索条件⑤「ん／のではありません」
・キー　語彙素＝の　品詞＝助詞－準体助詞
　後方共起（キーから 1 語）　語彙素＝だ　品詞＝助動詞　活用形＝連用形
　後方共起（キーから 2 語）　語彙素＝は　品詞＝助詞
　後方共起（キーから 3 語）　語彙素＝有る　活用形＝連用形
　後方共起（キーから 4 語）　語彙素＝ます　活用形＝未然形
　後方共起（キーから 5 語）　語彙素＝ず　活用形＝終止形
　後方共起（キーから 6 語）　語種＝記号

検索条件⑥「ん／のじゃありません」
・キー　語彙素＝の　品詞＝助詞－準体助詞
　後方共起（キーから 1 語）　書字形出現形＝じゃ
　後方共起（キーから 2 語）　語彙素＝有る　活用形＝連用形
　後方共起（キーから 3 語）　語彙素＝ます　活用形＝未然形
　後方共起（キーから 4 語）　語彙素＝ず　活用形＝終止形
　後方共起（キーから 5 語）　語種＝記号

「独話」では「簡略形」の用例はなかった。「対話」の場合、①によって得られた 6 件から、「～のでは、～」の用例を 5 件排除し、残り 1 件を分析対象とする。②によって得られた 445 件から、「ん＋じゃない」で否定を表す用例を 13 件、「の」＋デハナイカの用例を 1 件排除し、残り 431 件を分析対象とする。③によって得られた 1 件は「ん／の＋ではない」で否定を表す用例であるため排除した。④によって得た 14 件から、「～んじゃ、～」の用例を 3 件排除し、残り 11 件を分析対象とする。⑤と⑥の用例はなかった。以上合わせて計 443 件の簡略形の用例を分析対象とする。

一般形

検索条件⑦「ん／のではないか」
・キー　語彙素＝の　品詞＝助詞－準体助詞
　後方共起（キーから 1 語）　語彙素＝だ　品詞＝助動詞　活用形＝連用形
　後方共起（キーから 2 語）　語彙素＝は　品詞＝助詞
　後方共起（キーから 3 語）　語彙素＝無い
　後方共起（キーから 4 語）　語彙素＝か　品詞＝助詞－終助詞

検索条件⑧「ん／のじゃないか」

・キー　語彙素＝の　品詞＝助詞－準体助詞
　後方共起（キーから 1 語）　書字形出現形＝じゃ
　後方共起（キーから 2 語）　語彙素＝無い
　後方共起（キーから 3 語）　語彙素＝か　品詞＝助詞－終助詞

検索条件⑨「ん／のではないですか」

・キー　語彙素＝の　品詞＝助詞－準体助詞
　後方共起（キーから 1 語）　語彙素＝だ　品詞＝助動詞　活用形＝連用形
　後方共起（キーから 2 語）　語彙素＝は　品詞＝助詞
　後方共起（キーから 3 語）　語彙素＝無い
　後方共起（キーから 5 語）　語彙素＝か　品詞＝助詞－終助詞

検索条件⑩「ん／のじゃないですか」

・キー　語彙素＝の　品詞＝助詞－準体助詞
　後方共起（キーから 1 語）　書字形出現形＝じゃ
　後方共起（キーから 2 語）　語彙素＝無い
　後方共起（キーから 4 語）　語彙素＝か　品詞＝助詞－終助詞

検索条件⑪　「ん／のではありませんか」

・キー　語彙素＝の　品詞＝助詞－準体助詞
　後方共起（キーから 1 語）　語彙素＝だ　品詞＝助動詞　活用形＝連用形
　後方共起（キーから 2 語）　語彙素＝は　品詞＝助詞
　後方共起（キーから 3 語）　語彙素＝有る　活用形＝連用形
　後方共起（キーから 4 語）　語彙素＝ます　活用形＝未然形
　後方共起（キーから 5 語）　語彙素＝ず　活用形＝終止形
　後方共起（キーから 6 語）　語彙素＝か　品詞＝助詞－終助詞

検索条件⑫　「ん／のじゃありませんか」

・キー　語彙素＝の　品詞＝助詞－準体助詞
　後方共起（キーから 1 語）　書字形出現形＝じゃ
　後方共起（キーから 2 語）　語彙素＝有る　活用形＝連用形
　後方共起（キーから 3 語）　語彙素＝ます　活用形＝未然形
　後方共起（キーから 4 語）　語彙素＝ず　活用形＝終止形
　後方共起（キーから 5 語）　語彙素＝か　品詞＝助詞－終助詞

「独話」については、⑦によって得られた 2,291 件から、23 件の「のではなかろうか」

の用例を除外し、残り 2,268 件を分析対象とする。また、⑧によって得られた 2,510 件から、15 件の「んじゃなかろうか」の用例を除外し、残り 2,495 件を分析対象とする。さらに、⑨によって得られた 230 件から、51 件の「ん／のではないだろうか」の用例および、160 件の「ん／のではないでしょうか」の用例を「複合形」として別扱いし、また、「ん／のではないのか」の用例を 15 件および「ん／のではなかったのか」の用例を 3 件排除し、残り 1 件を分析対象とする。⑩によって得られた 142 件から、35 件の「ん／のじゃないだろうか」の用例および、42 件の「んじゃないでしょうか」の用例を「複合形」として別扱いし、また、「んじゃないのか」の用例を 45 件排除し、残り 20 件を分析対象とする。⑪と⑫の用例はなかった。以上のようにして得られた計 4,784 件の用例を「独話」における「一般形」のノデハナイカの分析対象とする。

「対話」の場合、⑦によって得られた 3 件、⑧によって得られた 215 件から、「の」＋デハナイカの用例を 1 件排除し、残り 214 件を分析対象とする。また、⑨によって得られた 1 件は「ん／のではないでしょうか」の用例であるため、「複合形」として別扱いにする。⑩によって得られた 77 件から、2 件の「ん／のじゃないだろうか」の用例および、2 件の「んじゃないでしょうか」の用例を「複合形」として別扱いし、また、「んじゃないのか」の用例を 28 件および「んじゃなかったか」の用例を 3 件排除し、残り 42 件を分析対象とする。⑪と⑫の用例はなかった。以上のようにして得られた計 259 件の用例を「対話」における「一般形」のノデハナイカの分析対象とする。

複合形

「独話」については、上述のような検索方法で、別扱いとした 51 件の「ん／のではないだろうか」、35 件の「ん／のじゃないだろうか」、160 件の「ん／のではないでしょうか」、42 件の「んじゃないでしょうか」、計 288 件「複合形」のノデハナイカの用例を「独話」の分析対象とする。

「対話」については、2 件の「ん／のじゃないだろうか」、1 件の「ん／のではないでしょうか」、2 件の「んじゃないでしょうか」、計 6 件「複合形」のノデハナイカの用例を「対話」の分析対象とする。

3.1.3 検索結果

以上述べた検索条件によって収集した用例の件数および 100 万語単位での出現数を表 7 に示す。表 7 から「独話」と「対話」におけるノデハナイカの出現形に大きな違いが見られる。「独話」では「一般形」、特に⑦「ん／のではないか」と⑧「ん／のじゃないか」が頻繁に使われているのに対して、「簡略形」の用例は見られなかった。また、「独話」における「複合形」は⑮「ん／のではないでしょうか」の形で現れることが多い。一方、「対話」の場合、よく使われる形は「簡略形」の②「ん／のじゃない」である。その代わりに、「対話」では「複合形」の使用が非常に少ない。また、使用頻度を示す 100 万語単位での出現数から見れば、ノデハナイカは「独話」における使用頻度が「対話」よりやや高い。

表 7 話し言葉におけるノデハナイカの件数

形式	出現形	独話		対話	
簡略形	①ん／のでは	0	0	1	443
	②ん／のじゃない	0		431	
	③ん／のではない	0		0	
	④ん／のじゃ	0		11	
	⑤ん／のではありません	0		0	
	⑥ん／のじゃありません	0		0	
一般形	**⑦ん／のではないか**	2,268	4,784	3	259
	⑧ん／のじゃないか	2,495		214	
	⑨ん／のではないですか	1		0	
	⑩ん／のじゃないですか	20		42	
	⑪ん／のではありませんか	0		0	
	⑫ん／のじゃありませんか	0		0	
複合形	⑬ん／のではないだろうか	51	288	0	5
	⑭ん／のじゃないだろうか	35		2	
	⑮ん／のではないでしょうか	160		1	
	⑯ん／のじゃないでしょうか	42		2	
計		5,072		707	
100 万語単位での出現数		737		626	

収集した「独話」における 5,072 件のノデハナイカの用例から、700 件をランダムにピックアップし、「対話」における 707 件の用例と合わせて、計 1,407 件の用例を分析の対象とする。本論文で規定したノデハナイカの意味用法に照らし、分類した結果を図 8 に示す。

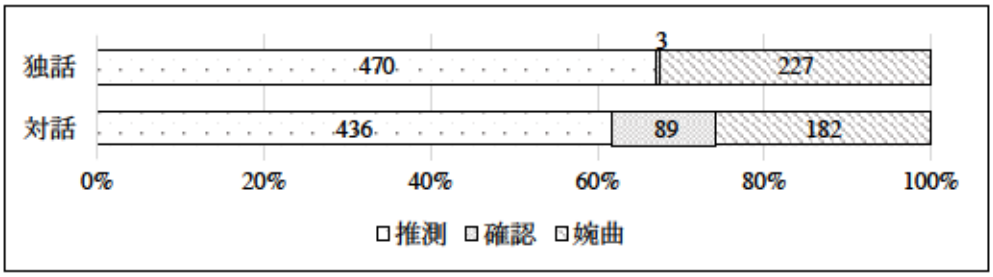

図 8 話し言葉におけるノデハナイカの用法

「独話」においても「対話」においても、ノデハナイカは「推測」用法がもっともよく使われ、6 割以上に達している。また、「確認」用法については、「独話」ではほぼ使われず[6]、「対話」における割合は 12%である。さらに、「婉曲」用法については、「独話」におけ

[6] 「独話」における「確認」の用例はすべて対話の直接引用である。

る割合は約 3 割であり、「対話」よりやや大きい。

3.2 ノデハナイカの後接形式および共起語

本節においては、話し言葉におけるノデハナイカの使用実態について、形式の面からの考察を行う。3.2.1 では後接形式、3.2.2 では共起語を考察する。

3.2.1 ノデハナイカの後接形式

ノデハナイカの各形式を後接形式の有無によって、「言い切り」と「言い切り以外」に分類した結果を図 9 に示す。

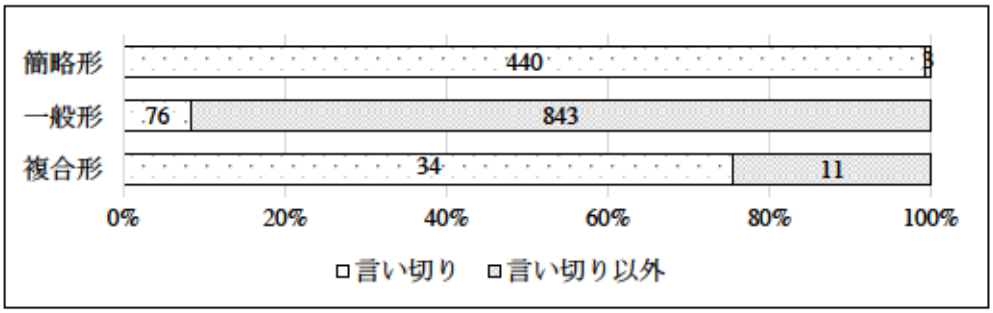

図 9 話し言葉におけるノデハナイカの後接形式

図 9 からわかるように、ほぼすべての「簡略形」と約 8 割の「複合形」が「言い切り」で用いられるのに対して、「一般形」は 9 割以上が「言い切り以外」である。では、なぜ「一般形」の「言い切り」は少ないのだろうか。また、後接形式の有無によって、どのような違いが生じるのだろうか。以下では、「言い切り」と「言い切り以外」のノデハナイカをそれぞれ見ていく。

まず、少数である「一般形」の「言い切り」の用例を考察する。「独話」においては、「一般形」の「言い切り」が 28 件ある。そのうち、(49) のような後ろの文脈における共起語と共起するものが 17 件ある。残りの 11 件はすべて (50) のように、丁寧体基調の講演において、普通体で現れている。これは、スピーチレベルシフト[7]と言えるだろう。(50) においては、「三十二名ぐらいえーいらっしゃるのではないか」という文は、心に浮かんだまま音声化された話し手の思考過程であると考えられる。つまり、「独話」における「言い切り」の形で発せられた「一般形」のノデハナイカは、話し手の心内発話といった「聞き手不在」(仁田 1991) の発話を表していると考えられる。

[7] スピーチレベルシフトとは、「同一会話内におけるデスマス体の使用・不使用の一時的なシフト」である (宇佐美 1995)。

(49)　他のものに比べてえー上の方にあるのではないかつまりＦゼロの下降開始が遅いのではないかということがあのー考えられたんですけれども

（独話, CSJ, 学会, A05M0413）

(50)　それではコーヒーと紅茶では紅茶の方が好きという方どのぐらいいらっしゃいますでしょうかえーあああありがとうございます三十二名ぐらいえーいらっしゃるのではないかえそういたしますと（後略）

（独話, CSJ, 学会, A01M0559）

「対話」の場合、対話の相手としての聞き手が存在するため、「一般形」は「言い切り」で使用されると、聞き手から情報を要求するニュアンスが強くなる。(51) のように、聞き手である F098 は試験監督の経験者であり、「監督は本が読めるかどうか」という話題について、聞き手は話し手より情報量が優位である。この場合に、話し手が使用した「言い切り」の「一般形」は強い問いかけ性をもっている。話し手の不確実な推測を聞き手に示し、聞き手に情報を求めるという「確認」の働きを果たしている。「対話」におけるノデハナイカはよく「言い切り以外」で現れる現象は安達（1999）にも指摘されている。安達（1999: 129）では「文末の調整が必要になるということからすると、ノデハナイカは話し手の不確かな考えを聞き手に対して持ちかけ、訴えかけるという意味あいが強くもっていることが示唆されよう」と述べている。

(51)　F124：でも監督の方は何にもできないんですよね、本読むってこともできないんじゃないですか。

F098：いや、だめとは言われてないけれど、（そう？　）でも私みたいにほら、読みはじめたらもう必死になっちゃって（後略）

（対話, 名大, 108）

では、ノデハナイカにどのような形式が後接するのだろうか。ノデハナイカに「と／という」節を後接したものを「ノデハナイカ＋ト」とし、「かな」後接したものを「ノデハナイカナ」とする。また、ノデハナイカと「かな」との共起にさらに「と／という」節が後接された用例を「ノデハナイカナ＋ト」とする。「複合形」に関しては後接形式がない場合「ノデハナイダロウカ」と表記し、「複合形」にさらに「と／という」節が付加されたものを「ノデハナイダロウカ＋ト」と表記する。「独話」と「対話」におけるノデハナイカの後接形式の詳細を表 8 に示す。

表 8 話し言葉におけるノデハナイカの後接形式の詳細

後接形式＼発話場面	計	独話	対話
ノデハナイカ＋ト	573（40.7%）	**479（68.4%）**	94（13.3%）
ノデハナイカナ	86（6.1%）	5（0.7%）	**81（11.5%）**
ノデハナイカナ＋ト	181（12.9%）	**146（20.9%）**	35（5.0%）
ノデハナイダロウカ	30（2.1%）	28（4.0%）	2（0.3%）
ノデハナイダロウカ＋ト	14（1.0%）	13（1.9%）	1（0.1%）
その他	7（0.5%）	29（4.1%）	494（69.9%）
計	1,407（100.0%）	700（100.0%）	707（100.0%）

「独話」でも「対話」でも、「と／という」節がもっともよくノデハナイカに後接する。特に、独話におけるその割合は約 7 割に達している。また、「独話」と「対話」の後接形式にも大きな差異が見られる。「独話」では「かな」単独でノデハナイカに後接するのはまれである一方、（52）のように「かな」の後ろにさらに「と／という」節が後接する用例がよく見られ、2 割以上である。これに対して、「対話」では（53）のように「かな」が後接するほうがより多い。さらに、「独話」では「ノデハナイダロウカ」および「ノデハナイダロウカ＋ト」が後接する用例は合わせて約 6%であるが、「対話」ではそれが非常に少ない。

（52） その癖というものを考える時にんん直接的に見てるのはあの一重みということになってしまいますんでま一情報を抽象化するということも言えるんじゃないかなと思います

（独話, CSJ 学会, A05M0181）

（53） F023：たぶんA子さんが行ったときみんな閉まってたんじゃないかな。
F107：たぶんね。あたしはねときは開いてたもんね。（後略）

（対話, 名大, 002）

ノデハナイカに「かな」や「疑念」のダロウのような疑いの形式が後接する場合、疑いの形式は問いかけ性の希薄化といった面で働いていると宮崎（2005: 33）は指摘している。本論文の調査結果から見れば、ノデハナイカの後接形式に疑いの形式の使い分けが見られた。「独話」の場合、「ノデハナイカナ＋ト」の形で使用されることが多い。また、「ノデハナイダロウカ」も使用されている。一方、「対話」の場合、「ノデハナイカナ」はよく使用されるが、「ノデハナイダロウカ」はほぼ見られない。

3.2.2 ノデハナイカの共起語

次に、話し言葉におけるノデハナイカの「共起語」の上位 5 位を表 9 に示す。

表 9 話し言葉におけるノデハナイカの共起語

順位	共起語	計	独話	対話
1	思い／思う	314（22.3%）	254（36.3%）	60（8.5%）
2	考え／考える	118（8.4%）	117（16.7%）	1（0.1%）
3	感じ／感じる／気がする	41（2.9%）	25（3.6%）	16（2.3%）
4	言う	24（1.7%）	13（1.9%）	11（1.6%）
5	心配／懸念／危惧／不安	10（0.7%）	10（1.4%）	0（0%）
TOP 5 のカバー率		37.1%	62.0%	12.4%

ノデハナイカの共起語では思考動詞「思う」、「考える」が圧倒的に多く、話し言葉全体で見ると、3 割以上が思考動詞と共起している。つまり、ノデハナイカは話し手の思考内容を述べる表現としてよく使われると言える。（54）は思考動詞と共起する例である。ただし、「独話」と「対話」に差が見られ、「独話」では半数以上の用例が思考動詞と共起するのに対して、「対話」ではその割合はそれほど高くない。特に、「考える」との共起はほぼ見られない。これは、コーパスの性質と関連していると考えられる。「独話」における（55）のような「考える」と共起する用例は、論理的・理性的な思考が要求される「学会」に集中している。

（54） F098：せめて日本語やって帰れば、あの、ね、日本の文化一応身につけて、日本語ができれば何かつぶしが利くんじゃないかと思ってね。
M027：そうですね。
（対話，名大，035）

（55） また関連性理論で定義されている認知効果でちょっと飛ばしましたが詩的効果の概念でえーんーせ理性に訴える説得力を説明できたのではないかと考えます
（独話，CSJ 学会，A01M0768）

思考動詞のほかに、ノデハナイカは「感じる／気がする」ともよく共起する。（56）のように話し手の直感的な感想や気持ちを述べる際に用いられる。これより、ノデハナイカは話し手の直感的な感想から、論理的・理性的な思考を経た判断まで、多様な認識を表すことができると言えるだろう。

（56） プライベートな時間とか守られた反面そこにあるあったかかったこう交流心の交流が親子でさえ兄弟間でさえ失われていってしまったんじゃないかなっていう気がするんです
（独話，CSJ 模擬，S09F1328）

第4位の「言う」と共起する例は（57）であり、他の人の意見などを引用する際にノデハナイカは使用されている。当然ながら、「言う」は引用の代表的な共起語であるが、(58)のようにほかの引用を表す表現もある。実際に、ノデハナイカはよく引用の文に現れ、「独話」には48件（6.9%）、「対話」には62件（8.8%）ある。

（57）　F117：で、学務から言うと、なんか、やっぱり木曜日の分を受けてないんで、受けづらいと思うからやめた方がいいんじゃないですかって言われるんだけども、（後略）

（対話，名大，043）

（58）　同時に先程××先生もえ言及された森岡健二氏によって我がままな子供達がどうも育っているのではないかという指摘がなされるに至ります

（独話，CSJ学会，A08M0760）

また、ノデハナイカは（59）のように話し手の「心配／懸念／危惧／不安」といったネガティブな心理状態を表す際にもよく使われる。興味深いことに、ノデハナイカと「安心」「満足」などポジティブな心理状態の表現との共起は見られなかった。

（59）　それでもこの六十歳を過ぎた毎日はあまりにも刺激のない生活だったらしくて却って別別な意味でぼけに繋がるのではないかという心配もありました

（独話，CSJ模擬，S10F1178）

以上の後接形式および共起語という形式面からの考察をまとめると、まず、「一般形」のノデハナイカは「言い切り」での使用が非常に少ないことがわかった。「言い切り以外」の場合に、「と／という」節を後接して使われるのがもっとも多い。また、「独話」では「ノデハナイカナ＋ト」、「対話」では「ノデハナイカナ」の形でよく使われる。共起語から見ると、思考動詞とノデハナイカの共起がもっとも多い。そして、他の人の意見などを引用する際およびネガティブな心理状態を表す際にノデハナイカもよく使われる。日本語教育において、強く問いかける意図がない場合、「一般形」は「言い切り」での使用が少ないことを学習者に指導する必要があると思われる。具体的には、「んじゃないかと思う」、「のではないかと考える」のような組み合わせた形式で導入したほうがよいだろう。また、「独話」と「対話」における後接形式の違いについて言及できれば、より望ましいと思われる。

3.3 「推測」用法

用法別に見ると、話し言葉では、ノデハナイカの「推測」用法の割合がもっとも大きい。本節においては、ノデハナイカの「推測」用法が表す認識の段階、および応答文としての使用という2つの視点から、その使用実態について考察する。

3.3.1 認識の段階

3.2 で述べたように、共起語から、ノデハナイカは直感的な感想から、論理的・理性的な思考を経た判断まで多様な認識を表すことができることが明らかになった。実例を観察すると、本論文で「推測」用法と分類されるノデハナイカには、実際に多様な認識段階のものが含まれていることがわかる。たとえば、(60)(61)(62)はすべて「推測」用法の用例であるが、異なる認識段階の推測を表している。(60)は話し手の心内発話である。話し手は水中が見えない場合、「なにかがいる」と推測している。ノデハナイカが表しているのは話し手の直感的な「不安」であり、判断が未成立である「疑い」を述べていると言える。(61)において、F160 は生徒の人数について、不確定でありながら、記憶などに基づいて「50 人ぐらい」と推測しており、(60)より認識が進んだ段階にあると思われる。(62)の場合、前文脈における「ので」で述べられた客観的な理由に基づいて、話し手は理性的な思考を経た認識判断をノデハナイカによって述べている。つまり、(61)に比べれば、より判断成立に傾く「推量」の段階にあると思われる。

(60) こう入ってるとですねこう下が見えないとこう水中が見えないこれ何かいるんじゃないかっていう必ずこう不安に駆られると言うかまその自分の不安の何て言うんですかね

(独話, CSJ, 模擬, S11M0253)

(61) F160：私のおばさんもピアノの先生なのね。(うん)すっごい頑張ってる。
F045：あ、本当？
F160：うん。生徒 50 人ぐらいいるんじゃない。
F045：あ、それ、すごいね。

(対話, 名大, 067)

(62) 科目番号三が入っているモデルの確率がえーかなり高くなっていますのでえこの辺がえーとどうもえっとモデル平均にえーとあまりよろしくない影響を与えたのではないかとえー考えられます

(独話, CSJ, 学会, A07M0503)

以上のように、「推測」用法のノデハナイカは、話し手の多様な段階の認識を表すことができる。安達(1999: 117)では、ノデハナイカの基本的な意味を「判断を下すための根拠の欠如」としている。しかし、実際の使用において、収集した「推測」の用例のうちの 103 件(12%)は上述(62)のように、「ので」などの理由を表す接続助詞によって、明示的に判断の根拠を示している。つまり、ノデハナイカによる判断の確信度は指定されているわけではないと言えるだろう。この点に関しては、宮崎他(2002: 194)、蓮沼(2003: 14)でも指摘されており、その証拠として、認識のモダリティのさまざまな副詞と共起することをあげている。では、実際の使用において、ノデハナイカはどのような副詞とよく共起

するのだろうか。それを次の表 10 にまとめる。

表 10 「推測」のノデハナイカと共起する副詞

順位	副詞	計	対話	独話
1	たぶん	53	36	17
2	きっと	17	12	5
3	もしかすると類[8]	11	4	7
4	おそらく	9	0	9
5	ひょっとすると類[9]	3	0	3

ノデハナイカとよく共起する副詞には「たぶん」「きっと」「もしかすると類」などがあり、「たぶん」との共起はもっとも頻繁である。また、「対話」に比べれば、「独話」における副詞はバリエーションに富んでいる。(63) ～ (67) はそれぞれの実例である。

(63) F087：え、あそこはどうなったんですか、学生課とか、*事務方*の方は。
F074：あ、でも全然行ってないんでわかんないですけど、(あ、そうですか)
たぶん教室にするんじゃないかなーって思うんですけどー
(対話, 名大, 054)

(64) F057：なんか院生の人ってテスト受けない人が多いんだよね、きっとね。みんなどうしてたんだろう、去年までは、と思って。
F093：ああいう語学系のやつ？　うん、受けない人が多いんじゃない、きっと。
(対話, 名大, 101)

(65) F098：でも、そのトヨタのこと知っている子がいて、(中略) 案内の言葉を選ぶことができるんだと。
M027：あー、そうですか。それで英語で。
F098：もしかして英語で選んだんじゃないかと。そしたら英語で当然なんで、わたし、向こう、トヨタぐらいの大きさになればちゃんと中国語でね、
M027：いますよね。
(対話, 名大, 035)

(66) 本当にもうそん時にはもう何が何が起こったか分からんでそのままあの一京都へ向かって走ってましたまー恐らくその中央分離帯にぶつかったんじゃないかなと思います
(独話, CSJ, 模擬, S05M1282)

(67) そういうところを見ていくとその人が表現者があるいはひょっとしたらその時代が何を気にしていたのかということが見えてくるんじゃないかと

[8] 「もしかすると」「もしかしたら」「もしかして」を含む。
[9] 「ひょっとすると」「ひょっとしたら」「ひょっとして」を含む。

（独話, CSJ, 模擬, S05M1282）

3.3.2 応答文としての使用

安達（1999: 85）は、応答文で使われることを、ノデハナイカが情報提供機能をもっていることの有力な根拠としている。収集した「対話」における 397 件の「推測」用法の用例のうちの 94 件、つまり約 4 分の 1 という高い比率で、応答文として使用されている。応答文として使用されるノデハナイカも、話し手の多様な認識段階の推測を表している。たとえば、(68) では、F123 はまず「わかんない」によって確実な情報をもっていないと表明し、その上で応答としてノデハナイカによって推測を述べている。(69) では、M034 は「何も言ってなかった」を根拠として、ノデハナイカによって「何も変わらない」と推測している。(70) では、F112 は「あの人が作家」という事実に基づいて、ノデハナイカによって推測している。

(68) ＜テープ反転＞
F093：今ひっくり返ったの。
F123：わかんない。今ひっくり返った<u>んじゃない</u>？
F093：あ、もうひっくり返ってるかと思った、私。
（対話, 名大, 049）

(69) F004：あれはどうなった？
M034：あー。どうなんだろうなー。あのー、もう何も言ってなかったし、何も変わらない<u>んじゃない</u>。
（対話, 名大, 092）

(70) F134：うーん、もう飽きたんかもよ、この仕事に。
F112：ねえ。大変、大変っていうか、もういいやって思っちゃうかも。
F134：でも、次、何の仕事するんだろう。
F112：え、でもあの人作家だから、そっちで稼ぐ<u>んじゃない</u>？
（対話, 名大, 125）

このように、「推測」のノデハナイカは多様な認識段階の推測を表すことができ、頻繁に応答文に用いられる。そのため、日本語教育において、応答文に使用されるノデハナイカについての指導が求められるだろう。それによって、使用場面の提示で学習者の産出を促すことを期待できると同時に、応答文に使用するということがノデハナイカの「情報提供」の機能を理解するための手助けにもなると思われる。

3.3.3 聞き手の反応

「推測」のノデハナイカは「対話」で使用されると、間接的に問うニュアンスを帯びることがあるため、日本語学習者にとって、話し手の立場からノデハナイカをどのように使うかのみを指導することは、やはり不十分であろう。聞き手としてノデハナイカに対して

どのように反応すればよいか、ということの指導も求められると思われる。そのため、本節では、聞き手としてはノデハナイカをどのように受け止めているのか見るために、聞き手の反応について考察する。(71) のように話し手が聞き手の反応を待たず、「推測」の発話の次に続けて発話する場合を「維持」とし、(72) (73) のように話者交替が起こる場合を「交替」とする。「交替」には 2 つのタイプがある。1 つは (72) のように、発話内容は話題の続きだけであり、ノデハナイカに対する反応ではないものであり、これを「交替ー継続」とする。また、もう 1 つは (73) のように、交替後の発話内容がノデハナイカに対する直接な答えであるものであり、これを「交替ー答え」とする。図 10 に聞き手の各反応の割合を示す。

(71) 【維持】

F075：だから、そっちのAの話も、うーん、で、どういうつもりで私に面接をね、(うん) うん、したのかなあって思って。ほんとに。

F098：うん、うん。でも、もう 1 人の方がやっぱりだめだったら、この人にしようと思ったんじゃない、少なくとも。それは、面接してみないと。

(対話, 名大, 097)

(72) 【交替ー継続】

F098：でもどういうニュア、ほ、標準語でいうとなんなの、あれは。

F138：標準語ないんじゃない。

F098：どういう感じなの、悪いのはわかるんだけど。

(対話, 名大, 008)

(73) 【交替ー答え】

F020：こんな、こんなのもかわいいんじゃない。

F025：あ、それもかわいいかも。

(対話, 名大, 038)

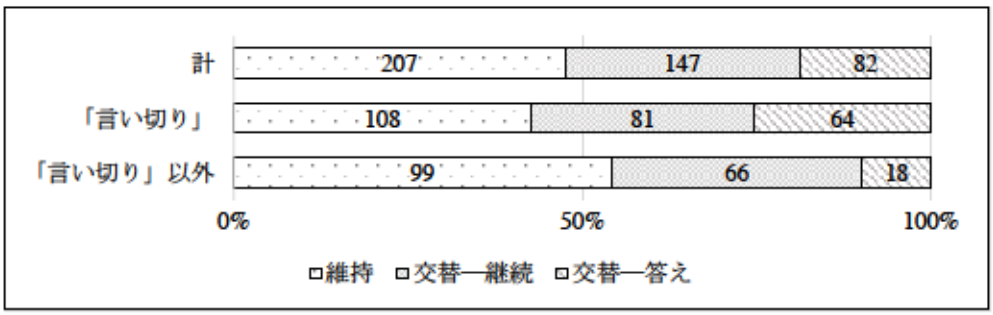

図 10 「対話」における「推測」に対する聞き手の反応

「維持」「交替ー継続」「交替ー答え」のうち、「交替ー答え」だけがノデハナイカの伺うニュアンスに対する反応である。図 10 からわかるように、その割合は高くない。合計で見ると、「交替ー答え」は 2 割弱である。また、後接形式の有無によって差は見られる

が、「交替ー答え」の割合が高い「言い切り」の場合であっても、4 分の 1 にすぎない。「言い切り以外」の場合、前述したように、後接形式によってノデハナイカの問いかけのニュアンスが緩和される。そのため、「交替ー答え」の比率が少ないのだと考えられる。また、「対話」において「言い切り」で現れるノデハナイカは、基本的に「簡略形」の形である。「交替ー答え」の割合が低いことは、ノデハナイカが「簡略形」で現れる際に、話し手の推測を述べることが主たる用法であり、積極的に伺うニュアンスを帯びるわけではないからだろう。安達（1999: 129）では「ノデハナイカは話し手の不確かな考えを聞き手に対して持ちかけ、訴えかけるという意味あいが強くもっている」と述べているが、本論文の調査結果から見ると、「簡略形」の場合そうではないことがわかる。

3.4 「確認」用法

本節では、発話意図と情報の質という 2 つの視点から、ノデハナイカの「確認」用法の使用実態を考察する。

3.4.1 発話意図

山岡他（2010）における発話意図の分類に照らして、収集した「聞き手依存型」の用例を検討すると、「陳述要求」「主張要求」「感情要求」といった発話意図が見られた。それぞれの発話意図の割合を図 11 に示す。

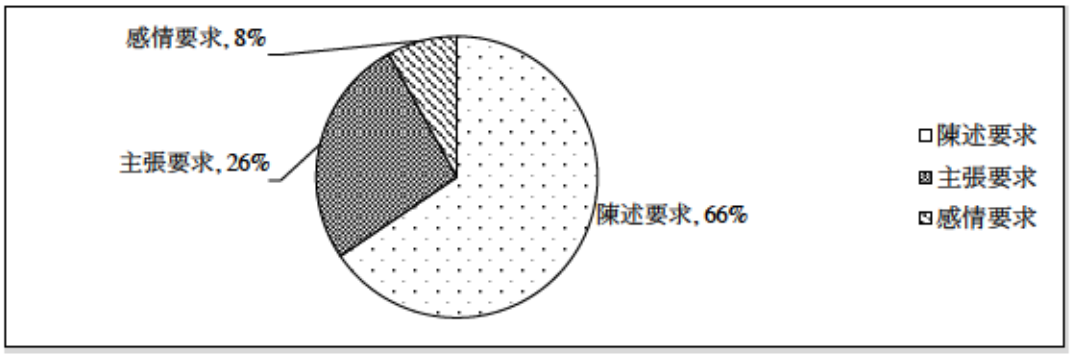

図 11 「対話」における「確認」のノデハナイカの発話意図

ノデハナイカは「陳述要求」の意図でもっともよく使われる。つまり、3 分の 2 のノデハナイカは客観的な情報について確認するのであると言える。「陳述要求」の用例をさらに詳しく見ると、「聞き手無関与」と「聞き手関与」に分けられる。たとえば、(74) のような気温についての確認は「聞き手無関与」である。(74) は他の人が住んでいたところの状況についての対話である。F068 が提供した「古い」「武家屋敷みたい」という情報に基づいて、F032 は「冬は寒い」と推測して、さらに、その推測の正否をノデハナイカによって F068 に確かめるのである。また、「聞き手関与」というのは (75) のような聞き手の客観的なの経験などについての確認である。(75) において、F098 は自分の試験監督の

経験を話しており、F124 はそれについてノデハナイカによって確認しているのである。「聞き手無関与」と「聞き手関与」の件数はそれぞれ 43 件と 12 件であり、「聞き手無関与」のほうが多い。

(74) F032：どこに住んでんの。
F068：世田谷だったと思うわね。（中略）
F068：だから、そこのお母さん、だから、あの、汚ーい、古ーいね、武家屋敷みたいなね。（うん）だけどね、バルチスがぜひ決してね、手を入れちゃいけないって言うんですって。
F032：だ、冬なんか寒いんじゃない。
F068：昔のまんまが、（ああ）日本のね。
（対話，名大，056）

(75) F098：私は、もう今年は何か、私たちのところは、しなくてもいいことになったのね。（中略）
F124：でも監督の方は何にもできないんですよね、本読むってこともできないんじゃないですか。
F098：いや、だめとは言われてないけれど、（そう？　）でも私みたいにほら、読みはじめたらもう必死になっちゃって＜笑い＞
（対話，名大，108）

一方、上述のような客観的な情報について確認する「陳述要求」に比べ、聞き手の主張、感情などについて確認することは比較的少ない。（76）と（77）はそれぞれ「主張要求」と「感情要求」の例である。

(76) F049：でもさ、それは F120 ちゃんだってさ、（うん）なんていうの、自分の教えたもので（うん）生徒が学んでくみたいなのはいいんじゃない？
F120：でもさー、なんていうの、なんかみんなが話すの聞いたり、書いてきた作文見ると、あ、私がこう言っちゃったからみんなまちがえてますとかすごい残るしー、（後略）
（対話，名大，053）

(77) M023：スーパーマーケットとか行きました？
F107：行ったよ。
M023：楽しいんじゃないですか。ありますよね。ニュージーでもいっぱいある。
F107：楽しかったね。
（対話，名大，001）

3.4.2 情報の質

前述のように、ノデハナイカの「確認」用法は、発話意図別での使用頻度に違いが見ら

れた。つまり、ノデハナイカは主に「陳述要求」の意図で使われており、「主張要求」、特に「感情要求」のための使用は少ない。では、なぜこのような現象が見られたのだろうか。本節では、「情報の質」という視点から考えていく。

「陳述要求」によって確認されるのは、客観的事実である。また、「主張要求」および「感情要求」によって確認されるのは、話し手の主観的評価や感情などである。これらの情報はいずれも聞き手の私的領域に属する情報であるが、その段階が異なるだろう。つまり、客観的事実は私的領域の周辺的なものであり、話し手の主観的評価や感情は聞き手の私的領域のより中心部のものであると思われる。これについては、張（2008）によるノデハナイカの使用制限についての考察に、同じような指摘が見られる。張（2008: 110）はノデハナイカの使用制限について、次の図 12 を用いて、「私的領域指数が高ければ高いほど、ノデハナイカにかかる使用制限が強くなる」と指摘している。

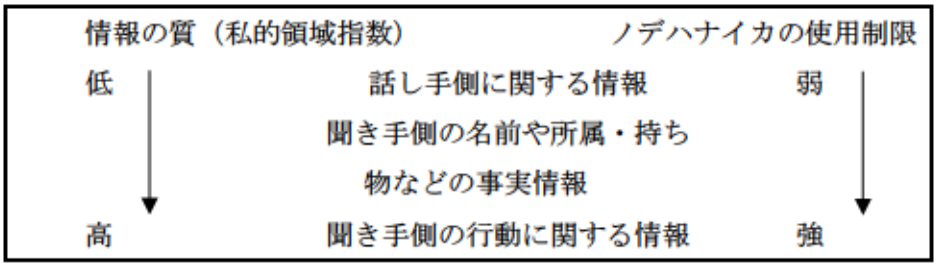

図 12 情報の質と使用制限の相関関係（張 2008: 110）

以上から、「確認」用法のノデハナイカは、「陳述要求」の意図でもっともよく使われ、「感情要求」の意図での使用は少ないことがわかる。それは、確認する情報の質と深く関連するのである。つまり、聞き手の私的領域の中心部に踏み込んで推測し、さらに聞き手に確認することは聞き手のフェイスを侵害する可能性が高いため、主観的評価や感情について確認することは少ない。学習者に「確認」用法を指導する際に、このような使用の制限について言及したほうがよいだろう。

3.5 「婉曲」用法

従来の研究では、ノデハナイカの「婉曲」を単に「推測」用法の付属的な用法であると捉えることが多い。そして、用法の提示にとどまり、文章や談話に現れた具体的な使用場面や発話機能について深く分析したものは少ない。本論文では、「婉曲」用法を「推測」用法から取り出し、独立した用法として考察する。日本語教育への応用を念頭において、「婉曲」用法についての考察を、「前接形式」および「発話意図」をめぐって行う。

3.5.1 前接形式

表 11 に「婉曲」用法のノデハナイカの前接形式の上位 5 位を示す。

表 11 話し言葉における「婉曲」のノデハナイカの前接形式

順位	前接形式	計	独話	対話
1	いい	97（23.8%）	22（9.7%）	75（41.4%）
2	てもいい	35（8.6%）	18（7.9%）	17（9.4%）
3	ば／たら／といい	34（8.3%）	18（7.9%）	16（8.8%）
4	必要／重要／大事／大切	31（7.6%）	27（11.9%）	4（2.2%）
5	ほうがいい	29（7.1%）	10（4.4%）	19（10.5%）

もっともよく前接するのは「いい」である。特に、「対話」におけるその割合は 4 割以上に達している。（78）はその例である。また、「てもいい」「ば／たら／といい」「ほうがいい」のような評価を表す表現もよく前接する。そして、「独話」においては、「必要／重要／大事／大切」のような重要性を評価する表現の前接が多い。

（78） F020：なんでもないけど、（うん）送ったって、ほら。（うん）ね。（うん）これなんか、これなんかいいんじゃない、送って入れてあげたら。壊れやしないから。

F025：かわいい。

（対話，名大，038）

3.5.2 発話意図

ノデハナイカの「婉曲」用法を指導する際に、文脈と切り離して、形式そのものの意味だけを抽象的に説明するだけでは、学習者の理解と産出に役立ちにくいだろう。そのため、ノデハナイカが使われる文脈全体の発話意図[10]の考察が重要なポイントになる。なぜなら、理解レベルから言えば、ノデハナイカが何を言うためによく使われるのかをわかれば、実際のコミュニケーションで、相手の発話意図を理解するための手がかりになる。また、産出レベルから言えば、学習者はその意図で発話しようとする際に、ノデハナイカを想起しやすくなると思われる。

まず、「独話」における「婉曲」用法を見る。「独話」においては、「対話」のようなやりとりのできる相手がいないが、聞き手は存在し、聞き手との人間関係を意識しながら発話を展開するのが一般的である。そのため、「婉曲」用法の用例は少なからず見られる。「独話」における「婉曲」用法のノデハナイカは、「意見・評価婉曲表明」「提案・助言」および「反論」をするために使われている。

「独話」において「婉曲」のノデハナイカは（79）のように、「意見・評価婉曲表明」のためにもっともよく用いられている。（79）においては、学会で話し手が「なぜ報道記事を使ったのか」について説明する際に、理由を述べた上で「報道記事がいい」という評

[10] 発話意図とは、話し手の発話の目的である。発話意図の種類が様々あり、たとえば、忠告・助言、勧誘、依頼、指示・命令、許可、申し出、叙述、宣言、応答、質問、確認などがある。

価を出している。その評価の表明を回避するためにノデハナイカを使用しているのである。また、(80) のような「提案・助言」、(81) のような「反論」を述べるために用いられることもある。

(79) 【意見・評価婉曲表明】

そこでこの報道記事を使えばある程度その目的などが限定されるので取り敢えず取っ掛かりとしてはこの報道記事がいいのではないかと考えて報道記事を使っています

(独話, CSJ 学会, A03M0465)

(80) 【提案・助言】

皆さんもえーシンガポールへ行かれることがあったら（中略）私は是非そういう体験も一遍してみたらいいのではないかと思います

(独話, CSJ 模擬, S07M0911)

(81) 【反論】

従来法としましてえーひひ非常にえー一般的に使われてる方法があります（中略）この波で表わしてるえー波形がえーとこのポストフィルターによるスペクトルの特性を表わしておりますと幾つかこのんこれ見ますと幾つか問題点があるんじゃないかという風に思われます

(独話, CSJ 学会, A01M0566)

また、「対話」における「婉曲」用法のノデハナイカは、「独話」に見られた発話意図以外に、(82) のように、聞き手に対して「慰め」を与えるために使われる用例も見られた。(82) において、F154 は声が大きいことが他の人に指摘されたという文脈に、F130 は「いいんじゃない」を用いて F154 の不安の感情を和らげている。

(82) 【慰め】

F130：あと、ハイになると声がおっきいかも。でも普段はそんなおっきい声で話せない。

F154：あー。あたしそんなに声おっきい。

F130：声が通るんだと思う。

F154：だからちょっと興奮してボリュームが上がると、とってもとっても鼓膜に響くのかなあ。

F130：いや。いいんじゃない、それはいいんじゃない、別に。あたしは、うらやましいかぎりです。

(対話, 名大, 113)

3.5.3 表現効果

日本語教育において、ノデハナイカにどのような表現効果があるかを学習者に明示することで、学習者の理解および使用を促進できると考え、本節では「婉曲」のノデハナイカの表現効果を考察することにする。

まず、先行研究における指摘を見る。「婉曲」用法のノデハナイカについて、安達（1999: 93）は、①「婉曲な情報提供によって丁寧さを生じさせる効果」と②「話し手の評価的な主張をやわらげる効果」があると述べている。①の場合、たとえば、自分の席に誰かが座っているという状況では、(83a) のようにノデハナイカを使って間接的な情報提供を行うのが普通であり、(83b) のような直接的な情報提供文を用いると聞き手への配慮に欠ける表現になると説明している。また、②の例は（84）であり、「べきだ」などの話し手の価値判断を表す評価のモダリティの形式が使われるとき、ノデハナイカをともなうことによって、強い主張のニュアンスが出るのを避けるという効果が見られると安達が述べている。

（83） A「失礼ですが、席を{a.お間違えではありませんか／ b.？　お間違えですよ}」
B 「あ、そうですか。それは失礼しました」

（安達 1999:93）

（84） 最高裁で反対意見を貫いた伊藤正己裁判官はのべている。「思想や信条の領域において、その保証が意味をもつのは、多数者の嫌悪する少数者の思想や信条である」と。大きな組織は小さな個人の信仰のありようについて、それがたとえ気に入らないもであっても、もっと寛容であるべきではないか。

（安達 1999:94, 「天声人語」1988 年 6 月 2 日）

収集した実例を見ると、「提案・助言」、「反論」および「慰め」の発話意図で使われるノデハナイカに①「婉曲な情報提供によって丁寧さを生じさせる効果」がある。「反論」のような相手と異なる意見を述べること、「提案・助言」「慰め」のような聞き手になにかするように圧力をかけるような行為は、相手のフェイスを脅かす FTA（Face Threatening Act（Brown & Levinson 1987）となるリスクが高い。ノデハナイカの使用によってそれを回避する働きがある。また、「意見・評価婉曲表明」のために使われるノデハナイカには、②「話し手の評価的な主張をやわらげる効果」が読み取れる。話し手が自分自身の意見や評価を述べる場合に、断定形で言い切れるにも関わらず、相手が自分と異なる意見や評価を持つ可能性を想定してノデハナイカによって間接的に述べることで、やわらげた言い方になるのであろう。この 2 つの表現効果はノデハナイカの意味の面の不確かさから来ていると思われる。

ここで、「提案・助言」および「慰め」の意図で発せられたノデハナイカの表現効果について、もうすこし考えたい。「提案・助言」および「慰め」の用例を見れば、ノデハナイカの使用でたしかに前述した丁寧さを生じさせる効果があるが、それに加えて、「話し

手の意見を積極的に聞き手に共有させる」という効果も読み取れるだろう。(86) で説明すると、声が大きいことで困っている F154 に対して、F130 は「いい」という自分の意見にノデハナイカを付加することによって、積極的に F154 に同じように考えさせることで、「慰め」の意図を達成させるのである。田中 (2013: 43) は、ノデハナイカに「相手に投げかけ」のニュアンスがあり、「その投げかけによって相手の考えや気持ちを変えさせようとすることが慰めにつながる」と指摘している。つまり、このような意見を積極的に聞き手に共有させるという表現効果は、ノデハナイカの形式面の疑問形式から来ていると言えるだろう。また、ノデハナイカはしばしば (86) のように、講演の最後の締めくくりの箇所で、主張や意見を総括的に述べる際に使われる。これも、積極的に聞き手に共有させるという表現効果を活用しているのではないかと考えられる。

(85) 【慰め】

F130：あと、ハイになると声がおっきいかも。でも普段はそんなおっきい声で話せない。

F154：あー。あたしそんなに声おっきい。

F130：声が通るんだと思う。

F154：だからちょっと興奮してボリュームが上がると、とってもとっても鼓膜に響くのかなあ。

F130：いや。いいんじゃない、それはいいんじゃない、別に。あたしは、うらやまいかぎりです。

((82) の再掲, 対話, 名大, 113)

(86) 【講演の締めくくり】

自分達のえー将来のえ子供や孫にえー美しい地球をえー世界遺産としてそのまま残していければえーいかなくてはえーならないのではないかと思います以上です

(独話, CSJ 模擬, S11M0517)

「婉曲」用法についての考察をまとめると、前接形式からみると、「いい」、「てもいい」、「ば／たら／といい」、「ほうがいい」、「必要／重要／大事／大切」が前接する用例が多い。また、発話意図からみると、「意見・評価婉曲表明」「提案・助言」「反論」「慰め」の意図でよく使われている。さらに、表現効果について考えると、ノデハナイカの意味の不確実さから、「婉曲な情報提供によって丁寧さを生じさせる効果」と「話し手の評価的な主張をやわらげる効果」という表現効果が生じて、疑問形式から、「話し手の意見を積極的に聞き手に共有させる」という表現効果が生じる。日本語教育において、「婉曲」用法の発話意図および表現効果を、例文や教師の解説などによって、学習者に明示することで、学習者の理解および使用を促進できるだろう。

3.6 まとめ

本節では、形式の面と意味の面から、JP による話し言葉におけるノデハナイカの使用実態について考察し、以下のような結果が得られた。

A. 後接形式と共起語：

①. 「一般形」は「言い切り」での使用が非常に少ない。「と／という」節および「かな」がよく後接する。

②. 思考動詞との共起が多い。また、他人の意見などを引用する際やネガティブな心理状態を表す際によく使われる。日本語教育では「一般形」について、「んじゃないかと思う」のようなかたまりで導入したほうが望ましい。

B. 「推測」のノデハナイカ：

①. 直感的な推測や、根拠に基づいた推測など、話し手の多様な認識段階の推測を表すことができ、よく応答文として使われる。日本語教育では、学習者の産出を促すために、応答文として使用されるノデハナイカについての指導が求められる。

②. 伺うニュアンスを帯びる場合はあるが、話し手の推測を述べ立てることが主たる用法である。

C. 「確認」のノデハナイカ：

「陳述要求」の意図でよく使われるが、「感情要求」の意図での使用が少ない。それは、確認する情報の質と深く関連する。「確認」用法を指導する際には、主観的評価や感情についての確認は失礼になりやすいことを指導すべきである。

D. 「婉曲」のノデハナイカ：

①. 前接形式に「いい」、「てもいい」、「ば／たら／といい」、「ほうがいい」、「必要／重要／大事／大切」が多い。

②. 発話意図からみると、「意見・評価婉曲表明」「提案・助言」「反論」「慰め」の意図でよく使われる。

③. 表現効果について考えると、意味の不確実さから、「婉曲な情報提供によって丁寧さを生じさせる効果」と「話し手の評価的な主張をやわらげる効果」という表現効果が生じて、疑問形式から、「話し手の意見を積極的に聞き手に共有させる」という表現効果が生じる。日本語教育では「婉曲」用法の発話意図および表現効果を学習者に明示すべきである。

4. 中国語話者によるノデハナイカの使用実態ー書き言葉

本節ではノデハナイカについて、JP と対照しながら、CN による書き言葉における使用実態を調査する。なお、調査対象者は中級以上に達している CN に限定する。本節の構成は以下のとおりである。4.1 で調査方法および結果を述べる。4.2 で形式の面から、出現形

および後接形式について考察する。4.2〜4.4 では、タスク内容別で、ノデハナイカを意味の面から考察する。4.6 で考察の結果をまとめる。

4.1 調査の概要および結果

4.1.1 使用したコーパスおよび調査方法

JP と対照しながら CN による書き言葉におけるダロウの使用実態を調査するために、YNU と JCK を使用して調査を行う。YNU と JCK における各タスクの内容は、以下のとおりである。

【YNU の各タスクの内容】

タスク① 面識のない先生に図書を借りる
タスク② 友人に図書を借りる
タスク③ デジカメの販売台数に関するグラフを説明する
タスク④ 学長に奨学金増額の必要性を訴える
タスク⑤ 入院中の後輩に励ましの手紙を書く
タスク⑥ 市民病院の閉鎖について投書する
タスク⑦ ゼミの先生に観光スポット・名物を紹介する
タスク⑧ 先輩に起こった出来事を友人に教える
タスク⑨ 広報誌で国の料理を紹介する
タスク⑩ 先生に早期英語教育について意見を述べる
タスク⑪ 友人に早期英語教育について意見を述べる
タスク⑫ 小学生新聞で七夕の物語を紹介する

（金澤編 2014: 53）

【JCK の各タスクの内容】

意見文：晩婚化の原因とその展望について
説明文：自分の故郷について
歴史文：自分の趣味（昔から続けていること）について

本節では、YNU については、CN による 360 編（約 13.3 万字）と JP による 360 編（約 11.7 万字）の作文を対象とする。JCK については、CN による 60 編（約 12.9 万字）と JP による 60 編（約 13.6 万字）の作文を対象とする。対象とした作文から、ノデハナイカの用例を手作業で抽出する。これらのコーパスは、CN と JP に対して同じ作文タスクを課すことによって得た作文を収録しており、文章の内容が揃っているため、CN と JP によるノデハナイカの使用における違いが伺えると思われる。

4.1.2 調査結果

以上述べた調査方法によって抽出した各コーパスにおけるノデハナイカの件数を表 12

に示す。1 万字あたりの合計件数から見れば、CN によるノデハナイカの件数は JP の件数を大きく下回っており、JP の約 3 割にすぎない。

表 12 CN と JP によるノデハナイカの件数

書き手	YNU										JCK				合計（1 万字あたり）
	③	④	⑤	⑥	⑦	⑨	⑩	⑪	⑫	小計	説明	意見	歴史	小計	
CN		2	4	6			8	8	2	30	1	3	7	11	41（1.5）
JP	2	3	8	7	3	1	15	13	2	54	13	54	10	77	131（5.2）

ところで、YNU の各タスクはその内容によって、JCK における分類方法に沿って、説明文、意見文、歴史文の 3 種類に分けることが可能である。したがって、YNU と JCK を合わせて、表 13 のように整理することができる。この 3 種類の作文においては、意見文におけるノデハナイカの件数がもっとも多く、CN と JP による件数の差ももっとも顕著である。また、説明文においては、CN によるノデハナイカ件数は JP の 7 分の 1 であり、非常に少ない。歴史文の場合、CN と JP の件数はそれぞれ 11 件と 18 件であり、3 種類の中で差がもっとも小さい。では、具体的にどのような文脈や場面において、JP と CN によるノデハナイカの使用の有無に違いが生じるのだろうか。以下、実例に基づいて、JP の使用と対照しながら、4.2 では形式の面から、4.3～4.5 ではタスク内容別に、CN によるノデハナイカの使用実態を検討する。

表 13 CN と JP によるノデハナイカの件数（タスク内容別）

種類	コーパス	タスク内容	件数	
			CN	JP
説明文	YNU タスク③	デジカメの販売台数に関するグラフを説明する	3	21
	YNU タスク⑦	ゼミの先生に観光スポット・名物を紹介する		
	YNU タスク⑨	広報誌で国の料理を紹介する		
	YNU タスク⑫	小学生新聞で七夕の物語を紹介する		
	JCK「説明文」	自分の故郷について		
意見文	YNU タスク④	学長に奨学金増額の必要性を訴える	27	92
	YNU タスク⑥	市民病院の閉鎖について投書する		
	YNU タスク⑩	先生に早期英語教育について意見を述べる		
	YNU タスク⑪	友人に早期英語教育について意見を述べる		
	JCK「意見文」	晩婚化の原因とその展望について		
歴史文	YNU タスク⑤	入院中の後輩に励ましの手紙を書く	11	18
	JCK「歴史文」	自分の趣味（昔から続けていること）について		

4.2 形式の面からの考察

まず、図 13 に形式別のノデハナイカの件数を示す。JP に比べれば、CN によるノデハナイカの件数は、「簡略形」の場合はほぼ同じであるが、「一般形」と「複合形」においては差が大きい。「一般形」の場合、CN によるノデハナイカが 31 件あり、JP の 83 件より 52 件も少ない。また、「複合形」の場合、CN による件数は JP の 44 件より 39 件も少なく、5 件のみである。さらに、各形式が占める割合から見れば、CN は「簡略形」の割合が高く、「複合形」が低いことがわかる。

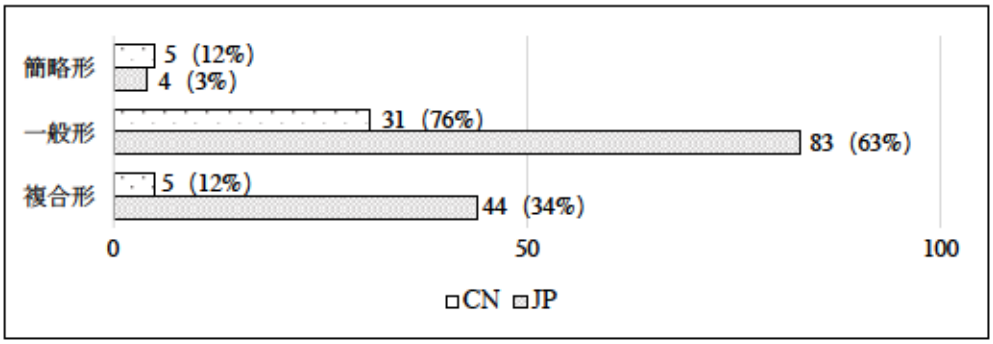

図 13 CN と JP によるノデハナイカの件数（形式別）

第 2 節で JP によるノデハナイカの使用実態調査から、「一般形」が「言い切り以外」の形で使用される傾向があることがわかった。では、CN による使用にも同じような傾向が見られるのだろうか。「一般形」の後接形式を示している図 14 から、そうではないことがわかる。CN の用例のうち「言い切り」が 5 割も占めており、その割合は JP より著しく高い。

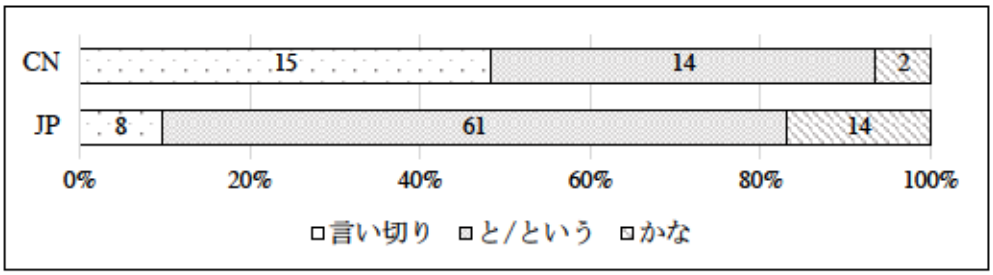

図 14 「一般形」ノデハナイカの後接形式

さらに、「言い切り以外」の場合の詳細を見ると、(87) のような「と／という」節がもっともよく後接するという点で CN は JP と同じであるが、その件数も割合も大きく JP を下回っている。そして、(88) のようなノデハナイカに「かな」が後接する用例は、CN の使用においては非常に少ない。

(87)　また、小学生 3 年生からだと子供のかんじょう感性で楽しく学ぶこともでき、よりはやく英語に親しむことができるのではないかと思います。

(CN, YNU タスク⑩, C049)

(88)　私は反対でもないけど賛成もしないよ。だけど週 2 はやらなくていいんじゃないかな。

(JP, YNU タスク⑪, J021)

形式の面からの考察は以下のようにまとめられる。まず、JP に比べれば、CN では「複合形」の使用が特に少ない。また、「一般形」の場合、CN は「言い切り」の形を多用している。その原因として、まず、CN は「一般形」が「言い切り以外」の形で使用される傾向に対する認識が欠けていることがあげられる。また、「ノデハナイカ＋かな」という組み合わせの習得の不十分さも、それに関連していると考えられる。

4.3 説明文におけるノデハナイカ

説明文におけるノデハナイカを用法別で分類した結果を図 15 に示す。「推測」も「婉曲」も、CN の件数が JP より少ないが、「推測」のほうの差がより大きい。以下では、説明文における「推測」のノデハナイカを中心に、具体例に基づいて考察していく。

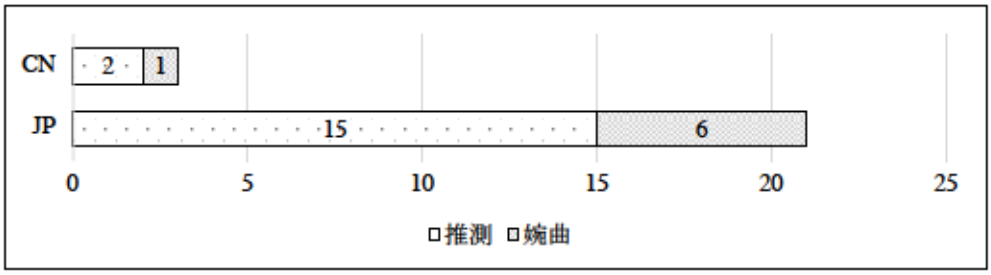

図 15 説明文におけるノデハナイカの用法

まず、CN による「推測」用法のノデハナイカの実例を（89）（90）に示す。2 件とも読み手の考えや状況などについての推測である。（89）において、「小学生新聞で七夕の物語を紹介する」文章の冒頭で、ノデハナイカによって読み手の考えを推測しながら話題を導入するのである。（90）は「自分の故郷について」という文章の終りの部分で、読み手に故郷への観光を薦める際に、書き手は読み手の立場になり、故郷に来たらどのような利点があるのかについてノデハナイカで推測している。このようなノデハナイカには、読み手との距離を縮め、そして読み手の共感を呼ぶといった表現効果があると思われる。

(89)　みなさんは、7 月と言えば何が思い浮びますか。七巧という人は多いのではありませんか。

(CN, YNU タスク⑫, C001)

(90)　私の故郷を紹介した後で、あなたたちがどう気持ですか？　暇とかゴールデンウイークなどのゆとりがあれば、ぜひ、来てください。本心からご歓迎いたします。私の故郷には意外な収穫をしてもらうのではないかと考えられます。

（CN, JCK「説明文」, c01－1）

JP の用例には上記（89）のような話題導入のために聞き手の考えや経験などを推測する用例が 6 件あり、すべて JCK の「説明文」に現れる。CN と JP の件数に差がある原因として、話題を導入する仕方の違いがあげられる。JCK の「説明文」において、JP の用例には、聞き手の考えや経験についての推測で話題を導入する用例が計 22 件[11]あり、そのうちの 6 件はノデハナイカである。一方、CN の用例には、それは 1 件のみ[12]であり、その代わりに、(91) のような直接的な話題導入が多く見られる。話題導入に関して、楊 (2011) は話題化までのプロセスを「即時的開始」と「漸次的開始」に分類した上で、日本語と中国語の会話を分析し、中国語では前者のほうが多いと指摘している。説明文に見られた話題導入の仕方の違いには、母語の言語習慣が CN の日本語作文に影響しているのではないかと考えられる。また、上記（90）のような、聞き手の立場から薦める理由を述べる際に使われるノデハナイカは JP の用例に 3 件あるが、CN との差は大きくない。

(91)　これから私が私の出身地を紹介しましょう。まず、万里の長城だ。万里の長城は中国の歴代王朝が北方辺境防衛のために造った大城堡だった。

（CN, JCK「説明文」, c15－1）

次に、JP は使うが、CN の使用は見られない場合を見る。それは（92）のような、これからの事態展開について推測する場合である。JP による 3 件のうちの 2 件は、YNU のタスク③に現れる。(92) では、書き手はグラフで示されているデータについて説明した後、ノデハナイカによって「今後の販売台数」について予測している。このタスクでは、今後の状況を予測することが明示的に要求されてはいないが、JP による 30 編の作文のうち、それに言及しているものが 4 編あり、そのうちの 2 編にノデハナイカが使われている[13]。一方、CN の場合、事態展開について推測する作文が 2 編あるが、いずれもノデハナイカの用例ではない[14]。

---

[11] JP による 22 件のうちの 6 件はノデハナイカの用例である。ほかに、ダロウが 10 件、「～と思う」が 4 件、「かもしれない」が 2 件ある。

[12] CN による 1 件は「かもしれない」の用例である。

[13] JP によるほかの 2 編について、1 つはダロウによって推測している。もう 1 つは「今後もさらなる成長が期待されており、10 万台越えも目前だ」のように推測している。

[14] CN による 2 編について、1 つは「2010 年以降は増える見込みである」のように推測している。もう 1 つは「これからも増えていくでしょうか」のような「疑念」のダロウの用例である。

(92)　その後、2010 年、現在までは、上向きにある。近い将来には、10 万台をこえるのではないかと考えられる。

(JP, YNU タスク③, J003)

説明文における「推測」用法のノデハナイカについての考察をまとめると、まず、CN による使用が少ないのは、ノデハナイカによって読み手の考えを推測しながら話題を導入する用例である。これは、CN の母語の言語習慣に影響され、話題導入の仕方の違いによるものだと考えられる。また、説明文における事態展開について予測する際には、CN によるノデハナイカの使用は見られない。

4.4 意見文におけるノデハナイカ

意見文の各タスクにおけるノデハナイカを用法別に分類した結果を表 14 に示す。合計件数から見れば、いずれの用法も CN の件数が少ないが、「推測」用法のほうの差がより大きい。以下では、意見文におけるノデハナイカについて、「推測」と「婉曲」に分けて、それぞれの具体例に基づいて考察していく。

表 14 意見文の各タスクにおけるノデハナイカの用法

タスク	内容	推測		婉曲	
		CN	JP	CN	JP
YNU タスク④	学長に奨学金増額の必要性を訴える	1	3	1	0
YNU タスク⑥	市民病院の閉鎖について投書する	3	4	3	3
YNU タスク⑩	先生に早期英語教育について意見を述べる	4	5	4	10
YNU タスク⑪	友人に早期英語教育について意見を述べる	4	5	4	8
JCK「意見文」	晩婚化の原因とその展望について	2	41	1	13
計		14	58	13	34

4.4.1 意見文における「推測」のノデハナイカ

意見文における「推測」のノデハナイカについて、推測する内容によって分類した結果を図 16 に示す。CN の使用は単一的であり、事態展開の推測に集中している。しかし、これでも 11 件のみであり、JP による 33 件の 3 分の 1 にすぎない。また、JP の用例には、原因を推測するノデハナイカが 17 件あるが、CN による使用は見られない。

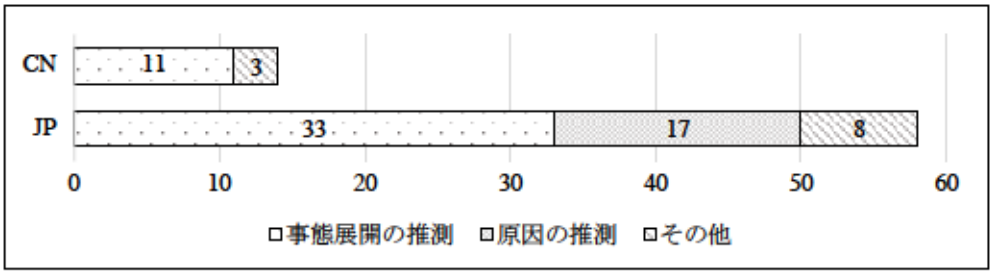

図 16 意見文における「推測」のノデハナイカ

まず、事態展開を推測するノデハナイカの使用について考察する。(93) ～ (95) は JP による実例である。(93) において、学長に奨学金増額の必要性を訴えるために、まず奨学金がない状況を想像し、それによって招かれる望ましくない結果を推測する際に、ノデハナイカが使われている。(94) において、ノデハナイカは「もし病院が閉鎖されたら、どのような結果を招くか」という事態展開の文脈に現れている。これによって病院閉鎖に対する反対意見の正当性を表すのである。(95) において、ノデハナイカは引用節に現れ、「早期英語教育を行う」ことの結果を推測する際に使われている。

(93) そこで、生活費を稼ぐ為にアルバイトを沢山しなければならないという状況が出来上がってしまうと、学生の本業である学業が疎かになりかねないのではないでしょうか。

(JP, YNU タスク④, J028)

(94) 産婦人科も、周りにはないため、なくなってしまうと、安心して子どもを産めなくなってしまうのではないでしょうか。

(JP, YNU タスク⑥, J006)

(95) 早期英語教育を行うことで、日本語・英語共に中途半端なまま成長してしまう可能性もありますし、2 か国語を学ぶということは、“日本人だ”というアイデンティティの確立ができない、また遅くなってしまうのではないかとの懸念もあります。

(JP, YNU タスク⑩, J017)

無論、事態展開を推測する際に、ノデハナイカは唯一の選択肢ではない。そのため、CN の件数が JP より少ないことだけで、問題があるとは言えない。では、CN はどのように事態展開を推測するのだろうか。これを明確にするためには、意見文から、CN によるすべての事態展開を推測する用例を取り出す必要がある。比較のために、JP の用例も取り出して、CN と JP が使う表現とそれぞれの割合を図 17 に示す。

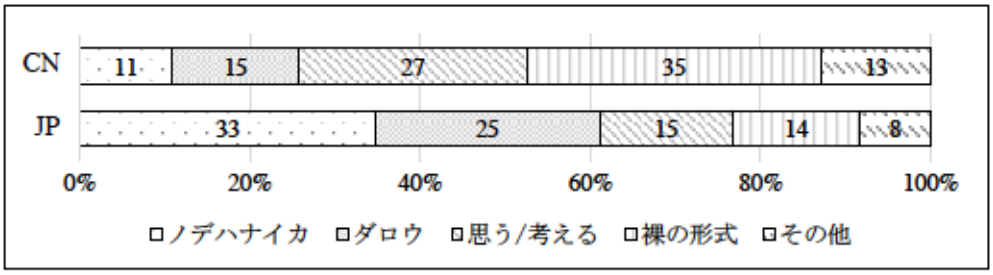

図 17 意見文における事態展開予測を表す表現[15]

CN と JP による事態展開を推測する文がそれぞれ 101 件と 95 件ある。そのうち、CN によるノデハナイカの用例は 11 件のみである。ダロウがやや多く 15 件あるが、JP の 25 件とはまだ差がある。一方、CN の用例にはモダリティ形式を付加しない「裸の形式」が多く、事態展開を予測する文の 3 分の 1 以上を占めている。JP の用例にも「裸の形式」があるが、件数は CN より少ない。そして 14 件すべてが（96）のように YNU のタスク⑥に現れている。このタスクでは、タスクシートに「この病院には近隣の町にはない産婦人科、リハビリテーション科がある」という前提が提示されている。この場合、「遠くの病院まで通わなければなりません」ということは未来の事態展開ではあるが、ほぼ断定できる結果であるため、「裸の形式」を使用しても不自然ではない。

（96） リハビリテーション科がもしこの近くになくなってしまったら、遠くの病院まで通わなければなりません。

（JP, YNU タスク⑥, J018）

一方、CN による「裸の形式」によって事態展開を推測する文には、（97）～（99）のような不自然な文が見られる。（97）では、心配されている内容は「学業に悪影響を与えてしまう」可能性があることである。必ずそのようになるとは断定できないため、「悪影響を与えてしまうのではないかと心配されています」のほうがよりふさわしいであろう。（98）は仮定条件の帰結として事態展開についての推測であり、（99）は晩婚化の今後の発展についての推測である。どちらも断言できない事柄について、CN は「裸の形式」を使用している。その結果、読み手に違和感をもたらす可能性がある。

（97） 留学生のみんな生活のため、アルバイトも非常に頑張っていますが、やりすぎだと学業に悪影響を与えてしまうと心配されています。

（CN, YNU④, C005）

（Cf. 留学生のみんな生活のため、アルバイトも非常に頑張っていますが、やりすぎだと学業に悪影響を与えてしまうのではないかと心配されています。）

[15] 「その他」に、「かもしれない」「ちがいない」などがある。また、複数の形式が並列的に出現した場合は、もっとも内側に位置するモダリティを基準に分類する。例：「～だろうと思う」→ダロウ

(98)　そうしないと、女性たちは安心しないと思います。結婚と出産に踏み切れる人は少なくなります。(中略) そうすれば男性は家で子供の世話などやれるようになります。

(CN, JCK「意見文」, c30－2)

(Cf. 結婚と出産に踏み切れる人は少なくなるのではないですか。(中略) そうすれば男性は家で子供の世話などやれるようになるのではないですか。)

(99)　確かに、晩婚化もたくさんの影響を持ってきた。たとえば、人口の出生率が下げて、高齢化社会に入った。でも、今後、晩婚化が続いていく。

(CN, JCK「意見文」, c31－2)

(Cf. でも、今後、晩婚化が続いていくのではないか。)

次に、原因を推測する際に使われるノデハナイカについて考察する。JP の用例には、(100) のような原因推測のノデハナイカが 17 件あるが、CN の使用は見られない。CN がなぜノデハナイカを使用しないのかを明確にするためには、まず CN が実際にどのように原因を推測しているのかを考察する必要があろう。そのため、以下では、原因を述べることが明示的に要求される JCK の「意見文」(晩婚化の原因とその展望について) にしぼって、CN によるすべての原因推測の用例を取り出す。比較のために、JP の用例も取り出し、CN と JP が原因を推測する際に使う表現とそれぞれの割合を図 18 に示す。

(100)　つまり、晩婚化が進んだ理由の一つとして「早く結婚する意義を見出せなくなった」という点があるのではないだろうか。

(JP, JCK「意見文」, j17－2)

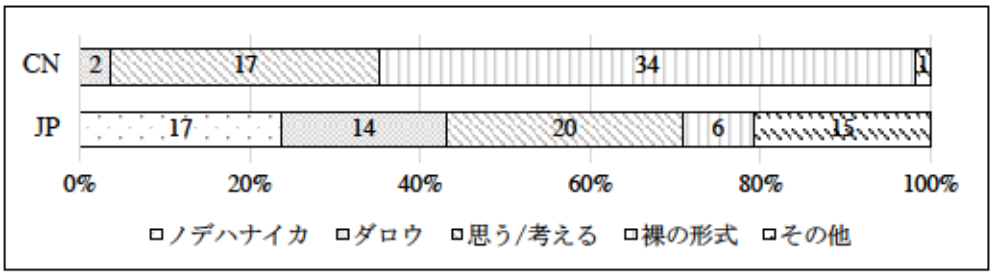

図 18 JCK「意見文」における原因推測を表す表現[16]

図 18 に示している CN のデータを見ればわかるように、ノデハナイカの使用は見られず、ダロウの使用はあるが、2 件のみである。一方、JP の場合、ノデハナイカとダロウが合わせて半分近くを占めている。また、CN が「裸の形式」を多用することが特徴的であり、その割合が 6 割以上に達している。次いで思考動詞「思う／考える」が 3 割以上であ

[16] 「その他」に、「言える」「感じる」などがある。

る。（101）は「裸の形式」の例である。CN は 5 つの原因をあげているが、いずれも推測を表すモダリティ形式を使用せず、裸の形式によって述べている。また、（102）は「思う／考える」によって原因を推測する例である。

（101） 一つの原因は経済の問題である。（中略）
もう一つの原因は、国家の現状である。（中略）
次の原因は、恋人を選ぶ標準は違うになる。（中略）
四番の原因は、学問を追求する意識。（中略）
最後の原因は、個人主義である。（後略）
（CN, JCK「意見文」, c18－2）

（102） 晩婚になって、基本の原因はいい相手が見つけないと思います。自分はどんなやつにしても、いい相手が見つけたいんです。
（CN, JCK「意見文」, c14－2）

一方、JP のデータに目を向けると、「裸の形式」は 1 割にもなっておらず、CN より著しく少ないことがわかる。また、JP が原因を推測する際に使う表現は、CN よりバラエティに富んでいる。「思う／考える」のほかに、ノデハナイカ、ダロウなどのモダリティもほぼ同じ頻度で使用されている。

以上の「推測」用法のノデハナイカについての考察から、CN による使用が少ない場面としてあげられるのは、事態展開の予測および原因の推測である。これは、「裸の形式」の多用と深く関連していると言える。

4.4.2 意見文における「婉曲」のノデハナイカ

次に、意見文における「婉曲」用法のノデハナイカについて考察する。（103）におけるノデハナイカは、書き手「意見・評価」を婉曲的にする働きがある。この場合、ノデハナイカを使わなくても文法的に間違っていないが、主張が強くなり、独断的なニュアンスになる恐れがある。特に、（104）のように、「晩婚意識も必要だ」「今後の生活にとっても重要だ」のように連続的に断定的な「意見・評価」を述べると、独断的なニュアンスになりやすいだろう。

（103） 確かに、英語ってグローバル社会の中でとっても大切だと思うけど、まずは自分の国の言語や文化を知ることが重要なんじゃないかな。
（JP, YNU タスク⑪, J017）

（104） 個人にとって、晩婚意識も必要だ。年齢の増えるにつれて、時間の重要性や自分の重要がはっきりしていく。どうすれば自分が幸福できるのを分かるから、今後の生活にとっても重要だ。
（CN, JCK「意見文」, c31－2）

件数から見れば、CN と JP による「婉曲」の用例はそれぞれ 13 件と 34 件であり、21 件もの差がある。この違いが生じた原因を探るために、「早期英語教育について意見を述べる」ことを求める YNU のタスク⑩と⑪をめぐって、実例に基づいて考察を行う。

まず、タスク⑩から、「意見・評価」の文をすべて取り出し、図 19 にまとめる。タスク⑩の内容は、先生に早期英語教育について意見を述べるメール文である。意見評価を述べる際に、CN も JP も思考動詞「思う／考える」をもっともよく使用し、「裸の形式」がほぼ同じ頻度で使用されているが、CN によるノデハナイカの使用は非常に少ない。

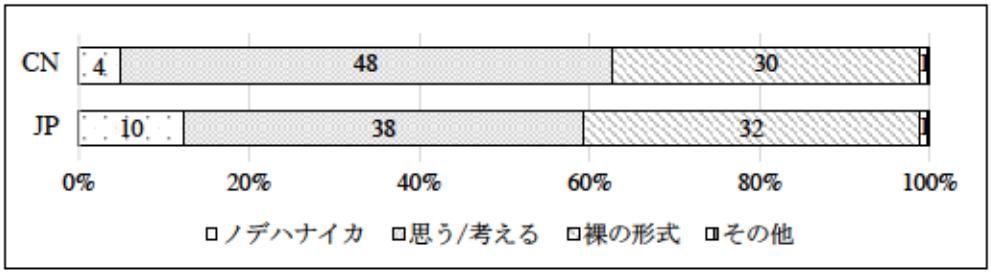

図 19 YNU タスク⑩における「意見・評価」を表す表現[17]

まず、「裸の形式」の使用について見よう。前節で見られた「推測」の際に CN が JP より「裸の形式」を多用する傾向とは違い、「意見・評価」を述べる場合、件数から大きな違いが見られない。しかし、JP による 32 件のうちの 28 件（88%）は、（105）のような賛成あるいは反対という立場表明である。これに対して、CN による 30 件のうちの 22 件（73%）は立場表明であるが、残りの約 3 割の「裸の形式」は（106）のように、立場表明以外の場合に使われている。つまり、「意見・評価」を述べる際に、JP はほぼ立場表明の場合にだけ「裸の形式」を使用しているが、CN は立場表明以外の場合にも、「裸の形式」を多用している。

（105） 早期英語教育について、私は賛成です。

（JP, YNU タスク⑩, J015）

（106） 英語は世界の共通言語です。どこの国の人も学ばなければならない。

（CN, YNU タスク⑩, C020）

伊集院・高橋（2004）、李（2007）、木下（2014b）の調査でも、同じような結果が出ている。「裸の形式」の多用は、誤用とは限らないが、学習者が思う以上に強い印象となる可能性がある（木下 2014b: 160）。その原因について、李（2007: 243）は中国語では「婉曲表現は一般的にあまり使われない」という CN の母語による影響をあげている。たとえば、（106）を中国語に訳すと、「英语是世界通用语言，无论哪个国家的人都必须学习」の

[17] 「その他」に、「言える」「感じる」がある。

ような婉曲表現を含まない文になり、特に強い印象がない。

次に、CN による「思う／考える」の使用を見る。ノデハナイカの使用が少ない代わりに、CN では「思う／考える」によって「意見・評価」を述べる用例が多い。（107）が示しているような「思う」の連続的な使用も少なくない。このような使用は間違いとは言えないものの、同じ表現の繰り返しは単調で内容も貧困な印象を与えやすいだろう。

（107） 自分自身のアイデンティティを形成させるには、母語への帰属意識が非常に重要だと、私は思っております。そのアイデンティティが形成される以前に、ほかの言語を教えては、むしろよくないと思います。根なし草のような人間は決してよい人間にはなれないと思います。

（CN, YNU タスク⑩, C059）

次に、タスク⑪に目を向ける。タスク⑪は、友人に早期英語教育について意見を述べるメール文であり、タスク⑩よりあらたまり度が低い。図 20 が示しているように、「終助詞」が使用されるようになり、「裸の形式」が占める割合は少なくなっている。しかし、依然として CN が「裸の形式」を多用する傾向が見られる。また、タスク⑩に比べて、JP ではノデハナイカの件数に大きな変化が見られない。つまり、ノデハナイカの使用があらたまり度にほぼ影響されず、先生に対しても、友人に対しても、多様な場面に使われていると言えよう。

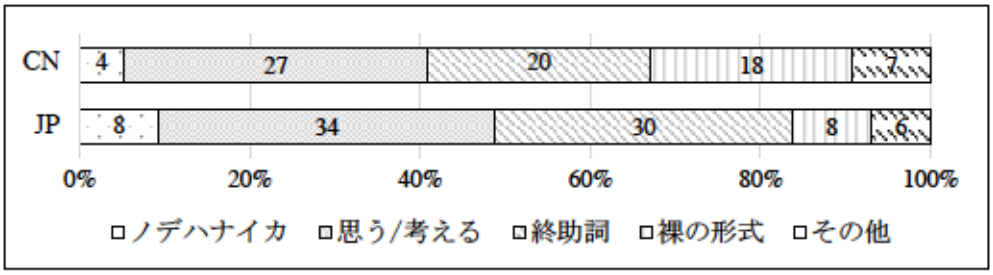

図 20 YNU タスク⑪における意見評価を表す表現[18]

意見文における「婉曲」用法のノデハナイカについての考察は以下のようにまとめられる。まず、CN によるノデハナイカの使用が少ないことは、「推測」用法と同じように「裸の形式」の多用と関連している。そして、思考動詞「思う／考える」によって意見や評価を述べる用例が多く、単調で内容が貧困な印象を与えやすい。

4.5 歴史文におけるノデハナイカ

歴史文においては、CN と JP によるノデハナイカの用例がそれぞれ 11 件と 18 件あり、

[18] 「その他」に、「言える」「感じる」がある。

3 種類の作文では差がもっとも小さいが、やはり CN による使用は JP より少ない。そして、11 件のうちの 4 件は同じ学習者による用例である。歴史文におけるノデハナイカを用法別に分類した結果を図 21 に示す。図 21 から、説明文と意見文には「推測」用法の使用が多いのに引き換え、歴史文には「婉曲」用法のほうがよく使用されることがわかる。以下では、歴史文における「婉曲」用法のノデハナイカを中心に、具体例に基づいて考察していく。

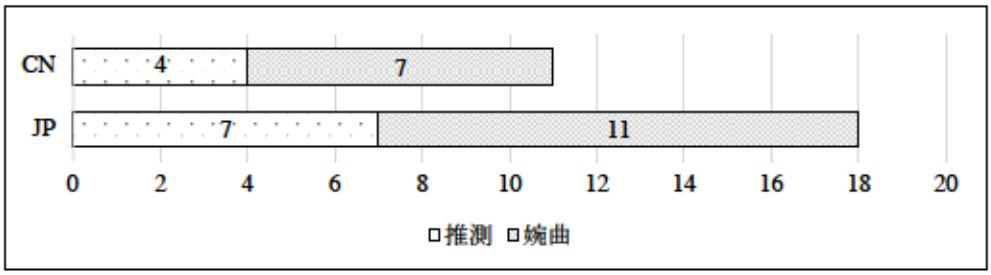

図 21 歴史文におけるノデハナイカの用法

まず、使用意図別に「婉曲」用法のノデハナイカの用例を「意見・評価婉曲表明」「提案・助言」「慰め」に分類し、その結果を図 22 に示す。

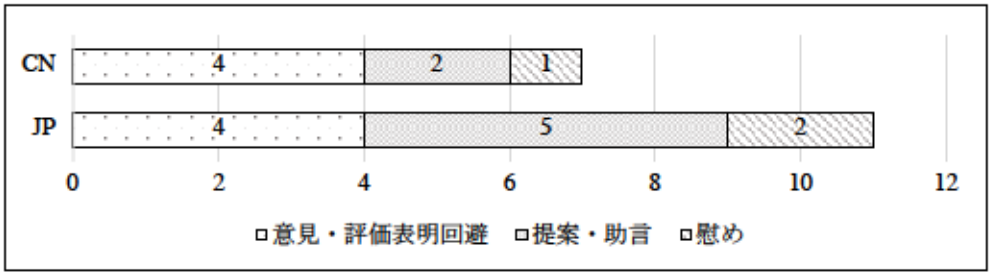

図 22 歴史文における「婉曲」のノデハナイカ

「意見・評価婉曲表明」の際には、CN と JP による件数は同じである。一方、CN による「提案・助言」および「慰め」の意図で使われるノデハナイカは JP より少ない。JP による「提案・助言」および「慰め」の用例は、すべて YNU のタスク⑤、つまり「自分の経験を踏まえ、後輩に励ましの手紙を書く」という作文に現れる。(108) のように後輩にアドバイスをする際や (109) のように慰める際にノデハナイカが使われている。

(108) まず、就活は、入院してでもできるところからやればいいんじゃないかな。

(JP, YNU タスク⑤, J006)

（109） どうしても入院ってハンデを考えちゃうけど、入院中だってネット使えば情報はいくらでも手に入るし、お見舞に来てくれた先輩に話を聞いたっていいし、別に遅れをとるってことはないんじゃないかな、って思うよ。

（JP, YNU タスク⑤, J025）

第 2 節での JP によるノデハナイカの使用実態調査からも、「婉曲」のノデハナイカは「提案・助言」「慰め」の意図でよく使用されるという結果を得た。それは、ノデハナイカに「話し手の意見を積極的に聞き手に共有させる」という効果があるからである。つまり、自分の意見にノデハナイカを付加することによって、積極的に相手に同じように考えさせ、「提案・助言」「慰め」の意図を達成させるのである。しかし、CN はこれらの意図で書く際に、あまりノデハナイカを使用する意識がない。たとえば、CN の作文にも、後輩にアドバイスをしたり、慰めたりする文が多くあるが、30 名の CN のうちノデハナイカを使用しているのは 1 名のみである。ほかの CN は（110）のように「思う」を使って提案したり、あるいは（111）のような「裸の形式」で慰めたりして、ニュアンスが硬くて不自然になる場合もある。

（110） とういうことで今の内はゆっくり休んだほうがいいと思います。

（CN, YNU タスク⑤, C012）

（111） だから、心配する必要がない。

（CN, YNU タスク⑤, C012）

4.6 まとめ

本節では、YNU と JCK を利用して、CN による書き言葉におけるノデハナイカの使用実態について、形式および用法から考察を行った。JP との比較から、以下のことがわかった。

A. 出現形および後接形式：

①. 「複合形」の使用が少ない。

②. 「一般形」の場合、「言い切り」の使用は JP より多い。特に「かな」がノデハナイカに後接する用例が少ない。CN に指導する際に、「複合形」の「のではないだろうか」「んじゃないでしょうか」、および「んじゃないかな」をかたまりとして導入したほうがよい。

B. 「推測」のノデハナイカ：

①. ノデハナイカによって読み手の考えを推測しながら話題を導入する用例が少ない。これは、CN の母語の言語習慣に関連しており、話題導入の仕方の違いによるものだと考えられる。

②. 事態展開および原因を推測する用例が少ない。これは、CN が「裸の形式」を多用することと関連している。そのため、CN に対する具体的な文法項目の指導に先立ち、

これらの文脈において、「裸の形式」のみではなく、推測を表す表現を使用するという意識をまず促す必要がある。その上で、ノデハナイカを指導する際に、事態展開および原因の推測を具体的な使用場面として提示する。さらに、その表現をまとめる機会を設け、そこでノデハナイカを繰り返して提示すると、より望ましい。

C. 「婉曲」のノデハナイカ：

①. 「提案・助言」「慰め」の意図での使用が少ない。これは「裸の形式」の多用と関連している。

②. 「思う／考える」によって「意見・評価」を述べる用例が多く、単調で内容が貧困な印象を与えやすい。CN に指導する際には、母語の影響を考慮する必要がある。つまり、「主張をやわらかくする表現効果がある」という抽象的な説明だけでは不十分であり、ノデハナイカの使用の有無によって、読み手に与える印象の違いなど具体的な表現効果の説明、そして「提案・助言」「慰め」といった具体的な使用場面の提示が求められる。

5. 中国語話者によるノデハナイカの使用実態－話し言葉

本節では、JP と対照しながら、CN による話し言葉におけるノデハナイカの使用実態について調査する。書き言葉と同じように、調査対象者は中級以上に達している CN に限定する。また、調査するデータは「独話」と「対話」からなる。本節の構成は以下のとおりである。5.1 で調査の概要および結果を述べる。5.2 で形式の面から、出現形および後接形式について考察する。5.3 と 5.4 で「独話」と「対話」におけるノデハナイカの使用実態について、実例に基づいて考察を行う。5.5 で考察の結果をまとめる。

5.1 調査の概要および結果

「独話」における CN の使用実態については、発話対照 DB の「スピーチ」における中級以上に達している 16 名の CN のデータを調査対象とする。また、比較のために、同じ課題で発話した 10 名の JP のデータも調査する。手作業で抽出した各課題におけるノデハナイカの件数を表 15 に示す。16 名の CN による 64 の「スピーチ」発話には、ノデハナイカの使用が見られなかった。一方、10 名の JP による 40 の発話に、ノデハナイカの用例が 33 件ある。特に「sp12」と「sp13」において、ノデハナイカは 1 発話につき 1 件以上、という高い頻度で使用されている。「独話」における使用実態については、5.3 で考察する。

表 15 「独話」におけるノデハナイカの件数

課題 / 話者	sp10	sp11	sp12	sp13	合計
CN（64 発話）	0	0	0	0	0
JP（40 発話）	1（0.1）	8（0.8）	13（1.3）	11（1.1）	33（0.8）

（（）内は 1 発話あたりの件数）

また、「対話」における CN の使用実態については、発話対照 DB および I－JAS を用い、「インタビュー」と「ロールプレイ」に分けて調査する。その結果を表 16 に示す。「インタビュー」においても、「ロールプレイ」においても、CN によるノデハナイカの 1 万字あたりの件数は JP より著しく少ない。「対話」における使用実態については、5.4 で考察する。

表 16 「対話」におけるノデハナイカの件数

課題 / 話者	インタビュー	ロールプレイ		合計
		RP2	RP6	
CN	8（0.2）	4（1.1）	0	12（0.2）
JP	71（3.5）	8（7.3）	10（12.5）	89（4.0）

（（）内は 1 万字あたりの件数）

5.2 形式の面からの考察

図 23 に形式別のノデハナイカの件数を示す。CN と JP によるノデハナイカの件数には大きな差があるが、「一般形」に集中していることは共通している。一方、JP は「簡略形」と「複合形」も使用するが、CN による使用は見られない。

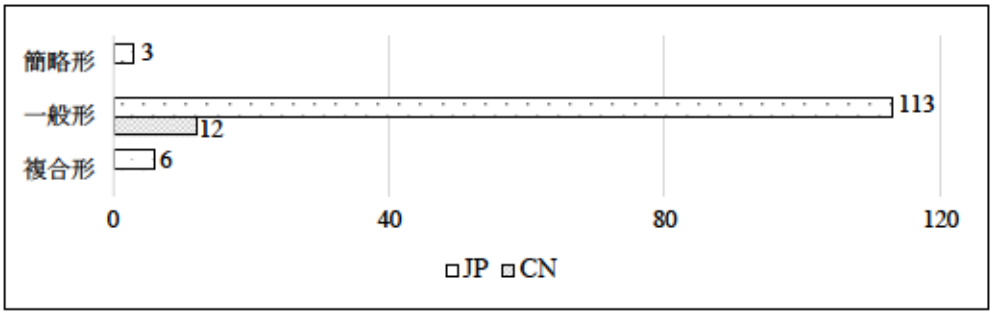

図 23 CN と JP によるノデハナイカの件数（形式別）

第 2 節での JP によるノデハナイカの使用実態調査から、「一般形」は、「言い切り以外」の形で使用される傾向があることがわかった。では、CN による使用でも同じような傾向が見られるのだろうか。「一般形」の後接形式を示している図 24 から、そうではないこと

がわかる。CN では「言い切り」が 5 割も占めており、その割合は JP より著しく高い。

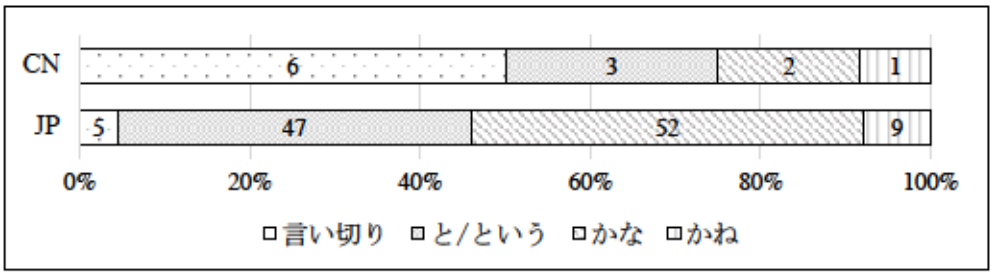

図 24 CN と JP による「一般形」のノデハナイカの後接形式

さらに、「言い切り以外」の場合の詳細を見ると、JP の場合、「かな」および「と／という」節がノデハナイカに後接する用例は合わせて 9 割近くを占めている一方、CN による使用は非常に少ない。特に、(112) のような「かな」の後ろにさらに「と／という」節が後接する用例は、JP では 41 件（36%）もあるが、CN では見られない。

(112) そういった自分の何か打ち込みたいことをするに当たって、肉体的やな制約とか、社会的な制約が、おそらく女性よりは少ないのではないかなあと思います
(JP, 発話対照 DB sp11, jp050)

5.3 「独話」におけるノデハナイカの使用実態

本論文で調査した「独話」のデータにおいては、JP と大きく異なり、CN によるノデハナイカの使用は見られない。その原因を探るために、まず、JP はどの課題で、ノデハナイカをどのように使用しているのかを明確にする必要がある。それを踏まえて、同じ場面では、CN がどのように発話しているのかを考察すれば、非用の原因が見えてくるだろう。そこで、以下では JP による使用が多く見られた話題「sp11」「sp12」「sp13」におけるノデハナイカの使用を見ていく。

5.3.1 「sp11」

「sp11」の内容を以下に再掲する。「sp11」において、JP による 8 件のノデハナイカの用例に、「推測」用法が 5 件、「婉曲」用法が 3 件ある。

【sp11】: 今度生まれるときは、男性がいいですか、女性がいいですか。理由を挙げて、あなた自身の考えを話してください。

(113) は「推測」の例である。「sp11」では、理由をあげることが明示的に要求されている。JP によるノデハナイカの用例は、(113) が示しているように、理由を説明する文脈に用いられている。つまり、「今度生まれるときは、女性であれば」という仮説に基づき、

どのような結果があるのかをノデハナイカによって推測し、それを「女性のほうがいい」という意見の理由としてあげているのである。ノデハナイカが推測しているのは、これからの事態展開である。

（113） 理由といえば、何といってももう、これまで男性として生きてきて経験してきたことと、多分女性として生きた場合っていうのは、全く違う人生歩めるんじゃないかなあという感じがしまして。

（JP, 発話対照 DB sp11, jp042）

このような、事態の展開を推測し、それを理由としてあげることが、JP の発話によく見られる理由の述べ方である。「sp11」における JP による 10 発話に、事態展開を推測して理由を述べることが 8 件あり、そのうちの 4 件がノデハナイカである[19]。CN ではこのような推測も多く見られ、16 発話に 12 件ある[20]。しかし、CN による事態展開の推測は JP と異なり、ノデハナイカを使わない一方、（114）と（115）のような「裸の形式」の使用が多い。

（114） 出産することは辛いかもしれませんが、それは、それによって、命の偉大さが感じられます。それは掛け替えの無い体験となります。

（CN, 発話対照 DB sp11, j cn059）

（Cf. （前略）、命の偉大さが感じられるのではないでしょうか。それは掛け替えの無い体験となるのではないでしょうか。）

（115） ですから私はそういう時無力感を感じました。もし私力があれば、絶対おばあさんをちゃんと立つようにしてあげます。

（CN, 発話対照 DB sp11, cn064）

（Cf. もし私力があれば、絶対おばあさんをちゃんと立つようにしてあげたのではないかと思います。）

（114）では、CN は「今度生まれるときは女性がいい」という意見の理由として、「出産すること」の展開を推測している。また、（115）では、CN は前文脈で「おばあさんを助けることができなかった」という失敗した経験を述べ、「もし私が男性で力があれば」という仮説に基づいて推測している。いずれも断言できない事柄であるが、CN は「裸の形式」を使用している。その結果、聞き手に違和感をもたらす可能性があるだろう。このような「裸の形式」の多用も、ノデハナイカの非用と関連していると思われる。

---

[19] ほかに「～と思う」が 3 件、「かな」が 1 件ある。「裸の形式」で事態展開を推測する用例は見られない。

[20] CN による 12 件には、「裸の形式」が 5 件、「～と思う」が 3 件、ダロウが 2 件、「かもしれない」が 2 件ある。

5.3.2 「sp12」と「sp13」におけるノデハナイカ

次に、「sp12」「sp13」におけるノデハナイカについて考察する。課題の内容を以下に再掲する。「sp12」と「sp13」においては、JP による 24 件のノデハナイカの用例に、「推測」用法が 6 件、「婉曲」用法が 18 件あり、いずれも「提案・助言」を行うために使われている。

【sp12】: 日本語（外国語）をより早く、効率的に勉強するために、どのような工夫をするといいと思いますか。あなた自身の経験も挙げながら、これから日本語（外国語）を勉強しようとする人に提案をしてあげてください。

【sp13】: あなたの家族の中に、「タバコが嫌いで、自分の周りでは誰にもタバコを吸ってもらいたくない」と思っている人、「タバコが好きで、リラックスするためにはタバコを吸うことがぜひ必要だ」と思っている人の両方がいるとします。家族の中でこのふたりがうまくやっていくためには、どうすればいいと思いますか。具体的な解決策の提案をしてください。

まず、JP による実例を見る。(116) は「婉曲」の例である。「これから外国語を勉強しようとする人に提案」する際に、JP は「一番良い」と、その学習方法を評価することによって、提案を行い、さらにノデハナイカを付加することで、その提案をより婉曲的にしているのである。また、(117) は「推測」の例である。話し手は「共通する場所が公平な場所にするという方法で解決していくと、どのような結果があるのか」を、ノデハナイカで推測することによって、提案を行っているのである。この 2 つの提案の仕方をそれぞれ「評価」と「結果推測」と呼ぶ。

(116) そしてできることなら、現地に行って、現地の言葉に触れる。それが、一番良い勉強なのではないでしょうか。

(JP, 発話対照 DB sp12, jp045)

(117) 共通する場所が公平な場所にするというふうなことが、どちらにも不満にならないんじゃないかなと思います。

(JP, 発話対照 DB sp12, jp038)

また、JP による使用について、もう 1 つ注目すべきことは、ノデハナイカの出現位置である。24 件のうちの 10 件のノデハナイカは、スピーチの最後の締めくくりの箇所で使われている。つまり、「sp12」「sp13」における JP による 20 発話のうちの半数が、ノデハナイカによってスピーチを締めくくっているのである。第 3 節における JP の使用実態調査からも、同じ現象が見られた。これは、ノデハナイカに話し手の意見を積極的に聞き手に共有させるという表現効果があるため、主張や意見を総括的に述べる際によく用いられるのだと考えられる。しかし、CN はこのようなスピーチの技術を身につけていないと

言えよう。

次に、CN が「提案・助言」のノデハナイカを使用しない原因を考察するために、CN が提案をする際に、どのような表現を使っているのかをまず明確にする必要がある。「sp12」と「sp13」におけるすべての「提案・助言」の文を取り出し、その結果を図 25 に示す。

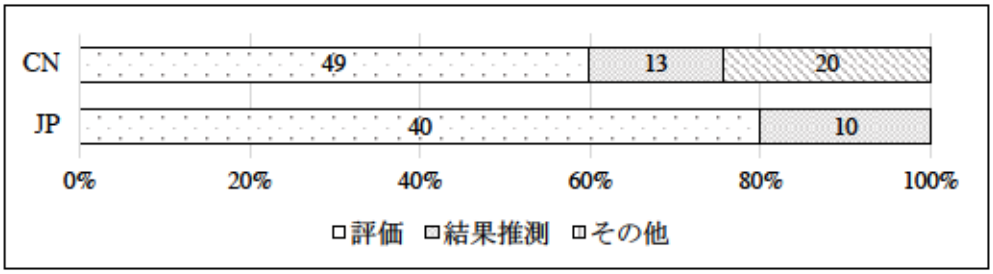

図 25 「sp12」と「sp13」における「提案・助言」の文

CN でも JP と同じように、「評価」と「結果推測」で提案を行う用例が見られるが、「その他」には、(118)(119)のように、JP に見られなかった「～てください」「～しましょう」などの行為要求表現も少なからず見られる。

(118) 皆もできるだけ、日本語の本を読んだり、テープを聞いたり日本語のドラマを見たりするようにしてください。できるだけ日本語の環境を作ってください。
(CN, 発話対照 DB sp12, cn067)

(119) だからさあ、たばこを吸うことが、止めるほうが良いと進言してみましょう。
(CN, 発話対照 DB sp13, cn058)

次に、「評価」と「結果推測」の文の文末表現に注目する。図 26 と図 27 からわかるように、ノデハナイカの代わりに、CN は「思う」で「評価」と「結果推測」を述べる場合が多い。(120)のように、連続で使用する例も少なくない。同じ表現の繰り返しは単調で内容も貧困な印象を与えやすいだろう。また、「評価」の文にも、「結果推測」の文にも、CN は(121)(122)のような「裸の形式」を使用するという点で JP と異なっている。ニュアンスが硬くて不自然になる場合もある。

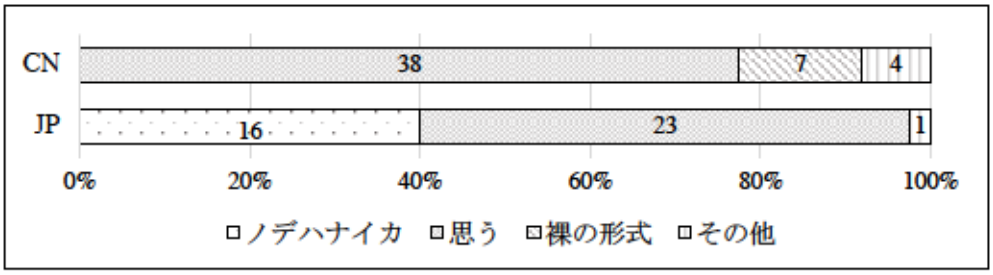

図 26 「評価」の文の文末表現[21]

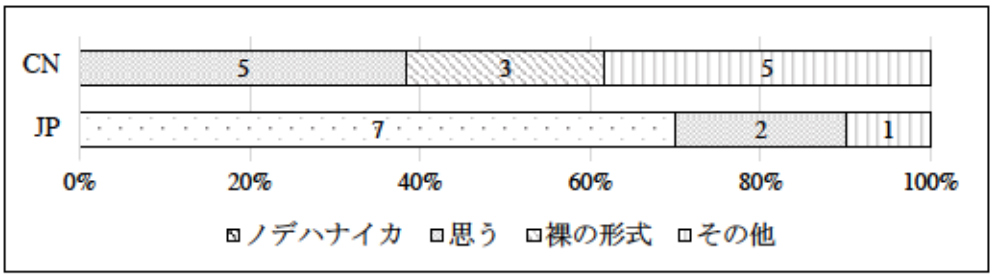

図 27 「結果推測」の文の文末表現[22]

(120) 努力して、毎日毎日続けるのはとても大切だと思います。話すの練習は、毎日本を読んで、又人に会う時できるだけ日本語で話すのはとても大切だと思います。

(CN, 発話対照 DB sp12, cn054)

(121) ですから普段はできるだけ多く練習しなければなりません。

(CN, 発話対照 DB sp12, cn059)

(122) 私はこのような 仕方と方法と、父と相談する。父は賢明な人と思います。もし私は言ったら、父は禁煙ことができます。

(CN, 発話対照 DB sp13, cn051)

5.4 「対話」におけるノデハナイカの使用実態

本節では、「対話」におけるノデハナイカの使用実態について、「インタビュー」と「ロールプレイ」に分けて、課題別に考察する。

5.4.1 「インタビュー」におけるノデハナイカの使用実態

「インタビュー」においては、JP は CN の 17.5 倍の頻度でノデハナイカを使用している。前述のように、「インタビュー」はある程度統一された話題で構成されている。図 28

[21] JP による「その他」の 1 件は「かな」である。CN による「その他」の 4 件に、「かな」が 2 件、ダロウと「ね」が 1 件ずつである。

[22] JP による「その他」の 1 件は「かな」である。CN による「その他」に、「かもしれない」が 2 件、ダロウ、「信じる」、「可能性がある」が 1 件ずつである。

に、ノデハナイカが「インタビュー」のどの話題に出現しているのかを示す。以下では、ノデハナイカの件数が比較的多い「過去の経験」「現在のこと」「意見陳述」における CN と JP による使用を比較する。

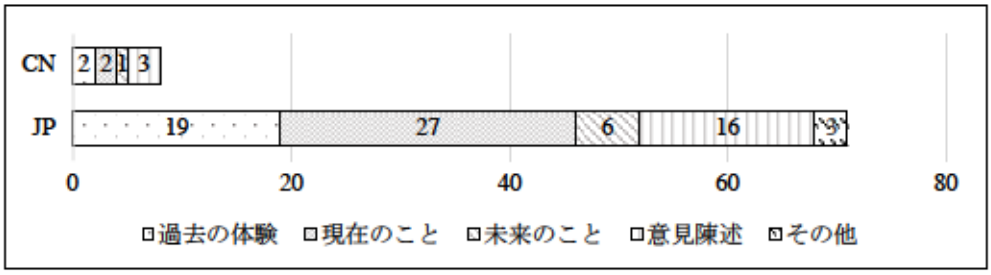

図 28 「インタビュー」にノデハナイカが出現した話題

まず、JP による「過去の体験」という話題におけるノデハナイカを見よう。JP による 19 件に、「推測」用法が 16 件、「婉曲」用法が 3 件ある。(123)(124)は「推測」用法の代表的な例である。(123)では、過去の怖い経験が話題になっている。その経験を語る際に、JP は「推測」のノデハナイカによって話し手の心内発話を述べ、当時の心情や気持ちを表している。また、(124)では、JP は記憶が曖昧になった過去の経験について述べる際に、「推測」のノデハナイカによって不確実さを示している。さらに、「婉曲」用法のノデハナイカは、(125)のように、自分を評価する際に使われることがある。

(123) JJJ24：まあインドの電車ってなんかほんとに、すごいわけですよ、天井とか、乗ってる人とか、窓から出てる人とか、
C　：ああいう感じですね
JJJ24：窓もないし、ドアもない、閉めてたら暑いからだと思いますけど、まあ、そしたら、もうギュウギュウ詰めですし、もう、お、落ちるんじゃないかと、うーん、まあでも、行き先もちょっとこれ本当に正しいのかなっていうレベルですね、うん

(JP, I－JAS, JJJ24－I)

(124) C　：へー、えで、どうしたんですか
JJJ18：やーどうしたんでしょうかね、その時はほんとにショックだったんですけど
C　：ですよねー、服しかないんですもん〈はい〉遊べないですよね
JJJ18：そうなんですよ、でもその後まあお年玉とかで何とかしたんじゃないですかねー

(JP, I－JAS, JJJ18－I)

(125) C　：えーと JJ さんって小さいお子さんの時ってどんな〈はい〉子供だったんですか

JJJ56：あーどんな子供、えー、まあ、野球とかもやってたので〈へー〉少年野球とかもやってたんで結構活発だったんじゃないかなと思いますけど

（JP, I－JAS, JJJ56－I）

一方、「過去の体験」における CN による 2 件は、「推測」と「婉曲」が 1 件ずつである。上記のような、心内発話および記憶が不確かな出来事を述べるノデハナイカの使用はない。（126）からわかるように、CN ははっきり覚えていない「お金を盗んだ理由」を述べる際に、「たぶん」という副詞でその不確実性を示している。自分を評価する際にも、ノデハナイカを使わず、（127）のように「変な子供」という「裸の形式」で直接的に評価を述べることが多い。

（126） CCH07：たとえば、うお母さんと、あのーお父さんの、お金を、んーぬー盗みました｛笑｝

C　：｛笑｝え、それはどうしてー？

CCH07：あーん、うーたぶん、んー、あのー、あーすあー

C　：お菓子を、買いたいとか？

CCH07：うん、たぶん、あーお菓子を買いたいとか、あのーん好きな物を買いたいとか〈へー〉、あのおー、お母さんおお、お父さん、くあー、おお母さんとお母さんの、お金を、んん盗んであの好きな物を買いに行きました｛笑｝

（CN, I－JAS, CCH07－I）

（127） C　：あのーCH さんは、小さい子供の時ってどんな子供だったんですか？

CCH07：うーあの時は〈んー〉、うー、あの時は、えー、ちょっと、うー、変な、子供｛笑｝

C　：変な子供って？

（CN, I－JAS, CCH06－I）

次に、「現在のこと」という話題におけるノデハナイカについて考察する。JP では「推測」用法が 16 件、「婉曲」用法が 11 件ある。特に、「出身地」という話題には、ノデハナイカの使用が多く見られる。たとえば、「推測」は（128）のように、「出身地」の現状という質問に対して、確実な情報を持っておらず、推測しながら答える際に使われている。また、（129）は「婉曲」の例である。出身地に関して、「おすすめ」が求められた際に、「提案・助言」を行うために、ノデハナイカが使われているのである。

（128） C　：農家がいっぱいあった

JJJ30：はい

C　：今は？　どうですか？

JJJ30：今は少ないーていうかもうほとんどないんじゃないですかね？

C　：あ、へー〈はい〉残念ですね、それは

（JP, I－JAS, JJJ30－I）

（129） C　：見たらいいよとかって、おすすめはありますか？

JJJ49：えー、あそう

（中略）

JJJ49：だから僕らもおすすめするなら飛騨高山とか、〈うーん、ああ〉古川村、あの古川の合掌造りとかご覧になった方がいいんじゃないですかっていう世界ですね

C　：あーなるほどねー

（JP, I－JAS, JJJ49－I）

一方、「現在のこと」について述べる際には、CN によるノデハナイカが 2 件のみある。「出身地」という話題についての発話に、ノデハナイカの用例はない。（130）では、不確実な情報を提供する際に、疑いの形式を使うべきところで、「か」を使うことで相手に問いかけるようなニュアンスになり、不自然になっている。また、「独話」にもこの傾向が見られたが、CN は「提案・助言」をする際に、ノデハナイカをあまり使用しない。CN によるほぼすべての提案が、（131）のように、観光地の名前を提示することにとどまっている。

（130） C　：じゃあ、あの昨日の朝はチンシュウ市ですよね

CCH08：はい

C　：じゃそのうち、朝何時に起きました？

CCH08：朝は一八時くらい起きましたか

（CN, I－JAS, CCH08－I）

（Cf. 朝は一八時くらい起きたんじゃないですかね）

（131） C　：たとえば私が今度北京に遊びに行ったとしたら〈はい〉、どこに、あのー、行ったらいいですか？　何か、アドバイス

CCH03：はい〈はい〉、えー、えーあのー、万里の長城とか〔笑〕

C　：あー

CCH03：えー、えこれ、あ、えー、えー、万里の長城とかあの、えー、故宮、とか、えー

C　：あーなるほどはいはい聞いたことあります

（CN, I－JAS, CCH03－I）

最後に、「意見陳述」という話題におけるノデハナイカに目を向ける。JP による 16 件のノデハナイカの用例には、「推測」と「婉曲」がそれぞれ 9 件と 7 件ある。「推測」はよく（132）（133）のように、未実現のことについて推測する際に使われる。（132）は「都会に住むか田舎に住むか」ということを議論する際に、未来の自分がどちらに住むかをノデハナイカで推測して、質問に答えている。また、（133）の「お金と時間とどちらが大事か」という議論において、JP はノデハナイカによって「もし時間があればなにができるのか」を推測し、それを「時間が大事」という主張の理由として提示しているのである。また、「婉曲」は、（134）のように「意見・評価」を述べる際に用いられている。

（132） C　：たとえば十年後とか二十年後に〈はい〉、なんか住むとしたら〈はい〉、都会と田舎とどちらに住みたいと思いますか？

JJJ20：そうですねー、なんかそれもすごく、迷っている、こととゆう〈はい〉、なんですけど〈はい〉、た、たぶん、都会に住んでるんじゃないかなと、思いますね

（JP, I－JAS, JJJ20－I）

（133） JJJ05：知識を蓄えたりとか〈うん〉、あの今後将来につながる形で有効活用、えーするために与えられた時間に、あ、として使えれば

C　：うんうん

JJJ05：えーそれが何倍にもなってお金、お金として何倍にもなって返って来るんじゃないかとゆうふうに考えています

（JP, I－JAS, JJJ05－I）

（134） C　：なるほどじゃあお金はその一、お金のためじゃないとおっしゃたのはお金はじゃあそそんなになくてもよい、まあなくてもよいってゆう

JJJ05：んーなくてんーあった方がたの、あ、あ、あ、ある人生も楽しいと思いますが〈うん〉、ただそんなになくてもいいんではないかと、思います

（JP, I－JAS, JJJ05－I）

「意見陳述」という話題における CN の用例を見ると、3 件はすべて理由を述べるために、未実現のことについて推測するものである。件数が少ないため一般化は難しいが、（135）が示しているように、上記（132）と同じような文脈において、CN と JP はノデハナイカの使用の有無に違いが生じている。また、（136）のように、「意見・評価」を述べる際にも、「独話」と同じく「思う」を多用する傾向が見られる。

（135） C　：うん、でも、す年取ったらではない、今から十年か二十年先です、だからあなたが、三十ぐらいの時ですね

CCH37：三十ぐらいは、たぶん都会に奮闘しています

（CN, I－JAS, CCH37－I）

(136) C　　：じゃあやっぱりじ、時間がほしいですか？

CCH37：はい

C　　：贅沢できないですよ？

CCH37：あ、まあ時間があればーあー自分の能力もどんどん上げると思います あー、能力を上げるとまあ、金もあると思います〈うんうんうん〉、んそんなにたに（金）が、あー必要ではありませんと思います

(CN, I－JAS, CCH37－I)

5.4.2 「ロールプレイ」におけるノデハナイカの使用実態

最後に、「ロールプレイ」におけるノデハナイカについて考察する。「ロールプレイ 2」の内容を再掲する。「ロールプレイ 2」において、CN と JP の件数はそれぞれ 4 件と 8 件である。

【RP2】あなたは、日本料理店でアルバイトをしています。接客スタッフとして注文を取ったり、料理を運んだりしています。店長さんから、「料理を作る人が一人やめたので、来月から料理を作る仕事を担当してほしい」と言われました。しかし、あなたは料理は苦手だし、日本人と話せる仕事がしたいので、この話を断りたいと思いました。店長に、料理の仕事の話をじょうずに断って、今の仕事を続けられるように話してください。

「ロールプレイ 2」における JP による実例を（137）（138）に示す。（137）では、「推測」のノデハナイカは「心配」の内容を述べる際に用いられ、店長からの依頼を断る理由の説明になっている。つまり、もし依頼されたとおり「料理を作る仕事」を担当したら、どのような結果を招くのかをノデハナイカで推測している。また、（138）は「婉曲」の例である。JP は「難しい」という意見を述べる際に、ノデハナイカを使用することで、断りをより婉曲的に行っている。JP による 8 件には、「推測」と「婉曲」用法が 4 件ずつある。

(137) JJJ17：まあ他の人ーがーあのー入られるー〈うんうん〉ようでしたら、その方をー優先にーしていただいてー

C　：はい

JJJ17：お力になかなかなれないんじゃないかっていう心配があるのでーで、どうしてもってゆうのでしたらーまあたとえば盛り付ける時のお皿を並べるとかー

C　：うんうんうんはい

JJJ17：そういった形でしたらー、お力にはなれるかと思いますけどー

C　：あーわかりました

(JP, I－JAS, JJJ17－RP2)

(138) C　：その、仕込みのような〈ええ〉ことを教えてもらいながらーちょっとず

つ覚えてもらったらいいかなーってゆう感じではいるんですよ

JJJ54：なるほど〈んー〉それだとしたら、でもあれじゃないですかやっぱりー、そう何佐藤さんゆうめたーね辞めたー穴を〈んー〉埋めるってゆうのは相当難しいんじゃないですかねー、だってほんとそうですねー、もう、ろくすっぽ洗い物すらやってないですからね

C　：{笑} あそう

(JP, I－JAS, JJJ54－RP2)

一方、CN による 4 件のうちの 3 件は「推測」用法であり、「婉曲」用法の使用は特に少ない。(139) や (140) のように、ストレートに「不可」を表明する例が多くある。また、(141) のような文において、「推測」のノデハナイカを使えば、より自然な文になると思われる。

(139) C　：そんなに料理が下手なのかな？

CCM06：はいー、(中略) そして、店長は他の人、を、探し、たらいいと思います、んーそんなことは私にとって、難しい

C　：そうですか

(CN, I－JAS, CCM06－RP2)

(140) C　：是非あなたに、変わってほしいと思うんですよー？

CCH15：はい、はーす、あーそうですか、あーでも、今まで私の仕事は (中略)

C　：うんうんうんうん

CCH15：そ、だからそれはだめです

(CN, I－JAS, CCH15－RP2)

(141) CCH12：ですから〈うーん〉、自分は、あ料理できる、料理することが、できるかどうか心配しています

C　：心配、そうですか

CCH12：あーもしなんか、えー、えもしなんか、し、間違いがあったら〈はい〉、絶対、えーお客様に怒られる〈うーん〉、疑いがあります

C　：あーそうなんだ

(CN, I－JAS, CCH12－RP2)

(Cf. 絶対、えーお客様に怒られるんじゃないかと心配しています)

ラオハブラナキット (1997: 98) では、「断り」の本質ともっとも関わっている中心構造として、「不可」を表明する部分と、断る「理由」を表明する部分をあげている。上記した (138) と (139) におけるノデハナイカは、それぞれ「理由」と「不可」を表明する部分に属すると思われる。カノックワン (1997) の調査によれば、学習者によるほとんどの「不可」の内容が「断定形」で終っており、ストレートに「不可」を表す傾向がある。本

論文はノデハナイカにしぼって調査しているが、CN による使用に同じような結果が見られた。森山（1990）が指摘しているとおり、断り行為はもっとも相手に不快感を与える行為であり、対人関係上の障害が生じないように配慮すべきである。そのため、ノデハナイカを指導する際には、「断り」を 1 つの使用場面として明示的に提示することが望ましいだろう。

次に、「ロールプレイ 6」におけるノデハナイカの使用について考察する。「ロールプレイ 6」において、JP の用例にはノデハナイカが 10 件あるが、CN には 1 件もない。「ロールプレイ 6」の内容を以下に再掲する。

【RP6】＜ロールカード A＞

来週の水曜日は先生の誕生日です。それで、なにかいいプレゼントを贈ろうと思います。あなたは、プレゼントを一人で贈るより、ほかの友達と一緒に贈ったほうがいいと思っています。そこで友達のところに行って、一緒にプレゼントを贈ろうと誘い、どんなプレゼントがいいか、相談して決めてください。あなたは、プレゼントはあとにずっと残るものがいいと思っています。

＜ロールカード B＞

友達が訪ねてきて、来週の水曜日は先生の誕生日なので、一緒にプレゼントを贈ろうと誘いました。あなたも、それはとてもいいことだと思いました。そこで、友達と相談して、どんなプレゼントにするか決めてください。あなたは、プレゼントには先生の好きな花か食べ物がいいと思っています。

「ロールプレイ 6」における JP によるノデハナイカは、(142)（143）のように、相手の提案を評価したり、相手と異なる提案を行ったりする際に使われている。

(142) jp038：だから今度さ、何かプレゼントでもしてお返ししようかと思ってんだけど、どう思う
jp045：あー、良いんじゃないかなあ
jp038：そう。じゃ一緒にする

（JP, 発話対照 DB, jp038jp045rp06j）

(143) jp052：そういうこう、記念にこう、あとに残るものが良いと思うんだよね
jp053：あとに残るものかあ、そうか
jp052: どうかなあ
jp053：そうか、でも先生の誕生日だよねえ。誕生日プレゼントだから、そんなの、残るものじゃなくて、卒業式とか、そういう時は何か記念に残るようなものが良いと思うけど、誕生日だから、何か花とか、何か食べ物とか、そういうちょっと軽いもので良いんじゃないかなあと思うんだけど
jp052：軽いものという考えもできるけど、どうせだったらこう皆で、一人で上

げるわけじゃないからさ、皆で集まって上げるじゃん。そうすっと、或る程度高いものでも上げられそうな気がするんだよね。そしたら、食べ物よりも、こうな形のものに残るもののほうが良いんじゃないかなあ

（JP, 発話対照 DB, jp052jp053rp06j）

反論は積極的フェイスを脅かす FTA であると考えられるため、相手と違う意見を述べる際には、ノデハナイカなどの婉曲表現によって、配慮を示すことが望ましいだろう。しかし、CN では相手への配慮に欠ける場合がある。たとえば、（144）において、CN が述べているのは相手と違う意見であるにもかかわらず、「実用なプレゼントを贈りたい」のように、直接的に願望を表出している。

（144） jp060：ちょう先生は確かね、花が好きなんだよね。であと、何かほら、食べるのも好きじゃない。だから、プレゼントはねえ花とか食べ物とかが良いかなあと思うけど

（中略）

cn063：私の考えでは、実用なプレゼントを贈りたい、たとえば、おもちゃとか、或いは本とか

jp060：でも先生だからなあ先生の好きな本っていうのは、難しいんじゃないかな、高そうだし

（CN, 発話対照 DB, cn063jp060rp06j）

また、「独話」と同じように、「対話」において「提案・助言」をする際にも、CN は「思う」を多用している。そして、（145）のように、「良いですか」という問いかけで「提案・助言」を行う発話もある。JP の用例には意見を述べたあと、「どうかな」などで相手の意見を尋ねる発話はあるが、このような直接的に評価を聞く用例はない。

（145） jp059：でも何かこう後に残るようなもののほうが良いんじゃないかなあ

cn054：それはそうですね。じゃあ、とても小さいなプレゼント、食べ物は良いですか

（CN, 発話対照 DB, cn054jp059rp06j）

（Cf. 食べ物は良いんじゃないかな）

5.5 まとめ

本節では、発話対照 DB と I－JAS を利用して、CN による話し言葉おけるノデハナイカの使用実態について、形式および発話場面から考察を行った。JP との比較から、以下のことがわかった。

A. 後接形式と共起語：

「一般形」の場合、「言い切り」の使用は JP より多い。特に「かな」がノデハナイカに後接する用例が少ない。CN に指導する際に、「一般形」は「言い切り」以外のほうがよく使われることを強調し、よく後接する「と／という」節や「かな」などもいっしょに提示する必要がある

B. 「独話」におけるノデハナイカ：

①. CN によるノデハナイカの使用は見られなかった。事態展開を推測する際に CN は「裸の形式」を使用する傾向がある。

②. JP はよくスピーチの締めくくりの箇所で、ノデハナイカによって主張や意見を総括的に述べるが、CN はノデハナイカを用いたこのようなスピーチの技術も身につけていない。そのため、CN にスピーチや発表といった場面での発話を指導する際に、締めくくりのノデハナイカを指導項目に入れるべきである。

C. 「対話」におけるノデハナイカ：

①. 話し手の心内発話および記憶が不確かになった出来事を述べる際に、CN による「推測」用法の使用が少ない。

②. 「意見・評価」を述べたり、「提案・助言」をしたりする際に、「婉曲」のノデハナイカの使用が少ない一方、「思う」を多用する傾向がある。「思う」の連続使用によって、聞き手に単調で内容が貧困という印象を与えないように、CN に多様な婉曲表現を使うことの重要性を強調し、「思う」の代わりにノデハナイカの使用を促したほうがいい。

CN によるノデハナイカの使用が少ないことは、「裸の形式」の多用と関連していると言える。書き言葉についての考察にも、このような現象が見られた。その原因について、ここで発話対照 DB における CN による母語での発話を用いて、中国語との対応という面から考えてみたい。以下では、事態展開について推測する際に、CN による「裸の形式」の用例を再掲し、対応する中国語での発話も示す。

（146） 出産することは辛いかもしれませんが、それは、それによって、命の偉大さが感じられます。

（前略）在这一阶段中他可以感受到这种生命的伟大。

（CN，発話対照 DB sp11, j cn059）

（147） ですから私はそういう時無力感を感じました。もし私力があれば、絶対おばあさんをちゃんと立つようにしてあげます。

（前略）就是我觉得如果自己是男生的话，会比较有力气能够把奶奶扶起来。

（CN，発話対照 DB sp11, cn064）

（148） 私はこのような仕方と方法と、父と相談する。父は賢明な人と思います。もし私は言ったら、父は禁煙ことができます。
我爸爸是非常明理的人，我认为他一定会听我和妈妈的话。
（CN，発話対照 DB sp13, cn051）

（146）～（148）のように、CN はこれらの事態展開を推測する文を日本語で発話する際に、「裸の形式」を使用しているが、中国語での発話には、「裸の形式」ではなく、「可以」「会」のような推測を表す表現を使用している。つまり、中国語でも事態展開を推測する際に「裸の形式」をあまり使わず、推測形式を使用している。その点では日本語と一致する。しかし、推測形式の文中における位置は異なる。日本語の場合、推測を表すノデハナイカなどの表現は、基本的に文末に現れる。一方、中国語においても、語気助詞「吧」によって推測する際には、たしかに日本語と同じように文末に位置する。これが原因だろうか、日本語の推測形式と中国語の「吧」との対応関係は日本語教育の現場で強調されてきた。しかし、「吧」以外の推測を表す助動詞「会」「可以」などは文末ではなく、文中に位置しているため、CN にとって日本語の文末におけるノデハナイカとの対応関係は気づきにくいだろう。さらに、日本語教育において、それに関する指導も少ないため、中国語で「会」「可以」で推測する文を日本語で発話すると、CN は「裸の形式」を使用してしまうのだろう。これゆえ、CN にノデハナイカの「推測」用法を指導する際に、中国語の「会」「可以」などの推測を表す助動詞との対応関係を強調することによって、推測を表す表現を使用するという意識を促すことができると思われる。

第 4 章 ダロウとノデハナイカの比較

第 2 章と第 3 章では、表 1 と表 2 に示されている分類方法に基づき、コーパスを用いてダロウとノデハナイカを考察した。表 1 と表 2 の比較からわかるように、ダロウとノデハナイカの用法には重なる部分が多い。たとえば、ダロウの「推量」用法と「疑念－疑い」用法は、ノデハナイカの「推測」用法との接点がある。また、ダロウにもノデハナイカにも「確認－聞き手依存」用法と「婉曲」用法がある。

表 1 本論文におけるダロウの意味用法の分類

<table>
<tr><td colspan="4"></td><td colspan="2">聞き手情報への配慮</td></tr>
<tr><td colspan="4"></td><td>配慮しない</td><td>配慮する</td></tr>
<tr><td rowspan="6">話し手の認識</td><td rowspan="4">不確か</td><td rowspan="2">疑問要素なし</td><td>情報提供</td><td>A. 推量</td><td>－</td></tr>
<tr><td>情報要求</td><td>－</td><td>B－1. 確認－聞き手依存</td></tr>
<tr><td rowspan="2">疑問要素あり</td><td>情報提供</td><td rowspan="2">C－1. 疑念－疑い</td><td rowspan="2">C－2.疑念－婉曲疑問</td></tr>
<tr><td>情報要求</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">確か（疑問要素なし）</td><td>情報提供</td><td>D. 婉曲</td><td>－</td></tr>
<tr><td>認識要求</td><td>－</td><td>B－2. 確認－聞き手誘導</td></tr>
</table>

表 2 本論文におけるノデハナイカの意味用法の分類

<table>
<tr><td colspan="3"></td><td colspan="2">聞き手情報への配慮</td></tr>
<tr><td colspan="3"></td><td>配慮しない</td><td>配慮する</td></tr>
<tr><td rowspan="3">話し手の認識</td><td rowspan="2">不確か</td><td>情報提供</td><td rowspan="2">A. 推測</td><td>－</td></tr>
<tr><td>情報要求</td><td>B. 確認－聞き手依存</td></tr>
<tr><td>確か</td><td>情報提供</td><td>C. 婉曲</td><td>－</td></tr>
</table>

では、ダロウとノデハナイカの各用法には、具体的にどのような類似点と相違点があるのだろうか。本章ではそれを明確にするために、まず第 2 章と第 3 章におけるコーパス調査の結果に基づき、ダロウとノデハナイカの意味用法を比較する。その上で、文系学術論文という使用場面にしぼって、ダロウの「推量」用法とノデハナイカの「推測」用法、そしてダロウの「婉曲」用法とノデハナイカの「婉曲」用法を詳しく比較する。本章の構成は以下のとおりである。1.では関連する先行研究を概観する。2.ではコーパス調査の結果に基づき、ダロウとノデハナイカを比較する。3.では文系学術論文にしぼって、ダロウとノデハナイカを比較する。4.では考察の結果をまとめる。

1. ダロウとノデハナイカの比較に関する研究

ダロウとノデハナイカを比較する研究には、安達（1999）、宮崎（2001）、張（2006）、張（2008）などがある。以下では用法別に概観する。

1.1 ダロウの「推量」「疑念」用法とノデハナイカの「推測」用法の比較

宮崎（2001: 16）は、まずダロウの「疑念」用法[1]とノデハナイカの「推測」用法を比較している。両者とも（1）（2）のように、「もしかしたら」などの副詞と共起可能であり、また（3）（4）のように、命題内容を仮定条件節へ受け継ぐことができるため、「真偽が問題になる状況において＜可能性＞を取り上げるという点では同様である」と指摘している。また、両者の違いは、ダロウの「疑念」用法は「未選択の＜可能性＞」を取り上げるのに対して、ノデハナイカの「推測」用法は「選択後の＜可能性＞」を取り上げるというところにあると宮崎（2001: 19）は述べている。

（1）　もしかしたら、この刑事は自分のことを疑っているのだろうか。迫坪は不安になった。

（宮崎 2001: 16, 三谷幸喜「古畑任三郎」）

（2）　もしかして私は誤ったのではないか……
何気なく起きた疑念が、みるまに吟子の頭の中で輪を作り、拡がり、やがて渦のような大きなうねりとなって返ってくる。

（宮崎 2001: 16, 渡辺淳一「花埋み」）

（3）　験者たちは、私に女の霊が憑いているというが、それは宮の生霊だろうか。ああ、もしそうならどんなに嬉しいか。われながら厭わしいこの身も、尊く思えるというものだ。

（宮崎 2001: 17, 田辺聖子「新源氏物語」）

（4）　本当にそんなことがあったのだろうか、おれがひっかかったように、あいつもまた世間のやつらの罠におとされたんじゃないのか。そうだとすると、あんなひどいことをするんじゃなかった、と栄二は思った。

（宮崎 2001: 17, 山本周五郎「さぶ」）

次に、ダロウの「推量」用法とノデハナイカの「推測」用法については、両者とも「おそらく」「たぶん」「きっと」などの確信の度合いを表す副詞と共起できる点で接点をもつと述べている。さらに、宮崎（2001）は（5）の例をあげ、ノデハナイカの「推測」用法は、ダロウの「疑念」用法と「推量」用法の間に割り込んで、「両者の中間的な認識状態を表す」と指摘し、ダロウとノデハナイカの振る舞いを表 3 のようにまとめて比較している。

（5）　彼は来ているだろうか。来ていないのではないか。たぶん、来ていないだろう。

（宮崎 2001: 24）

---

[1] 宮崎（2001）では、本論文でダロウの「疑念」用法として扱う表現をダロウカとしており、ダロウと別扱いしている。ここでは本論文の用語を使う。

表 3 ダロウとノデハナイカの振る舞いの比較（宮崎 2001: 27，一部抜粋）

	「疑念」のダロウ	「推測」のノデハナイカ	「推量」のダロウ
相矛盾する命題の提示	○	×	×
モシカスルト等との共起	○	○	×
仮定条件節への受け継ぎ	○	○	×
疑いの形式としての使用[2]	○（wh 可）	○（wh 不可）	×
オソラク、タブン等との共起	×	○	○

宮崎（2001）を踏まえて、張（2006）は「疑い」と「判断」の連続性に注目している。（6）～（8）のように、張（2006）は認識のレベルを「疑い」「疑い・判断」「判断」[3]の 3 つに分けている。ダロウとノデハナイカについては、単に「疑い」あるいは「判断」を表すと定義するのではなく、認識上の連続性という特徴を強調している。図 1 のように、「疑念」のダロウは「疑い」も「疑い・判断」も表せる。「推測」のノデハナイカは「疑い・判断」も「判断」も表せる。また、「推量」のダロウが表すのは「判断」である。

（6）　【疑い】

あの女が男を死にみちびいた。そして男は何という素直さで死を受け容れたことか。けれども彼の場合、死ははたして正しい事であっただろうか。そのことが賢一郎にとっては一番大きな疑問であった。

（张 2006: 9，青春）

（7）　【疑い・判断】

そこまでいかなくても、せっかくの監査委員の制度が機能していないのではないかと疑問に思うことがしばしばある。地方行革の中で、監査制度の強化も重要な課題だ。

（张 2006: 11，朝日新聞社説）

（8）　【判断】

もし、あの日照りの中を、自分が無帽で十五分も歩けば、きっと冷たいプールの中か井戸の中にでも飛び込みたくなるのではないかと、彼は思う。

（张 2006: 12，アカシアの大連）

---

[2] 「疑いの形式としての使用」について、宮崎（2001: 20-21）は（a）と（a'）のような例をあげている。「wh 疑問文は疑問詞部分に代入しうるすべての要素を選択候補と見做している」ため、選択後の＜可能性＞を差し出すノデハナイカは使用できない。

（a）「この娘のどこに惹かれているのだろうか」と、伊木は自らに問うてみた。

（吉行淳之介「樹々は緑か」）

（a'）「*この娘のどこに惹かれているのではないか」と、伊木は自らに問うてみた。

[3] 原文は中国語の「疑问」「疑问・判断」「判断」である。

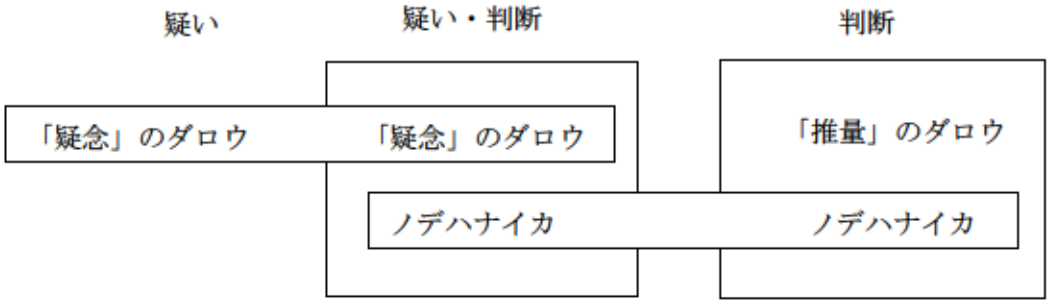

図 1 疑いと判断の連続性（張 2006: 13, 一部抜粋）[4]

1.2 ダロウの「確認」用法とノデハナイカの「確認」用法の比較

ダロウの「確認」用法とノデハナイカの「確認」用法を比較する研究には、安達（1999）、宮崎（2001, 2002, 2005）などがある。宮崎（2005: 118）では、ノデハナイカの「確認」用法はダロウに比べてきわめて限定的であると論じられている。ダロウとノデハナイカの間に互換性が成立するのは（9）のような「聞き手依存型」の場合に限定される。一方、ダロウは「聞き手依存型」から、（10）のような「聞き手誘導型」にまで及んでいる。

（9） a. 「ゆみちゃん、あんたいい人があるんじゃない？　私そう睨んだわ。」
（宮崎 2005: 118, 林芙美子「放浪記」）
b. 「ゆみちゃん、あんたいい人があるでしょ。私そう睨んだわ。」

（10） a. 「加藤さん、ほら聞こえるでしょう。水野さんと市川さんの声がね。」
（宮崎 2005: 118, 新田次郎「孤高の人」）
b. 「*加藤さん、ほら聞こえるんじゃない？　水野さんと市川さんの声がね。」

また、「聞き手依存型」においても、ノデハナイカの用法はダロウよりもかなり狭い。たとえば、（11）のような聞き手の意志を確認する場合には、ダロウを用いるのが自然であるが、ノデハナイカを用いると、聞き手の意志を詮索しているような意味になり、文脈に合わなくなる。また、（12）のように、聞き手に許容を求める場合にもダロウしか使えない。ノデハナイカを使用すると、本来聞き手に決定権があることに対して話し手が意見しているような意味になり、これも文脈に合っていない。

（11） a. 「山本君、行くでしょ」
三吉さんに言われて、太郎は、行かなきゃなるまいなあ、と心の中で考えていたが、多少おっくうであった。

[4] 張（2006）では、本論文でダロウの「疑念」用法として扱う表現を「だろうか」としており、ダロウと別扱いしている。ここでは本論文の用語を使う。

b. 「*山本君、行くんじゃない？」

（宮崎 2001: 26, 曽野綾子「太郎物語　大学編」）

（12） a. 楯夫「作家協会の、ちょっとしたパーティがあるんだ。君を連れて行きたい。いいだろ？」

b. 「*作家協会の、ちょっとしたパーティがあるんだ。君を連れて行きたい。いいんじゃない？」

（宮崎 2001: 26, 野沢尚「結婚前夜」）

以上の比較結果について、宮崎（2005）は次のようにまとめている。

> 本来、聞き手に決定権がある事柄について確認する際にノデハナイカが使用できないという事実は、やはりノデハナイカが話し手の（形成途上の）推量判断を提示する機能を積極的に有しているということを意味している。逆に、そうした状況・文脈で自然に使用できるダロウは、こうした用法ですでに推量判断を提示する機能を失い、聞き手の認識がそのようであることを確認する形式として使用されていると考えることができる。
>
> 宮崎（2005: 120）

また、安達（1999: 95）では、二人の人が部屋にいるとき、戸が開くような音がしたという状況において、（13）のような例ではダロウとノデハナイカは適格性に差が出てくると指摘している。それは、ダロウは「発話以前に話し手の中で成立していた判断を確認する形式」、ノデハナイカは「現場情報からの推論をも含んで、推測された事態を問いかける形式」であると分析している。

（13） a. 誰か来たんじゃない？

b. *誰か来たでしょ？

（安達 1999: 95）

1.3 先行研究のまとめ

以上概観したように、ダロウとノデハナイカを比較する先行研究はほぼすべてが研究者の内省によるものであって、使用実態に基づいた研究が少ない。また、用法別に見ると、「確認」用法の使用状況における共通点と相違点については、すでに詳しく比較されている。しかし、ダロウの「推量」「疑念」用法とノデハナイカの「推測」用法については、共通点があるという指摘にとどまり、詳しい比較はまだ行われていない。また、両形式の「婉曲」用法の異同も言及されていない。

2. ダロウとノデハナイカの比較－コーパス調査の結果に基づく

本節では、第 2 章と第 3 章におけるコーパス調査の結果に基づき、ダロウとノデハナイカの各用法を比較する。2.1 ではダロウの「推量」用法とノデハナイカの「推測」用法、2.2 ではダロウの「疑念」用法とノデハナイカの「推測」用法、2.3 ではダロウの「確認」用法とノデハナイカの「確認」用法、2.4 ではダロウの「婉曲」用法とノデハナイカの「婉曲」用法をそれぞれ比べる。

2.1 ダロウの「推量」用法とノデハナイカの「推測」用法

ダロウの「推量」用法とノデハナイカの「推測」用法について、まず共起語を比較する。表 4 と表 5 に書き言葉における両者の共起語の上位 5 位を示す。表 4 と表 5 に共通に現れているは思考動詞「思う／考える」と「推測類」である。一方、ダロウの共起語には、認識判断を表す「見る／理解／判断／解釈」が多いが、ノデハナイカの共起語にはあまり見られない。その代わりに、ノデハナイカは直感的な感覚を表す「感じる／気がする」および「疑い類」とよく共起する。つまり、ダロウは思考を経た認識判断、ノデハナイカは直感的な認識判断に偏っていると言えるだろう。また、「予測／予想」との共起から、ダロウはよく未来についての予測を表すという点でノデハナイカと異なると言える。一方、ノデハナイカの場合、ネガティブな心理状態を表す「心配／不安／懸念／危惧」との共起が特徴的である。

表 4 書き言葉における「推量」のダロウの共起語の上位 5 位

順位	共起語
1	思う／考える
2	言う
3	推測類[5]
4	見る／理解／判断／解釈
5	予測／予想

表 5 書き言葉における「推測」のノデハナイカの共起語の上位 5 位

順位	共起語
1	思う／考える
2	心配／不安／懸念／危惧
3	感じる／気がする
4	疑い類[6]
5	推測類

[5] 「推測」「推量」「推定」などを含む。

[6] 「疑い」「疑念」「疑問」などを含む。

次に、「対話」における応答文としての使用状況から、ダロウの「推量」用法とノデハナイカの「推測」用法を比較する。ダロウは応答文で相手の質問に対して答える際にはあまり使用されていないが、ノデハナイカは（14）のように頻繁に使われている。

（14）　F004：あれはどうなった？
　　M034：あー。どうなんだろうなー。あのー、もう何も言ってなかったし、何も変わらないんじゃない。

（対話，名大，092）

このような現象からわかったことは以下のようにまとめられる。ダロウは認識上の不確かさをもっているにもかかわらず、積極的に不確実さを表すのではない。そのため、応答文に不確実な情報を提供する際には頻繁に使われない。宮崎（2002: 133）が指摘しているように、ダロウの不確かさは経験的な事実として確認されているわけではないという認識面での不確かさである。判断面ではダロウは断定的な判断を表すのである。一方、ノデハナイカは判断面では多様な判断の段階を表せるため、不確実な情報を提供する機能もあり、応答文に頻繁に使われるのである。

2.2 ダロウの「疑念」用法とノデハナイカの「推測」用法

ダロウの「疑念」用法とノデハナイカの「推測」用法については、聞き手の反応を比較する。（15）のように、話し手が聞き手の反応を待たず、続けて発話する場合を「維持」とし、話者交替が起こる場合を「交替」とする。「交替」には 2 つのタイプがある。1 つは（16）のように、発話内容は話題の続きだけのものであり、これを「交替ー継続」とする。また、もう 1 つは（17）のように、交替後の発話内容が直接な答えであるものであり、これを「交替ー答え」とする。図 2 にダロウの「疑念」用法とノデハナイカの「推測」用法に対する聞き手の反応を示す。

（15）　【維持】
　　F004：そうだよねー。うーん。なんかさ、不思議なんだけどさー、（うん）ほら、日本語勉強しに来てるのに、なんで授業中に英語使うんだろう。使わない？
　　F005：使う、使う。

（対話，名大，052）

（16）　【交替ー継続】
　　F098：でもどういうニュア、ほ、標準語でいうとなんなの、あれは。
　　F138：標準語ないんじゃない。
　　F098：どういう感じなの、悪いのはわかるんだけど。

（対話，名大，008）

（17）　【交替ー答え】

F134：でも、次、何の仕事するんだろう。

F112：え、でもあの人作家だから、そっちで稼ぐんじゃない？

（対話，名大，125）

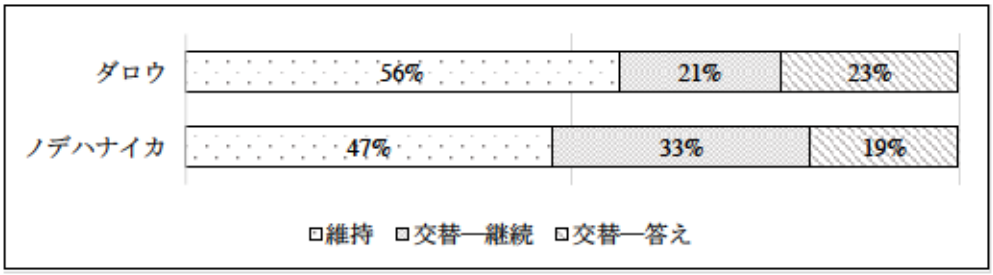

図 2 ダロウの「疑念」用法とノデハナイカの「推測」用法に対する聞き手の反応

「維持」「交替ー継続」「交替ー答え」のうち、「交替ー答え」だけがノデハナイカの伺うニュアンスに対する反応である。図 2 からわかるように、ダロウでもノデハナイカでもその割合は高くない。つまり、「対話」においては、ダロウもノデハナイカも話し手の疑いを述べることが主たる用法であり、積極的に伺うニュアンスを帯びるわけではないと言える。また、ダロウとノデハナイカを比較すると、ダロウのほうが「維持」の割合が高い。それは、ダロウには（18）のように、自問的に疑いを表明することで、話し手の思考過程を提示し、思考時間を作るというフィラーのような機能があるからである。このような用法は選択後の＜可能性＞を差し出すノデハナイカ（宮崎 2001: 19）にはない。

（18）　F050：おいしいんだよ。味がなんかしっかり。なんだろう、ちょっと酸味があって。

F039：あ、へー。

F050：何に近いかな。なんかわかんないけど。

F039：ふんふんふん。

（対話，名大，050）

また、ダロウは「未選択の＜可能性＞」を取り上げるのに対して、ノデハナイカの「推測」用法は「選択後の＜可能性＞」を取り上げる（宮崎 2001: 19）という違いがあるため、コーパス調査から、ダロウとノデハナイカが文章に果たす機能には以下のような相違点も見られた。それは、ダロウは（19）のように、文章において問題提起の機能を果たす場合がある。（19）では、まずダロウによって問題を提起し、それから回答も提示する。問題提起は読み手にその疑いに気づかせ、さらにそれについて考えさせる働きがある。一方、ノデハナイカは（20）のように、読み手の共感を呼ぶ機能がある。（20）では、ノデハナイカによって読み手がいま直面している課題について推測し、読み手の共感を呼ぶ働きがある。

(19)　確かに、理論的にはその通りですが、実際に子会社化された Shared Service Company の実態はどうなのでしょうか。結論から言えば、最初の 1、2 年は良いが、中長期的には、以下に述べるような様々な経営上の課題を内含していると思います。

（文学以外，中田研一郎 2005『ソニー会社を変える採用と人事』，角川書店）

(20)　さて、夏休みも後半になってくると合宿の疲れや長期の休みから来る精神的な疲れ等が重なって、ともすればだらだらとした日々を送りがちになってきます。夏休みの残りの日数を数えながら宿題の整理に追われている人もいるのではないでしょうか。昨年のトレーニングワイドにも書きましたが、（後略）

（雑誌，『陸上競技マガジン』2002 年 9 月号，ベースボール・マガジン社）

2.3 ダロウの「確認」用法とノデハナイカの「確認」用法

宮崎（2005: 118）はノデハナイカの「確認」用法はダロウよりかなり狭いと指摘しているが、コーパス調査の結果もそれを間接的に裏付けている。「対話」におけるダロウとノデハナイカの各用法の割合を示している図 3 からわかるように、ダロウは「確認」用法が頻繁に使われており、全体の約 6 割を占めている。一方、用法が狭いため、ノデハナイカの「確認」用法は頻繁に使われていない。

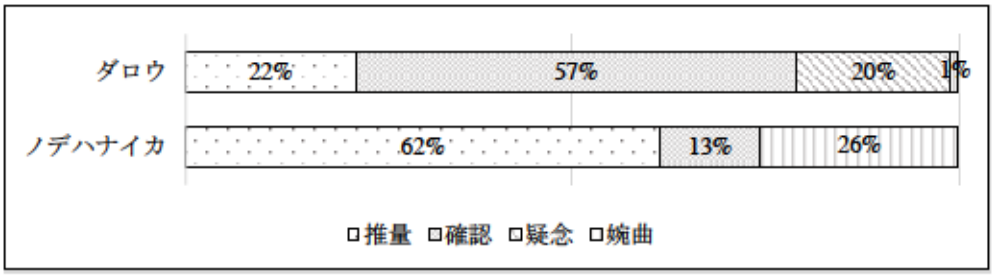

図 3 「対話」におけるダロウとノデハナイカの各用法の割合

ダロウの「確認」用法とノデハナイカの「確認」用法の違いについては、1.2 で概観したように、宮崎（2001, 2002, 2005）ですでに詳しく比較されている。ここではその補足として、発話意図という観点から両者の共通点を指摘する。

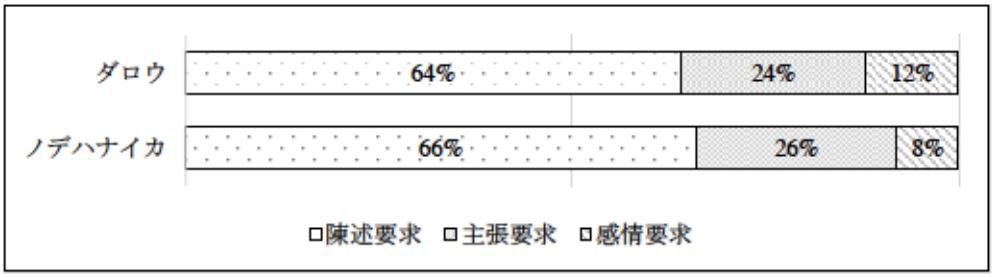

図 4 ダロウの「確認」用法とノデハナイカの「確認」用法の発話意図

図 4 にダロウとノデハナイカを発話意図によって「陳述要求」「主張要求」「感情要求」（山岡他 2010）に分類した結果を示す。ダロウもノデハナイカも、主に「陳述要求」の意図で使われている。一方、聞き手の私的領域の中心部に踏み込んで推測し、さらに聞き手に確認することは聞き手のフェイスを侵害する可能性が高いため、「主張要求」と「感情要求」の意図での使用は少ない。

2.4 ダロウの「婉曲」用法とノデハナイカの「婉曲」用法

ダロウの「婉曲」用法とノデハナイカの「婉曲」用法について、「対話」における使用に大きな違いが見られた。上述した図 3 からわかるように、ダロウの「婉曲」用法は「対話」における使用頻度が非常に低いのに対して、ノデハナイカの「婉曲」用法は、「対話」では「意見・評価婉曲表明」、「提案・助言」、「反論」および「慰め」など、多様な意図で頻繁に使われている。(21) は「慰め」の例である。

(21)　【慰め】

F130：あと、ハイになると声がおっきいかも。でも普段はそんなおっきい声で話せない。

F154：あー。あたしそんなに声おっきい。

F130：声が通るんだと思う。

F154：だからちょっと興奮してボリュームが上がると、とってもとっても鼓膜に響くのかなあ。

F130：いや。いいんじゃない、それはいいんじゃない、別に。あたしは、うらやましいかぎりです。

（対話, 名大, 113）

このような使用上の差異は、ダロウの「婉曲」用法とノデハナイカの「婉曲」用法の表現効果の違いによるものであると思われる。ダロウの「婉曲」は推量形式から来ている。つまり、ダロウは本来が推量を表す形式であり、認識が不確かであることが前提である。このような表現は認識が確かである文に付加されると、婉曲さが加えられ、主張を控えめにする効果が生じる。意味の面から見ると、ダロウによって述べられるのは断定した判断であるため、「十分な検討・検証を経た結果の結論・見解である」（蓮沼 2015: 27）というニュアンスがある。一方、ノデハナイカの「婉曲」は、疑問形式から来ている。認識の不確実さから、「婉曲な情報提供によって丁寧さを生じさせる効果」と「話し手の評価的な主張をやわらげる効果」という表現効果が生じる。また、判断の不確実さから、「話し手の意見を積極的に聞き手に共有させる」という表現効果が生じる。

3. ダロウとノデハナイカの比較－文系学術論文における

2.ではコーパス調査の結果に基づき、ダロウとノデハナイカの各用法を比較した。本節

では、文系学術論文にしぼって、ダロウの「推量」用法とノデハナイカの「推測」用法、そしてダロウの「婉曲」用法とノデハナイカの「婉曲」用法を比較する。文系学術論文における使用にしぼる理由は、まず、特定の使用場面にしぼることで、比較が行いやすいからである。また、文系学術論文においては、ダロウもノデハナイカも書き手の推論、判断、主張などを述べる際に頻繁に使われている[7]。さらに、CN のニーズから考えると、将来日本に留学する CN はもちろん、中国の大学で日本語を専攻とする CN にとっても、日本語で卒業論文を執筆し完成することが大学の卒業要件の 1 つである。そのため、アカデミック・ライティングにおけるダロウとノデハナイカに関する指導が求められる。学術論文におけるダロウとノデハナイカの特徴を明らかにすることは、その指導にも役立つだろう。なお、学術論文には「確認」用法はあまり使用されない。また、学術論文におけるダロウの「疑念－疑い」用法はほぼすべてが（22）のような問題提起である。この場合はノデハナイカと互換できない。そのため、本節では「確認」用法と「疑念－疑い」用法については詳しく比較しない[8]。本節で学術論文におけるダロウとノデハナイカを比較するにあたっては、ダロウの「推量」用法とノデハナイカの「推測」用法、そしてダロウの「婉曲」用法とノデハナイカの「婉曲」用法を中心に行う。

（22）　それでは、規範理論に基づく分析モデルを理念型として再構成することは可能なのだろうか。理念型の論理基準として（中略）つまり，規範理論に基づく分析モデルであっても客観的可能性の基準を満たす場合、理念型として用いることは可能だといえる。

（『社会学評論』，④）

本節の構成は以下のとおりである。3.1 では学術論文におけるダロウとノデハナイカに関する研究を概観する。3.2 では調査方法を説明し、調査結果を示す。3.3 ではダロウの「推量」用法とノデハナイカの「推測」用法の使用を比較する。3.4 ではダロウの「婉曲」用法とノデハナイカの「婉曲」用法の使用を比較する。

3.1 学術論文におけるダロウとノデハナイカに関する研究

学術論文におけるダロウとノデハナイカに関する研究には、早川他（2007）、小森（2014）、ターインタ（2018）などがある。早川他（2007）は、文系学術論文における「判断表現」を調査している。ダロウに関しては、まず、出現数は判断表現でもっとも多いという結果を得ている。また、早川他（2007）は判断表現の機能を「当然の帰結」「筆者の個人的判

[7] 佐藤他（1997）は、工学系学術論文において「のではないだろうか」は「特に使われにくい判断表現」であると報告している。一方、本論文で調査した文系学術論文において、ダロウとノデハナイカの用例が多く見られる。

[8] 宮崎（2001, 2002）では、ダロウの「疑念」用法とノデハナイカの「推測」用法について詳しく比較、考察している。

断」「言い換え」「予想・評価」の 4 つに分類し、ダロウは「主観性の強い表現」であるため、「筆者の個人的判断」の機能としてもっともよく使われると指摘している。なお、早川他（2007）ではノデハナイカについて言及していない。

また、小森（2014）は学習者向けのアカデミック・ライティング指導の改善を目的としており、社会科学系と人文科学系の学術論文におけるノデハナイカの使用を調査している。表 6 に示されているように、小森（2014）ではノデハナイカの出現場所を「導入部分」「本論部分」「終結部分」に分けており、それぞれの場所における使用については、「構造」「共起表現」「出現形式の傾向」「意味・機能」といった視点から考察している。小森（2014）におけるノデハナイカについての考察は全面的で、示唆的であると思われる。しかし、「婉曲」用法については、単に「推測」用法の付属的な用法と捉え、特に言及していない。

表 6 JP によるノデハナイカの使用状況（小森 2014: 54）

出現場所	構造	共起表現	出現形式の傾向	意味・機能
導入部分	背景→問題提起→論文の目的	マイナスの意味・書き手の評価を表す表現	（の）ではないだろうか	レトリカルな機能
	背景→自説の提示→論文の目的	手段・仮定・因果関係を表す文型	（の）ではないかと V	思考内容の対象化
本論部分	調査結果→主張	逆接・譲歩、総括・妥当性・立場・言い換え・推量、対比・並列・比較選択の副詞・接続表現	（の）ではないか （の）ではないかと V （の）ではないだろうか	中心的な意味 思考内容の対象化 レトリカルな機能
	調査結果→考察→帰結	総括・結論の接続表現		
	調査結果→データ解釈→理由	理由を表す文型		
終結部分	まとめ→締めくくり→（今後の課題）	書き手の評価・今後の可能性を表す表現	（の）ではないだろうか	レトリカルな機能
本論部分（他者の意見）	他者の意見→書き手の意見	発話・思考動詞、発言・思考・判断の名詞	（の）ではないかという＋名詞 （の）ではないかと V	思考内容の対象化

（__部でノデハナイカを使用する）

さらに、ターインタ（2018）は日本語学系学術論文の結論におけるモダリティの使用を調査するものであり、ダロウもノデハナイカも調査対象に入れている。しかし、ダロウとノデハナイカに関しては、調査結果の件数の提示にとどまり、詳しい考察と比較は行われていない。

3.2 調査方法と結果

本論文では、人文科学系の論文から 6 分野を選び、計 120 編の論文を分析対象とする。

CN 向けの指導上の示唆を得るために、留学生が日本語で論文を書くことが比較的多いと考えられる日本語学、日本語教育学、日本文学、歴史学、哲学、社会学の 6 分野を選んだ。表 7 に示されている学会誌から、各分野が 20 編になるように論文を選定した。論文選定に着手した時点で入手できた最新の号から、執筆者が日本人研究者である原著論文を抜き出した。調査資料の概要を付録 1 に示す。

表 7 分析対象とした論文の掲載学会誌

分野	学会誌名	学会名	論文数
日本語学	『日本語の研究』	日本語学会	20
日本語教育学	『日本語教育』	日本語教育学会	20
日本文学	『日本文学』	日本文学協会	10
	『日本近代文学』	日本近代文学会	10
歴史学	『史学雑誌』	史学会	20
哲学	『哲学』	日本哲学会	20
社会学	『社会学評論』	日本社会学会	20

上述 120 編の学術論文の本体の部分（表題、要旨、注、文献、付録を除いた部分）から、抽出したダロウとノデハナイカの件数を表 8 に示す。ダロウのバリエーションには、「だろう」と「であろう」があり、ノデハナイカには「のではないか」、「のではないだろうか」がある。件数から見れば、ダロウの使用頻度がより高い。

表 8 学術論文におけるダロウとノデハナイカの件数

	出現形	件数	
ダロウ	だろう	380	588
	であろう	208	
ノデハナイカ	のではないか	112	192
	のではないだろうか	80	

また、収集した用例を用法別に分類した結果を図 5 に示す。ダロウの場合、派生的な用法とされてきた「婉曲」用法が、「推量」用法よりも頻繁に使われている。一方、ノデハナイカの場合、「推測」用法が 3 分の 2 を占めており、「婉曲」用法の使用はダロウほど頻繁ではない。件数から見れば、ダロウの「推量」用法はノデハナイカの「推測」用法の約 2 倍であり、ダロウの「婉曲」用法はノデハナイカの「婉曲」用法の約 5 倍に達している。以下では、ダロウの「推量」用法とノデハナイカの「推測」用法、そしてダロウの「婉曲」とノデハナイカの「婉曲」用法をそれぞれ比較していく。

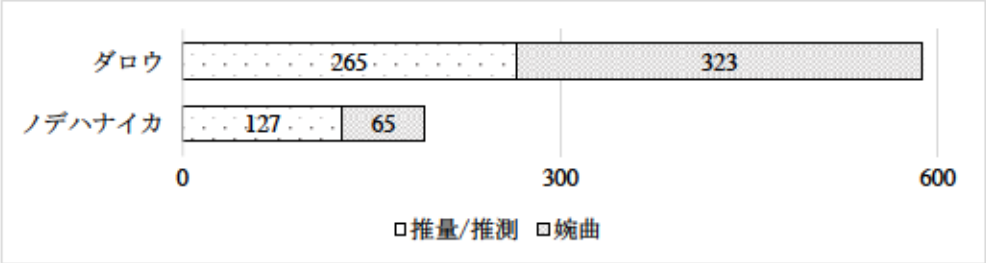

図 5 学術論文におけるダロウとノデハナイカの用法

3.3 ダロウの「推量」用法とノデハナイカの「推測」用法

小森（2014）を踏襲し、出現場所を「導入部分」「本論部分」「終結部分」に分けて、それぞれにおけるダロウとノデハナイカの件数を図 6 に示す。ダロウもノデハナイカも本論部分に集中しているが、導入部分と終結部分におけるノデハナイカの割合はダロウより高い。以下では、出現場所ごとにダロウとノデハナイカの使用を比較していく。

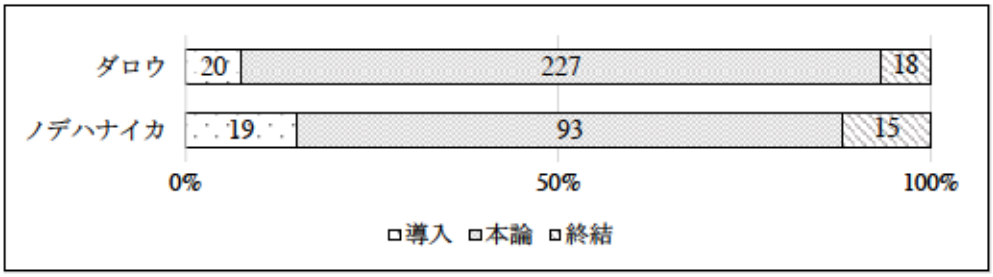

図 6 ダロウとノデハナイカの出現場所

3.3.1 導入部分におけるダロウとノデハナイカ

収集した導入部分における用例を観察すると、ダロウとノデハナイカは、研究の背景を紹介したり、先行研究における問題を指摘したり、書き手の自説を提示したりする際に使われている。これらの使い方をそれぞれ「研究背景の紹介」「問題の指摘」「自説の提示」と呼び、ダロウとノデハナイカにおけるそれぞれの割合を図 7 に示す。

(23) 【研究背景の紹介】

では、日本語教育において学習者の書く能力と辞書はどのように捉えられているのだろうか。（中略）定期試験のような到達度テストでも、辞書の使用が禁止されていることが一般的であろう。

（『日本語教育』, ⑧）

(24) 【問題の指摘】

考察対象が南九州に限られていて、他の九州諸氏の動向が視野に収められていないのも問題である。了俊の解任は様々な利害関係が交差したところに生じた

ものであり、南九州情勢に注目するだけではかえって解任劇の理解を一面的にする恐れがあるだろう。

（『史学雑誌』，①）

(25)　【自説の提示】

世論調査を絶好の機会として、しかも無自覚的に、彼女／彼らは、生きづらいはずの現実を「とても幸せ」だと世間に承認（recognition）して貰わなければならないほど瀬戸際まで追いやられているのではないか。彼女／彼らは、生きづらいはずの日本社会を幸福だと錯誤もしくはその錯誤を強請（extort）されているのではないか。本稿ではこの問題意識を先鋭化させ、（中略）それを社会学的に解剖する。

（『社会学評論』，⑳）

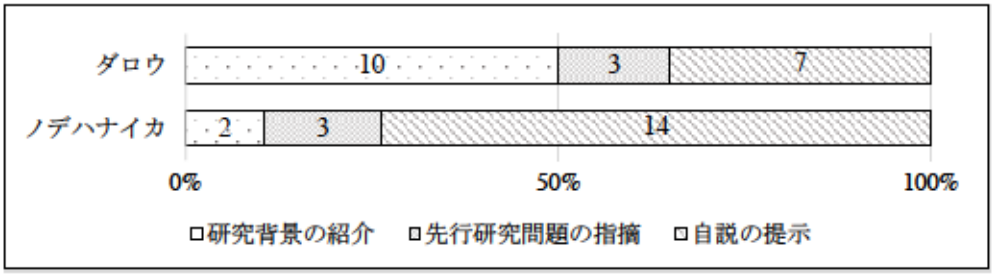

図 7 導入部分におけるダロウとノデハナイカの使い方

図 7 からわかるように、導入部分においては、ダロウは上記（23）のように、「研究背景の紹介」でもっともよく使われているが、「自説の提示」としての使用はそれほど多くない。一方、ノデハナイカの使用は、「研究背景の紹介」では少ないが、「自説の提示」に集中している。これは、ノデハナイカが表すのは「話し手が 1 つの有力な可能性を選択したこと（宮崎 2005: 99）」であるため、導入部分における「自説の提示」と馴染みやすいからであろう。上記（25）のように、書き手はノデハナイカを使用し、読み手と問題意識を共有している。

3.3.2 本論部分におけるダロウとノデハナイカ

本論部分におけるダロウとノデハナイカは、調査、考察に基づき得られた結果を述べる際に使われており、大きく 2 種類に分けられる。1 つは、調査によって得られたデータをもとに、その結果などの帰結について推量する＜帰結推量＞である。もう 1 つは、既知の事態に対して、その背後の原因などの事情について推量する＜事情推量＞である。この 2 種類の割合を示している図 8 からわかるように、ダロウでは＜帰結推量＞は 7 割強、＜事情推量＞は 3 割弱である。一方、ノデハナイカでは＜帰結推量＞は約 9 割に達しており、ダロウに比べれば＜事情推量＞の割合は低い。以下では＜帰結推量＞と＜事情推量＞を表すダロウとノデハナイカをそれぞれ比較する。

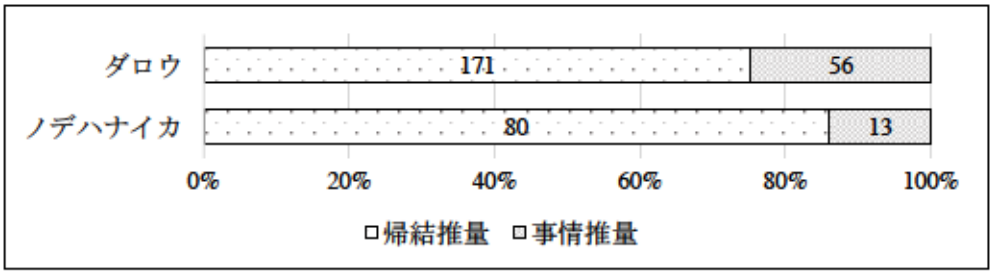

図 8 本論部分におけるダロウとノデハナイカの使い方

まず、本論部分における＜帰結推量＞を表すダロウとノデハナイカを比較する。＜帰結推量＞に見られる 1 つ目の違いは、ダロウは（26）のように、仮定条件の帰結としての使用が多く、ノデハナイカではそれが少ないことである。ダロウでは仮定条件の帰結としての使用が 40 件（23.4%）もあり、ノデハナイカの 7 件（8.8%）と比較すると、使用頻度の高さがわかるだろう。宮崎（2002: 134）もダロウが仮定条件の帰結としての使用が多いことを指摘しており、それはダロウが描き出すのは「想像・思考の中で捉えた出来事」からであると分析している。

（26）　【仮定条件の帰結】

イトウの出没に関わる背景知識を増やし、友人以外にもイトウの出没に関する証言が複数あれば、私の信念の度合いはさらに上方修正されるだろう。

（『哲学』，⑨）

＜帰結推量＞に見られる 2 つ目の違いは、ダロウでは「現在／未来」についての推量が多いが、ノデハナイカでは相対的に少ないことである。前接内容の時制によって大きく「現在／未来」と「過去」に分けると、ダロウでは「現在／未来」と「過去」がそれぞれ 136 件（79.5%）と 35 件（20.5%）あり、ノデハナイカではそれぞれ 50 件（62.5%）と 30 件（37.5%）ある。つまり、ダロウでは（27）のような「現在／未来」についての推量の割合がノデハナイカより明らかに高い。

（27）　【現在／未来】

Mono の場合、実際の経験だけでなく、読書・メディア、家族との日々のやり取りなどを通して、小学校入学以降も、自然と語彙力を伸ばしていくだろう。

（『日本語教育』，①）

（28）　【過去】

増問屋に至っては、五軒中四軒が国問屋である。彼らは銀主としての機能を期待された者たちだが、取り立ての際には国問屋としての実績が買われたのではないだろうか。

（『史学雑誌』，⑥）

次に、本論部分における＜事情推量＞を表すダロウとノデハナイカを比較する。＜事情推量＞の用例を検討すると、次の 2 つの種類が見られる。1 つは、「推量内容＋既知事態＋ダロウ／ノデハナイカ」のような事情推量である。(29) のように、「のではないか」が推量しているのはその直前の内容ではなく、さらに前の「「はず」が名詞であるという意識が希薄となった」という部分である。本論文ではこのような事情推量を＜事情推量 1＞と呼ぶ。2 つ目は、「既知事態＋推量内容＋ダロウ／ノデハナイカ」のような事情推量である。(30) のように、「であろう」が推量しているのはその直前の「諦めることなく真面目に取り組んだ」という部分である。本論文ではこれを＜事情推量 2＞と呼ぶ。ダロウとノデハナイカによる＜事情推量＞の詳細を図 9 に示す。

(29)　【事情推量 1】

言い換えれば「はず」が名詞であるという意識が希薄となったため、名詞由来ではない他の文末表現のように使われ始めているのではないかと推測される。

(『日本語の研究』, ①)

(30)　【事情推量 2】

スポーツが得意な方ではないがここまで泳げるようになったのは、諦めることなく真面目に取り組んだからであろう。

(『日本語教育』, ⑫)

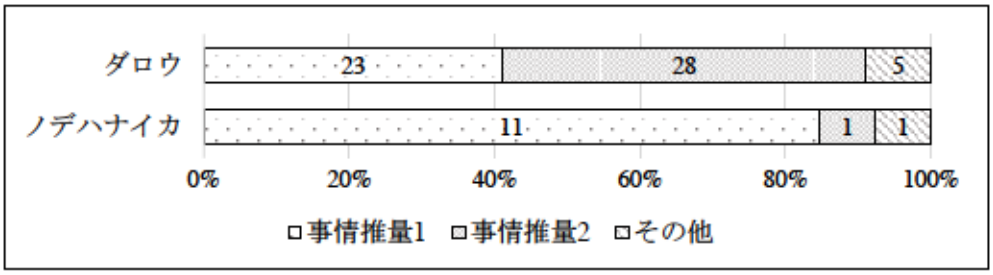

図 9 本論部分における＜事情推量＞の詳細[9]

図 9 からわかるように、ダロウの場合、＜事情推量 1＞も＜事情推量 2＞もあり、＜事情推量 2＞のほうがやや多い。一方、ノデハナイカの場合は、ほぼすべてが＜事情推量 1＞であり、＜事情推量 2＞の割合がダロウに比べれば非常に低い。

最後に、形式の面から比較する。本論部分におけるダロウとノデハナイカを後接形式の有無によって、「言い切り」と「言い切り以外」に分類した結果を図 10 に示す。ほぼすべてのダロウは「言い切り」の形で現れるのに対して、ノデハナイカの 4 割以上は「と／と

[9] 「その他」には、(b) のような、「～の理由は～ダロウ／ノデハナイカ」、「～が～の原因ダロウ／ノデハナイカ」などの用例がある。これらの用例の割合が低く、ダロウとノデハナイカには大きな差が見られないため、ここで詳しく検討しない。

(b) 以上のような婉曲用法が、「めり」には五二例中三五例、六七%あり、推定伝聞「なり」には一例も見られない。これが、「めり」にのみ、カシが下接しやすい理由であろう。

(『日本語の研究』, ⑤)

いう」節を後接した「言い切り以外」である。

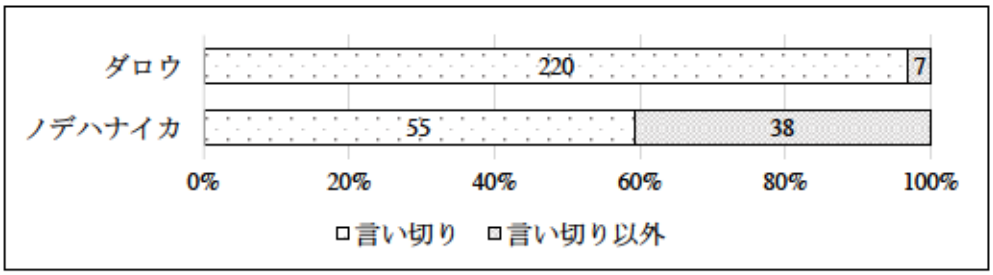

図 10 本論部分におけるダロウとノデハナイカの後接形式

このような形式上の違いから、使用の傾向における異なりも伺える。つまり、(31) のように、ノデハナイカは書き手の意見を述べる際に使用されるだけでなく、他者の意見を引用する際に使われる場合も少なくない。本論部分におけるノデハナイカの用例には、このような「他者の意見の引用」が 15 件（16.1%）ある。一方、収集したダロウの用例はすべてが書き手の意見を表しており、「他者の意見の引用」は見られない。

(31)　【他者の意見の引用】

迫野（1998）や金水（2006）では、（中略）同じ有情物の存在を表す「をり」が、近畿ではゆっくりと「ゐたり」に換わっていったが、東国では急激に「ゐたり」にとって換わったのではないかと見ている。

（『日本語の研究』, ⑬）

3.3.3 終結部分におけるダロウとノデハナイカ

収集した終結部分における用例を観察すると、ダロウとノデハナイカは、考察の結果をまとめて述べたり、今後の研究をどのように展開していくかについての展望を述べたりする際に使われている。これらの使い方をそれぞれ「結果のまとめ」と「今後の展望」と呼び、ダロウとノデハナイカにおけるそれぞれの割合を図 11 に示す。

(32)　【結果のまとめ】

コピュラの過去形と過去否定形式が、本来ともにデアッタという同じ音環境にあったからこそ、現代方言においても類似した分布を示しているのではないだろうか。

（『日本語の研究』, ⑪）

(33)　【今後の展望】

今後さらなる研究において、全体的な傾向性を描く因子分析型アプローチと、細部を描くプール・カテゴリー分析をうまく組み合わせることによって、人び

とのナショナル・アイデンティティの様態についてよりいっそう迫ることができるだろう。

（『社会学評論』，⑥）

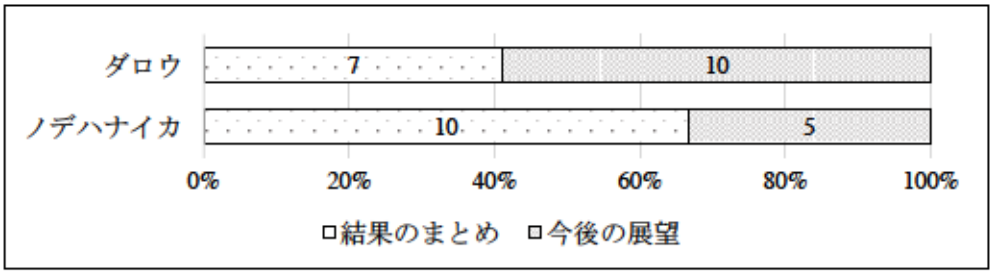

図 11 終結部分におけるダロウとノデハナイカの使い方

図 11 にからわかるように、ダロウにおける「今後の展望」の割合はノデハナイカに比べると高い。これは、本論部分に見られた、ダロウでは「現在／未来」についての推量が多いという特徴と一致する。

3.4 ダロウの「婉曲」用法とノデハナイカの「婉曲」用法

次に、ダロウとノデハナイカの「婉曲」用法を比較する。3.4.1 では、出現場所から両形式を比較する。3.4.2 では前接形式について考察する。

3.4.1 出現場所

学術論文におけるダロウとノデハナイカの「婉曲」用法の用例を出現場所によって、「導入部分」「本論部分」「終結部分」に分けた結果を図 12 に示す。

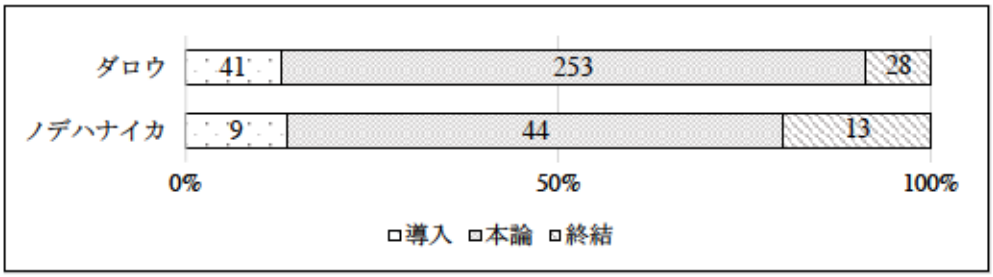

図 12 ダロウとノデハナイカの出現場所

図 12 からわかるように、論文の終結部分における割合は、ノデハナイカのほうが明らかに高い。前述したように、ノデハナイカには「話し手の意見を積極的に聞き手に共有させる」という表現効果がある。論文の終結部分での使用は、この表現効果を活用しているのであると思われる。（34）を例とすると、論文の締めくくりとして研究の意義を述べる際にノデハナイカは用いられている。これによって、婉曲さが加えられると同時に、読み手に賛同を呼びかけるニュアンスも生じさせるだろう。一方、このようなニュアンスがあ

るからこそ、論理的な分析が求められる本論部分においては、「婉曲」のノデハナイカの使用は多くなく、その件数はダロウの約 5 分の 1 にとどまる。

(34)　考察を通じて、言葉が、社会文化的な背景やコンテクストとどのように接触し、認識を生み出すのかを考えることにも貢献できたのではないかと考える。

（『日本語教育』,④）

次に、(35) に本論部分で頻繁に使われるダロウの例をあげる。(35) において、「公共的討議だけではカントの問題状況を解決できない」という客観的な考察の結果に基づき、著者の主張を述べる際にダロウが使われている。ダロウによって、婉曲さが加えられると同時に、十分な検討を経た結果の見解であることも示されている。

(35)　以上の考察から確認できることは二点ある。第一に、公共的討議だけではカントの問題状況を解決できない。それ故、仮想的な利害関係者としての自己自身との討議も、討議倫理は認める必要があるだろう。

（『日本語教育』,④）

3.4.2 前接形式

次に、「婉曲」を表すダロウとノデハナイカの前接形式にどのような違いがあるのかを見ていく。表 9 と表 10 に、「婉曲」を表すダロウとノデハナイカの前接形式の上位 5 位を示す。

表 9 「婉曲」のダロウの前接形式

順位	前接形式	出現数	%
1	と言える／と言ってもいい	70	21.7%
2	できる類[10]	56	17.3%
3	重要・必要	37	11.5%
4	べき	36	11.1%
5	いい類[11]	28	8.7%

（出現数＝323）

[10] 「できる」、「可能」、「ありえる」などを含む。

[11] 「てもいい」、「ほうがいい」などを含む。

表 10 「婉曲」のノデハナイカの前接形式

順位	前接形式	出現数	%
1	重要・必要	14	21.5%
2	できる類	13	20.0%
3	いい類	8	12.3%
4	と言える／と言ってもいい	6	9.2%
5	なければならない	4	6.2%

（出現数＝65）

表 9 からわかるように、ダロウの場合、「と言える／言ってもいい」のような、「話し手が構築した主張や表現について、その客観的妥当性を承認する標識」（森山 2000: 64）がもっとも多く、2 割以上も占めている。これは、「十分な検討・検証を経た結果の結論・見解である」（蓮沼 2015: 27）というダロウのニュアンスに馴染みやすいと思われる。(36) のように、書き手が「と言える」によって判断の客観的妥当性を承認して主張し、さらにダロウを付加することで、その主張をより婉曲的にしている。

(36) ただし、この「（ズボン）をきる」とする間違いはモノリンガルにも多く、モノリンガルでも混乱しうるポイントで JSL が大きくつまずいていると言えるだろう。

（『日本語教育』, ⑬）

一方、表 10 からわかるように、「と言える／言ってもいい」と共起するノデハナイカはそれほど多くなく、1 割未満である。ノデハナイカの場合、(37) のように、「重要・必要」のような評価を表す表現との共起が多い。

(37) 国文学研究にとって、〈書物のリテラシー〉を獲得し、継承していく制度的な保障を構築することは緊要課題である。しかし、その反面として自戒も必要なのではないか。

（『日本文学』, ②）

4. まとめ

本章では、ダロウとノデハナイカの各用法について比較を行った。まず、コーパス調査の結果に基づいて検討した結果、以下のことがわかった。

A. ダロウの「推量」用法とノデハナイカの「推測」用法

①. 共起語の比較から、ダロウは思考を経た認識判断、ノデハナイカは直感的な認識判断に偏っている。

②. 応答文としての使用状況から、ダロウは判断面では断定的な判断を表すのに対して、ノデハナイカは判断面では多様な判断の段階を表す。

B. ダロウの「疑念」用法とノデハナイカの「推測」用法

①. 聞き手の反応から見れば、ダロウもノデハナイカも、話し手の疑いを述べることが主たる用法であり、積極的に伺うニュアンスを帯びるわけではない。

②. 文章における機能から見れば、ダロウは問題を提起し、読み手に考えさせる働きがある。ノデハナイカは読み手の状況を推測し、読み手の共感を呼ぶ機能がある。

C. ダロウの「確認」用法とノデハナイカの「確認」用法

①. 使用頻度から見れば、ダロウのほうが頻繁に使われている。

②. 発話意図から見れば、ダロウもノデハナイカも、主に「陳述要求」の意図で使われ、「主張要求」と「感情要求」の意図での使用は少ない。

D. ダロウの「婉曲」用法とノデハナイカの「婉曲」用法

ダロウの「婉曲」用法は「対話」における使用頻度が非常に低いのに対して、ノデハナイカの「婉曲」用法は、多様な意図で頻繁に使われている。

また、文系学術論文にしぼって比較した結果は表 11 のようにまとめられる。

表 11 文系学術論文におけるダロウとノデハナイカ

用法	出現場所	使い方		ダロウ	ノデハナイカ
推量・推測	導入部分	研究背景の紹介		○	△
		自説の提示		△	○
	本論部分	帰結推量	仮定条件の帰結	○	△
			現在／未来	○	△
			過去	○	○
		事情推量	事情推量 1	○	○
			事情推量 2	○	△
		他者の意見の引用		△	○
	終結部分	結果のまとめ		○	○
		今後の展望		○	△
婉曲	表現効果			十分な検討を経た結果の見解である	意見を積極的に聞き手に共有させる
	共起語			と言える／言ってもいい	重要・必要

（○：相対的に使用頻度が高い；△：相対的に使用頻度が低い）

A. ダロウの「推量」用法とノデハナイカの「推測」用法

①. 導入部分では、ダロウは「研究背景の紹介」でよく用いられるのに対して、ノデハナイカは「自説の提示」でよく使われる。

②. 本論部分では、「帰結推量」の場合、ダロウは仮定条件の帰結としての使用がノデハナ

イカより多く、「現在／未来」についての推量もノデハナイカより多い。また、「事情推量」の場合、ノデハナイカの使用は少ない。一方、ノデハナイカは他者の意見を引用する際によく用いられるが、ダロウではそれが少ない。

③. 終結部分では、ダロウは「結果のまとめ」と「今後の展望」を述べる際に使われるが、ノデハナイカでは「今後の展望」は少ない。

B. ダロウの「婉曲」用法とノデハナイカの「婉曲」用法

①. ダロウには、十分な検討を経た結果の見解であるというニュアンスがあり、よく「と言える／言ってもいい」に後接して使用される。

②. ノデハナイカには、話し手の意見を積極的に聞き手に共有させるという表現効果があり、論文の終結部分における割合はダロウより高く、よく終結部分で「重要・必要」のような評価を表す表現に後接する。

アカデミック・ライティングにおけるダロウとノデハナイカを学習者に指導する際に、表 11 のように、出現場所別に、「○」と表記した相対的に使用頻度の高い具体的な使い方を指導するとよいだろう。また、「婉曲」用法は頻繁に使われているため、独立した用法として、「と言えるだろう」「重要なのではないだろうか」などのかたまりで提出するとよい。

第 5 章 日本語教科書におけるダロウとノデハナイカの扱い

本章では、第 2 章と第 3 章におけるコーパス調査および第 4 章における比較の結果を踏まえ、従来の日本語教育におけるダロウとノデハナイカの扱いを検討する。ダロウとノデハナイカはどのように扱われているのかを探る手がかりとして、中国で広く使用されており、初級から中上級まで一貫したシラバスで作成された以下の 5 種類の日本語教科書を選定し、教科書調査を行う。

①. 『新総合日本語 基礎日語第 1 冊』『同第 2 冊』『同第 3 冊』『同第 4 冊』（大連理工大学出版社）（以下『新総合』とする）
②. 『新編日語（重排版）第 1 冊』『同第 2 冊』『同第 3 冊』『同第 4 冊』（上海外国語教育出版社）（以下『新編』とする）
③. 『総合日語（修訂版）第 1 冊』『同第 2 冊』『同第 3 冊』『同第 4 冊』（北京大学出版社）（以下『総合』とする）
④. 『日語総合教程第 1 冊』『同第 2 冊』『同第 3 冊』『同第 4 冊』（上海外国語教育出版社）（以下『教程』とする）
⑤. 『みんなの日本語初級I第 2 版』『同初級II』『みんなの日本語中級I』『同中級II』（スリーエーネットワーク）（以下『みんな』とする）

本章の構成は以下のとおりである。1.と 2.では、使用実態調査の結果を踏まえて、日本語教科書におけるダロウとノデハナイカの扱いを調査し、問題点を指摘する。3.ではそれらの問題点をめぐって、改善案を提案する。

1. 日本語教科書におけるダロウの扱いとその問題点

本節では、日本語教科書におけるダロウの扱いについて調査し、問題点を指摘する。1.1 ではダロウの各用法の提出課と提出順序を調査する。1.2～1.5 では使用実態調査の結果を踏まえて、「推量」「確認」「疑念」「婉曲」用法の扱いとその問題点をそれぞれ検討する。

1.1 日本語教科書におけるダロウの提出課および提出順序

まず、5 種類の教科書では、ダロウの各用法が文法項目として明示的に提出されているかどうかを調べ、結果を表 1 にまとめる。

表 1 教科書におけるダロウの各用法の提出課

用法＼教科書		新総合	新編	総合	教程	みんな
推量		2 冊 17 2 冊 26	1 冊 13 2 冊 12	1 冊 10 1 冊 15	1 冊 12	初II 32 中I 5 中II 22
確認	聞き手依存型	1 冊 13	2 冊 17	1 冊 13	―	初I 21
	聞き手誘導型	2 冊 17	―	―	1 冊 12	中II 17
疑念	疑い	3 冊 7	―	―	3 冊 13	中I 5
	婉曲疑問	2 冊 20 2 冊 29	―	1 冊 13 2 冊 15	1 冊 12 4 冊 15	▲初II 32 中I 1 中I 3 中II 14
婉曲		―	△1 冊 13	―	―	―

（△：文法解説あり、対応する例文なし；▲：文法解説なし、その用法の例文あり）

ダロウの各用法の提出課を示している表 1 から、次のことがわかる。

①. 「推量」については、どの教科書も文法項目として扱っている。『教程』以外の教科書では、「推量」は複数の課に分けて指導されている。

②. 「確認」については、どの教科書も指導しているが、「聞き手依存型」と「聞き手誘導型」をともに扱っているのは『総合』と『みんな』のみである。

③. 「疑念」の「疑い」については、『新編』と『新総合』では指導されていない。『総合』『教程』『みんな』では「疑い」を 1 つの課で扱っている。「疑念」の「婉曲疑問」については、『新総合』では指導されていない。ほかの教科書では複数の課に分けて指導している。

④. 「婉曲」については、あまり文法項目として扱われていない。『新編』では簡単な文法解説はあるが、対応する例文はない。

次に、ダロウの各用法の提出順序を表 2 に整理する。ダロウの提出順序を示している表 2 から、次のことがわかる。

⑤. 『みんな』以外の教科書は、初級段階では、「推量」からダロウを導入しはじめ、「確認」および「疑念－婉曲疑問」に展開していく。「疑念－疑い」を中級段階で扱っている。『みんな』は「確認－聞き手依存型」を最初に導入し、初級段階で「推量」も指導している。「疑念－婉曲疑問」と「疑念－疑い」を中級に入ってから指導している。

⑥. 1 つの課でダロウの複数の用法を扱う傾向が見られる。特に『新編』と『教程』では、その傾向がより明確である。

表 2 教科書におけるダロウの各用法の提出順序[1]

段階		新総合	新編	総合	教程	みんな
初級	前半	推量 （でしょう） ↓ 確認 （依存） ↓ 推量 （だろう）	－	推量 （でしょう） ＋ 確認 （依存） ＋ 疑念 （婉曲疑問） ＋ △婉曲	推量 （でしょう） ＋ 確認 （依存） ＋ ▲確認 （誘導） ＋ 疑念 （婉曲疑問）	確認 （依存）
	後半	確認 （誘導） ↓ 疑念 （婉曲疑問）	推量 ＋ 確認 （依存）	－	－	推量 （でしょう）
中級	前半	疑念 （婉曲疑問） ↓ 疑念 （疑い）	－	推量 （だろう）	疑念 （疑い）	疑念 （婉曲疑問） ↓ 疑念 （疑い） ＋ 推量 （だろう）
	後半	－	－	－	－	確認 （誘導） ↓ 推量 （ノダロウ）

1.2 日本語教科書における「推量」のダロウの扱い

本節では、日本語教科書における「推量」のダロウの扱いについて述べる。1.2.1 では、JP と CN の使用実態調査の結果を踏まえ、指導する際の留意点を指摘する。1.2.2 では、教科書における解説とその問題点を分析する。1.2.3 では例文とその問題点を分析する。

1.2.1 CN に「推量」のダロウを指導する際の留意点

JP と CN の使用実態調査から、「推量」のダロウを CN に指導する際の留意点は以下のようにまとめられる。

---

[1] 表における各表記の意味は以下のとおりである。
「↓」：提出の先後順序
「＋」：は同じ課で複数の用法が同時に提出される
「△」：文法解説があるが、対応する例文がない
「▲」：文法解説がないが、その用法と判断できる例文がある

①. 「聞き手に伝えるという意図を本来的には持っていない」（安達 1997: 93）という伝達的側面の特徴を説明する必要がある。話すことを指導する際に、「独話」では「～だろうと思う」、「対話」では「～でしょうね」を使用するように説明する。書くことを指導する際に、読み手が不特定であれば、「言い切り」を使用するように説明する。また、譲歩および理由を述べる際に使われる「ダロウ＋が／けれども」「ダロウ＋から／し」を、上級段階で文章の展開に論理性と説得力を加える表現として扱うとよい。

②. ダロウは認識上の不確かさをもっているにもかかわらず、不確実な情報を提供する際には頻繁に使われないということを指導する必要がある。特に、質問に対して、答えが不確実であることを示す場合にあまり使われないことを説明する。

③. 未来を表す形式であると誤解させないように、例文を工夫する必要がある。

④. 「のだ」が前接した＜事情推量＞を表す「ノダロウ」に重点をおいて指導する必要がある。

1.2.2 日本語教科書における「推量」のダロウに関する解説とその問題点

表 3 に教科書における「推量」のダロウに関する解説をまとめる。

表 3 教科書における「推量」のダロウに関する解説[2]

	課	解説
新総合	2 冊 17 課	でしょう 「でしょう」は判断助動詞「です」の推量形式である。普通体は「だろう」である。よく「たぶん」「きっと」などの副詞と共起し、文末は下降調である。 （判断助动词「です」的推量形式。简体为「だろう」表示说话人的推测。多与「たぶん」「きっと」等副词搭配使用。语尾读降调。）
	2 冊 26 課	おそらく…だろう 「おそらく…だろう」は客観的な物事あるいは将来の事態についての推測を表す。信憑性はかなり高いが、「きっと」より低い。「たぶん」に比べれば、ニュアンスは重くて、悪い傾向のある事態について推測する。 （「おそらく…だろう」表示对客观事物或将来的事情的推测。认为有相当大的可靠性，但程度低于「きっと」。与「たぶん」相比，语气比较沉重。所推测的内容有不好的倾向。）
新編	1 冊 13 課	でしょう 文末は下降調であり、話し手の婉曲的な断定あるいは推測を表す。推測を表す「でしょう」はよく陳述副詞「たぶん」と共起する。「きっと」と共起する際に婉曲的な断定を表す。 （句尾语调要下降，表示讲话人的委婉断定或推测。表示推测的「でしょう」常和陈述副词「たぶん」搭配使用，也和「きっと」一起使用。和「きっと」一起使用时表示委婉的断定。）
	2 冊 12 課	さぞ…でしょう 副詞「さぞ」と「でしょう（だろう）」と共起し、「想必」「一定是」を表す。他人の境遇や心情などについての同感を表す。 （副词「さぞ」和「でしょう（だろう）」呼应使用，表示「想必」「一定是」，用于对他人的境遇，心情等的同感）
	3 冊 18 課	ことだろう 「ことだろう」は「だろう」よりニュアンスが鄭重である。話し手の感慨を表す。よく

[2] 表中の下線は筆者による。『総合』『新編』『新総合』『教程』における解説の原文は中国語であり、日本語の訳文および表中の下線は筆者による。『みんな』の本冊には例文のみあり、解説は『みんなの日本語初級I 第 2 版 翻訳・文法解説 中国語版』『同初級II』『みんなの日本語中級I 翻訳・文法解説 中国語版』『同中級II』（スリーエーネットワーク）による。教科書における例文は付録 2 に示す。

		「どんあに」「さぞ」などと共起する。 （「ことだろう」比「だろう」语气郑重，用来表示自己的感慨。「ことだろう」常和「どんあに」「さぞ」等呼应使用）
総合	1 冊 10 課	でしょう 「でしょう」は「です」の推測形式であり、話し手の推測を表す。未来のことについても、過去のことについても推測できる。中国語の「吧」と同じ意味である。 （「でしょう」是「です」的推測形式，表示说话人的推測。它既可以推測未来的事情，也可以推測过去发生的事情。相当于汉语的“吧”之意）
	1 冊 15 課	だろう 「だろう」は「でしょう」の普通体であり、推測を表す。中国語の「大概…吧」、「吧」と同じ意味である。 （「だろう」表示推測，是「でしょう」的简体形式。相当于汉语的“大概…吧，…吧”等）
教程	1 冊 12 課	でしょう 将来、あるいは不確実な事態についての推測を表す。 （表示对未来事情或不确定事情的推測。）
みんな	初II 32 課	でしょう 未来のことや、きっぱりと断定できないことについて推測する際に使われる。 （用于说话人对未来的事情或不太确切事情做推断时。）
	中I 5 課	だろう・だろうと思う 「だろう」は「でしょう」の普通形で、普通体の文章で使われる。話し手自分の考えを断定せず、推量する述べ方である。 会話では、「と思う」をつけて、「だろうと思う」の形で使うのが普通である。 （「だろう」是「でしょう」的普通形，用于简体文章。表示说话人对自己想法不是很肯定，而是一种推測。 在会话中用「と思う」、通常也用「だろうと思う」的形式。）
	中II 22 課	のであろう 「のであろう（のだろう）」は、その前の文の理由、または、前の文で描かれている状況に対する解釈を想像して述べていることを表す。 （「のであろう（のだろう）」用于对前句的理由，或者前句所描绘的状况作解释性的推測。意思是：大概是…吧。）

教科書における解説を、1.2.1 で指摘した指導する際の留意点に照らし合わせると、「推量」のダロウの解説における問題点は以下のようにまとめられる。

①. 伝達的側面の特徴に関する説明がない。それゆえ、使用場面および後接形式についての説明も不十分であり、指導しているのは『みんな』中級 I の第 5 課のみである。

②. ダロウは認識上の不確かさをもっているにもかかわらず、不確実な情報を提供する際には頻繁に使われないということに関する説明がない。一方、『総合』1 冊第 10 課、第 15 課では、「吧」と対応させて説明している。「吧」は不確かな判断を明示する際に積極的に使われるため、この説明は CN の誤解を招く恐れがある。

③. 『みんな』以外の教科書では「のだ」が前接した＜事情推量＞を表す「ノダロウ」に関する指導がない。

1.2.3 日本語教科書における「推量」のダロウに関する例文とその問題点

付録 2 に示されている各教科書における例文を、1.2.1 で指摘した指導する際の留意点に照らし合わせると、「推量」のダロウの例文における問題点は以下のようにまとめられる。

④. 『みんな』以外の教科書では、「推量」のダロウの例文は基本的に「言い切り」の形で現れており、「～だろうと思う」、「～でしょうね」の例文が少ない。また、使用場面の提示が不十分な例文がある。たとえば、(1) はどのような状況で発せられた文である

かは判断しにくい。

(1)　その辞書は高いだろう。

(『総合』1 冊 15 課)

⑤. 使用実態と矛盾している例文がある。「推量」のダロウの例文には、(2) (3) のような応答文に使用される文が少なくない。これらの例文を読むと、CN はダロウが不確実であることを強調するために使われるのだと誤解する恐れがある。

(2)　鈴木：あの人はこの大学の先生ですか。
　　趙：学生でしょう。

(『総合』1 冊 15 課)

(3)　山田さんはどこにいますか。
　　二階にいるでしょう。

(『新編』1 冊 13 課)

⑥. ＜事情推量＞を表す「ノダロウ」の例文が少ない。また、「ノダロウ」に関する例文はすべてが (4) のような＜事情推量 2＞「既知事態＋推量内容＋ノダロウ」であり、CN にとっては特に困難である＜事情推量 1＞「推量内容＋既知事態＋ノダロウ」の例文はない。

(4)　洋子さんは先に帰った。保育所に子どもを迎えに行ったのだろう。

(『みんな』中II 22 課)

1.3 日本語教科書における「確認」のダロウの扱い

本節では、日本語教科書における「確認」のダロウの扱いについて述べる。1.3.1 では、JP と CN の使用実態調査の結果を踏まえ、指導する際の留意点を指摘する。1.3.2 では、教科書における解説とその問題点を分析する。1.3.3 では例文とその問題点を分析する。

1.3.1 CN に「確認」のダロウを指導する際の留意点

JP と CN の使用実態調査から、「確認」のダロウを CN に指導する際の留意点は以下のようにまとめられる。

①. 「確認」という行為は、高い待遇レベルが要求される場面、そして聞き手の私的領域の中心部に踏み込んだ「主張要求」と「感情要求」の意図で使用すると、失礼さをともないやすいことを指導する必要がある。

②. 使用する際に、普通体基調の場合でも、よく丁寧体の「でしょ（う）」を使用することを指導する必要がある。

1.3.2 日本語教科書における「確認」のダロウに関する解説とその問題点

表 4 に教科書における「確認」のダロウに関する解説をまとめる。

表 4 教科書における「確認」のダロウに関する解説

	課	解説
新総合	2 冊 17 課	名・形動[語幹]／用言[常体]＋でしょう 確認を表し、聞き手の同意を求める。男性は「だろう」、女性は「でしょう」を使う。文末は上昇調である。 （表示确认。含有希望听话人能表示同意的期待。男性一般用「だろう」，女性一般用「でしょう」。语尾读升调。）
新編	1 冊 13 課	でしょう 文末は上昇調であり、相手の同意を求める。話し手の持ち物や達成したことを自慢するのである。 （句尾语调升高，表示征求对方同意，讲话人在向别人夸耀自己的持有物或做成的事情。）
総合	1 冊 13 課	でしょう 「でしょう」は確認を表すことができる。文末は上昇調であり、中国語の“吧”と同じ意味である。 （「でしょう」还可以表示确认的意思，这时要读升调。相当于汉语的“吧”等。）
	2 冊 17 課	でも、…でしょう 相手の意見に賛成できないときに、「でも、…でしょう」で反論を述べる。文末は上昇調である。 （当不能认同对方的说法时，就采用这种表达方式（でも、…でしょう）进行反驳，这时句尾一定要读升调。）
教程	1 冊 12 課	でしょう 話し手はほぼ断定できる事実を聞き手に確認する際に使われる。この用法は推量というより、むしろ婉曲的な断定を表す。文末は上昇調である。 （用于向对方进一步确认自己已经基本确定的事实。这种用法与其说是推测，倒不如说是一种委婉的断定，一般要用升调。）
みんな	初Ⅰ 21 課	でしょう？ 聞き手の同意を求めるために、問いかけあるいは確認をする場合に使われる。文末は上昇イントネーションになる。 （用于为求得听话人同意，进行询问或确认时。「でしょう」用升调。）
	中Ⅱ 17 課	でしょ 「…だろう」の形で上昇イントネーションをともなって使われ、相手に「…」の内容を確認する表現である。相手が「…」を認識していない場合、認識するよう求める言い方になり、非難したり叱ったりする気持ちがともなうこともある。丁寧形「でしょう」のほか、会話では「でしょ」「でしょっ」「だろ」「だろっ」などの形になることがある。 （「…だろう」的形式，在说话时句末需要升调，表达与对方确认「…」的内容。有时表示说话时，对方没有认识到「…」，要求对方认识到「…」，并带有指责和批评的意思。有时为了表示礼貌语气，可替换为「でしょう」。会话中有时也可替换为「でしょ」「でしょっ」「だろ」「だろっ」等形式。意思是：是不是该…了？　）

教科書における解説を、1.3.1 で指摘した指導する際の留意点に照らし合わせると、「確認」のダロウの解説における問題点は以下のようにまとめられる。

①. 『総合』と『みんな』以外の教科書の解説では、総括的な説明しかなく、「聞き手依存型」と「聞き手誘導型」の違いについての指導がない。

②. 『みんな』以外の教科書では、「確認」は失礼さをともないやすいことに関する説明が不十分である。特に『総合』では、下線部のように「確認」のダロウが反論の表現として扱われている。このような解説は、CN による不適切な使用を招きやすい。

③. 普通体基調の場合でも丁寧体の「でしょ（う）」がよく使用されることについての説明がない。

1.3.3 日本語教科書における「確認」のダロウに関する例文とその問題点

付録 2 に示した各教科書における例文を、1.3.1 で指摘した指導する際の留意点に照らし合わせると、「確認」のダロウの例文における問題点は以下のようにまとめられる。

④. 話者の親疎、上下関係および発話場面といった情報の提示が不充分である。たとえば、(5) のような文を目上の人に対して発話すると、失礼になりやすいが、教科書では話者の関係についての情報がない。

(5)　7 月に京都でお祭りがあるでしょう？
　　…ええ、あります。

（『みんな』初I 21 課）

1.4 日本語教科書における「疑念」のダロウの扱い

本節では、日本語教科書における「疑念」のダロウの扱いについて述べる。1.4.1 では、JP と CN の使用実態調査の結果を踏まえ、指導する際の留意点を指摘する。1.4.2 では、教科書における解説とその問題点を分析する。1.4.3 では例文とその問題点を分析する。

1.4.1 CN に「疑念」のダロウを指導する際の留意点

JP と CN の使用実態調査から、「疑念」のダロウを CN に指導する際の留意点は以下のようにまとめられる。

①. 「疑い」については、中国語と異なり、日本語では疑問文がそのまま疑いを表せないと説明し、「疑い」のダロウの使用を促す必要がある。書くことを指導する際に、文章の展開に重要な働きを果たす問題提起についての説明が求められる。

②. 「疑い」については、話すことを指導する際に、「何だろう／でしょう」「何て言うだろう／でしょう」を思考時間を作るための表現と説明し、「何だろう／でしょうね」「どうだろう／でしょうね」を応答を回避するための表現と説明するとよい。

③. 「婉曲疑問」については、「依頼」「許可求め」「主張・助言」といった使用場面の提示が求められる。特に、「いかかでしょうか」「のではないでしょうか」を「主張・助言」に丁寧さを加える表現として指導する必要がある。

1.4.2 日本語教科書における「疑念」のダロウに関する解説とその問題点

表 5 に教科書における「疑念」のダロウに関する解説をまとめる。

表 5 教科書における「疑念」のダロウに関する解説

	課	解説
新総合	—	—
新編	1 冊 13 課	でしょう 「でしょうか」は「ですか」と同じように質問の意味を表すが、「でしょうか」のほうがニュアンスは婉曲的である。 （「でしょうか」同于「ですか」，表示提问，但语气比「ですか」委婉。）

	2 冊 15 課	（の）ではないでしょうか 問いかけるようなニュアンスで、話し手の断定できないことを述べる。ニュアンスは婉曲的である。話し手ははっきり断言できないが、ほぼそうだと思っている。もちろん、「だろう」ほど自信がない。 （用于讲话者用询问的口气向对方提出自己不敢贸然断定的事物。这种表达方式语气婉转，讲话人对所推测的事物虽然不是很肯定，但在心里还是认为事情八九不离十基本如此，当然，不如「だろう」显得那么自信。）
総合	2 冊 20 課	よろしいでしょうか 「よろしい」は「よい」より丁寧な言い方である。 （形容词「よろしい」是「よい」的郑重，礼貌表达方式。）
	2 冊 29 課	V させていただけないでしょうか 「させてもらえないでしょうか」の謙譲語である。 （是「させてもらえないでしょうか」的敬语（自谦）表现形式。）
	3 冊 7 課	であろうか 「であろう」は「である」の推量形式である。「であろうか」は話し言葉における「でしょうか」の意味と同じである。 （「であろう」是「である」的推量形式，「であろうか」的意思相当于口语中的「でしょうか」。）
教程	1 冊 12 課	でしょう 「でしょう」は疑問を表す終助詞「か」といっしょに使われ、文末は下降調であり、ニュアンスは「ですか」より婉曲的である。 （でしょう可以和表示疑问的终助词か一起使用，一般用降调，语气比ですか婉转。）
	3 冊 13 課	はたして～だろうか 「はたして」は副詞であり、「だろうか」と共起し、事態や事態の展開に対する疑いを表す。その意味は「究竟是否…呢」、「到底是否…呢」である。 （はたして为副词，与だろうか相呼应，表示对事物或事物的进展持怀疑态度。意为“究竟是否…呢”、“到底是否…呢”。）
	4 冊 15 課	てはいないだろうか 「ある事態の存在についての推測」を表す。「だろう」ほど自信がないが、当該事態の存在については比較的肯定的な態度をもつ。「不是…吗」、「是否…了呢」という意味である。 （表示“对某现象的存在表示推测”，虽然没有比直接使用「だろう」那么具有自信，但是对该现象的存在也是持比较肯定的态度。意为“不是…吗”，“是否…了呢”。）
みんな	中I 1 課	てもらえない／いただけないでしょうか 「てもらえないでしょうか・ていただけないでしょうか」は、「てもらえませんか・ていただけませんか」よりさらに丁寧で柔らかい印象を与える表現である。 （「てもらえないでしょうか・ていただけないでしょうか」比「てもらえませんか・ていただけませんか」给人留下更加礼貌，委婉的印象。）
	中I 3 課	させてもらえない／いただけないでしょうか 「させていただけませんか」より「させていただけないでしょうか」のほうがより丁寧である。 （「させていただけないでしょうか」比「させていただけませんか」有礼貌。）
	中I 5 課	のだろうか 「…のだろうか」で「…」が正しいかどうか自分に問いかけるときに使う。「どう」「何」「いつ」などの疑問詞といっしょに使って、その答えを自問することもある。 相手に対して質問するときには使われるが、「…のですか」に比べると「…のでしょうか」のほうが答えを強要しない柔らかい尋ね方になる。 疑問詞のない「…のだろうか」の形では、「…が正しくない・…とは思わない」ということを言いたい場合にも使われる。 （「…のだろうか」用于自问「…」是否正确的场合。和「どう」「何」「いつ」等疑问词一起使用，也用于自问自答。 也用于向听话人提问。与「…のですか」相比，「…のでしょうか」的提问方式较委婉，不强求听话人回答。 没有疑问词的「…のだろうか」，也用于表达…不正确或认为不是…的场合。）
	中II 14 課	のではないだろうか 「…のではないかだろうか」は、「…」と思うが、その真偽が不確かで断定できないという話し手の考えを述べる表現である。 （表示说话人虽然认为「…」，但又不能确定其真伪，无法做出判断，仅阐述自己的想法时用，意思是：不是…吗）

教科書における解説を、1.4.1 で指摘した指導する際の留意点に照らし合わせると、「疑念」のダロウの解説における問題点は以下のようにまとめられる。

①. 「疑い」については、『新編』と『新総合』では説明がない。ほかの教科書では「疑い」は扱われているが、日本語と中国語の疑いの表し方の違いに関する説明がない。そして問題提起の機能に関する指導も欠けている。
②. 「疑い」については、思考時間を作るための「何だろう／でしょう」「何て言うだろう／でしょう」、および応答を回避するための「何だろう／でしょうね」「どうだろう／でしょうね」についての指導がない。
③. 「婉曲疑問」については、「婉曲的」であるという抽象的な説明のみあり、使用場面の提示が不十分であるため、CN の産出につながりにくい。

1.4.3 日本語教科書における「疑念」のダロウに関する例文とその問題点

付録 2 に示されている各教科書における例文を、1.4.1 で指摘した指導する際の留意点に照らし合わせると、「疑念」のダロウの例文における問題点は以下のようにまとめられる。

④. 「疑い」については、例文からダロウが文章の構造における働きを読み取りにくい。たとえば、(6) のような例文だけでは、問題提起の機能がわかりにくいが、その後ろに「温暖化がさらに進むかもしれません」のような文があれば、その機能を読み取りやすくなるだろう。

(6)　地球の未来はどうなるのでしょうか。

(『みんな』中I 5 課)

⑤. 「婉曲疑問」については、例文における話者の親疎、上下関係および発話場面といった情報の提示が不充分である。たとえば、(7) では話者情報も発話場面も不明確であるため、このような例文から「婉曲疑問」を使用する必要性がわかりにくいだろう。

(7)　大学を卒業した年は何年だったでしょう。
　　…たしか 1965 年だったと思います。

(『教程』1 冊 12 課)

1.5 日本語教科書における「婉曲」のダロウの扱い

本節では、日本語教科書における「婉曲」のダロウの扱いについて述べる。1.5.1 では、JP と CN の使用実態調査の結果を踏まえ、指導する際の留意点を指摘する。1.5.2 では、教科書の扱いにおける問題点を指摘する。

1.5.1 CN に「婉曲」のダロウを指導する際の留意点

JP と CN の使用実態調査から、「婉曲」のダロウを CN に指導する際の留意点は以下のようにまとめられる。

①. 「婉曲」のダロウが表すのは「十分な検討・検証を経た結果の結論・見解である」というニュアンスであることを説明する必要がある。

②. 書くことを指導する際に、読み手が不特定である文章ではよく使用されると説明し、「主張・評価」を「提案・助言」を婉曲的にする表現として、「と言える／言ってもいい＋ダロウ」、「必要／重要／大事＋ダロウ」、「ば／たら／といい＋ダロウ」を提示するとよい。

1.5.2 「婉曲」のダロウの扱いにおける問題点

教科書における「婉曲」のダロウの扱いを、2.4.1 で指摘した指導する際の留意点に照らし合わせると、問題点は以下のようにまとめられる。

「婉曲」のダロウに関する解説も例文も欠けており、婉曲表現を使用する意識を促す指導もない。その結果、CN の「婉曲」のダロウに対する理解と使用に困難をきたす恐れがある。

2. 日本語教科書におけるノデハナイカの扱いとその問題点

本節では、日本語教科書におけるノデハナイカの扱いについて調査し、問題点を指摘する。2.1 ではノデハナイカの各用法の提出課と提出順序を調査する。2.2～2.4 では使用実態調査の結果を踏まえて、「推測」「確認」「婉曲」用法の扱いをそれぞれ検討する。

2.1 日本語教科書におけるノデハナイカの提出課および提出順序

まず、5 種類の教科書では、ノデハナイカの各用法が文法項目として明示的に提出されているかどうかを調べ、結果を表 6 にまとめる。

表 6 教科書におけるノデハナイカの各用法の提出課

教科書／用法	新総合	新編	総合	教程	みんな
推測	2 冊 30 4 冊 15	2 冊 15	2 冊 24 2 冊 25	3 冊 4	中I 5 中II 14 中II 15
確認	2 冊 30	―	3 冊 1	―	―
婉曲	―	―	▲2 冊 24	▲3 冊 4	▲中II 15

（▲：文法解説なし、その用法の例文あり）

ノデハナイカの各用法の提出課を示している表 6 から、次のことがわかる。

①. 「推測」については、どの教科書でも文法項目として扱われている。そして、『新総合』『総合』『みんな』では、「推測」は複数の課に分けて指導されている。

②. 「確認」については、解説に明示的に「確認」を指導しているのは『総合』と『新総合』のみである。

③. 「婉曲」については、どの教科書でも文法項目として扱われていないが、『総合』『教程』『みんな』の例文には、「婉曲」用法と判断できる文がある。

また、ノデハナイカの各用法の提出順序を表 7 に整理する。

表 7 教科書におけるノデハナイカの各用法の提出順序

段階		新総合	新編	総合	教程	みんな
初級	前半	―	―	―	―	―
	後半	推測 ＋ ▲婉曲 （一般形） ↓ 推測 （複合形）	推測 ＋ 確認 （一般形）	推測 （複合形）	―	―
中級	前半	確認 （簡略形）	―	―	推測 ＋ ▲婉曲 （複合形）	推測 （簡略形）
	後半	―	推測 （複合形）	―	―	推測 （複合形） ↓ 推測 ＋ ▲婉曲 （一般形）

（▲：文法解説なし、その用法の例文あり）

ノデハナイカの提出順序を示している表 7 から、次のことがわかる。

④. 教科書におけるノデハナイカについての指導は、初級後半と中級前半に集中しており、すべて「推測」用法から導入する。

⑤. 形式から見ると、「複合形」は共通に指導されている。一方、話し言葉では実際に多用される「一般形」と「婉曲形」を扱わない教科書がある。特に『新編』と『教程』は「複合形」のみを指導している。

2.2 日本語教科書における「推測」のノデハナイカの扱い

本節では、日本語教科書における「推測」のノデハナイカの扱いについて述べる。2.2.1 では、JP と CN の使用実態調査の結果を踏まえ、指導する際の留意点を指摘する。2.2.2 では、教科書における解説とその問題点を分析する。2.2.3 では例文とその問題点を分析する。

2.2.1 CN に「推測」のノデハナイカを指導する際の留意点

JP と CN の使用実態調査から、「推測」のノデハナイカを CN に指導する際の留意点は以下のようにまとめられる。

①. 直感的な推測や、根拠に基づいた推測など、多様な認識段階の推測を表せると説明し、中国語の「吧」のみではなく、「会」、「可以」などとの対応関係も説明する必要がある。

②. 書くことを指導する際に、ノデハナイカによって読み手の状況や心理状態を推測することで話題を導入するという使い方を提示する。

③. 話すことを指導する際に、応答文として不確実な答えを述べるという使い方を提示する。

④. 「一般形」は「言い切り」以外の形で使用されることが多いことを強調し、「のではないかと思う」、「んじゃないかと心配する」、「んじゃないかな」を自分の思考、不安に思うことを述べる表現として指導し、「のではないかと指摘する／言っている」先行研究を引用する表現として指導する必要がある。

2.2.2 日本語教科書における「推測」のノデハナイカに関する解説とその問題点

表 8 に各教科書における「推測」のノデハナイカに関する解説をまとめる。教科書における解説を、2.2.1 で指摘した指導する際の留意点に照らし合わせると、「推測」のノデハナイカの解説における問題点は以下のようにまとめられる。

①. 多様な認識段階の判断を表せるということについての説明がない。対応する中国語として、「会不会、是不是、可能是」、「会不会…吧、是不是…吧、可能是…吧」「不是…吗、说不定」「也许…吧、大概是…吧、大概会…吧」はあげられているが、これらはいずれも判断が未成立の段階の認識を表す表現であり、より多様な対応表現の提示が求められる。

②. 意味についての抽象的な説明は多いが、具体的な使用場面の提示は不足している。

③. 「一般形」の後接形式については、「と思う」のみが指導されている。ほかの後接形式の提示はほぼない。

表 8 教科書における「推測」のノデハナイカに関する解説

	課	解説
新総合	2 冊 30 課	体言＋な／用言[連体形]＋のではないか 婉曲的な推測を表す。よく「と思う」などに前接する。中国語の「会不会、是不是、可能是」と同じ意味である。話し言葉では「のじゃないか」あるいは「んじゃないか」という形式もよく使われる。 （这个句型用于表示委婉的推测。经常与「と思う」等搭配。译为“会不会、是不是、可能是”等。口语中还常用「のじゃないか」或「んじゃないか」这种形式。）
	4 冊 15 課	体言／用言[連体形]＋の＋ではないだろうか 「(の) ではないだろうか」は「(の) ではないか」より婉曲的な言い方である。断定はできないが、たぶんそうだろうという推測的な判断を表す。類似表現には「(の) ではないかと思う」がある。中国語の「不是…吗、说不定」と同じ意味である。 （「(の) ではないだろうか」是「(の) ではないか」的委婉说法。表示说话人虽然不能明确断定，但是可以做出“也许会是这样吧”这种推断型的判断。类似的表达方式有「(の) ではないかと思う」。译为“不是吗”“说不定”）
新編	2 冊 15 課	(の) ではないでしょうか 問いかけるようなニュアンスで、話し手の断定できないことを述べる。ニュアンスは婉曲的である。話し手ははっきり断言できないが、ほぼそうだと思っている。もちろん、「だろう」ほど自信がない。 （用于讲话者用询问的口气向对方提出自己不敢贸然断定的事物。这种表达方式语气婉转，讲话人对所推测的事物虽然不是很肯定，但在心里还是认为事情八九不离十基本如此，当然，不如「だろう」显得那么自信。）
総合	2 冊 24 課	のではないか（と思う） 婉曲的な推測を表す。中国語の「会不会、是不是、可能是」と同じ意味である。よく「と思う」に前接する。日常会話では「んじゃないかと思う」という形式もよく使われる。 （用于表示委婉的推测。相当于汉语的“会不会、是不是、可能是”等，经常与「と思う」搭配使用。在日常会话中，还常用「んじゃないかと思う」这种形式）
	2 冊 25 課	のではないだろうか 「のではないか」と同じように、話し手の推測を表すが、より婉曲的であり、相手に確認するニュアンスがある。中国語の「会不会…吧、是不是…呢、可能是…吧」と同じ意味である。 （与「のではないか」一样，用于表示说话人的推断。只不过语气更加委婉，含有向对方确认的语气。相当于汉语的“会不会…吧、是不是…呢、可能是…吧”）
教程	3 冊 4 課	のではないだろうか 話し手の肯定的な推測を表す婉曲的な言い方である。中国語の「也许…吧、大概是…吧、大概会…吧」と同じ意味である。敬体は「のではないでしょうか」である。また、否定ではなく、肯定的な意味を表すことに注意する必要がある。 （表示说话者的肯定推测，是比较委婉的表达形式。意味“也许…吧、大概是…吧、大概会…吧”。这个惯用型的敬体形式为のではないでしょうか。另外，须注意这个惯用型表达的是肯定的意思，而非否定的意思。）
みんな	中I 5 課	んじゃない？ 「んじゃないですか」は「のではありませんか」のくだけた形である。くだけた会話で、話し手の考えを述べるときに使う。「んじゃないですか」は親しい人に対して使うとき、「んじゃない」になることがある。改まった会話では、「のではないでしょうか」になる。 （「んじゃないですか」是「のではありませんか」的较随意的说法。在无需客气的场合，叙述说话人的想法时使用。当「んじゃないですか」用于亲密场合，有时变成「んじゃない」。在需要礼貌的谈话时，用「のではないでしょうか」。）
	中II 14 課	のではないだろうか 「…のではないかだろうか」は、「…」と思うが、その真偽が不確かで断定できないという話し手の考えを述べる表現である。 （表示说话人虽然认为「…」，但又不能确定其真伪，无法做出判断，仅阐述自己的想法时用，意思是：不是…吗。）
	中II 15 課	のではないか 「…のではないか」は「…」がおそらく正しいという見込みが、「…」の真偽が不確かだということを表す。 「と思う」「と思われる」「とのことだ」などをともなって、控えめに話し手の考えを述べる表現になる。 （表示估计「…」有可能是正确的，但又不确定「…」的真实性。意思是：是不是…啊。与「と思う」「と思われる」「とのことだ」等搭配使用，表示说话人有节制地阐述自己的想法。）

2.2.3 日本語教科書における「推測」のノデハナイカに関する例文とその問題点

付録 2 に示されている各教科書における例文を、2.2.1 で指摘した指導する際の留意点に照らし合わせると、「推測」のノデハナイカの例文における問題点は以下のようにまとめられる。

④. 対話形式の例文、特に応答文に使われる例文が少ない。一方、(8) のような対話形式になっておらず、発話場面が不明確な例文が多く見られる。

(8)　彼は先月北京へ行ったのではないでしょうか。

(『教程』3 冊 4 課)

⑤. 「婉曲」用法に関する文法解説はないが、「推測」用法の例文には (9) (10) のような「婉曲」用法と判断できる文がある。

(9)　この値段はちょっと高すぎるんじゃないかと思います。

(『総合』2 冊 24 課)

(10)　青少年の教育こそ真に大切なのではないだろうか。

(『教程』3 冊 4 課)

⑥. 「簡略形」の例文が少ない。5 種類の教科書における計 35 件の例文には、「簡略形」が (11) の 1 件しかない。

(11)　最近、食欲がないの。
…どこか悪いんじゃない？　一度病院で見てもらったほうがいいよ。

(『みんな』中I 5 課)

⑦. 「一般形」の例文は後接形式が単一的であり、ほぼすべてが「と思う」である。

2.3 日本語教科書における「確認」のノデハナイカの扱い

本節では、日本語教科書における「確認」のノデハナイカの扱いについて述べる。2.3.1 では、JP と CN の使用実態調査の結果を踏まえ、指導する際の留意点を指摘する。2.3.2 では、教科書における解説とその問題点を分析する。2.3.3 では例文とその問題点を分析する

2.3.1 CN に「確認」のノデハナイカを指導する際の留意点

JP と CN の使用実態調査から、「確認」のノデハナイカを CN に指導する際の留意点は以下のようにまとめられる。

「確認」という行為は、高い待遇レベルが要求される場面、そして聞き手の私的領域

の中心部に踏み込んだ「主張要求」と「感情要求」の意図で使用すると、失礼さをともないやすいことを指導する必要がある。

2.3.2 日本語教科書における「確認」のノデハナイカに関する解説とその問題点

表 9 に教科書における「確認」のノデハナイカに関する解説をまとめる。教科書における解説を、2.3.1 で指摘した指導する際の留意点に照らし合わせると、「確認」のノデハナイカの解説における問題点は以下のようにまとめられる。

①. 解説があるのは『総合』と『新総合』のみであり、ほかの教科書では「確認」用法について言及していない。

②. 解説がある教科書では、「確認」という行為にともなう失礼さについての説明はない。

表 9 教科書における「確認」のノデハナイカに関する解説

	課	解説
新総合	2 冊 30 課	体言＋な／用言[連体形]＋のではないか 話し手の判断を表す。聞き手に確認するニュアンスがある。 （用于表示说话人的推断，含有向对方确认的语气）
新編	―	―
総合	3 冊 1 課	んじゃない 「んじゃない」は否定疑問文の形式で話し手の肯定的な判断を述べて、そして聞き手に確認する。文末は上昇調であり、中国語の「吧」と同じ意味である。 （「んじゃない」这个句式是说话人以否定问句的形式向听话人传达自己肯定的判断，并向听话人进行确认，句尾要读升调。相当于汉语的“吧”）
教程	―	―
みんな	―	―

2.3.3 日本語教科書における「確認」のノデハナイカに関する例文とその問題点

付録 2 に示されている各教科書における例文を、2.3.1 で指摘した指導する際の留意点に照らし合わせると、「確認」のノデハナイカの例文における問題点は以下のようにまとめられる。

③. 例文には、話者の親疎、上下関係および発話場面といった情報の提示が不充分である。例文はすべて（12）のように、ノデハナイカ一文のみが提示され、対話の形式にさえなっていない。

（12） 彼、体の調子でも悪いんじゃない？

（『総合』3 冊 1 課）

2.4 日本語教科書における「婉曲」のノデハナイカの扱い

本節では、日本語教科書における「婉曲」のノデハナイカの扱いについて述べる。2.4.1 では、JP と CN の使用実態調査の結果を踏まえ、指導する際の留意点を指摘する。2.4.2

では、日本語教科書の扱いにおける問題点を指摘する。

2.4.1 CN に「婉曲」のノデハナイカを指導する際の留意点

JP と CN の使用実態調査から、CN に「婉曲」のノデハナイカを指導する際の留意点は以下のようにまとめられる。

①. 中国語では「意見・評価」を述べる際に「裸の形式」をよく使用することと異なり、日本語では婉曲表現の使用が求められるということを指導する必要がある。

②. 「いい」、「てもいい」、「ば／たら／といい」、「ほうがいい」、「必要／重要／大事／大切」が前接した形式を、「意見・評価婉曲表明」「提案・助言」「反論」「慰め」の意図で使用すると指導するといい。

③. 「思う」の連続使用によって、聞き手に単調で内容が貧困という印象を与えやすいため、多様な婉曲表現を使うことの重要性を強調し、「思う」の代わりにノデハナイカの使用を促したほうがいい。

④. 「話し手の意見を積極的に聞き手に共有させる」という表現効果を説明し、スピーチや発表といった場面での発話を指導する際に、締めくくりの箇所で主張や意見を総括的に述べる際に使用すると指導する必要がある。

2.4.2 日本語教科書における「婉曲」のノデハナイカの扱いにおける問題点

教科書における扱いを、2.4.1 で指摘した指導する際の留意点に照らし合わせると、「婉曲」のノデハナイカの扱いにおける問題点は以下のようにまとめられる。

①. 「婉曲」のノデハナイカに関する指導が欠けており、婉曲表現を使用する意識を促す指導もない。

②. 「婉曲」のノデハナイカを明示的に指導していないが、「推測」の例文には「婉曲」の文が見られ、CN を困惑させる可能性がある。

3. 改善案

3.では、1.と 2.で指摘した日本語教科書における問題点について、どのように改善すべきかを検討する。3.1 ではダロウとノデハナイカの各用法の提出順序を提案する。3.2 では具体的な例文と日本語教師向けの文法解説をまとめる。

3.1 ダロウとノデハナイカの各用法の提出順序

本節では、JP と CN の使用実態調査の結果を踏まえ、CN の理解度を考慮した上で、ダ

ロウとノデハナイカの各用法の提出順序を次の表 10 のように提案する[3]。提出の際に、学習レベルに合わせて、文法項目を「理解レベル」と「産出レベル」、つまり聞いて理解できればいいものと、使えるようになる必要があるものに分ける。また、「理解レベル」の場合、それは話す際に使われるものか、それとも書く際に使われるものかによって、さらに「話」と「書」に分ける。なお、シリーズ教科書は初級 2 冊と中級 2 冊からなるものが多いため、表 10 もそれを前提として作成した。

表 10 ダロウとノデハナイカの提出順序

段階		順序
初級	前半	A. 疑念－婉曲疑問「でしょうか」【産出（話）】
	後半	B. 確認「でしょう？」【理解】 ↓ C. 推量「でしょう＋でしょうね」【理解】
中級	前半	D. 推量「でしょう（だろう）ね＋だろうと思う」【産出（話）】 ↓ E. 推測＋婉曲 「んじゃない？　＋んじゃないかな＋のではないかと V」【産出（話）】 ↓ F. 確認「でしょう？」【産出（話）】＋確認「んじゃない？」【理解】 ↓ G. 疑念－疑い「だろうか／でしょうか」【産出（話）】
	後半	H. 推量「(の) だろう＋（の）であろう」【産出（書）】 ↓ I. 婉曲「だろう＋であろう」【産出（書）】 ↓ J. 推測＋婉曲「のではないかと V＋のではないだろうか」【産出（書）】 ↓ K. 疑念－疑い「だろうか＋であろうか」【産出（書）】

[3] 日本語教育におけるダロウの提出順序を検討する先行研究には庵（2009）がある。庵（2009）は表（1）のような「望ましい提出順序」を提唱している。この提出順序は、JP の使用実態に基づき、学習者の理解度を考慮するなどの点で優れたものであるが、検討の余地はまだある。まず、庵（2009）はすべての項目を「産出レベル」と見なす文法シラバスを認めることを前提にしているが、このような文法シラバスには「再考の余地がある」と庵（2009: 64）も認めている。また、庵（2009）ではダロウの「疑念－疑い」用法と「婉曲」用法についての指導が欠如している。

表（1） 望ましい提出順序（庵 2009: 66）

	初級	中級	上級
でしょうか	○		
だろうと思います	×	○	
でしょう（確認）	×	○	
だろう（推量）	×	○	
でしょうね	×	○	
でしょう（推量）	×	×	○

初級前半段階では、「疑念－婉曲疑問」を表すダロウを話し言葉で使用する産出項目として最初に提出する。また、初級後半段階では、ダロウの「確認」および「推量」用法を理解項目として提出する。中級に入ると、前半段階ではダロウの「推量」用法および、ノデハナイカの「推測」と「婉曲」用法を、話し言葉で使用する産出項目として扱う。また、ダロウの「確認」用法を産出項目として再度指導する。さらに、ダロウの「疑念－疑い」用法も、話し言葉で使用する産出項目として提出する。中級後半段階では、ダロウの「推量」と「婉曲」用法および、ノデハナイカの「推測」と「婉曲」用法を書き言葉で使用する産出項目として提出する。最後に、書き言葉で使用するダロウの「疑念－疑い」用法を産出項目として扱う。

3.2 例文と日本語教師向けの文法解説

本節では、ダロウとノデハナイカの各用法を提出する際の例文と日本語教師向けの文法解説について具体的に述べる。

A. 疑念－婉曲疑問「でしょうか」【産出（話）】

初級前半段階で、まず「疑念－婉曲疑問」を表す「でしょうか」を話し言葉で使用する産出項目として提出する。この段階で既習文法が限られているため、「～ですか」→「～でしょうか」のような質問文を丁寧にする単純な形式のみを扱い、「でしょうか」をかたまりとして指導するとよい。「していただけないでしょうか」「のではないかでしょうか」のようなほかの形式との組み合わせは、その形式を提出する課の例文に提示する。

表 11 「A. 疑念－婉曲疑問」の例文と教師向け解説

例文	（ア）【会社で、田中は上司の部長と話しています】 部長：田中さん、今ちょっと時間ありますか。 田中：はい、何でしょうか。
	（イ）【学生は先生に本を借ります】 学生：先生、その本を借りてもいいでしょうか。
	（ウ）【デパートで、お店の人はお客さんと話しています】 客　　：おすすめありますか？ 店の人：こちらはいかがでしょうか。
解説	「でしょうか」は「ですか」より丁寧な問いかける表現である。（ア）のように質問を丁寧にするだけでなく、（イ）（ウ）のように許可を求めたり、提案したりする際にもよく使われる。 指導の際に、話者の上下・親疎関係に注目させながら意味を説明するとよい。

B. 確認「でしょう？」【理解】

初級後半段階で、ダロウの「確認」用法を理解項目として提出する。この段階で提出する理由は、日常会話で頻繁に用いられるからである。特に、「確認－聞き手依存型」の場合、聞き手の答えが求められるため、CN はこのような用法を理解できなければ、会話が

うまく進められないかもしれない。一方、「確認」という行為は失礼さをともないやすいため、不適切に使用すると、相手に違和感を覚えさせる可能性がある。そのため、この段階で理解項目として指導する。

表 12 「B. 確認」の例文と教師向け解説

例文	【花子は先週美味しい店を見つかりました。今日友達のさくらをその店へ連れていきました】 花　子：このケーキはとても美味しいよ。食べてみて。 さくら：うん、いただきます。 花　子：どう？　おいしいでしょう？ さくら：うん、おいしい！
解説	「でしょう？」は確認を表す表現であり、親しい友人同士の会話でよく使われる。

C. 推量「でしょう＋でしょうね」【理解】

初級後半段階で、「確認」用法を提出したあと、「推量」用法の「でしょう」と「でしょうね」も理解項目として提出する。「推量」も日常会話で多用されるダロウの 1 つの用法であるが、「でしょう」はすでに「確認」として提出されたため、「推量」用法を説明しないと、CN は会話の意味を正しく理解できない可能性がある。また、あまり「言い切り」で使われないといった使用上の制限があるため、初級後半段階では「推量」用法をまず理解項目とする。

表 13 「C. 推量」の例文と教師向け解説

例文	（ア）【テレビの天気予報】 あした九州地方は雨でしょう。
	（イ）【会社で、退勤時間になりました。佐藤と井上は同僚の田中を誘います】 佐藤、井上：田中さん、いっしょに飲みに行きませんか。 田中：すみません、きょうはまた残業です。 －－－－－－－－－－－－－－－－－－－－ 佐藤：田中さんは最近忙しいですね。 井上：そうですね。明日のパーティーにも来ないでしょうね。
解説	「でしょう」は話し手の推量を表す。日常会話でよく（イ）のように「でしょうね」の形で使われる。話し手が専門家である場合に、（ア）のような言い切りの「でしょう」も使われる。

D. 推量「でしょう（だろう）ね＋だろうと思う」【産出（話）】

すでに理解項目として習った「推量」用法を、中級前半段階で産出項目として提出する。話し言葉では「言い切り」での使用が少ないため、「でしょう（だろう）ね」と「だろうと思います」の形を指導する。普通体の「だろう」をここで初めて扱う。

表 14 「D. 推量」の例文と教師向け解説

例文	（ア）【田中と同僚の伊藤は電車で映画のポスターを見ながら】 田中：あの映画を見ましたか。 伊藤：ううん、まだですね。 田中：けっこう人気がありますから、きっとおもしろい①でしょうね。 伊藤：そう②でしょうね。よかったら今度いっしょに見に行きませんか。
	（イ）【「結婚と仕事」についてのスピーチ】 わたしは結婚しても、たぶん働き続けていく人生を選ぶだろうと思います。
解説	推量を表す「だろう／でしょう」は、話し手のほぼ断定した判断を表す。話し言葉ではあまり言い切りの形で使われない。対話では、よく「ね」を付加した形で使われる。（ア）②のように同意を示すこともできる。断定した判断を表すため、中国語の「吧」と異なり、質問に対して不確実な応答をする際には、あまり使われない。独話では、（イ）のようによく「と思う」と共起する。

E. 推測＋婉曲「んじゃない？　＋んじゃないかな＋のではないかと V」【産出（話）】

中級前半段階で、ダロウの「推量」用法を指導したあと、初めてノデハナイカを扱う。「推測」用法はノデハナイカのもっとも頻繁に使われる用法であり、話し手の意見判断を述べる重要な表現であるため、まずこの用法を産出項目として提出する。また、「婉曲」用法も同じ課で扱う。提出する形式は話し言葉でよく使われる「んじゃない？」「んじゃないかな」「んじゃないかと V」である。

表 15 「E. 推測＋婉曲」の例文と教師向け解説

例文	（イ）【花子は恋人の太郎のことについて、友達のさくらと話しています】 花　子：最近、太郎さんからぜんぜん連絡がないんだけど、なんかあった①んじゃないかとちょっと心配している。 さくら：仕事が忙しい②んじゃない？　花子ちゃんから連絡してみたら？
	（イ）【会社で、佐藤と井上は同僚の田中について話しています】 佐藤：田中さんは会社を辞めるらしいですよ。 井上：ほんとう？　でも、次何の仕事をするんでしょう。 佐藤：さあ、小説を書くのが好きだから、作家とかになるんじゃないかな。
	（ウ）【大学の授業で、山田は「晩婚化」について発表しています】 山田：女性の高学歴は晩婚化の大きな要因の一つなのではないかと考え、女性の平均学歴について調査しました。
	（エ）【「環境保護」についての講演】 以上の内容をまとめると、私達の子供や孫のために、美しい地球をそのまま残さなければならないのではないかと思います。以上です。

	（オ）【大学の後輩が先輩に就職に関するアドバイスを求めています】 後輩：周りの人はみんな就活をしていますけど、わたしはどこからやり始めたらいいか全然わからないんです。 先輩：そうですね。まず、自分がほんとうにやりたいことを考えたほうがいいんじゃないかな。
解説	「んじゃない？」「んじゃないかな」「のではないかと V」は話し手の推測を表す形式である。（ア）のような直感的な推測や、（イ）のような根拠に基づいた推測など、多様な認識段階の推測を表せる。ダロウと違って、（イ）のように不確実な応答をする際によく使われる。 「んじゃないか」「んじゃありませんか」などの形式はあまり使われない。くだけた会話では「んじゃない？」「んじゃないかな」、改まった会話では「のではないかと V」がよく使われる。 「のではないかと V」の場合、（ウ）のように思考動詞と共起するほかに、（ア）①のように「心配する」などと共起し、不安に思うことについて述べる際によく使われる。
	話し手の確実な認識判断にノデハナイカをつけると、主張や評価などを婉曲的にする働きがある。話し手の意見を積極的に聞き手に共有させるという表現効果があり、（エ）のように講演やスピーチの締めくくりの箇所で主張や意見を総括的に述べる際によく使われる。 また、提案したり、反論したり、慰めたりするときにもよく使われる。「～いい」「必要／重要」に後接することが多い。 中国語ではこのような婉曲表現の使用が比較的少ないため、指導する際に使用場面と合わせて婉曲表現を使用する意識を促すとよい。

F. 確認「でしょう？」【産出（話）】＋確認「んじゃない？」【理解】

すでに理解項目として指導したダロウの「確認」用法を、中級前半段階で産出項目として提出する。普通体基調の対話でも丁寧体で使われる傾向があるため、ここでは「でしょう？」のみを扱う。また、同じ課でノデハナイカの「確認」用法の「んじゃない？」を理解項目として提出する。同じ課で扱う理由は、この両形式の「確認」用法に共通点が多いため、同じ課で扱うと CN にとって理解しやすいと考えられるからである。また、ノデハナイカの「確認」用法を理解項目とする理由は、その使用頻度がダロウより低く、そしてほぼすべてがダロウに言い換えられるためである。

表 16 「F. 確認」の例文と教師向け解説

例文	（ア）【家で、妻は夫のかばんからタバコを見つけました】 妻：またタバコを吸ったでしょう？ 夫：いや、ほんとうにやめたよ。
	（イ）【花子は友達のさくらと話しています】 花　子：この前いっしょにケーキを食べたでしょう？　あの店の隣に、人気のタピオカ専門店もできたよ。 さくら：ほんとう？　じゃ、飲みに行こう！
	（ウ）【太郎は友達の健太と話しています】 太郎：北海道旅行はどうだった？　寒かったんじゃない？ 健太：うん、すごく寒かったけど、スキーは楽しかったよ。
解説	確認を表す「でしょう？」には、2 種類がある。1 つは（ア）のように、聞き手から「はい／いいえ」の答えを求めるタイプである。もう 1 つは（イ）のように、聞き手に共通認識を喚起させるタイプである。 中国語と違って、日本語では「でしょう？」は失礼さをともないやすいため、目上の人に使わないように言っておく。特に、相手の感情などについての確認は失礼になりやすい。そして、普通体基調の対話では「だろう」ではなく、丁寧体の「でしょう」で使われる傾向がある。
	「でしょう？」と同じように、「んじゃない？」にも確認用法がある。ただし、「んじゃない？」には（ウ）のような聞き手から「はい／いいえ」の答えを求めるタイプしかない。（イ）のような文脈には使えない。

G. 疑念ー疑い「だろうか／でしょうか」【産出（話）】

「疑念ー疑い」用法を中級前半段階で初めて提出する。ここでは、話し言葉での使用頻度が高い思考時間を作ったり、応答を回避したりするという使い方を中心に指導する。

表 17 「G. 疑念—疑い」の例文と教師向け解説

例文	（ア）【休憩時間、田中と同僚の李が話しています】 田中：李さんは上海出身ですね。来週上海へ遊びに行くんですけど、なにかおすすめの料理とかありますか。 李：そうですね。何でしょうかね。あ、小籠包は美味しいですよ。
	（イ）【太郎は友達の健太といっしょに、テレビでサッカー観戦をしています】 太郎：どっちのチームが勝つ①だろう。 健太：さあ、どう②だろうね。
解説	「だろうか／でしょうか」（「何」「どう」などの疑問詞がある場合、「か」が省略される場合もある）は話し手の疑いを表す。話し言葉では、（ア）のように思考時間を作ったり、（イ）②のように応答を回避したりする際によく使われる。また、（イ）①のように、間接的に情報を要求する機能もある。

H. 推量「（の）だろう＋（の）であろう」【産出（書）】

中級後半に入ると、書き言葉における使用を中心に指導する。まずは「推量」用法の「だろう」と「であろう」である。「のだ」が前接した「のだろう」と「のであろう」は、使

用頻度が高く、CN にとって理解も使用も困難であるため、重点を置いて指導する必要がある。

表 18 「H. 推量」の例文と教師向け解説

例文	（ア）世界の人口が増えすぎると、地球環境はもっと悪くなるだろう。
	（イ）おそらく、10 年前の日本ではこのような問題はなかっただろう。
	（ウ 1）地球温暖化の影響で、近年大雨が増加しているのだろう。
	（ウ 2）近年大雨が増加している。地球温暖化が影響したのだろう。
解説	推量を表す「だろう」と「であろう」は、意見文や学術論文などの不特定の人が読む文章において、よく言い切りの形で使われる。（ア）のような仮定条件の帰結としての使用は多い。（イ）のように過去のことについても推量できる。 「のだろう/のであろう」は「のだ」と「だろう」が組み合わせられたものであり、既知事態の背後にある事情についての推量を表す。事情推量には 2 種類がある。1 つは、（ウ 1）のような「推量内容＋既知事態＋のだろう」であり、もう 1 つは（ウ 2）のような「既知事態＋推量内容＋のだろう」である。

I. 婉曲「だろう＋であろう」【産出（書）】

中級後半段階で、ダロウの「推量」用法を理解した上で、ダロウの「婉曲」用法を産出項目として、書き言葉でよく使用される「だろう」と「であろう」の形で提出する。

表 19 「I. 婉曲」の例文と教師向け解説

例文	（ア）この改革は国際金融システムの安定に大きく貢献したと言えるだろう。
	（イ）これらの問題を解決するためには、まず、その原因を明らかにすることが必要であろう。
解説	「だろう／であろう」は文章において、主張や評価などを婉曲的にする用法もある。書き手の確実な認識判断に「だろう／であろう」をつけると、ニュアンスは婉曲的になるが、その認識判断は十分な検討を経た結果の結論であるというニュアンスもある。よく「と言える」に後接する。 中国語の文章ではこのような婉曲表現の使用が少ないため、指導する際に婉曲表現を使用する意識を促すとよい。

J. 推測＋婉曲「のではないかと V＋のではないだろうか」【産出（書）】

中級後半段階で、ダロウの「推量」と「婉曲」用法を指導したあと、それと類似するノデハナイカの「推測」と「婉曲」用法も書き言葉で使用する産出項目として、「のではないか」と「のではないだろうか」の形で提出する。

表 20 「J. 推測＋婉曲」の例文と教師向け解説

例文	（ア）インターネットの普及にともなって、多くの人は在宅勤務を始めたのではないだろうか。それについて、意識調査を行った。
	（イ）道路を広げる計画には反対意見が多かったため、今週の会議でまた検討するのではないかと思われる。
	（ウ）田中（2006）は温度が実験の結果を影響しているのではないかと指摘している。
	（エ）事故現場の状況は不明確なので、情報公開が必要なのではないかと思う。
解説	文章に使われる「のではないかと V」と「のではないだろうか」は、書き手の推測判断を表すことができる。「のではないか」の使用は比較的少なく、「のではないかと V」と「のではないだろうか」の形でよく使われる。 （ア）のように、読み手の状況や心理状態を推測することで話題を導入する際によく使われる。 「のではないかと V」の場合、（イ）のように「思う」と共起するほかに、（ウ）のように「指摘する」などと共起し、他人の意見を引用する際にも使える。 日本語で文章を書く際に、CN はよく「と思う」を繰り返して使用する。単調で内容が貧困な印象を与えないように、意見や判断を述べる際に「だろう」「のではないか」など多様な表現の使用を促すとよい。
	「のではないかと V」と「のではないだろうか」は「だろう」と同じように、書き手の確実な認識判断につけると、書き手の主張や評価などを婉曲的にする用法もある。（エ）のように、よく「必要／重要」に後接する。

K. 疑念ー疑い「だろうか＋であろうか」【産出（書）】

中級後半段階で、「疑念ー疑い」用法の「だろうか」を産出項目として提出する。話し言葉における使い方をすでに G で指導したため、ここでは書き言葉での使用を中心に扱う。「疑念ー疑い」用法は文レベルのみではなく、文章レベルから見ても文章の構成に重要な働きがある。そのため、文章の構成をわかりやすくする表現として、中級後半段階で扱うとよいと思われる。

表 21 「K. 疑念ー疑い」の例文と教師向け解説

例文	（ア）では、地球の未来はどうなるだろうか。現状から見れば、……そのため、温暖化がさらに進むかもしれない。
	（イ）たしかに、スマホを使って、いろいろなことができるようになったが、スマホは本当に人々の生活を便利にしただろうか。
解説	疑いを表す「だろうか／であろうか」は、文章において、よく（ア）のように問題提起の表現として使われる。この場合、続きの内容を予告する働きがあり、文章の構成に重要である。 中国語では疑問文をそのまま疑いとして使うことができるが、日本語では疑いの形式の使用が必要であることを学習者に強調する。たとえば、（イ）の文を「スマホは本当に人々の生活を便利にしたか」にすると、直接相手に問いかけるような述べ方になってしまう。

第 6 章 結論

本章では、次の 2 点について述べる。まず 1.では、本論文の結論として各章のまとめを記す。また 2.では、研究における今後の課題を述べる。

1. 各章のまとめ

本論文は、CN 向けの日本語教育へ資する形での文法記述を実現するために、モダリティ表現ダロウとノデハナイカを中心に調査・分析を行ったものである。ここで、第 1 章で述べた本論文の研究目的に立ち戻り、ここに再掲する。

①. JP によるダロウとノデハナイカの使用実態を調査する。それぞれの特徴および共通点と相違点を明らかにし、日本語教科書における記述や指導方法の改善のための基礎データを得る。

②. CN によるダロウとノデハナイカの使用実態を調査する。JP の使用実態との比較により、CN の使用の特徴および問題点を明らかにし、CN 向けの指導における留意点を洗い出す。

③. 中国における日本語教育の現場で広く使われる日本語教科書におけるダロウとノデハナイカの扱いの問題点を指摘した上で、教育現場に貢献できる改善案を提示する。

本論文は、第 2 章から第 5 章までの本論、序論にあたる第 1 章と結論にあたる本章第 6 章を含め、6 つの章から構成されている。以下、本論の各章の内容をまとめ、提示する。

第 2 章では、ダロウについて詳しく検討した。まず、先行研究を参考にし、ダロウの意味用法を表 1 のように分類した。

表 1 本論文におけるダロウの意味用法の分類

<table>
<tr><td colspan="4"></td><td colspan="2">聞き手情報への配慮</td></tr>
<tr><td colspan="4"></td><td>配慮しない</td><td>配慮する</td></tr>
<tr><td rowspan="6">話し手の認識</td><td rowspan="4">不確か</td><td rowspan="2">疑問要素なし</td><td>情報提供</td><td>A. 推量</td><td>－</td></tr>
<tr><td>情報要求</td><td>－</td><td>B－1. 確認－聞き手依存</td></tr>
<tr><td rowspan="2">疑問要素あり</td><td>情報提供</td><td rowspan="2">C－1. 疑念－疑い</td><td rowspan="2">C－2.疑念－婉曲疑問</td></tr>
<tr><td>情報要求</td></tr>
<tr><td colspan="2" rowspan="2">確か（疑問要素なし）</td><td>情報提供</td><td>D. 婉曲</td><td>－</td></tr>
<tr><td>認識要求</td><td>－</td><td>B－2. 確認－聞き手誘導</td></tr>
</table>

次に、書き言葉と話し言葉のコーパスを用いて、JP による使用実態を用法別に調査した。その結果、次のようなことが明らかになった。

A. 「推量」のダロウ：

【書き言葉】:

①. 「言い切り」の形で使用される場合が多い。伝達する意図が明確である話し言葉においては、ダロウは「言い切り」で使いにくいが、書き言葉ではその制限は強くない。

②. 「のだ」が前接した＜事情推量＞を表す「ノダロウ」がよく使用される。「推量内容＋既知事態＋ノダロウ」のような＜事情推量 1＞と「既知事態＋推量内容＋ノダロウ」のような＜事情推量 2＞があり、＜事情推量 2＞の使用がより多い。

【話し言葉】:

③. 伝達する意図が明確である話し言葉においては、「言い切り」での使用が少ない。「独話」では「と／という」節、「対話」では終助詞「ね」がよく後接する。

④. 応答文においては、「推量」のダロウは「そうでしょうね」の形で、同意を表す表現としてよく使用されるが、相手の質問に対して答える際には、あまり使用されない。

B. 「確認」のダロウ：

【書き言葉】:

①. 「文学」の「会話の文」および「知恵袋」の「回答」によく現れる。

②. 前接形式には、「ある／いる」のほかに、評価を表す形容詞も多く、それによって自慢したり、相手の評価を求めたりする。

③. 丁寧体基調の場合はもちろん、普通体基調の場合でも、丁寧体で使われる傾向がある。

【話し言葉】:

④. 「陳述要求」の意図での使用が多い。聞き手の私的領域の中心部に踏み込んだ「主張要求」と「感情要求」の意図ではあまり使用されない。

⑤. 書き言葉の場合と同じように、普通体基調の場合でも、丁寧体が使われる傾向がある。

C. 「疑念」のダロウ：

【書き言葉】:

①. 「知恵袋」の「質問」では「婉曲疑問」用法が頻繁に使用される。ほかの＜ジャンル＞では、問題を提起する際に「疑い」用法がよく使用される。

②. 「のだ」と共起した「ノダロウカ」の使用が多い。前接形式と合わせて見ると、「ノデハナイカ＋ダロウカ」、「どう／いかが＋ダロウカ」、「ある／いる＋ノダロウカ」の組み合わせが多い。

【話し言葉】:

③. 「疑い」の場合、「何＋ダロウ」と「何て言う＋ダロウ」のような組み合わせは、思考時間を作るためのフィラーのような表現としてよく使用される。また、応答回避の表現としてもよく使用される。

④. 「婉曲疑問」の場合、ノデハナイカおよび「いかが」とよく共起し、「主張・助言」などを柔らかくする表現として使用される。

D. 「婉曲」のダロウ：

【書き言葉】:

①. 「と言える／言ってもいい」、「ば／たら／といい」の前接が多く、書き手の「主張・評価」あるいは「提案・助言」を婉曲的にするために用いられる。

②. 「主観性の強さや独断的なニュアンスを抑える」という表現効果があると同時に、ダロウによって述べられるのは断定した判断であるため、「十分な検討・検証を経た結果の結論・見解である」というニュアンスもある。

【話し言葉】:

③. 「対話」における使用頻度は非常に低い。

④. 「独話」では書き言葉と異なり、よく「言い切り以外」の形で使用される。

また、学習者コーパスを用いて、CN によるダロウの使用実態を用法別に調査した。JP との比較から、次のようなことが明らかになった。

A. 「推量」のダロウ：

【書き言葉】:

①. 読み手へ伝達する意図が明確である場合でも、CN は「言い切り」の形を多用する。これは、「推量」のダロウの伝達的側面の特徴に対する認識が不十分からであるため、指導が必要である。

②. 「ノダロウ」の非用は大きな問題であり、「推量内容＋既知事態＋ノダロウ」のような＜事情推量 1＞は特に困難である。指導の際に、「のだ」についての説明を適宜に繰り返し、＜事情推量 2＞、＜事情推量 1＞の順に指導し、＜事情推量 1＞に重点をおいて説明したほうがよい。

③. 譲歩および理由を述べる際のダロウの使用が少ない。「ダロウ＋が／けれども」「ダロウ＋から／し」は文章の展開に論理性と説得力を加える効果があり、上級段階で扱うとよい。

【話し言葉】:

④. 書き言葉の場合と同じように、聞き手に伝達する意図がある場合でも、「言い切り」の形を多用する。

⑤. 応答文に不確実な情報を提供する意図でダロウを使用する。これにより、独断的なニュアンスになりやすいため、「推量」のダロウが積極的に不確実さを表すのではなく、不確実な情報を提供する際には頻繁に使われないということの指導が求められる。

⑥. 「が／けれども」が後接して譲歩を表す用例が少ない。「たしかに～でしょうけれども、～」のような譲歩構造の指導が必要である。

⑦. ダロウの使用は「未来のこと」についての話題に集中し、ダロウを未来を表す形式と誤解する可能性がある。それを防ぐために、適切な例でダロウを導入することを工夫すべきである。

B. 「確認」のダロウ：

【話し言葉】:

①. 高い待遇レベルの要求される場面でも「確認」のダロウを使用する。

②. よく「主張要求」の意図で使用する。このような使用は相手に違和感を覚えさせる可能性があるため、使用制限についての指導が求められる。

C. 「疑念」のダロウ

【書き言葉】:

①. 問題提起としての使用が少ない。指導の際に、文レベルでの説明だけでは不十分であり、文章の構造におけるダロウの重要性も言及するとよい。

②. 間接的に主張を表すダロウの使用が少ない。その代わりに作文では直接相手に問いかけるような疑問文を使う。これは、中国語で疑問文はそのまま疑いを表せるという母語の影響に関連しているため、重点をおいて指導する必要がある。

③. 「主張・助言」を婉曲的にするという意図での使用が少ない。その原因として、「主張・助言」を述べる際に、より婉曲的な表現を使用する意識が薄いことと、「疑念」のダロウとノデハナイカなどの表現との共起についての習得が不十分であることがあげられる。

【話し言葉】:

④. 「フィラー」と「応答回避」の表現としての使用が少ない。これらの用法は円滑なコミュニケーションを遂行するために重要な働きを果たすため、重点をおいて指導する必要がある。

⑤. 「不確実表示」としての使用が少ない。「推量」用法のニュアンスと比較することで、CN の理解を深めることができると思われる。

D. 「婉曲」のダロウ

【書き言葉】:

①. 聞き手へ伝達する意図が明確である場合でも、「婉曲」のダロウを使用する。CN に指導する際に、「婉曲」のダロウのニュアンスおよび使用場面の指導は不可欠である。

②. 「と言える／言ってもいい」、「必要／重要／大事」に後接するダロウの使用が少ない。「婉曲」のダロウの付加で主張を控えめにする意識が足りないことが原因と考えられるが、「と言える」の使用の少なさとも関連している。そのため、日本語教育では、「と言える」の指導を重視した上で、「と言える／言ってもいい＋ダロウ」、「必要／重要／大事＋ダロウ」をかたまりとして提出することは望ましい。

第 3 章では、ノデハナイカについて詳しく検討した。まず、先行研究を参考にし、ノデハナイカの意味用法を表 2 のように分類した。

表 2 本論文におけるノデハナイカの意味用法の分類

<table>
<tr><td colspan="3"></td><td colspan="2">聞き手情報への配慮</td></tr>
<tr><td colspan="3"></td><td>配慮しない</td><td>配慮する</td></tr>
<tr><td rowspan="3">話し手の認識</td><td rowspan="2">不確か</td><td>情報提供</td><td rowspan="2">A. 推測</td><td>－</td></tr>
<tr><td>情報要求</td><td>B. 確認－聞き手依存</td></tr>
<tr><td>確か</td><td>情報提供</td><td>C. 婉曲</td><td>－</td></tr>
</table>

次に、書き言葉と話し言葉のコーパスを用いて、JP による使用実態を調査した。その結果、次のようなことが明らかになった。

A. 後接形式と共起語：

①. 「一般形」のノデハナイカは「言い切り」以外の形で使用される傾向があり、書き言葉では「と／という」節を後接することが多く、話し言葉では「かな」の後接も多い。

②. 共起語から見ると、思考動詞およびネガティブな心理状態を表す表現との共起が多い。

B. 「推測」のノデハナイカ：

【書き言葉】:

①. 「知恵袋」では、質問する際に、背景である質問者の悩みや心配に思うことなどを述べる際によく使われる。回答する際に、確実な情報をもっていない場合によく使われる。

②. 「文学」の地の文では、よく登場人物の心内発話に現れる。

③. 「雑誌」「文学以外」「ブログ」では、書き手が読み手の状況や心理状態などを推測する場面によく使われ、読み手の共感を呼び、読み手との距離を縮める表現効果がある。また、他人の意見を引用する際によく使われる。

【話し言葉】:

④. 直感的な推測や、根拠に基づいた推測など、話し手の多様な認識段階の推測を表すことができ、よく応答文として使われる。

⑤. 伺うニュアンスを帯びる場合はあるが、話し手の推測を述べ立てることが主たる用法である。

C. 「確認」のノデハナイカ：

【話し言葉】:

「陳述要求」の意図での使用が多い。聞き手の私的領域の中心部に踏み込んだ「主張要求」と「感情要求」の意図ではあまり使用されない。

D. 「婉曲」のノデハナイカ：

【書き言葉】:

①. 「知恵袋」では、よく「～いい」の形式に後接し、回答者の「意見・評価」および「提案・助言」を婉曲的にするために用いられる。

②. 「文学」では、よく会話の文に現れる。話し手の「意見・評価」を婉曲的にすると同時に、その意見を積極的に聞き手に共有させるという表現効果もある。

【話し言葉】:

③. 前接形式に「いい」、「てもいい」、「ば／たら／といい」、「ほうがいい」、「必要／重要／大事／大切」が多い。

④. 発話意図からみると、「意見・評価婉曲表明」「提案・助言」「反論」「慰め」の意図でよく使われる。

⑤. 表現効果について考えると、意味の不確実さから、「婉曲な情報提供によって丁寧さを生じさせる効果」と「話し手の評価的な主張をやわらげる効果」という表現効果が生じて、疑問形式から、「話し手の意見を積極的に聞き手に共有させる」という表現効果が生じる。

また、学習者コーパスを用いて、CN によるノデハナイカの使用実態を用法別に調査した。JP との比較から、次のようなことが明らかになった。

A. 出現形および後接形式：

①. 「複合形」の使用が少ない。

②. 「一般形」の場合、「言い切り」の使用は JP より多い。特に「かな」がノデハナイカに後接する用例が少ない。CN に指導する際に、「複合形」の「のではないだろうか」「んじゃないでしょうか」、および「んじゃないかな」をかたまりとして導入したほうがよい。

B. 「推測」のノデハナイカ：

【書き言葉】:

①. ノデハナイカによって読み手の考えを推測しながら話題を導入する用例が少ない。これは、CN の母語の言語習慣に関連しており、話題導入の仕方の違いによるものであると考えられる。

②. 事態展開および原因を推測する用例が少ない。これは、CN が「裸の形式」を多用することと関連している。そのため、CN に対する具体的な文法項目の指導に先立ち、これらの文脈において、「裸の形式」のみではなく、推測を表す表現を使用するという意識をまず促す必要がある。その上で、ノデハナイカを指導する際に、事態展開および原因の推測を具体的な使用場面として提示する。さらに、その表現をまとめる機会を設け、そこでノデハナイカを繰り返して提示すると、より望ましい。

【話し言葉】:

③. 「独話」では、CN によるノデハナイカの使用は見られなかった。事態展開を推測する際に CN は「裸の形式」を使用する傾向がある。また、CN はスピーチの締めくくり

の箇所で、ノデハナイカによって主張や意見を総括的に述べるというスピーチの技術も身につけていない。

④. 「対話」では、話し手の心内発話および記憶が不確かになった出来事を述べる際に、CN による「推測」用法の使用が少ない。

C. 「婉曲」のノデハナイカ：

【書き言葉】:

①. 「意見・評価」を述べたり、「提案・助言」をしたりする際に、「婉曲」のノデハナイカの使用が少ない一方、「思う」を多用する傾向がある。「思う」の連続使用によって、聞き手に単調で内容が貧困という印象を与えないように、CN に多様な婉曲表現を使うことの重要性を強調し、「思う」の代わりにノデハナイカの使用を促したほうがいい。

【話し言葉】:

②. 「提案・助言」「慰め」の意図での使用が少ない。これは「裸の形式」の多用と関連している。

第 4 章では、ダロウとノデハナイカの各用法について比較を行った。まず、コーパス調査の結果に基づいて検討した結果、以下のことがわかった。

A. ダロウの「推量」用法とノデハナイカの「推測」用法

①. 共起語の比較から、ダロウは思考を経た認識判断、ノデハナイカは直感的な認識判断に偏っている。

②. 応答文としての使用状況から、ダロウは判断面では断定的な判断を表すのに対して、ノデハナイカは判断面では多様な判断の段階を表す。

B. ダロウの「疑念」用法とノデハナイカの「推測」用法

①. 聞き手の反応から見れば、ダロウもノデハナイカも、話し手の疑いを述べることが主たる用法であり、積極的に伺うニュアンスを帯びるわけではない。

②. 文章における機能から見れば、ダロウは問題を提起し、読み手に考えさせる働きがある。ノデハナイカは読み手の状況を推測し、読み手の共感を呼ぶ機能がある。

C. ダロウの「確認」用法とノデハナイカの「確認」用法

①. 使用頻度から見れば、ダロウのほうが頻繁に使われている。

②. 発話意図から見れば、ダロウもノデハナイカも、主に「陳述要求」の意図で使われ、「主張要求」と「感情要求」の意図での使用は少ない。

D. ダロウの「婉曲」用法とノデハナイカの「婉曲」用法

ダロウの「婉曲」用法は「対話」における使用頻度が非常に低いのに対して、ノデハ

ナイカの「婉曲」用法は、多様な意図で頻繁に使われている。

また、文系学術論文におけるダロウとノデハナイカの使用を比較した結果は表 3 のようにまとめられる。

表 3 文系学術論文におけるダロウとノデハナイカ

<table>
<tr><th>用法</th><th>出現場所</th><th colspan="2">使い方</th><th>ダロウ</th><th>ノデハナイカ</th></tr>
<tr><td rowspan="10">推量・推測</td><td rowspan="2">導入部分</td><td colspan="2">研究背景の紹介</td><td>○</td><td>△</td></tr>
<tr><td colspan="2">自説の提示</td><td>△</td><td>○</td></tr>
<tr><td rowspan="8">本論部分</td><td rowspan="3">帰結推量</td><td>仮定条件の帰結</td><td>○</td><td>△</td></tr>
<tr><td>現在／未来</td><td>○</td><td>△</td></tr>
<tr><td>過去</td><td>○</td><td>○</td></tr>
<tr><td rowspan="2">事情推量</td><td>事情推量 1</td><td>○</td><td>○</td></tr>
<tr><td>事情推量 2</td><td>○</td><td>△</td></tr>
<tr><td colspan="2">他者の意見の引用</td><td>△</td><td>○</td></tr>
<tr><td rowspan="2">終結部分</td><td colspan="2">結果のまとめ</td><td>○</td><td>○</td></tr>
<tr><td colspan="2">今後の展望</td><td>○</td><td>△</td></tr>
<tr><td rowspan="2">婉曲</td><td colspan="3">表現効果</td><td>十分な検討を経た結果の見解である</td><td>意見を積極的に聞き手に共有させる</td></tr>
<tr><td colspan="3">共起語</td><td>と言える／言ってもいい</td><td>重要・必要</td></tr>
</table>

（○：相対的に使用頻度は高い；△：相対的に使用頻度は低い）

A. ダロウの「推量」用法とノデハナイカの「推測」用法

①. 導入部分では、ダロウは「研究背景の紹介」でよく用いられるのに対して、ノデハナイカは「自説の提示」でよく使われる。

②. 本論部分では、「帰結推量」の場合、ダロウは仮定条件の帰結としての使用がノデハナイカより多く、「現在／未来」についての推量もノデハナイカより多い。また、「事情推量」の場合、ノデハナイカの使用は少ない。一方、ノデハナイカは他者の意見を引用する際によく用いられるが、ダロウではそれが少ない。

③. 終結部分では、ダロウは「結果のまとめ」と「今後の展望」を述べる際に使われるが、ノデハナイカでは「今後の展望」は少ない。

B. ダロウの「婉曲」用法とノデハナイカの「婉曲」用法

①. ダロウには、十分な検討を経た結果の見解であるというニュアンスがあり、よく「と言える／言ってもいい」に後接して使用される。

②. ノデハナイカには、話し手の意見を積極的に聞き手に共有させるという表現効果があり、論文の終結部分における割合はダロウより高く、よく終結部分で「重要・必要」のような評価を表す表現に後接する。

第 5 章では、第 2 章と第 3 章における使用実態調査および第 4 章における比較の結果を踏まえ、従来の日本語教育におけるダロウとノデハナイカの扱いについて検討した。中国で広く使用されている 5 種類の日本語教科書を選定して、ダロウとノデハナイカの各用法の提出順序、文法説明、例文を考察し、以下のような問題点を指摘した。

A. 「推量」のダロウ：

①. 伝達的側面の特徴に関する説明がない。それゆえ、使用場面および後接形式についての説明も不十分である。

②. ダロウは認識上の不確かさをもっているにもかかわらず、不確実な情報を提供する際には頻繁に使われないということに関する説明がない。一方、ダロウを「吧」と対応させて説明している教科書がある。「吧」は不確かな判断を明示する際に積極的に使われるため、この説明は CN の誤解を招く恐れがある。

③. 「のだ」が前接した＜事情推量＞を表す「ノダロウ」に関する指導が不十分である。

④. 「推量」のダロウの例文は基本的に「言い切り」の形で現れており、「～だろうと思う」、「～でしょうね」の例文が少ない。また、使用場面の提示が不十分な例文がある。

⑤. 使用実態と矛盾している例文がある。

⑥. ＜事情推量＞を表す「ノダロウ」の例文が少ない。また、「ノダロウ」に関する例文はすべてが＜事情推量 2＞「既知事態＋推量内容＋ノダロウ」であり、CN にとっては特に困難である＜事情推量 1＞「推量内容＋既知事態＋ノダロウ」の例文はない。

B. 「確認」のダロウ：

①. 「聞き手依存型」と「聞き手誘導型」の違いについての指導が不十分である。

②. 「確認」は失礼さをともないやすいことに関する説明が不十分である。

③. 普通体基調の場合でも丁寧体の「でしょ（う）」がよく使用されることについての説明がない。

④. 話者の親疎、上下関係および発話場面といった情報の提示が不充分である。

C. 「疑念」のダロウ：

①. 「疑い」については、日本語と中国語の疑いの表し方の違いに関する説明がない。そして問題提起の機能に関する指導も欠けている。例文からもダロウが文章の構造における働きを読み取りにくい。

②. 「疑い」については、思考時間を作るための「何だろう／でしょう」「何て言うだろう／でしょう」、および応答を回避するための「何だろう／でしょうね」「どうだろう／でしょうね」についての指導がない。

③. 「婉曲疑問」については、「婉曲的」であるという抽象的な説明のみあり、使用場面の提示が不十分であるため、CN の産出につながりにくい。

④. 「婉曲疑問」については、例文における話者の親疎、上下関係および発話場面といった情報の提示が不充分である。

D. 「婉曲」のダロウ：

「婉曲」のダロウに関する解説も例文も欠けており、婉曲表現を使用する意識を促す指導もない。その結果、CN の「婉曲」のダロウに対する理解と使用に困難をきたす恐れがある。

E. 「推測」のノデハナイカ：

①. 多様な認識段階の判断を表せるということについての説明がない。対応する中国語として、「会不会、是不是、可能是」、「会不会…吧、是不是…吧、可能是…吧」「不是…吗、说不定」「也许…吧、大概是…吧、大概会…吧」はあげられているが、これらはいずれも判断が未成立の段階の認識を表す表現であり、より多様な対応表現の提示が求められる。

②. 意味についての抽象的な説明は多いが、具体的な使用場面の提示は不足している。

③. 「一般形」の後接形式については、「と思う」のみが指導されている。ほかの後接形式の提示はほぼない。

④. 対話形式の例文、特に応答文に使われる例文が少ない。

⑤. 「婉曲」用法に関する文法解説はないが、「推測」用法の例文には「婉曲」用法と判断できる文がある。

⑥. 「簡略形」の例文が少ない

⑦. 「一般形」の例文は後接形式が単一的であり、ほぼすべてが「と思う」である。

F. 「確認」のノデハナイカ：

①. 「確認」用法を指導していない教科書がある。

②. 解説がある教科書では、「確認」という行為にともなう失礼さについての説明はない。

③. 例文には、話者の親疎、上下関係および発話場面といった情報の提示が不充分である。

G. 「婉曲」のノデハナイカ：

①. 「婉曲」のノデハナイカに関する指導が欠けており、婉曲表現を使用する意識を促す指導もない。

②. 「婉曲」のノデハナイカを明示的に指導していないが、「推測」の例文には「婉曲」の文が見られ、CN を困惑させる可能性がある。

さらに、それらの問題点をめぐって、前 3 章の調査結果と CN の理解度を考慮した上で、ダロウとノデハナイカの各用法の提出順序を表 4 のように提案し、各用法を提出する際の例文と日本語教師向けの文法解説も具体的に提案した。

表 4 ダロウとノデハナイカの提出順序

段階		順序
初級	前半	A. 疑念－婉曲疑問「でしょうか」【産出（話）】
	後半	B. 確認「でしょう？」【理解】 ↓ C. 推量「でしょう＋でしょうね」【理解】
中級	前半	D. 推量「でしょう（だろう）ね＋だろうと思う」【産出（話）】 ↓ E. 推測＋婉曲 「んじゃない？　＋んじゃないかな＋のではないかと V」【産出（話）】 ↓ F. 確認「でしょう？」【産出（話）】＋確認「んじゃない？」【理解】 ↓ G. 疑念－疑い「だろうか／でしょうか」【産出（話）】
	後半	H. 推量「(の）だろう＋（の）であろう」【産出（書）】 ↓ I. 婉曲「だろう＋であろう」【産出（書）】 ↓ J. 推測＋婉曲「のではないかと V＋のではないだろうか」【産出（書）】 ↓ K. 疑念－疑い「だろうか＋であろうか」【産出（書）】

2. 今後の課題

最後に、今後研究を重ねるにあたっての 3 つの課題について述べる。

第 1 に、研究対象の項目についてである。本論文では、多様な用法を持ち、そして各用法に共通点が多いモダリティ表現ダロウとノデハナイカに焦点を当て、考察した。しかし、推量を表す「かもしれない」「と思う」、確認を表す「ね」「ではないか」、疑念を表す「かな」など、各用法にはほかの類義表現も多く存在しているが、本論文ではそれについての記述は不十分である。使えるようになるためには、様々な表現から、話し手の意図にもっとも適したものを選択するための情報が必要であるため、今後はほかの類義表現も研究対象に入れて考察し続けたいと考える。

第 2 に、研究方法についてである。本論文では、ダロウとノデハナイカの使用実態については、コーパスを用いて調査を行った。コーパスを用いることで、実際の使用を客観的に見ることができるようになり、これまでの考察を検証したり、補足したりすることが可能になるといったメリットがある。しかし、CN の非用に関しては、どのように扱うかは難しい問題である。本論文では JP との比較によって CN の非用を指摘したが、それについての詳しい考察ができなかった。今後はコーパス調査と合わせて、アンケート調査やインタビュー調査など多様な研究方法を用いて調査を行っていく必要がある。

第 3 に、調査対象者についてである。本論文では、JFL（Japanese as a Foreign Language: 外国語としての日本語教育）環境で日本語を学ぶ中国語話者のみを調査対象者とした。近年日本に留学し、JSL（Japanese as a Second Language: 第 2 言語としての日本語教育）環境で学ぶ中国語話者が増加しているため、今後は調査対象者の範囲を拡大していく必要がある。

参考文献

安達太郎（1997）「「だろう」の伝達的な側面」『日本語教育』95, pp.85-96, 日本語教育学会

安達太郎（1999）『日本語疑問文における判断の諸相』, くろしお出版

安達太郎（2002）「第 5 章 質問と疑い」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『新日本語文法選書 4 モダリティ』, pp.174-202, くろしお出版

庵功雄（2009）「「推量の「でしょう」に関する一考察－日本語教育文法の視点から」『日本語教育』142, pp.58-68, 日本語教育学会

庵功雄（2013）「「のだ」の教え方に関する一試案」『言語文化』50, pp.3-15, 一橋大学語学研究室

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』, スリーエーネットワーク

伊集院郁子（2010）「意見文における譲歩構造の機能と位置－「確かに」を手がかりに」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』2, pp.101-110, アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会

伊集院郁子・高橋圭子（2004）「文末のモダリティに見られる“Writer／Reader visibility”－中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較」『日本語教育』123, pp.86-95, 日本語教育学会

伊集院郁子・高橋圭子（2010）「日本語の意見文に用いられる文末のモダリティ－日本・中国・韓国語母語話者の比較」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』36, pp.13-27, 東京外国語大学留学生日本語教育センター

宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用－スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』662, pp.27-42, 昭和女子大学近代文化研究所

宇佐美洋・籠宮隆之・椙本総子（2004）「『日本語学習者による日本語／母語発話の対照言語データベース』の設計」『電子情報通信学会技術研究報告. SP, 音声』104-148, pp.29-34, 一般社団法人電子情報通信学会

大島資生（1993）「中国語・韓国語話者における日本語のモダリティ習得に関する研究」『日本語教育』81, pp.93-103, 日本語教育学会

太田陽子（2008）「「運用力につながる文法記述」試論－モダリティ表現「ハズダ」の分析を通して」早稲田大学大学院日本語教育研究科（博士論文）

奥田靖雄（1984）「おしはかり（一）」『日本語学』3-12, pp.54-69, 明治書院

金澤裕之編（2014）『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』, ひつじ書房

菊地康人（2000）「のだ（んです）の本質」『東京大学留学生センター紀要』10, pp.25-51, 東京大学留学生センター

木下りか(2014a)「学習者の作文コーパスにおける認識的モダリティ－母語話者との比較」『第 12 回日本語教育研究集会予稿集』, pp.34-37, 日本語教育研究集会実行委員会

木下りか(2014b)「認識的モダリティの誤用と非用－日本語学習者の意見文作成上の課題」『第 10 回国際日本語教育・日本研究シンポジウム予稿集』, pp.158-161, 香港日本語

教育研究会
キャアコップチャイ，スィラッサナン（2010）「「だろう」の意味・用法－小説における分析」『日本語／日本語教育研究』1, pp.157-176，日本語／日本語教育研究会
グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』，くろしお出版
国立国語研究所（1960）『話しことばの文型（1）－対話資料による研究』，秀英出版
小西円（2008）「「(の）ではないか」類の出現形と使用環境の関連について」『早稲田日本語研究』17, pp.35-46，早稲田大学日本語学会
小西円（2011）「使用傾向を記述する－伝聞の「ソウダ」を例に」森篤嗣・庵功雄（編）『日本語教育文法のための多様なアプローチ』, pp.215-233，ひつじ書房
小森万里（2014）「アカデミック・ライティングにおける「(の）ではないか」の使われ方に関する一考察」『日本語・日本文化』41, pp.37-60，大阪外国語大学研究留学生別科
三枝令子（2002）「書き言葉における「だろうか」「のだろうか」の使い分け」『言語文化』39, pp.21-37，一橋大学語学研究室
迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子（2016）「＜共同研究プロジェクト紹介＞基幹型：多文化共生社会における日本語教育研究多言語母語の日本語学習者横断コーパス」『国語研プロジェクトレビュー』6-3, pp.93-110，国立国語研究所
佐々木泰子・川口良（1994）「日本人小学生・中学生・高校生・大学生と日本語学習者の作文における文末表現の発達過程に関する一考察」『日本語教育』84, pp.1-13，日本語教育学会
佐藤勢紀子・仁科浩美（1997）「工学系学術論文にみる「と考えられる」の機能」『日本語教育』93, pp.61-71，日本語教育学会
佐藤雄亮（2010）「引用節内のモダリティ形式と主節述部・被修飾名詞との関連性－意味分類を基に」『思言 東京外国語大学記述言語学論集』6, pp.25-52，東京外国語大学地域文化研究科・外国語学部記述言語学研究室
白川博之（2002）「記述的研究と日本語教育－「語学的研究」の必要性と可能性」『日本語文法』2-2，pp.62-80，日本語文法学会
徐文輝（2019）「中国人日本語学習者の日本語モダリティ習得研究－「ダロウ」を中心に」金沢大学大学院人間社会環境研究科（博士論文）
ターインタ，プーワット（2018）「日本語学系学術論文におけるモダリティの使用－結論におけるモダリティの使用を中心に」『日本語・日本文化研究』28, pp.139-149，大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻
高橋圭子・伊集院郁子（2006）「疑問文に見られる"Writer／Reader visibility"－中国人学習者と日本語母語話者の意見文の比較」『日本語教育』130, pp.80-89，日本語教育学会
田窪行則・金水敏（1996）「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3-3, pp.59-74，日本認知科学会
田中妙子（2013）「「慰め発話」の形式的特徴－文末表現を中心に」『日本語と日本語教育』41, pp.31-46，慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター

田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152, pp.123-109, 日本語学会
田野村忠温（1990）『現代日本語の文法 I「のだ」の意味と用法』, 和泉書院
田野村忠温（2012）「日本語コーパスと複文の研究－BCCWJ の特性と利用の方法」, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「複文構文の意味の研究」公開シンポジウム
鄭相哲（1995）「ネとダロウとジャナイカー確認要求形式」『日本語類義表現の文法（上）単文編』, pp.263-274, くろしお出版
張恵芳（2008）「「推量確認要求」用法の日中対照研究－情報伝達・語用論的な観点から」『言語学論叢』オンライン版創刊号（通巻 27）, pp.103-114, 筑波大学一般・応用言語学研究室
張恵芳（2009）「自然会話における「確認用法」の「ノデハナイカ」の使用実態」『筑波応用言語学研究』16, pp.75-86, 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース
張恵芳（2010）「自然会話に見られる「ダロウ」と「デハナイカ」の表現機能の違い－用法上の互換性を持つ「認識喚起」の場合」『日本語教育』145, pp.49-59, 日本語教育学会
張恵芳（2012）「自然会話に見られる「でしょう」の「念押し確認用法」」『筑波応用言語学研究』19, pp.31-45, 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味II』, くろしお出版
中北美千子（2000）「談話におけるダロウ・デショウの選択基準」『日本語教育』107, pp.26-35, 日本語教育学会
永谷直子（2017）「正確で自然な判断の表し方」『現場に役立つ日本語教育研究 3 わかりやすく書ける作文シラバス』, pp.37-55, くろしお出版
西尾実（1975）「国語教育学の構想」『西尾実国語教育全集第 4 巻』, 教育出版
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』, ひつじ書房
仁田義雄（1992）「判断から発話・伝達へ－伝聞・婉曲の表現を中心に」『日本語教育』77, pp.1-13, 日本語教育学会
日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法 4 第 8 部　モダリティ』, くろしお出版
野﨑まり・岩崎裕久美（2014）「中国語母語話者の日本語の意見文に用いられる文末表現－日本語話者・中国語話者の日本語意見文及び中国語意見文を比較して」『神奈川大学言語研究』36, pp.45-67, 神奈川大学外国語研究センター
野田尚史編（2005）『コミュニケーションのための日本語教育文法』, くろしお出版
野田春美編（2016）『日本語のモダリティのコーパス調査報告－『現代日本語文法』の記述の検証』,　学術研究助成基金助成金研究成果報告書
蓮沼昭子（1991）「ヨウダ・ラシイとダロウ－推量のムードの二類型」『日本語教育論集－日本語教育の現場から』, pp.209-221, 独立行政法人国際交流基金
蓮沼昭子（1995）「対話における確認行為－「だろう」「じゃないか」「よね」の確認用法」仁田義雄（編）『複文の研究（下）』, pp.389-419, くろしお出版
蓮沼昭子（2003）「認識的モダリティとレトリック」『日本語教育連絡会議論文集』16, pp.10-

22, 日本語教育連絡会議事務局
蓮沼昭子（2015）「『であろう』は婉曲表現か－客観的真理追究型テクストにおける使用を中心に」『日本語教育連絡会議論文集』27, pp.8-29, 日本語教育連絡会議事務局
早川幸子・古本裕子・苗田敏美・松下美知子・岡沢孝雄（2007）「文系学術論文における判断表現の使用実態」『金沢大学留学生センター紀要』10, pp.11-29, 金沢大学留学生センター
姫野伴子（1999）「でしょう（推量）」新屋映子・姫野伴子・守屋三千代『日本語教科書の落とし穴』, pp.12-19, アルク
馮雁鴻（2018）「ダロウに関する一考察－中国語母語話者への教育に向けて」神戸大学大学院人文学研究科（修士論文）
藤城浩子（2007）「「ノデハナイカ」類の意味・機能」『三重大学日本語学文学』18, pp.15-29, 三重大学日本語学文学研究室
藤森弘子（1994）「日本語学習者にみられるプラグマティック・トランスファー－「断り」行為の場合」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』1, pp.1-19, 名古屋学院大学
古川由理子（2005）「初級における「のだ文」指導の一試案」『大阪外国語大学留学生日本語教育センター授業研究』3, pp.67-78, 大阪外国語大学日本語日本文化教育センター
前川喜久雄（2006）「第一章 概説」『国立国語研究所報告 124 日本語話し言葉コーパスの構築法』, pp.1-22, 国立国語研究所
牧原功（1994）「間接的な質問文の意味と機能－ダロウカ、デショウカについて」『筑波応用言語学研究』1,pp.73-86, 筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究会応用言語学コース
益岡隆志（1991）『モダリティの文法』, くろしお出版
松本裕治（2009）「特集『日本語コーパス』にあたって」『人工知能学会誌』24-5, p.615, 人工知能学会
三宅知宏（1994）「否定疑問文による確認要求的表現について」『現代日本語研究』1, pp.15-26, 大阪大学現代日本語学講座
三宅知宏（1995）「『推量』について」『国語学』183, pp.1-11, 日本語学会
三宅知宏（1996）「日本語の確認要求の諸相」『日本語教育』89, pp.111-122, 日本語教育学会
三宅知宏（2010a）「「推量」と「確認要求」－“ダロウ”をめぐって」『鶴見大学紀要 第1部 日本語・日本文学編』47, pp.9-55, 鶴見大学
三宅知宏（2010b）「不定推量」と「質問表現」－“ダロウ”をめぐって II」『鶴見大学紀要 第1部 日本語・日本文学編』47, pp.57-75, 鶴見大学
宮崎和人（1999）「確認要求表現としての「ダロウネ」」『日本語科学』6, pp.71-90, 国立国語研究所
宮崎和人（2001）「認識的モダリティとしての＜疑い＞－「ダロウカ」と「ノデハナイカ」」『国語学』52-3, pp.15-29, 日本語学会
宮崎和人（2002）「第4章 認識のモダリティ」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『新日本語文法選書4 モダリティ』, pp.121-171, くろしお出版

宮崎和人（2004）「否定疑問文の類型について」『岡山大学言語学論叢』11, pp.1-14, 岡山大学言語学研究会
宮崎和人（2005）『現代日本語の疑問表現－疑いと確認要求』，ひつじ書房
森篤嗣・庵功雄編（2011）『日本語教育文法のための多様なアプローチ』，ひつじ書房
森田良行（1980）『基礎日本語 2』，角川書店
森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型』，アルク
森山卓郎（1989）「コミュニケーションにおける聞き手情報－聞き手情報配慮・非配慮の理論」仁田義雄・益岡隆志（編）『日本語のモダリティ』, pp.95-120, くろしお出版
森山卓郎（1990）「『断り』の方略－対人関係調整とコミュニケーション」『言語』19-8, pp.59-66, 大修館書店
森山卓郎（1992）「日本語における「推量」をめぐって」『言語研究』101, pp.64-83, 日本言語学会
森山卓郎（1995）「ト思ウ、ハズダ、ニチガイナイ、ダロウ、副詞～ø－不確実だが高い確信があることの表現」宮島達夫・仁田義雄（編）『日本語類義表現の文法（上）単文編』, pp.171-182, くろしお出版
森山卓郎（2000）「「と言える」をめぐって－テクストにおける客観的妥当性の承認」『言語研究』118, pp.55-79, 日本言語学会
山岡政紀・牧原功・小野正樹（2010）『コミュニケーションと配慮表現－日本語語用論入門』，明治書院
幸松英恵（2015）「＜事情推量＞を表さないノダロウ－準体助詞ノを含む推量形式に見られる 2 種」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』1, pp.3-22, 学習院大学国際研究教育機構
楊虹（2011）「中日母語場面の初対面会話における話題開始の比較－参加者間の相互行為に注目して」『立命館言語文化研究』22-3, pp.185-200, 立命館大学国際言語文化研究所
ラオハブラナキット，カノックワン（1997）「日本語学習者にみられる『断り』の表現－日本語母語話者と比べて」『世界の日本語教育』7, pp.97-112, 国際交流基金
李晨（2007）「中国語母語話者の日本語作文におけるモダリティ表現について」『語学教育研究論叢』24, pp.239-249, 大東文化大学語学教育研究所

张惠芳（2004）「关于日语推测语气表达形式“のではないか”的考察」『日语学习与研究』117, pp.15-21, 对外经济贸易大学
张兴（2006）「疑问与判断的接点－以“だろうか”“のではないか”为主」『日语学习与研究』126, pp.9-14, 对外经济贸易大学
Brown, P. and S. Levinson（1987）. Politeness: Some universals in language usage. Cambridge University Press.

参考資料

コーパス：

現代日本語書き言葉均衡コーパス，国立国語研究所

多言語母語の日本語学習者横断コーパス，迫田久美子・小西円・佐々木藍子・須賀和香子・細井陽子（2016）「多言語母語の日本語学習者横断コーパス International Corpus of Japanese as a Second Language」『国語研プロジェクトレビュー』6-3，国立国語研究所，pp.93-110

日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス，金澤裕之編（2014）『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』，ひつじ書房

日本語話し言葉コーパス，国立国語研究所・情報通信研究機構・東京工業大学

発話対照データベース，国立国語研究所

名大会話コーパス，藤村逸子・大曽美恵子・大島ディヴィッド義和（2011）「会話コーパスの構築によるコミュニケーション研究」，藤村逸子・滝沢直宏編『言語研究の技法：データの収集と分析』，pp.43-72，ひつじ書房

JCK 作文コーパス，新城直樹・庵功雄・石黒圭・ 金井勇人・末繁美和・俵山雄司

教科書

『新総合日本語 基礎日語第 1 冊』大連理工大学出版社

『新総合日本語 基礎日語第 2 冊』大連理工大学出版社

『新総合日本語 基礎日語第 3 冊』大連理工大学出版社

『新総合日本語 基礎日語第 4 冊』大連理工大学出版社

『新編日語（重排版）第 1 冊』上海外国語教育出版社

『新編日語（重排版）第 2 冊』上海外国語教育出版社

『新編日語（重排版）第 3 冊』上海外国語教育出版社

『新編日語（重排版）第 4 冊』上海外国語教育出版社

『総合日語（修訂版）第 1 冊』北京大学出版社

『総合日語（修訂版）第 2 冊』北京大学出版社

『総合日語（修訂版）第 3 冊』北京大学出版社

『総合日語（修訂版）第 4 冊』北京大学出版社

『日語総合教程第 1 冊』上海外国語教育出版社

『日語総合教程第 2 冊』上海外国語教育出版社

『日語総合教程第 3 冊』上海外国語教育出版社

『日語総合教程第 4 冊』上海外国語教育出版社

『みんなの日本語初級 I 第 2 版 本冊』スリーエーネットワーク

『みんなの日本語初級 II 第 2 版 本冊』スリーエーネットワーク

『みんなの日本語中級 I 本冊』スリーエーネットワーク

『みんなの日本語中級 II 本冊』スリーエーネットワーク

『みんなの日本語初級I 第2版 翻訳・文法解説 中国語版』スリーエーネットワーク
『みんなの日本語初級II 第2版 翻訳・文法解説 中国語版』スリーエーネットワーク
『みんなの日本語中級I 翻訳・文法解説 中国語版』スリーエーネットワーク
『みんなの日本語中級II 翻訳・文法解説 中国語版』スリーエーネットワーク

付録 1 第 4 章 学術論文調査資料

雑誌名	番号	出版年	号	ページ	著者	題名	ダロウ	ノデハナイカ	文字数
日本語の研究	1	2017	13-4	1-17	中俣尚己	接続助詞の前接語に見られる品詞の偏り	1	1	11,920
	2	2017	13-4	18-34	笹井香	レッテル貼り文という文	7	0	15,986
	3	2017	13-4	35-50	駒走昭二	ゴンザ資料におけるカス型動詞	4	2	11,893
	4	2017	13-4	51-67	松森晶子	九州二型体系の複合語アクセント型はなぜ中和するのか	1	2	13,130
	5	2017	13-3	84-68	富岡宏太	中古和文の助詞カシ	10	0	15,330
	6	2017	13-3	1-17	川島拓馬	文末形式「模様だ」の成立と展開	4	0	13,429
	7	2017	13-2	1-17	山岡華菜子	京阪式アクセント地域における「らしい」のアクセント	2	1	11,296
	8	2017	13-1	1-17	松森晶子	北琉球における C 系列 2 音節名詞の語頭音節の長音化	2	2	13,008
	9	2017	13-1	18-34	服部紀子	江戸期蘭語学における日本語の格理解	1	0	13,878
	10	2016	12-4	1-17	北﨑勇帆	複合助詞「であれ」「にせよ」「にしろ」の変遷	0	0	9,146
	11	2016	12-4	18-34	久保薗愛	鹿児島方言における過去否定形式の歴史	3	2	10,938
	12	2016	12-4	35-51	林直樹	音響的指標に基づく話者分類からみたあいまいアクセント	0	0	11,226
	13	2016	12-4	52-68	神永正史	変化の結果を表す「～てあり」の用法について	0	4	13,464
	14	2016	12-4	69-85	久屋愛実	見かけ上の時間を利用した外来語使用意識の通時変化予測	1	0	12,648
	15	2016	12-4	86-102	松本昂大	古代語の移動動詞と「起点」「経路」	0	0	12,972
	16	2016	12-4	103-117	原田走一郎	南琉球八重山黒島方言における二重有声摩擦音	0	0	8,821
	17	2016	12-4	1-17	三宅俊浩	可能動詞の成立	0	0	14,456
	18	2016	12-4	18-34	深津周太	「ちょっと」類連体表現の歴史―二つの型による機能分担の形成過程	0	0	12,018
	19	2016	12-4	35-51	辻本桜介	主節主体の動きを表す動詞終止形に接続するトテについて	10	1	13,012
	20	2016	12-4	67-52	遠藤佳那子	黒川真頼の活用研究と草稿「語学雑図」	3	0	9,524
日本語教育	1	2016	163	1-16	西川朋美・細野尚子・青木由香	日本生まれ・育ちの JSL の子どもの和語動詞の産出	4	2	13,811
	2	2016	163	17-31	嶋津拓	海外への「日本語の普及」に対する日本国民の意識	1	3	12,735
	3	2016	163	48-63	岡田美穂・林田実	中国語を母語とする中級レベルの日本語学習者の移動先を表す「に」と動作場所を表す「で」の習得	4	11	15,367
	4	2016	163	64-78	米澤陽子	二人称代名詞「あなた」に関する調査報告	5	4	14,995
	5	2016	163	79-94	寺嶋弘道	日本語学習者のコロケーションの選択とその考察	1	0	12,784
	6	2015	162	82-96	山内美穂	会話で「単独使用」される「たり」	1	3	14,857
	7	2015	162	34-49	宇佐美まゆみ	『総合的会話分析』の趣旨と方法	4	0	17,491
	8	2015	162	113-128	田中信之	文章産出過程における辞書使用－中国人学習者の場合	2	1	16,302
	9	2015	161	2-14	森山仁美	文脈における和語動詞語彙の産出	1	2	11,852
	10	2015	161	31-41	永井絢子	スリランカ人日本語学習者の格助詞の習得	0	0	9,030
	11	2015	161	42-49	後藤典子	医療・介護現場の方言を外国人はどう理解するか	0	0	7,513
	12	2015	160	49-63	滑川恵理子	言語少数派の子どもの生活体験に裏打ちされた概念学習	3	2	14,845
	13	2015	160	64-78	西川朋美・青木由香・細野尚子・樋口万喜子	日本生まれ・育ちの JSL の子どもの日本語力	5	0	13,218
	14	2015	160	79-93	大平幸	専門用語が生活において意味のあることばになっていく過程	0	2	15,065
	15	2015	160	94-109	山本富美子・二通信子	論文の引用・解釈構造	0	3	16,868
	16	2014	159	1-16	白石知代・松田文子	多義動詞「ぬく」のコアとそれを用いた複合動詞「V－ぬく」の意味記述	2	1	15,263
	17	2014	159	1-13	中西久実子	「名詞+だけだ」が不自然になる原因	5	0	12,005
	18	2014	159	30-45	松下光宏	コミュニケーションのための終助詞「もの」の用法	4	3	15,789
	19	2014	159	46-60	大場美和子・中井陽子・寅丸真澄	会話データ分析を行う研究論文の年代別動向の調査	1	1	14,861
	20	2014	159	61-75	渡辺裕美・松崎寛	発音評価の相違	0	0	15,687
日	1	2013	62-4	2-9	小峯和明	「説草」からみる書物の宇宙	7	6	9,032
	2	2013	62-4	10-22	高木元	書物のリテラシー	10	2	9,722
	3	2013	62-2	1-11	﨑かおり	伊須気余理比売の誕生	6	8	13,008

本文学	4	2013	62-2	24-35	和田崇	戦闘的なヒロインたち	7	0	13,463
	5	2013	62-1	2-10	太田善之	『懐風藻』の「尭」	5	0	9,902
	6	2013	62-1	11-24	中丸貴史	漢文日記のリテラシー	9	8	14,676
	7	2013	62-1	25-34	松本麻子	宗養の付句	11	0	10,177
	8	2013	62-1	35-43	藤沢毅	和本リテラシー教育の実践	18	2	11,819
	9	2013	62-1	44-56	日比嘉高	外地書店とリテラシーのゆくえ	7	1	15,094
	10	2013	62-1	57-67	難波博孝	リテラシーは「他」を排除する	3	5	12,378
日本近代文学	1	2016	95	1-16	富永真樹	書物という世界	14	0	15,005
	2	2016	95	17-32	井川理	転位する「探偵小説家」と「読者」	10	4	15,805
	3	2016	95	33-48	野田直恵	岡本かの子「花は勁 し」論	6	2	13,192
	4	2016	95	49-64	藤井貴志	<人形>のレジスタンス	11	3	17,813
	5	2016	95	65-80	宮崎真素美	鮎川信夫・「一つの中心」考	2	4	16,074
	6	2016	95	81-96	松田潤	清田政信の詩的言語における非在のイメージ	4	6	15,916
	7	2016	94	1-16	服部徹也	《描写論》の臨界点	9	4	17,514
	8	2016	94	17-30	権藤愛順	木下杢太郎「硝子問屋」の情調表現	4	0	11,302
	9	2016	94	31-44	田中励儀	泉鏡花「銀鼎」成立考－東北旅行と池田蕉園をめぐって	7	0	13,496
	10	2016	94	45-60	佐藤貴之	「替歌」の可能性－井伏鱒二「谷間」論	11	2	15,780
哲学	1	2017	68	109-123	川瀬和也	ヘーゲル『大論理学』における絶対的理念と哲学の方法	3	4	13,541
	2	2017	68	124-138	栗原隆	一者の影	2	1	13,092
	3	2017	68	139-153	真田美沙	ヘーゲル論理学存在論における三つの無限性	7	0	13,284
	4	2017	68	155-168	富山豊	現象学は外在主義から何を学べるか	20	16	12,504
	5	2017	68	169-184	鴻浩介	アンスコムの実践的知識論	10	7	12,674
	6	2017	68	185-199	松井隆明	フッサールにおける本質認識とそのアプリオリ性	6	1	11,565
	7	2017	68	200-214	宮原克典	事物知覚とエナクティヴィズム	2	4	12,508
	8	2017	68	215-230	山根秀介	ウィリアム・ジェイムズのプラグマティズムにおける実在とその認識	2	2	13,718
	9	2017	68	231-245	萬屋博喜	証言と徳	4	2	11,191
	10	2016	67	123-137	縣由衣子	ミシェル・セールの〈混合体 corps meles〉概念	3	4	13,729
	11	2016	67	138-152	秋保亘	スピノザ『エチカ』における個物の本質	2	1	13,351
	12	2016	67	153-168	石田隆太	《individuatio》と《principium individuationis》の多様性	10	0	10,584
	13	2016	67	169-185	大庭諒	純粋経験の統一的解釈の試み	3	0	12,959
	14	2016	67	186-200	川本隆	超越から内在へ	4	1	11,944
	15	2016	67	201-215	久高將晃	討議倫理学の適用可能性	14	0	11,803
	16	2016	67	216-230	黒岡佳柾	「確実性」を巡る対決	10	0	12,108
	17	2016	67	231-246	佐々木正寿	《生の哲学》と《写生》の思想	1	0	13,527
	18	2016	67	247-261	三浦洋	「悲劇の定義」の規範性	6	0	12,502
	19	2016	67	262-276	八幡さくら	シェリング芸術哲学における構想力	0	0	12,762
	20	2015	66	111-126	阿部将伸	キーネーシスとロゴス	7	3	11,675
史学雑誌	1	2016	125-12	1-24	堀川康史	今川了俊の探題解任と九州情勢	29	3	26,870
	2	2016	125-12	25-46	金子龍司	太平洋戦争末期の娯楽政策	1	0	20,827
	3	2016	125-11	1-36	藤波伸嘉	仲裁とカピチュレーション	9	3	26,953
	4	2016	125-11	40-64	中村博司	「大坂遷都論」再考	16	5	23,192
	5	2015	124-10	1-37	小池勝也	室町期鶴岡八幡宮寺における別当と供僧	3	10	26,581
	6	2015	124-10	38-66	島崎未央	都市大坂における種物流通と市場統制の変遷	8	3	25,979
	7	2015	124-10	66-92	菅野智博	近代満州における農業労働力雇用	5	0	22,477
	8	2015	124-9	1-35	国分航士	明治立憲制と「宮中」	1	1	25,841
	9	2015	124-9	39-62	後藤敦史	アメリカの対日外交と北太平洋測量艦隊	10	1	22,567
	10	2015	124-8	39-65	萬代悠	岸和田藩政と七人庄屋の家格変動	1	9	27,157
	11	2015	124-7	1-38	湯川文彦	三新法の原型	1	0	31,686
	12	2015	124-7	42-67	宮内肇	一九二〇年代珠江デルタの郷村社会と宗教	7	3	22,487
	13	2015	124-6	1-37	新見まどか	唐武宗期における劉鎮の乱と藩鎮体制の変容	7	0	23,082
	14	2015	124-6	38-52	大西克典	ピエトロ・レオポルド期トスカーナ大公国における土地税改革	2	0	11,963
	15	2015	124-6	52-76	柏原宏紀	大隈重信の政治的危機と財政をめぐる競合	26	1	24,633
	16	2015	124-4	1-37	河野正	高級農業生産合作社の成立と瓦解	13	0	28,066
	17	2015	124-4	38-62	岡本真	「堺渡唐船」と戦国期の遣明船派遣	4	3	25,105
	18	2015	124-4	62-85	佐々木政文	一九一〇年代奈良県における民衆教化政策と被差別	4	0	25,280
	19	2015	124-3	1-35	久保田裕次	寺内内閣期における対中国借款政策と勝田主計	1	2	23,294
	20	2015	124-3	39-64	小野美里	「事変」下の華北占領地支配	3	0	23,476
社会学評	1	2016	67-3	267-284	廣本由香	福島原発事故をめぐる自主避難の〈ゆらぎ〉	2	2	15,414
	2	2016	67-3	302-318	玉井眞理子	クリフォード・ショウのライフヒストリー研究再検討	1	1	15,490
	3	2016	67-3	319-337	戸江哲理	例外扱いする特権	13	3	15,248
	4	2016	67-2	132-147	額賀淑郎	重なり合う合意の分析モデル	4	0	15,560
	5	2016	67-2	148-165	藤間公太	施設養護家庭論の検討	8	0	16,479
	6	2016	67-2	166-181	梅村麦生	A. シュッツの同時性論	2	2	13,203

論	7	2016	67-2	182-200	石田淳	「日本人」の条件	2	0	11,279
	8	2016	67-2	201-221	竹田恵子	殖医療における「素人の専門知識」の潜在力	7	2	18,377
	9	2016	67-2	222-237	井上慧真	「移行の危機」にある若者への支援の形成と変容	0	1	13,217
	10	2016	67-1	2-20	桶川泰	恋愛ハウトゥが提供する純粋な関係性をめぐる自己知	1	1	17,156
	11	2016	67-1	21-38	高橋康史	犯罪者を家族にもつ人びとはいかにしてスティグマを内在化するのか	1	3	14,587
	12	2016	67-1	39-55	高橋由典	遊びの精神と体験選択動機	9	6	18,190
	13	2016	67-1	56-72	小形道正	ファッション・デザイナーの変容	0	0	14,263
	14	2016	67-1	73-88	高良倉成	社会」用語法による表象の特質について	5	0	15,729
	15	2016	67-1	89-105	菱山宏輔	地域防犯体制の構造転換	1	3	15,639
	16	2016	67-1	106-121	笹島秀晃	ニューヨーク市 SoHo 地区における芸術家街を 契機としたジェントリフィケーション	4	0	13,240
	17	2015	66-4	460-479	澤田唯人	腫れものとしての身体	3	2	18,198
	18	2015	66-4	480-497	伊藤康貴	「ひきこもり」と親密な関係	0	0	16,950
	19	2015	66-4	498-515	中村英代	「ひとつの変数の最大化」を抑制する共同体としてのダルク	3	2	16,744
	20	2015	66-4	516-533	栗田宣義	ルックス至上主義社会における生きづらさ	5	8	13,511

付録 2 第 5 章 教科書における解説と例文

表 1 教科書における「推量」のダロウに関する解説と例文

	解説	例文
総合	でしょう 「でしょう」は「です」の推測形式であり、話し手の推測を表す。未来のことも、過去のことも推測できる。中国語の「吧」と同じ意味である。 （「でしょう」是「です」的推測形式，表示说话人的推測。它既可以推測未来的事情，也可以推測过去发生的事情。相当于汉语的“吧”之意）	1) 1 時からは混むでしょう。
		2) 高橋：どの店がいいですか？ 王：そうですねえ。あの店がいいでしょう。
		3) 鈴木：あの人はこの大学の先生ですか。 趙：学生でしょう。
		4) 遠藤さんも国へ帰らなかったでしょう。
	だろう 「だろう」は推測を表す。「でしょう」の普通体である。中国語の「大概…吧」、「吧」と同じ意味である。 （「だろう」表示推測，是「でしょう」的简体形式。相当于汉语的“大概…吧，…吧”等）	5) 山田：高橋さんはどうでしょう。 王：たぶん、したことがあるだろうと思いますよ。
		6) その辞書は高いだろう。
		7) 明日も雨だろう。
		8) あそこへは電車よりバスのほうが便利だろう。
新編	でしょう 文末は下降調であり、話し手の婉曲的な断定あるいは推測を表す。 推測を表す「でしょう」はよく陳述副詞「たぶん」と共起する。「きっと」とも共起するが、そのとき婉曲的な断定を表す。 （句尾语调要下降，表示讲话人的委婉断定或推測。表示推測的「でしょう」常和陈述副词「たぶん」搭配使用，也和「きっと」一起使用。和「きっと」一起使用时表示委婉的断定。）	9) 日本では、クリスマスにお互いにプレゼントをするでしょう。
		10) 山田さんはどこにいますか。 …二階にいるでしょう。
		11) あなたの専攻は日本語でしょう。
		12) あしたたぶん雨がふるでしょう。
		13) 日本語の専攻ですから、卒業してきっと通訳か翻訳者になりたいのでしょう。
	さぞ…でしょう 副詞「さぞ」と「でしょう（だろう）」と共起し、「想必」「一定是」を表す。他人の境遇や心情などについての同感を表す。 （副词「さぞ」和「でしょう（だろう）」呼应使用，表示「想必」「一定是」，用于对他人的境遇，心情等的同感）	14) さぞお疲れでしょう。
		15) もう十二時すぎですから、さぞおなかがすいたでしょう。
		16) 断らずに旅行に出かけたのだから、お母さんはさぞ心配するでしょう。
		17) 北国ですから、さぞ寒いでしょう。
	ことだろう 「ことだろう」は「だろう」よりニュアンスが鄭重である。話し手の感慨を表す。よく「どんあに」「さぞ」などと共起する。 （「ことだろう」比「だろう」语气郑重，用来表示自己的感慨。「ことだろう」常和「どんあに」「さぞ」等呼应使用）	18) 九時間も飛行機に乗っていたのでは、さぞお疲れたことだろう。
		19) 一人も友達がいないのなら、さぞさびしいことだろう。
新総合	でしょう 「でしょう」は判断助動詞「です」の推量形式である。普通体は「だろう」である。よく「たぶん」「きっと」などの副詞と共起し、文末は下降調である。 （判断助动词「です」的推量形式。简体为「だろう」表示说话人的推測。多与「たぶん」「きっと」等副词搭配使用。语尾读降调。）	20) 明日もきっといい天気でしょう。
		21) ここは木も多いし、昼間も静かでしょう。
		22) この問題は難しいから、たぶん誰でもできないだろう。
		23) A：朝からずっと雪の中で鳥を見ていたんだ。 B：そうか。それは寒かっただろうね。
		24) A：お母さんは今どこ？ B：もうホテルに着いているだろう。
	おそらく…だろう 「おそらく…だろう」は客観的な物事あるいは将来の事態についての推測を表す。信憑性はかなり高いが、「きっと」より低い。「たぶん」に比べれば、ニュアンスは重くて、悪い傾向のある事態について推測する。 （「おそらく…だろう」表示对客观事物或将来的事情的推測。认为有相当大的可靠性，但程度低于「きっと」。与「たぶん」相比，语气比较沉重。所推測的内容有不好的傾向。）	25) おそらく彼はそのことを知っているだろう。
		26) 道がよくないから、おそらく一日では帰れないだろう。
		27) 相手はおそらくこちらのことを何から何まで詳しく調べているだろう。
教程	でしょう 将来、あるいは不確実な事態についての推測を表す。	28) たぶんもうすぐ駅につくでしょう。

	（表示对未来事情或不确定事情的推测。）	
みんな	でしょう 未来のことや、きっぱりと断定できないことについて推測する際に使われる。 （用于说话人对未来的事情或不太确切事情做推断时。）	29) 先生、日本の経済はどうなるでしょうか。 …そうですね。まだしばらくよくないらないでしょう。
		30) オリンピックは成功するでしょうか。 …大丈夫でしょう。ずいぶんまえから準備していますから。
	だろう・だろうと思う 「だろう」は「でしょう」の普通形で、普通体の文章で使われる。話し手自分の考えを断定せず、推量する述べ方である。 会話では、「と思う」をつけて、「だろうと思う」の形で使うのが普通である。 （「だろう」是「でしょう」的普通形，用于简体文章。表示说话人对自己想法不是很肯定，而是一种推測。在会话中用「と思う」、通常也用「だろうと思う」的形式。）	31) 世界の人口が増えすぎると、地球環境はもっとわるくなるだろう。
		32) 今ごろ北海道は雪だろう。
		33) 彼なら、試験に合格するだろうと思います。
		34) 観光客が増えて、もっとにぎやかになるだろうと思います。
	のであろう 「のであろう（のだろう）」は、その前の文の理由、または、前の文で描かれている状況に対する解釈を想像して述べていることを表す。 （「のであろう（のだろう）」用于对前句的理由，或者前句所描绘的状况作解释性的推測。意思是：大概是…吧。）	35) 氏の死の事実がひそかに覆い隠されることになったのであろう。
		36) 洋子さんは先に帰った。保育所に子どもを迎えに行ったのだろう。
		37) ガリレオは「それでも地球は回る」と言った。地動説への強い信念があったのであろう。
		38) 田中さんがにこにこしている。待ち望んでいたお子さんが生まれたのだろう。
		39) めったに泣かない彼女が泣いた。よほどうれしかったのだろう。
		40) 最近よく昔のことを思い出す。年を取ったということなのだろう。

表 2 教科書における「確認」のダロウに関する解説と例文

	解説	例文
総合	でしょう 「でしょう」は確認を表すこともできる。文末は上昇調であり、中国語の“吧”と同じ意味である。 （「でしょう」还可以表示确认的意思，这时要读升调。相当于汉语的“吧”等。）	41) 趙：わたしそろそろ帰らなくちゃ… 渡辺：まだいいでしょう。
		42) もう宿題は終わったでしょう？
		43) 今度のパーティーに来るでしょう？
		44) 日本では、家に入る時、靴が脱がなくてはいけないんでしょう？
	でも、…でしょう 相手の意見に賛成できないときに、「でも、…でしょう」で反論を述べる。文末は上昇調である。 （当不能认同对方的说法时，就采用这种表达方式（でも、…でしょう）进行反驳，这时句尾一定要读升调。）	45) でも、公衆電話があったでしょう。
		46) A：パーティーに行きません。 B：行かないんですか。でも、きのう、行くって言ったでしょう。
新編	でしょう 文末は上昇調であり、相手の同意を求める。話し手の持ち物や達成したことを自慢するのである。 （句尾语调升高，表示征求对方同意，讲话人在向别人夸耀自己的持有物或做成的事情。）	47) なかなかいいでしょう。
新総合	でしょう 確認を表し、聞き手の同意を求める。男性は「だろう」、女性は「でしょう」を使う。文末は上昇調である。 （表示确认。含有希望听话人能表示同意的期待。男性一般用「だろう」，女性一般用「でしょう」。语尾读升调。）	48) A：君も行くだろう？ B：はい、もちろん。
		49) A：美術館は電車を降りてからすぐだった。 B：行ったんだね。簡単だっただろう？
		50) A：このダンス、難しいでしょう？ B：ええ。いくら練習しても上手にならないね。
教程	でしょう 話し手がほぼ断定できる事実を聞き手に確認することを表す。この用法は推量というより、むしろ婉曲的な断定を表す。文末は上昇調である。 （用于向对方进一步确认自己已经基本确定的事实。	51) この前大阪から神戸まで 40 分ぐらいかかったでしょう？ …えっ、そんなにかかったんですか。

	这种用法与其说是推测，倒不如说是一种委婉的断定，一般要用升调。）	
みんな	でしょう？ 「でしょう？」は聞き手の同意を求めるために、問いかけあるいは確認をする場合に使われる。文末は上昇イントネーションになる。 （用于为求得听话人同意，进行询问或确认时。「でしょう」用升调。）	52) 7月に京都でお祭りがあるでしょう？ …ええ、あります。
	でしょ 「…だろう」の形で上昇イントネーションをともなって使われ、相手に「…」の内容を確認する表現である。相手が「…」を認識していない場合、認識するよう求める言い方になり、非難したり叱ったりする気持ちがともなうこともある。丁寧形「でしょう」のほか、会話では「でしょ」「でしょっ」「だろ」「だろっ」などの形になることがある。 （「…だろう」的形式，在说话时句末需要升调，表达与对方确认「…」的内容。有时表示说话时，对方没有认识到「…」，要求对方认识到「…」，并带有指责和批评的意思。有时为了表示礼貌语气，可替换为「でしょう」。会话中有时也可替换为「でしょ」「でしょっ」「だろ」「だろっ」等形式。意思是：是不是该…了？）	53) さあ、サッカーの練習に行くんでしょ。 54) 10時だ。子どもはもう寝る時間だろう。歯をみがいて、ベットに入りなさい。 55) 優太、そんなところに立って邪魔になるでしょ。こっちへいらっしゃい。 56) 飲みに行こうって誘ったのは君だろ。今日になってキャンセルなんて、ひどいよ。 57) 風邪をひくだろう／でしょ。早く着替えなさい。

表 3 教科書における「疑念」のダロウに関する解説と例文

	解説	例文
総合	よろしいでしょうか 「よろしい」は「よい」より丁寧な言い方である。 （形容词「よろしい」是「よい」的郑重，礼貌表达方式。）	58) いつがよろしいでしょうか。 59) お名前の漢字はこれでよろしいでしょうか。
	V させていただけないでしょうか 「させてもらえないでしょうか」の謙譲語である。 （是「させてもらえないでしょうか」的敬语（自谦）表现形式。）	60) よろしかったら、アルバイトをさせていただけないでしょうか。 61) パソコンを使わせていただけないでしょうか。 62) あしたは仕事を休ませていただけないでしょうか。
	であろうか 「であろう」は「である」の推量形式である。「であろうか」は話し言葉における「でしょうか」の意味と同じである。 （「であろう」是「である」的推量形式，「であろうか」的意思相当于口语中的「でしょうか」。）	63) 杭州から上海への列車の中、私の向かいに1組の男女が座っていた。男は女の父親であろうか。そんなふうに見受けられた。
新編	でしょう 「でしょうか」は「ですか」の意味と同じである。ニュアンスは「ですか」より婉曲的である。 （「でしょうか」同于「ですか」，表示提问，但语气比「ですか」委婉。）	64) クリスマスのプレゼントはどんなものが多いでしょうか。 65) 李さんもラジオを持っているでしょうか。
	（の）ではないでしょうか 問いかけるようなニュアンスで、話し手の断定できないことを述べる。このような言い方はニュアンスが婉曲的である。話し手ははっきり断言できないが、ほぼそうだと思っている。もちろん、「だろう」ほど自信がない。 （用于讲话者用询问的口气向对方提出自己不敢贸然断定的事物。这种表达方式语气婉转，讲话人对所推测的事物虽然不是很肯定，但在心里还是认为事情八九不离十基本如此，当然，不如「だろう」显得那么自信。）	66) 生活は苦しいと思っている人もかなりいるのではないでしょうか。 67) 彼は場所を間違えたのではないでしょうか。 68) 兄弟みんなで、もっと助け合うことが大切なのではないでしょうか。 69) 留学生が積極的にならないと、日本人と友達になるのは難しいのではないでしょうか。 70) やってきた人は王さんではないでしょうか。
新総合	—	—
教程	でしょう 「でしょう」は疑問を表す終助詞「か」といっしょに	71) 大学を卒業した年は何年だったでしょう。 …たしか1965年だったと思います。

	使われることができる。文末は下降調であり、ニュアンスは「ですか」より婉曲的である。 （でしょう可以和表示疑问的终助词か一起使用，一般用降调，语气比ですか婉转。）	72) クリスマスのプレゼントはどんなものが多いでしょうか。 …そうですね。え…、やはり小さくて、きれいで、可愛いものが、よく売れていますよ。
	はたして～だろうか 「はたして」は副詞であり、「だろうか」と共起し、事態や事態の展開に対する疑いを表す。その意味は「究竟是否…呢」、「到底是否…呢」である。 （はたして为副词，与だろうか相呼应，表示对事物或事物的进展持怀疑态度。意为“究竟是否…呢”、“到底是否…呢”。）	73) 日本的な経営が果たして他の国で通用するだろうか。 74) これは果たして本物だろうか。 75) 彼女は来ると言っていたが、果たして来るだろうか。 76) この計画の通りやって、果たしてうまくいくだろうか。
	てはいないだろうか 「ある事態の存在についての推測」を表す。「だろう」ほど自信がないが、当該事態の存在については比較的肯定的な態度をもつ。「不是…吗」、「是否…了呢」という意味である。 （表示“对某现象的存在表示推测”，虽然没有比直接使用「だろう」那么具有自信，但是对该现象的存在也是持比较肯定的态度。意为“不是…吗”，“是否…了呢”。）	77) 少し悲観的になりすぎてはいないだろうか。 78) できもしないことを望んでばかりいないだろうか。 79) 自分たちのごうまんさに気づいていないのだろうか。 80) 学生の側も、企業の規模や知名度にばかりこだわってはいないだろうか。 81) 森を自分が癒やされるための道具にしてはいないだろうか。
みんな	てもらえない／いただけないでしょうか 「てもらえないでしょうか・ていただけないでしょうか」は、「てもらえませんか・ていただけませんか」よりさらに丁寧で柔らかい印象を与える表現である。 （「てもらえないでしょうか・ていただけないでしょうか」比「てもらえませんか・ていただけませんか」给人留下更加礼貌，委婉的印象。）	82) 山田さん、この書類の書き方を教えてもらえないでしょうか。 83) 先生、わたしたちの結婚式でスピーチをしていただけないでしょうか。 84) すみません。道に迷ってしまったんですが、ちょっと教えていただけないでしょうか。
	させてもらえない／いただけないでしょうか 「させていただけませんか」より「させていただけないでしょうか」のほうがより丁寧である。 （「させていただけないでしょうか」比「させていただけませんか」有礼貌。）	85) 先生、留学生の皆さんにちょっとインタビューさせてもらえないでしょうか。 86) 課長、今度の仕事はぜひ私に担当させていただけないでしょうか。 87) 図書館にないので、先生の本をコピーさせていただけないでしょうか。
	のだろうか 「…のだろうか」で「…」が正しいかどうか自分に問いかけるときに使う。「どう」「何」「いつ」などの疑問詞といっしょに使って、その答えを自問することもある。 相手に対して質問するときには使われるが、「…のですか」に比べると「…のでしょうか」のほうが答えを強要しない柔らかい尋ね方になる。 疑問詞のない「…のだろうか」の形では、「…が正しくない・…とは思わない」ということを言いたい場合にも使われる。 （「…のだろうか」用于自问「…」是否正确的场合。和「どう」「何」「いつ」等疑问词一起使用，也用于自问自答。 也用于向听话人提问。与「…のですか」相比，「…のでしょうか」的提问方式较委婉，不强求听话人回答。没有疑问词的「…のだろうか」，也用于表达…不正确或认为不是…的场合。）	88) 地球の未来はどうなるのでしょうか。 89) どうすればこの地球から戦争をなくすことができるのだろうか。 90) コンピューターは本当に人々の生活を便利にしたのだろうか。 91) 猫は死ぬとき、どうして家からいなくなるのでしょうか。 92) ごみをこれ以上増やしてもいいのだろうか。
	のではないだろうか 「…のではないかだろうか」は、「…」と思うが、その真偽が不確かで断定できないという話し手の考えを述べる表現である。 （表示说话人虽然认为「…」，但又不能确定其真伪，无法做出判断，仅阐述自己的想法时用，意思是：不是…吗）	93) 続きも見たいという気持ちを起こさせるのではないだろうか。 94) 道路を広げる計画には反対意見が多い。実現は難しいのではないだろうか。 95) 日本経済の回復には少し時間がかかるのではないだろうか。 96) 情報が少なすぎて不安だ。もう少し情報がもらえたら、住民も安心できるのではないだろうか。

表 4 教科書における「推測」のノデハナイカに関する解説と例文

	解説	例文
総合	のではないか（と思う） 婉曲的な推測を表す。中国語の「会不会、是不是、可能是」と同じ意味である。よく「と思う」に前接する。日常会話では「んじゃないかと思う」という形式もよく使われる。 （用于表示委婉的推测。相当于汉语的“会不会、是不是、可能是”等，经常与「と思う」搭配使用。在日常会话中，还常用「んじゃないかと思う」这种形式）	97) いろいろな国の人と意見を交換すれば、もっと視野が広げられるのではないかと思います。 98) ここより高橋さんの部屋のほうが静かなのではないかと思います。 99) ▲この値段はちょっと高すぎるんじゃないかと思います。 100) やはり A チームのほうが強いんじゃないかな。
	のではないだろうか 「のではないか」と同じように、話し手の推測を表すが、より婉曲的であり、相手に確認するニュアンスがある。中国語の「会不会…吧、是不是…呢、可能是…吧」と同じ意味である。 （与「のではないか」一样，用于表示说话人的推断。只不过语气更加委婉，含有向对方确认的语气。相当于汉语的“会不会…吧、是不是…呢、可能是…吧”）	101) U ターン就職は出身地域の活性化に貢献するのではないだろうか。 102) この本は子供には難しいのではないでしょうか。 103) 一生懸命練習して、あそこまで上手になったのだから、李さんは弁論大会で優勝するのではないだろうか。 104) 連絡がないけれど、高橋さんは病気なのではないでしょうか。
新編	（の）ではないでしょうか 問いかけるようなニュアンスで、話し手の断定できないことを述べる。このような言い方はニュアンスが婉曲的であり、話し手ははっきり断言できないが、ほぼそうだと思っている。もちろん、「だろう」ほど自信がない。 （用于讲话者用询问的口气向对方提出自己不敢贸然断定的事物。这种表达方式语气婉转，讲话人对所推测的事物虽然不是很肯定，但在心里还是认为事情八九不离十基本如此，当然，不如「だろう」显得那么自信。）	105) 生活は苦しいと思っている人もかなりいるのではないでしょうか。 106) 彼は場所を間違えたのではないでしょうか。 107) 兄弟みんなで、もっと助け合うことが大切なのではないでしょうか。 108) 留学生が積極的にならないと、日本人と友達になるのは難しいのではないでしょうか。 109) やってきた人は王さんではないでしょうか。
新総合	体言＋な／用言[連体形]＋のではないか 婉曲的な推測を表す。よく「と思う」などに前接する。中国語の「会不会、是不是、可能是」と同じ意味である。話し言葉では「のじゃないか」あるいは「んじゃないか」という形式もよく使われる。 （这个句型用于表示委婉的推测。经常与「と思う」等搭配。译为“会不会、是不是、可能是”等。口语中还常用「のじゃないか」或「んじゃないか」这种形式。）	110) ▲この値段はちょっと高すぎるのではないかと思います。 111) 寮に誰もいないから、教室より静かなのではないかと思います。 112) 何か悪いことでも起きたのではないかと心配していました。 113) 財布をすりにすられたのではないかと驚かされました。
	体言／用言[連体形]＋の＋ではないだろうか 「（の）ではないか」より婉曲的な言い方である。断定はできないが、たぶんそうだろうという推測的な判断を表す。類似表現には「（の）ではないかと思う」がある。中国語の「不是…吗、说不定」と同じ意味である。 （是「（の）ではないか」的委婉说法。表示说话人虽然不能明确断定，但是可以做出“也许会是这样吧”这种推断型的判断。类似的表达方式有「（の）ではないかと思う」。译为“不是吗”“说不定”）	114) 子供が家出したのは親の責任ではないだろうか。 115) もしかしたら、彼女は本当に田中さんが好きなのではないだろうか。 116) 誰でも死にたくないのではないだろうか。 117) これから教育問題はますます重要になるのではないかと思う。
教程	のではないだろうか 話し手の肯定的な推測を表すえん曲的な言い方である。中国語の「也许…吧、大概是…吧、大概会…吧」と同じ意味である。敬体は「のではないでしょうか」であ	118) 山田さんがそんなことを言ったのも何か理由があるのではないでしょうか。 119) 彼は先月北京へ行ったのではないでしょうか。

	る。また、否定ではなく、肯定的な意味を表すことに注意する必要がある。 （表示说话者的肯定推测，是比较委婉的表达形式。意味“也许…吧、大概是…吧、大概会…吧”。这个惯用型的敬体形式为のではないでしょうか。另外，须注意这个惯用型表达的是肯定的意思，而非否定的意思。）	120) 村上春樹の小説は日本語専攻二年生にはまだ難しいのではないだろうか。
		121) ▲青少年の教育こそ真に大切なのではないだろうか。
みんな	んじゃない? 「のではありませんか」のくだけた形である。くだけた会話で、話し手の考えを述べるときに使う。「んじゃないですか」は親しい人に対して使うとき、「んじゃない」になることがある。改まった会話では、「のではないでしょうか」になる。 （是「のではありませんか」的较随意的说法。在无需客气的场合，叙述说话人的想法时使用。当「んじゃないですか」用于亲密场合，有时变成「んじゃない」。在需要礼貌的谈话时，用「のではないでしょうか」。）	122) 留学している息子から何の連絡もないんですよ。…心配ないんじゃないですか。何かあったら連絡がありますよ。
		123) 最近、食欲がないの。 …どこか悪いんじゃない？　一度病院で見てもらったほうがいいよ。
	のではないだろうか 「…のではないかだろうか」は、「…」と思うが、その真偽が不確かで断定できないという話し手の考えを述べる表現である。 （表示说话人虽然认为「…」，但又不能确定其真伪，无法做出判断，仅阐述自己的想法时用，意思是：不是…吗。）	124) マンガが作り上げたノウハウがアニメに影響を与え、見ている者を夢中にさせ、続きも見たいという気持ちを起こさせるのではないだろうか。
		125) 道路を広げる計画には反対意見が多い。実現は難しいのではないだろうか。
		126) 日本経済の回復には少し時間がかかるのではないだろうか。
		127) 情報が少なすぎて不安だ。もう少し情報がもらえたら、住民も安心できるのではないだろうか。
	のではないか 「…のではないか」は「…」がおそらく正しいという見込みが、「…」の真偽が不確かだということを表す。「と思う」「と思われる」「とのことだ」などをともなって、控えめに話し手の考えを述べる表現になる。 （表示估计「…」有可能是正确的，但又不确定「…」的真实性。意思是：是不是…啊。 与「と思う」「と思われる」「とのことだ」等搭配使用，表示说话人有节制地阐述自己的想法。）	128) 組織に偉大なる脇役たちがいないと、組織は徐々に疲弊していくのではないか。
		129) 留学している息子から何の連絡もない。何かあったのではないか。
		130) 新聞によると、今度の選挙に鈴木氏が出るのではないかとのことだ。
		131) ▲さまざまな意見が出て会議が混乱しているので、調整が必要なのではないかと思う。

表 5 教科書における「確認」のノデハナイカに関する解説と例文

	解説	例文
総合	んじゃない 「んじゃない」は否定疑問文の形式で話し手の肯定的な判断を述べて、そして聞き手に確認する。文末は上昇調であり、中国語の「吧」と同じ意味である。 （「んじゃない」这个句式是说话人以否定问句的形式向听话人传达自己肯定的判断，并向听话人进行确认，句尾要读升调。相当于汉语的“吧”）	132) 三好さんのことだから、また寝坊したんじゃない？
		133) ほかにも行きたい人がいるんじゃない？
		134) 教室より図書館のほうが静かなんじゃない？
		135) 彼、体の調子でも悪いんじゃない？
新編	—	—
新総合	体言＋な／用言[連体形]＋のではないか 話し手の判断を表す。聞き手に確認するニュアンスがある。 （用于表示说话人的推断，含有向对方确认的语气）	136) 去年、いっしょに京都へ行ったのではないですか。
		137) それはあなたが決めたんじゃないですか。
		138) ▲無理に食べなくてもいいんじゃないですか。
教程	—	—
みんな	—	—

（計 215,136 文字）